鹿児島県史料集 (46)

鹿児島県布達（下）

刊行のことば

県史料集の刊行は、郷土資料の保存を図るとともに、地方史の研究や県民の文化向上に役立てることを目的としております。

今回は、鹿児島県史料集第四十六集として「鹿児島県布達（下）」を刊行することになりました。布達とは、明治十九年二月以前に行政官庁がその官庁の内部または下級の行政官庁を指揮するために発した命令であり、当館に所蔵する鹿児島県布達のうち、昨年刊行した「鹿児島県布達（上）」の続編であり、「明治拾年参」、「明治拾壱年八」及び「明治拾壱年九」並びに「御布達並雑書」を収録したもので、当時の行政官庁がどのような仕事をしていたかを知ることができる貴重な史料となっております。

本書は、鹿児島市文化財審議会委員の宮下満郎氏によって、原稿作成・編集・校閲・校訂が進められ刊行の運びとなったものであります。昨年度に引き続き、長期間にわたる同氏の御苦労に対し心からお礼を申し上げますとともに、この史料が郷土史の研究に大いに役立てられるよう期待いたします。

平成十九年三月

鹿児島県立図書館長

上今常雄

解　題

底本の「鹿児島県布達」には、活版の布達原本と、それを筆写した手書きの写本がある。同書を鹿児島県史料集として刊行するに際し、活版の布達はまだ読みやすいので、写本が多い冊子を刊行しようということになった。上巻の解題でも述べたが、底本の鹿児島県布達拾年壱と同拾年弐は、一部活版の原本が交じる写本の多い布達集であった。今回下巻に採録する同拾年参の冊子は、巻末に一部活版印刷がみられるだけで、大部分は筆写本である。また鹿児島県布達拾壱年の布達は十一冊に分冊され、多くは活版の布達原本を綴ったものである。このうち下巻に採録される拾壱年八と拾壱年九は写本が含まれている。別史料の御布達並雑書は全て写本である。以下各冊毎に見ることにしよう。

鹿児島県布達　明治拾年参

表紙には「宮崎県古公文書鹿児島県布達　明治拾年参」と活字で印刷された題箋が張られている。このうち拾年と参は押印と思われる。筆写に使われた用紙は印刷された宮崎県の罫紙である。

本書には、上巻の拾年弐に続いて、明治十年十一月一日から同年十二月二十八日まで、一一九通の布達が収録されている。各布達の頭に付ける記号には、甲・乙・丁・出甲・往・支・飫の七種と無号がある。このうち甲は第五九号から第七七号まで、鹿児島県令岩村通俊の名で布達され、特定の宛先はない。内容や形式から推して全県下に布達されたものと考えられる。乙は第三九号から第六〇号まで、同じく県内全域に布達されたと思われるが、甲との違いは宛先が県下の区戸長という点である。同十一年度の布達集には丙号があるがこの冊にはない。しかし『丁丑日誌』に丙号が第三二号までみられるので、十年度も丙号があったことになる。丁は十二月に第一号だけがみられ、内容は十一年度の徴兵調査に関するもので、宛先はなく鹿児島県令岩村通俊が発行者である。出甲は同じく鹿児島県令の名で発行され、文書No35・36・37の第六・第七・第八号にみる限り、芸技などの遊興渡世に関する布達である。No60の出甲第六号は番号が重複するが、県令代理大書記官渡辺千秋名で、内容は区戸長役所を、区長事務扱所・戸長事務扱所と変更する通知である。往は第三七七号から第五七六号まで一四通、鹿児島県令岩村通俊の発行で、宛先が宮崎支庁である。支は第一三四号から第五七二号まで四四通、宮崎支庁発行の布達で、支庁管轄内の各出張所へ宛てたものである。飫はNo66の第五九号の一通だけで、宮崎支庁が第百三大区那珂郡福島西方村（飫肥出張所管内）の区戸長へ宛てたものである。内容は西南戦争で薩軍に従軍した西方村士族の田中束穂など三人の裁判判決を、親族に伝えるようにと達したものである。無号には県令・支庁・出張所などから出されたものが混在し、無号となった理由は不明である。あるいは写本作成時に記号番号が欠落したものであろうか。

以上の記号番号は、上巻に採録した明治拾年弐でも同じようなものだと思うが、上巻の解題ではふれなかったのでここに追記しておく。また記号番の区別は発行当時それなりの意味があったと思われるが、記録を欠くので詳細は不明である。利用者の賢察を待ちたい。

発行された布達はどのような手順で県民に伝えられたのだろうか、一般的には、県令―支庁長―出張所長―区長―戸長―県民の順序で下達されたものと考えられる。但し前にみたように、乙号の布達は

県令から直接区戸長へ宛てられているので、他にも途中に省略される機関があったのではなかろうか。この区戸長とは当時の大区小区制の区戸長である。大区小区制とは、江戸時代の郷村制が廃止され、近代的な市町村制が採用されるまでの、明治初期の過渡的な地方行政組織である。それは明治五年にはじまり、同十一年郡区町村編成法が公布され、それが施行されるまでの制度である。鹿児島藩では郷士年寄の名称が廃止されると、しばらく常備隊の隊長がその役職をついだが、常備隊が明治五年に解体されて区戸長へと変った。大区小区制では、郷村制の郷が大区、村が小区となり、地名を使わず数字が付され、第何大区何小区何々町村と表記されるようになった。一区または数大区に一区長・副区長が、一小区または数小区に一戸長・副戸長が置かれて、末端行政を担当した。

巻末に、第一号から第三八号まで活版（第二号のみ手書き）の鹿児島県令岩村通俊の布達が六通ある。これは上巻に載せた拾年壱の布達と同じであるから省略し、末尾の一通、帰順掛心得書だけを末載分として採録することにした。

鹿児島県布達　明治拾壱年八

明治十一年の布達は十一冊に分冊されている。編集方針が変ったのか担当者の違いからか、拾年分とは分類に少し違いがある。拾壱年壱・同弐・同参は甲第一号から第一三七号まで、拾壱年四・同五・同六・同七は乙第一号から第三五一号まで、拾壱年拾・同拾壱は丙第一号から第三四五号まで、活版刷りの布達を集めたものである。表紙に「宮崎県古公文書鹿児島県布達　拾壱年八」とあり、手書きと違う木版刷りのような字体である。無号（鹿児島県第一課）と乙号三通・庶第五号（ともに鹿児島県令岩村通俊）、戸籍調査規程とその雛形、戸籍加除規定とその雛形があり、無号以下七通の布達はいずれも戸籍調査に関するものである。鹿児島県内の戸籍は壬申戸籍をみることは殆んどなく、明治十二年作成の戸籍が各地で見られたのは、この時に作成されたものであろうか。乙号の三通の目録は、文書目録では拾壱年五・同六に書かれており、この冊の頭に文書目録はない。このことから、布達をまとめるにあたり、戸籍調査に関する布達だけを乙号集から抜いて、拾壱年八としてまとめた可能性が強い。

鹿児島県布達　拾壱年九

表紙に「宮崎県古公文書鹿児島県布達　明治拾壱年九」とあり、鹿児島県と印刷された罫紙に書かれ、乙第二号から乙第七号別冊まで二八通の記号は全て乙号である。この冊の頭にある文書目録には「十一年筆記達目録」とあり、同番号の目録は第四冊以下と重複しているので、乙号のうち手書き分だけが抜き取られ、一冊にまとめられたものと思われる。乙号であるから、鹿児島県令岩村通俊の名で各地の区戸長へ出された布達である。ただし巻末に「本年乙第七号活版達ニアリ之別冊ナリ」として県下の地名が、薩摩国では伊佐・出水・鹿児島・日置・高城・薩摩・谿山郡が、大隅国では姶羅・桑原・噌唹・肝属・大隅・菱刈郡が、日向国では諸県・臼杵・児湯・那珂・宮崎郡内のものが印刷されている。地名は郷・村・門・山・川・谷・峠・橋など、現在でもよく知られる地名と、今では忘れ去られた地名もある。文書目録には「征討記編纂ニ付関係地名調査云々件」とあるので、西南戦争の戦記作成の調査資料であることがわかる。このうち日向国については、郡名の正誤欄に四ヶ所訂正があり、地名の正誤欄には多くの附箋が付けられ、当時の大区小区・村名・門の内な

ど、こまかい注記があるが、附箋は虫損でマイクロ撮影が不完全な頁が多く、解読できない場所が多かった。この地名一覧は西南戦争の戦場となった鹿児島・宮崎両県の地名を網羅しているものと思われる。

御布達並雑書

表紙には「御布達并雑書」とあり、鹿児島県立図書館に古くから収蔵された史料である。中扉に「鹿児島県立図書館蔵書之印」の角印と一四〇二五の番号があり、末尾の頁に大正13年11月5日の受入印がある。原蔵者や編者名はない。八四通の文書は、文久二年島津茂久（忠義）の条書にはじまり、明治二年の版籍奉還に関するものへと続き、鹿児島藩時代では知政所布達が多い。次に廃藩置県の関係史料があり、布達の発行者は始め鹿児島県庁であるが、同七年七月大山綱良が鹿児島県権令に任命されると大山権令、やがて鹿児島県権令大山綱良へ、同八年十月から鹿児島県令大山綱良が使われている。その後は岩村通俊になるが数は少ない。

雑書には布達以外の貴重な史料がある。その一つに桂四郎宛の西郷吉之助書翰が二通ある。東京から廃藩置県の協議の模様を知らせたもので、いずれもよく知られた手紙である。明治四年七月九日と七月十日付である。この手紙は『大西郷全集』や『西郷隆盛全集』・『旧記雑録追録』などにもみられ、三者とも字句に若干の違いがあるので、それぞれが利用した写本に違いがあったことになる。このうち七月九日付の書翰は、桂家に伝わる正文によると七月廿日の誤写であることがわかり、本書ではその他の字句も正文で校訂した。七月十日付書翰の校訂注は大西郷全集によった。

西郷書翰としては、他に大山綱良宛明治十年三月十二日付一通がある。これもよく知られた手紙であるが、写本による違いがある。本書では追伸に協同体の報告書を合せているが、日付が前後しているので本来は別の史料であろう。

上巻に採録した鹿児島県布達のうち、「明治五年より九年に至る」と「明治五年六月より六年十二月に至る」は島津家編集所蔵本の一部であったが、その史料は伊地知季通の旧記雑録追録に利用されていないと述べた。御布達並雑書の史料も多くは同追録と重複するが、同書に採録されていない史料も多いので、季通の眼にふれなかった冊子であると思う。なお上巻と重複する文書は注記して省略したが、同追録と重複する史料は残した。

鹿児島県布達の刊行を担当したことで気付いたことがある。明治十年以後宮崎県が分離するまでの鹿児島県布達の大部分は、宮崎支庁に残された「鹿児島県布達」にみられ、特に明治十年分については『丁丑日誌』（鹿児島県史料集Ⅱ）により詳しい史料がある。ところが、藩政が終った明治二年以後の鹿児島藩時代の知政所布達、さらに廃藩置県後の鹿児島県庁と県令の布達など、一部は旧記雑録追録にもみられるが、同書に洩れている布達も多いと思う。西南戦争以前の布達の一部は本書でも公刊できた。ほかにも版籍奉還・廃藩置県・常備隊の創設と解体・文明開化・郷村制の解体などに関する貴重な布達があったと思う。島津家編輯所編纂の諸史料集に拾えるであろうし、古い市町村史誌類に利用されていることも多い。散逸した史料を諸書に拾って、藩政末期から県政初期にかけての鹿児島県布達集が編さんされるのを待ちたい。

目次

鹿児島県布達……1

明治拾年参

鹿児島県布達……57

明治拾壱年八

鹿児島県布達……63

明治拾壱年九

御布達並雑書……85

文書題……135

例　言

一．本史料集には、鹿児島県立図書館所蔵「鹿児島県布達」のうち、明治拾年参、明治拾壱年八、明治拾壱年九と、「御布達並雑書」の四冊を収めた。

一．原稿作成に際しては、できるだけ底本の体裁に従ったが、一部書式を整えた文書もある。

一．ごく一部の史料は他書によって校訂したが、大部分は底本どおりである。

一．印刷に際して、原則として常用漢字に改めた。また変体仮名もすべて通用体の平がなに改めた。ただし、江・者・茂・而・与などについては、活字を小さくしてそのまま使用した。

一．虫喰いなどの不明か所は、字数によって□□で示した。

一．本文には適宜、読点や並列点などを付した。

一．底本の巻頭にある目次は、印刷に際し巻末に移し通し番号を付け、一部修正して本書の文書目録に利用した。鹿児島県布達では月日を追加し、御布達並雑書は目次を欠くので、新たに追加した。

一．本史料の原稿作成と校訂は、宮下満郎が担当した。

鹿児島県布達

明治拾年参

（表紙）

宮崎県
古公文書　鹿児島県布達　明治拾年参

（文書題ハ巻末ニ移シタ）

1

支第百三十四号

山野ニ遺棄有之候鉄砲弾薬其他兵器類、拾得候人民より届出、其出張所へ格護致置候分、或ハ区戸長へ預ケ有之分も悉皆取纏、本県へ向ケ郵送方可取計、此旨相達候也、

十年十一月一日　宮崎支庁

都城
宮崎支庁出張所

2

往第三百七十七号

宮崎支庁

其所轄日向国諸県郡都城居住之者之由、国幣中社羽後国大物忌神社権祢宜隈元常規帰省之処、今以帰社不致ニ付同人挙動探偵ノ儀、別紙之通社寺局長より掛合有之候条、取調方該区戸長江相達至急可申出、此旨相達候也、

明治十年十一月七日　鹿児島県令岩村通俊

別紙
局第八十号

国幣中社羽後国大物忌神社権祢宜奉職、其御県士族隈元常規儀、昨年十二月中養母看病トシテ帰省願出、旧教部省ニ於テ許可相成居候処、本年五月ニ到リ、同社宮司ヨリ今以帰社不致段上申致シ、其後同人より何等不申出候ニ付テハ、同人挙動御県下ニ於テ篤ト御探偵御申越有之度、此段及御依頼候也、

内務省社寺局長
明治十年十月九日　少書記官足立正聲

鹿児島県令岩村通俊殿

3

甲第五十九号

去ル八月廿六日暴風雨ノ為メ、家屋蕩壊又ハ流出シ、自ラ小屋掛ヲ営ム能ハサル者ヘハ、成規ニ照シ、家持ノ者ニ限リ小屋掛料五円又ハ三円貸下候処、今般特別ノ訳ヲ以、元借家人・同居人ニテモ別ニ木屋掛ヲ営ミ候者ヘハ、家持同様貸下候条、此旨布達候事、

明治十年十一月七日　鹿児島県令岩村通俊

4

支第百八十壱号

往第三百七十八号

宮崎支庁

今般警察施行ニ付、管下各警察所配置ノ義、別紙之通丁野少警視ヨリ通知有之候条、為心得此段相達候事、

明治十年十一月七日　鹿児島県令岩村通俊

（別紙）

第一方面

鹿児島海岸通野上橋・江戸橋、旧県庁前通・千石馬場通・西田橋ヲ

右ニ折リ甲突川ヲ境界トシ以西、郡山・入来・藺牟田・黒木・佐志・鶴田・出水以西北ヲ、左ノ警視署ヲ置キ所轄ス、

下方限警視署　谷山警視署　山川警視署　伊集院警視署
加世田警視署　宮ノ城警視署　水引警視署　出水警視署
南方警視署

第二方面

鹿児島海岸通野上橋・江戸橋、旧県庁前通・千石馬場通、西田橋ヲ右ニ折リ甲突川ヲ境界トシ以北、吉田・蒲生・曽木・羽月・大口・山野ヨリ以東、小林・高原・高崎・高城・山ノ口・都ノ城・松山・志布志以南、左之警視署ヲ置キ所轄ス、

上方限警視署　加治木警視署　国分警視署　栗野警視署
大口警視署　都ノ城警視署　志布志警視署　鹿ノ屋警視署
小根占警視署　垂水警視署

第三方面

須木・野尻・高岡・穆佐、左ノ警視署ヲ置キ所轄ス、

高岡警視署　宮崎警視署　飫肥警視署　佐土原警視署
美々津警視署　延岡警視署　高鍋警視署

5

支第二百廿九号
番外

去ル十月卅一日附及布達候番号ノ儀、乙第廿三号ハ甲第五十八号ノ誤リ、且ツ右区戸長ノ四字ハ削除候条、此旨布達候事、

明治十年十一月七日　　鹿児島県令岩村通俊

6

先般鹿児島へ賊徒乱入ノ節、官員ヨリ給仕・小使ニ至ルマテ、其所有品ヲ焼失シ又ハ盗奪セラレシ者ハ、左記ニ倣ヒ確実取調、来十一月三十日迄ニ差出スヘク、若シ期限ヲ過キ差出候モノハ、無効ニ帰シ候事、

但焼失・盗奪品等無之者モ其旨可申出、且已ニ届出候分モ書式相違之者ハ、更ニ可差出候事、

明治十年十一月七日　　鹿児島県令岩村通俊

記

一絹地綿入	新古ノ別	幾個	一木綿綿入	新古ノ別	幾個
一絹地袷	同	同	一木綿袷	同	同
一絹地単物	同	同	一木綿単物	同	同
一カダヒラ	同	同	一絹地胴着	同	同
一木綿胴着	同	同	一絹地衾	同	同
一木綿衾	同	同	一絹地布団	同	同
一木綿布団	同	同	一絹地袴	同	同
一木綿袴	同	同	一絹地袷羽織	同	同
一絹地単羽織	同	同	一木綿袷羽織	同	同
一木綿単羽織	同	同	一羅紗洋服三枚揃	同	同
一木綿又ハ麻洋服三枚揃	同	同	一羅紗マンテル	同	同
一羅紗チヨツキ	同	同	一羅紗ヅボン	同	同
一木綿又ハ麻マンテル	同	同	一同チヨツキ	同	同
一同ヅボン	同	同	一羅紗洋服大ウハギ	同	同
一絹地西洋ネマキ	同	同	一ラシヤ西洋ネマキ	同	同
一洋服鳶合羽	同	同	一同半合羽	同	同
一絹地ジュバン	同	同	一木綿ジュバン	同	同
一木綿洋服シヤツ	同	同	一毛織地洋服シヤツ	同	同

一絹地男帯　同　同
一絹地女帯　但大幅　同　同
一絹地女子供帯　同　同
一絹地段物　同　同
一麻地段物　同　同
一皮敷物　同　同
一絹地綿入敷物　同　同
一長靴　同　同
一半靴　同　同
一同木綿張　同　同
一皮帽子　同　同
一木綿帽子　同　同
一箪笥　同　同
一支那ツヾラ　同　同
一刀　但金作り
一勝手道具　但種類一々書並ヘ
一金釵
一鼈甲釵
一同笄
一懐中時計　但金ガハ并ニ附属品トモ
一掛ケ時計
一金カナモノ烟草入
一金烟管
一両掛　新古ノ別
一机　但日本製　同
一木綿男帯　同　同
一木綿女帯　但大幅　同　同
一木綿女子供帯　同　同
一木綿段物　同　同
一ケツト　同　同
一毛織敷物　同　同
一木綿綿入敷物　同　同
一並靴　同　同
一西洋傘絹張　同　同
一ラシヤ帽子　同　同
一絹帽子　同　同
一麦稈又ハアンヘラ帽子　同　同
一日本ツヾラ　同　同
一西洋ツヾラ　同　同
一刀　但銀作り
一化粧道具　但同前
一銀釵
一同櫛
一木櫛
一同　但銀ガハ并ニ附属品トモ
一置時計
一銀カナモノ同
一銀烟管
一長持　同
一同　但西洋製　同
一同　但支那製
一茶器　同
一図引道具
一提燈
一膳椀類　種類一々書立ル
一銅又ハ鉄又ハ木ノ矢立　新古別
一金作り眼鏡
一寒暖計
一掛物　誰人書画
一法帖　和刻
一日本書物
一西洋書物
一写真画
一薬種　種類
一日本酒
一味噌
一柔薬
一菓子
一酒器　種類物質一々書並ヘ
一筆墨
一ピストル・銃　但弾薬有無共
一紙　種類書立ル
一銀矢立
一望遠鏡
一銀作り眼鏡
一算盤
一書画帖　誰人筆
一同　唐刻
一支那書物
一日本書物西洋綴
一金子
一米
一西洋酒
一醤油
一烟草

右ハ、今般鹿児島再戦ニ付、私所有ノ物品、何地ニ於テ亡失イタシ候儀、相違無之候也、

明治十年　月　日

官姓名印

鹿児島県令岩村通俊殿

右ハ、只其大略ヲ掲ケタルモノナレバ、此外ノ物モ一々書立ルベキハ勿論、其品物ノ種類性質等マテ成ルタケ精細ニ書立ルベシ、

7　支第百七拾壱号

威銃ノ儀、速ニ免許鑑札下附セサレハ、人民難渋之場合モ可有之ニ付、自分各区より願出候節ハ取糺之上、不都合無之ニ於而ハ出張所限聞届、免許鑑札下付致シ追テ取束ネ可届出、尤期限ハ願人ニより伸縮アレトモ、来十一年四月十五日限免許スル儀ト相心得ヘク、依テ予備鑑札弐百枚及送附候、此旨相達候也、

但本条免許鑑札下附スル上ハ、該地警視分署へ為届出可申事。

十年十一月八日　　宮崎支庁

都城
宮崎支庁出張所

8　甲第六十号

銃猟ノ儀ニ付テハ、本年一月廿三日太政官公布ノ趣モ有之候処、当県管下ノ義ハ間モナク兵馬倥傯ニ際シ、自然徹底不致モノト相見ヘ、近来官許ヲ経ス猥リニ発砲致シ候者モ有之哉ノ趣、不都合ノ至リニ候、依テ自今厳重可及取締候ニ付テハ、万一右等ノ諸則ヲ熟知不致、犯則ニ当リ候者有之候テハ憫然ノ至リニツキ、正副戸長ヨリ一般無遺漏申聞、銃猟及有害ノ鳥獣ヲ除クカ為メ発砲致度者ハ、別紙公布面ニ照準早々願出ベク、此旨布達候事

明治十年十一月九日　　鹿児島県令岩村通俊

（別紙）

有害ノ鳥獣ヲ除ク可キ銃砲免許ノ仮規則

第一条

一有害ノ鳥獣ヲ除クカ為メ発砲致度モノハ、住所姓名自分年令ヲ記シ県庁へ願出、免許ヲ受ク可キモノトス、

第二条

一此銃砲ヲ免許スル小村ハ三挺、大村ハ五挺マテヲ限リトス、

但本文ノ挺数ニテ実際不足ノ村ハ、其事実ヲ調査シ、其挺数ヲ増加スルモ苦シカラサルモノトス、

第三条

一左ニ記載シタル者ニハ免状ヲ付与セス、

一年令十六歳未満ノ者

一白痴・風癲等ノ者

一故ナク弓箭銃砲ヲ放ツノ刑ヲ受ケシ者

第四条

一銃砲ノ玉目ハ四匁八歩以下ニ限ル可シ、軍銃ヲ用ユルヲ禁ス、

第五条

一此銃砲ヲ携フル者ハ必ス其免状ヲ帯フ可シ、何人ヲ問ハス免状ヲ看ント請者アラバ、直ニ之ヲ示スヘシ、

第六条

一発砲ノ期限ハ、実地ノ景況ニ随ヒ、一月一日ヨリ十二月三十一日マテ、一ヶ年ノ内或ハ六七ヶ月、或ハ九十ヶ月、適宜ノ月数取調、一期限ニ定ム可キ事、

但山陬僻遠ノ村落ニテ、若シ一ヶ年中発砲ヲ要スルノ土地ハ、一ヶ年ヲ一期ト定ムルモ苦シカラザルモノトス、

第七条

一期限ノ外、常ニ発砲スルヲ禁ス、然レトモ若シ不時ニ有害ノ鳥獣アリテ、不得止発砲スルトキハ、其旨直ニ届出置クヘシ、

第八条

一免状ハ其効一期限ニ限ルモノトス、

第九条

一免状ハ売買スルヲ禁ス、

第十条

一衆人群集ノ場所、或ハ銃丸ノ達ス可キ恐レアル距離ノ人家ニ向テ発砲スルヲ禁ス、

第十一条

一社寺人家ノ構内ニテ、漫リニ発砲スルヲ禁ス、

第十二条

一此銃砲ヲ用テ獲スル鳥獣ハ、官許ヲ経スシテ発売スルヲ禁ス、

右四条及第七条以下ノヶ条ヲ犯ストキハ、相当ノ処置ヲ為ス可シ、

（前欠）

禁ス、

但地下ノ景況ニヨリ、不得止此期限ヲ伸縮スルトキハ、其理由ヲ内務省ヘ届出可シ、

第十一条　日没ヨリ日出迄ノ時間ハ銃猟ヲ禁ス、

第十二条　凡出猟スルモノハ必ス其免状ヲ携帯スヘシ、出猟中警察官吏・区戸長・村役人等免状ヲ看ント請フ者アル時ハ、直ニ之ヲ示スヘシ、

第十三条　地主其所有地内ニ於テ、他人ノ銃猟スルヲ有害トスル時ハ、第八条所示ノ如キ制札ヲ建テ、其周囲ニ縄張又ハ徘徊ヲナスヘシ、

第十四条　凡一期間再犯以上ノ者ハ、其罰金ヲ倍科スヘシ、

第十五条　銃猟ヲ生業トスル者ニアラスシテ、職猟ノ免状ヲ受ケ遊猟スル者ニ五拾円ノ罰金ヲ科シ、免状取上ケ其期内銃猟ヲ禁スヘシ、

第十六条　総テ犯則ノ者ヲ、他ヨリ証跡ヲ取リ訴出ル時ハ、犯人罰金ノ半ヲ賞トシテ与フヘシ、

第十七条　第十四条・第十五条ノ外諸規則ヲ犯ス者ハ、三円ヨリ少カラス弐拾円ヨリ多カラサル罰金ヲ科スヘシ、

9

支第百六十七号

別冊衛生局報告第六号差回候条、至急各区ヘ相達、此節柄厚注意可為致、此段相達候也、

十年十一月九日　　宮崎支庁

都城

宮崎支庁出張所

別紙

内務省衛生局報告第六号

明治十年九月二十三日発行

別紙医学部内科教師「ベルツ」氏取調候虎列刺治方概略、心得ノ為報告ス、

虎列刺病治方概略

虎列刺病ヲ予防スルニ方リテ其最緊要ナルハ、公私ノ家屋中ニアル厠及汚渠ヲ清潔ニ掃除スルニ在リ、病毒ノ発育蔓延スルハ、多クハ此場所ヨリスレバナリ、既ニ此病ノ流行スル徴ヲ見ルトキハ、此等ノ法ハ既ニ画餅ニ属スルニ似タレトモ、尚務テ之ヲ施行セザル可カラス、

第一各人ノ注意ス可キハ、食物及其他ノ諸因、即チ腸管ニ病害ヲ生シ身体ヲ衰弱セシム可キ件ナリ、其食品中ニ就テ最モ恐ルベキハ、

不熟ノ果実・不良ノ蔬肉及ヒ飲酒過度ナリ、此レ直ニ病ヲ発スルモノニアラザレトモ、腸管ヲ衰弱セシメ容易ニ之ニ感シ、終ニ伝染ノ因トナルコトアレバナリ、

飲料ニ供スル井水ハ無害ト雖トモ、東京ノ如キ市中平坦ナル地ハ、汚水滲透シテ井泉ニ混スルコトアレバ、宜シク先ツ其水ヲ煮沸シテ後チ用ニ供スヘシ、或ハ之ニ酒精（酒或ハブランデー）ヲ加フルコトアリ、

平常良性ノ食餌・精整ノ割烹ヲ用ユルモノハ、新ニ之ヲ変換スルヲ要セス、食料ハ概スルニ肉品ヲ要シテ蔬菜ヲ要セス、（肉食ハ其小量ヲ以テ既ニ腹ニ充ツレバナリ）平素飲酒ニ慣ルヽモノハ適宜ニ之ヲ用フレハ、其害ナキノミナラズ却テ此痛ヲ避クルコトアリ、然レトモ尋常市上ニ販売セル粗悪ノ酒類（和洋ヲ論セス）、凡ソ身体ニ害アルモノハ之ヲ厳禁シ、且ツ総テ多料ニ用フヘカラス、麦酒モ亦常ニ之ヲ嗜マサルモノハ用フルコト勿レ、

既ニ前身ニ不快ヲ覚ヘ、消化機上ニ妨害ヲ生スルコトアラハ、仮令ヒ未タ下痢セサルモ、速ニ濃浸ノ茶ヲ温服シ、或ハ葡萄酒ニ少許ノ糖及桂皮ヲ混スルモノ、或ハ火酒ニ白糖温湯ヲ加ヘ、或ハ酒ヲ暖メテ服サシムベシ、常ニ酒ヲ嗜マサルモノハ、宜シク斟酌シテ其少量ヲ与ヘ臥蓐ニ就カシメ、温ナル毛布ヲ以テ包纏シ湯婆ヲ置クヘシ、

前日ヨリ便秘スルモノハ、蕓麻子油一食匙ヲ与フルモ危害ナシトス、

此病ノ流行スル際ニ方リテ、患フル所ノ下痢ハ初メ軽症ナルモ、直ニ重症ニ変スルコトアリ、速ニ治療ヲ加ヘサル可カラス、其治法ハ先ツ患者ノ食料不節ヨリ、腸中ニ不消化ノ汚物ヲ停滞スルヲ検シ得ルトキハ、蕓麻子油ヲ与ヘ之ヲ排導ス、然ラサルモノハ直ニ阿片ヲ用フベシ、全ク食物ノ停滞ニ由ラサルモノハ阿片ヲ用ヒ、其時期ヲ誤マラサルトキハ、大抵其効績ヲ見ル、其方

尋常阿片丁幾（十滴至十五滴）

毎二時、或ハ毎三時、其緩急ニ応シテ反覆シテ之ヲ用フ、

若シ精力沈衰症ヲ来ストキハ、前方中ニ亜的児ヲ加フ、其方

阿片丁幾（十瓦）　硫酸亜的児（三十滴）　薄荷油（五滴）

右混和シ八滴ヨリ十五滴ヲ一盞ノ茶ニ滴シ、毎三時ニ与フベシ、

前方中、吐根或ハ纈草ノ類ヲ加フルコトアリ、

又方

阿片末　一瓦　甘草末　甘草膏

各適宜ヲ加ヘ丸トナシ、二十粒ヲ作リ、石松子末ヲ以テ衣被トナシ、二丸ヨリ四丸ニ至ルヲ服ス、此方最簡便ナリ、

若シ亢奮ノ効ヲ欲スルトキハ、前丸中ニ一尾ノ龍脳ヲ加フ、但シ備急薬トナスニハ、魚膠或ハ護謨ヲ以テ衣被トナシ、龍脳ノ飛散ヲ防禦スベシ、其患者ハ兼テ身体ヲ温保シ、「フラネル」ヲ以テ下腹ヲ包纏スベシ、

真ノ虎列剌症（米泔汁様ノ下痢、多量ノ稀液ヲ吐シ、皮膚厥冷、脈博線ノ如ク摘掣、小便閉等）ヲ発スルモノハ、諸薬ヲ与フルモ皆ナ吐瀉シ去ルヲ以テ、患者ヲ温布ニ包ミ、龍脳或ハ亜的児ヲ皮下注射薬トシ用フ、其方ハ

龍脳末　二瓦　阿列布油　八瓦

毎三時、一注射器量（龍脳十分ノ一瓦ヲ含ム）ヲ施ス、

此法ヲ屡反復スルモ、曽テ中毒ノ害ヲ見ズ、之ヲ注射スルニ方リテ此溶液水ニ比スレバ、稍ヤ粘稠ニシテ噴出シ難キヲ以テ、或ハ管口ヲ閉塞スルモノアリト誤認スルコト勿レ、巧ニ此薬品ヲ注射スルトキハ其痕ニ炎証ヲ起スコトナシ、

劇シキ嘔吐アルモノハ氷片ヲ含マシメ、或ハ嚥下セシム、又純良ノ葡萄酒ト稠厚ノ肉羹汁、或ハ希釈セル龍脳亜的児ヲ与フベシ、

発作ノ際痙攣ニ疼痛ヲ兼ヌル者ニハ、「モルヒネ」百分瓦ノ一ヲ以テ一回ノ量トシ、皮下ニ注射スレハ、鎮痛ノ外ニ少シク止下ノ効アルニ似タリ、又法、「ロロラルヒドラード」廿分ヲ百分ニ溶シ、毎回四乃至六注射器量ヲ注射シテ効アリ、

近時舶載セル新薬「バラコトイン」ナルモノアリ、頗ル下痢ヲ止ムルノ偉効アリト云フ、此薬ノ一瓦五十分ノ一ヲ皮下注射トシテ用フ、若シ其実験ヲ経得ルトキハ、速ニ之ヲ報告スベシ、

反能期ニ至テ吐瀉減却スルモノハ、専ラ体力ヲ挽回シ、虚脱ヲ防禦スルニ在リ、此法モ亦温布（或ハ湿布）ヲ以テ身体ヲ被覆シ、又タ龍脳注射等ヲ施ス、此期ニ至レバ鶏子黄・大麦煎糜粥汁ヲ与フ、纔ニ時日ヲ経ルモノニハ鶏卵ヲ与ヘ、漸次肉食ニ転スベシ、其肉ノ製法ハ細判或ハ細裁スル新鮮ナル牛肉（煮炙ヲ経サル鮮肉ヲ云フ）ニ塩ヲ加ヘ与フ、又鶏肉羹汁に米ヲ加フルモノヲ与フ、

此病後ハ尤飲食ヲ節スヘシ、而シテ機那煎（機那皮十尾ヲ百五十瓦ニ煎取スルモノ）ヲ投ス、或ハ規尼・鉄ヲ与フ、

峻症ノ急発ヲ前知スレハ尿ノ検査ヲ怠ル可カラス、其劇シキ発作中ハ尿ノ分秘全ク閉止シ、再ヒ通利スルトキハ蛋白ヲ混シ其量少シ、尿中ニ蛋白ヲ顕スノ間ハ其病猶危峻ヲ免レス、尿利再ヒ減少シ更ニ蛋白ヲ顕シ或ハ之ヲ増多スルモノハ、所謂虎列刺泰裴土ノ徴ナリ、此病ハ其症候殆ト腸室扶私ニ類似シ、預後最不良ナリ、若シ此症ヲ発スルトキハ、対症治法ニシテ強キ亢奮薬ヲ与フ、即チ龍脳亜的児・麝香・安息散（十分ノ一瓦）・葡萄酒等ヲ最トス、此際ニ於テ尤佳兆トナスベキモノハ尿利ノ増多ナリ、

虎列刺ニ屡々継発スル諸病アリ、赤痢・実扶的利質私・脱疽性炎症是ナリ、故ニ預メ病者ニ示シテ、若シ其疑ハシキアレハ速ニ医ニ報知セシムベシ、

実扶的利質私ニ因テ終ニ気管裁開法ヲ施スベキニ至ルコトアリ、赤痢ハ純厚硝酸銀水（半瓦ヲ百瓦ノ水ニ溶スルモノ）ヲ浣腸料トナス、其衰弱ニ因テ死ニ至ラサルモノハ止瀉ノ効アリトス、

褥瘡及ヒ脱疽性炎症ハ、患部ノ圧迫ヲ避ケ気扇或ハ水扇ヲ用フ、已ニ其皮膚ニ紅色ヲ呈ルモノハ、亜的児ヲ以テ其部ヲ洗滌ス、又官粉硬膏ヲ厚攤シテ患部ニ貼ス、若シ効ナクシテ脱疽ニ変スルモノハ、石炭酸水（五十倍ノモノ）ヲ以テ洗滌シ、或ハ之ヲ綿絮ニ蘸シテ貼スルコトアリ、更ニ防腐ノ効ヲ取ラント欲スルトキハ、サリチル綿ヲ貼スヘシ、

10

往第三百八拾三号

宮崎支庁

其所轄下日向国那珂郡第十六大区一小区西方村、農山下弥五衛門次男、熊本鎮台工兵第六小隊第一番山下安太郎、十月十六日流行病ニ罹リ入院ノ後、翌十七日午後第一時死去候旨、同台ヨリ通知有之候条、此旨親族之者へ可相達、此段相達候事、

明治十年十一月九日　　鹿児島県令岩村通俊

11

往第三百九十号

宮崎支庁

其庁所轄日向国高鍋村士族坂田諸潔、十月廿二日別紙写之通処刑済之旨、九州臨時裁判所ヨリ通知相成候条、此旨親族江相達候様、原籍戸長へ達方可取計、此段相達候也、

明治十年十一月十日　　鹿児島県令岩村通俊

追テ、別紙宣告書写、本籍掲傍場江三日間掲示方可取計、此段添テ相達候也、

12

支第百七十七号

霧島神社へ、長尾神社外三社、摂社ニ被定候段被達候旨、内務省ヨリ別紙ノ通本庁へ御達相成候条、為心得此段相達候也、

明治十年十一月十日　宮崎支庁

都城
宮崎支庁出張所

別紙

神社第弐百十三号

別紙ノ通、霧島神宮外三社へ相達候条、此旨為心得相達候事、

鹿児島県

内務卿大久保利通代理

明治十年三月廿一日　内務少輔　前島　密

（別紙）

其宮摂社、別紙ノ通相定候条、此旨相達候事、

内務卿大久保利通代理

明治十年三月廿一日　内務少輔　前島　密

（別紙）

霧島神宮摂社

野上神社　長尾神社　霧島東神社　霧島岑神社

以上四社

13

乙第三十九号
達甲第三十七号

区戸長
府県

客歳十月熊本県下騒擾之際、及ヒ本年九州地方賊徒征討之後、戦死或ハ傷痍ニ原因シテ竟ニ死ニ至ル軍人之寡婦・孤児ハ、恩給令ニ因リ扶助料可下賜之処、特別ヲ以而、右死後報告其所管ヘ相達候日より平定ニ至ル迄、寡婦・孤児ノ内ヘ手当金可給与旨、本年丁第四百十九号大阪事務所鳥尾中将達及達甲第廿七号ヲ以テ相達候処、今般既ニ平定ニ至リ候ニ付テハ、手当金給与可相止筈ノ処、右ハ追而扶助料下賜候迄従前ノ通給与致シ候条、軍人・軍属ノ遺族ヘ無漏洩可相達、此旨更相達候事、

但扶助料許可之日ニ至リ、右手当金差引精算候等ノ儀ハ、都テ最前達ノ通リ可心得候事、

陸軍卿山県有朋代理

明治十年十一月十二日　陸軍中将西郷従道

14

支第三百三十七号
甲第六十壱号

右之通陸軍省ヨリ被達候ニ付、追テ規則実践扶助料下賜候迄、従前之通毎月手当金給与候条、此旨軍人・軍属ノ遺族ヘ無漏可相達、此段相達候事、

鹿児島県令岩村通俊代理

明治十年十一月十二日　鹿児島県大書記官渡辺千秋

去ル十月、本県甲第四十六号ヲ以テ、各出張所々轄替ノ儀及布達置

候処、今般詮議ノ次第有之、右之通更定候条、此旨布達候事、

明治十年十一月十三日　　鹿児島県令岩村通俊

吉田郷　十島　右、鹿児島出張所々轄
伊集院郷　右、水引出張所々轄
横川郷　右、菱刈出張所々轄
敷根郷　右、本庁直轄
百引郷　右、垂水出張所々轄

15

支第百九十壱号

区戸長給料支給方之儀ニ付、過般本庁江伺候処、今般別紙写朱書之通指令相成候条、為心得此旨相達候事、

明治十年十一月十三日　　宮崎支庁

都城
宮崎支庁出張所

別紙

区戸長給料支給方ノ儀ニ付伺

当庁所轄下区戸長給料官費支給之儀ニ付、発第百五十九号ヲ以内務省へ御伺出相成居候処、朱書之通御指揮有之、為心得御達之趣領承仕候、右給額之儀ハ、旧宮崎県ニオイテ別紙之通制定、各区へ相達致候趣ニ付、右ニ照準渡方取計可然哉、此段相伺候也、

十年十月十八日　　小野支庁長

岩村県令殿

第四百八十八号

書面之趣、追テ一定シ規則相達候迄、月給渡方之儀伺ノ通、

明治十年十一月九日　　鹿児島県令岩村通俊　印

16

支第百九十五号

本年租税石代相場ニ相用候条、第百五大区諸県郡都城町、第百七大区同郡小林町、十月十五日より十二月十五日まで日数六十二日間、日々上中下米・大豆・粟石代相場、従前差出候物価表ニ倣ヒ、各種類限別紙ニ取調差出サセ、来ル十二月廿五日限無相違送致可有之、此旨相達候也、

明治十年十一月十四日　　宮崎支庁

都城
宮崎支庁出張所

17

乙第二十九号

区戸長

売買禄之儀ニ付、先般大蔵省ヨリ官員派出取調可相成旨、本年八月当県乙第十四号ヲ以テ相達候処、去ル九月一日県下再騒乱ニ付一旦引揚今般再派出、不日当県官員倶ニ鹿児島及各郷ニ就キ、売買高取調可相成候条、最前達ノ通相心得、此達到着之日ヨリ七日以内ニ一郷限リ取調、其区戸長詰所ニ取纏置可申、且又家禄・賞典禄共八年分ヨリ金禄改定相場ヲ以テ、大蔵省ヨリ下渡相成候得共、旧令之都合ヲ以、従前之通米価之侭下渡相成候趣ニ付テハ、八九両年貢納相場ヲ金禄改定相場ニ比スレハ、八九両年トモ貢納相場遥ニ低価ナルヲ以テ、渡不足ニ相成居候分渡方相成可候間、是又別紙書式ニ倣ヒ、一郷限リ其区戸長詰所ニ取纏置可申、此旨相達候事、

但本年八月乙第十四号布達、騒擾之為メ相達セサル郷モ有之候ハヽ、更ニ可相渡候条、其旨至急可申出事、

明治十年十一月十五日　　鹿児島県令岩村通俊

（別紙）

八九両年家禄・賞典請取方御届

一家禄何石

一賞典何石

〆何石　八年相当

内　米何程

　　金何程

一家禄何石

一賞典何石

〆何石　九年相当

内　米何程

　　金何程

右之通、八九両年分家禄・賞典、請取候処相違無御座候也、

鹿児島カ　士族カ平民カ
何郷カ

年　月　日　何ノ誰印

改名代替ノ者ハ旧名ヲ肩書ニスヘシ

前書之通相違無御座候ニ付、証印仕候也、

右戸長

何之誰印

18

乙第三拾号

区戸長

当県士族昨九年秋所務米受取余有之者ハ、勘合ノ切符写相添受取方可申出旨兼テ相達候、追々取調済之分ヨリ下渡候処、九月一日鹿児島へ賊徒襲来之際簿冊紛乱ニ付、是迄渡方不相成居候処、此際調査可下付筈ニ候条、切符所持ノ者ハ願書并写相添、来ル廿五日迄ニ可差出、此旨相達候事、

但九月一日以前願書差出致、現金下渡不相成分ハ願書焼失之儀ト相心得、更ニ願書・切符写共可差出候事、

明治十年十一月十五日　鹿児島県令岩村通俊

19

乙第三十一号

区戸長

管下旧鹿児島藩元宮崎県管内諸県郡ヲ除ク士族平民、戊辰ノ役出軍賞典禄下賜候者トモ、廃藩置県之際大蔵省エ届出之名簿脱漏等有之、其後処々追加之者モ不尠候処、当県旧官員取扱之帳簿錯雑、人員・禄高等大蔵省保存ノ根帳ニ相違ノ廉モ相見ヘ、取調方甚タ不都合ニ付、賞典禄下賜候者ハ勿論、戦死人数・祭典料并ニ負傷者養禄下賜向モ、別紙明細書雛形ノ通、往復ヲ除キ廿日間ニ取調、当県本支庁、出張所ノ内へ可差出、此段相達候事、

明治十年十一月十五日　鹿児島県令岩村通俊

（別紙）

明治元戊辰年兵役賞典禄明細

族姓名	士族平民何ノ某　賞典禄下賜候後改名又ハ養子等相成候者ハ其訳ヲ記スベシ
住所	何大区何小区何番地字何々
族戸主	士族平民何ノ某父兄又ハ伯父何々何ノ某
賞典禄石数	賞典禄米何石
払受不相済分	何年何月以来賞典禄不受取
十年渡分公債利子向本年一月以来ニテ請取石数	十年一月米何石 同　三月米何石

同上米手形 所持之写	何月何日渡 手形何通　米何石

右之通相違無之候也、

第何大区何小区何番地居住
士族平民　何ノ某印
戸主旅行等ノ者ハ親族等ノ内代理ニテ可申出
右戸長
何ノ某印

鹿児島県令岩村通俊殿

明治元戊辰兵役戦死祭典米明細

族　戸主	士族平民 何野某　祭典米下賜候後改名又ハ養子等相成候者ハ其訳ヲ記スベシ
住　所	何大区何小区何番地字何々
族　姓名	士族平民 某嫡子・二男又ハ弟何々何ノ某　此界内ニハ戦死人ノ姓名ヲ記スベシ
戦死地名	何国何郡何町村ニ於テ何年何月何日戦死
祭典米石数	玄米何石
十六年度分公債利子ノ内本年一月以来ニテ請取石数	本年一月米何石 同　三月米何石　受取
同上米手形 所持ノ石数 年月日	何月何日渡 手形何通　米何石

右之通相違無之候也、

第何大区何小区何番地居住
士族平民　何ノ某印
戸主旅行等ノ者ハ親族等ノ内代理ニテ可申出
右戸長
何ノ某印

鹿児島県令岩村通俊殿

明治元戊辰年兵役負傷養俸明細

族　姓名	士族平民 何ノ某　養俸下賜候後改名又ハ養子等相成候者ハ其訳ヲ記スベシ
住　所	何大区何小区何番地字何々
族　戸主	士族平民 何ノ某父兄又ハ伯父何々何ノ某
負傷地名	何国何郡何町村ニ於テ何年何月何日負傷
養俸米石数	玄米何石
十年度分公債利子ノ内本年一月以来ニテ請取石数	本年一月米何石 同　三月米何石　請取
同上米手形 所持ノ写	何月何日渡 手形何通　米何石

右之通相違無之候也

第何大区何小区何番地居住
士族平民　何ノ某印
本人旅行等ノ者ハ親族之内代理ニテ可申出
右戸長
何ノ某印

鹿児島県令渡辺通俊殿

20

甲第六拾九号

今般区戸長仮職制章程及心得書并等級表、別紙之通相定候条、此旨布達候事、

明治十年十一月十六日　　鹿児島県令岩村通俊

（別紙）

区戸長仮職制章程

職制

区長

官省ノ公布・県庁ノ布達ヲ遵奉施行シ、区内一切ノ事務ヲ総掌ス、
区内ノ利害得失並戸長以下ノ功過(禍)・勤惰ヲ視察シ、之ヲ県令ニ具申スルヲ得、
区内ノ事務挙ラサレハ、其責ニ任ス、
学区取締ヲ置カサル区内ニ在テハ、学区取締ノ事ヲ兼勤ス、
筆生ヲ置キ、事務ノ繁簡等ニヨリ之ヲ進退増減スル事ヲ得、

副区長

職掌区長ニ亜ク、
区長欠席スル時ハ其職務ヲ代理ス、

戸長

官省ノ公布・県庁ノ布達ヲ遵奉シ、該区ノ事務ヲ管掌ス、
管掌ノ事務挙ラサレハ、其責ニ任ス、
学区取締ヲ置カサル区内ニ在テハ、正副区長ニ稟議シテ其学務ヲ助ク、

副戸長

戸長ニ亜キ、区内ノ事務ヲ分担ス、
戸長欠席スル時ハ、上級ノ者其職務ヲ代理ス、

区長事務章程

第一条　公布・公達ヲ各戸長ニ配当スル事、
第二条　戸籍ヲ調査スル事、
第三条　区内ノ政表ヲ調整スル事、
第四条　国民軍名簿及徴兵連名簿等ヲ調査シ、之ヲ具申スル事、
第五条　租税ノ上納ヲ監視スル事、
第六条　成規アル区入費ヲ賦課スル事、
第七条　士民ノ生死・婚姻及平民ノ相続又ハ養子等ノ諸届ヲ承認スル事、
第八条　士民他行届ヲ承認スル事、
第九条　失踪・逃亡届ヲ取扱フ事、
第十条　郷村社以下ノ例祭届ヲ承認スル事、
第十一条　戸長ヨリ申達スル人民ノ諸申牒ニ奥書スル事、
右各条ハ、成規定例ニ拠リ区長之ヲ処分スルヲ得、其他ハ総テ細大トナク県令ニ具申シ、其裁可ヲ仰クモノトス、
但第七条・第八条・第十条ハ毎一ヶ月限取纏メ之ヲ具申スヘシ、

戸長事務章程

第一条　公布・公達ヲ伝達スル事、
第二条　戸籍ヲ加除スル事、
第三条　国民軍及徴兵年令ヲ審調スル事、
第四条　租税ヲ取纏メ上納スル事、
第五条　地所建物質入書入及ヒ建物売買譲渡ノ節、之ヲ台帳ニ記シ割印ヲナス事、
第六条　士民ノ送入籍ヲ取扱フ事、
第七条　棄児迷子并行旅病人処分ノ事、
第八条　宿村逓送人取扱ノ事、
第九条　道路掃除及用悪水路疏通ノ事、
第十条　地籍ヲ調査スル事、
第十一条　物産ヲ調査スル事、
第十二条　人民ノ諸申牒ニ奥書スル事、
右各条ハ、成規定例ニ拠リ戸長之ヲ処分スルヲ得、其他ハ総テ細大トナク区長ヘ稟議スベシ、

区長心得書

第一条　区内人民へ　朝旨ヲ説明シ、法令ヲ遵守セシムル事、

第二条　下情ヲ暢達シ、決シテ擁塞ノ弊アルマシキ事、

第三条　人民ノ安寧ヲ謀り公益ヲ興シ、利用厚生ノ道ヲ誘奨スル事、

第四条　学区取締ニ協議シテ、学事ヲ勧奨スル事、

第五条　孝子貞婦其他奇特ノ者アラハ、速ニ其行状ヲ具申スベキ事、

第六条　鰥寡孤独其他貧窶ノ者ヲ恤ミ、救助ヲ仰クヘキモノハ其情状ヲ詳カニ開申スヘキ事、

第七条　人民ニ接スル、温厚篤実ヲ旨トシ、決シテ尊大ノ挙動アルマシキ事、

第八条　苞苴厳禁ハ勿論、百事公正ヲ旨トスル事、

鹿児島県区戸長等給表

長区			長区副			長戸			長戸副		
楷級	準等	月給	階級	準等	月給	一級	等外一等	八円	一級	等外三等	五円
一級	十二等	二十円	一級	十四等	十二円	二級	等外二等	七円	二級	等外四等	四円
二級	十三等	十五円	二級	十五等	十一円	三級	等外二等	六円	三級	等外四等	三円
三級	十三等	十三円	三級	十五等	十円						

21

乙第四拾五号

正副区長

別紙仮職制章程及心得書並等級表相達候条、夫々遵守可致候也、

明治十年十一月十六日　　鹿児島県令岩村通俊

22

支第百八号

宮崎支庁

今般区戸長配置方・同仮職制章程及心得方并等級表、別紙之通相定候条、為心得此旨相達候事、

明治十年十一月十六日　鹿児島県令岩村通俊

別紙

記

一戸長配置之事

毎戸長事務扱処区画内、戸数四百戸ヨリ千弐百戸迄ハ戸長壱人ヲ置キ、千弐百戸以上弐千戸迄ハ弐人ヲ置ク、逐次八百戸ヲ逓加スル毎ニ壱人ヲ増置ス、若シ戸数四百戸ニ盈タサルモ、必戸長壱人ヲ置クモノトス、然レトモ反別ノ広狭、地勢ノ便否、事務ノ劇易ニ因リ、斟酌増減アルハ勿論タル可シ、

一副戸長配置之事

毎戸長事務扱所区画内、戸数百戸ヨリ三百戸迄ハ副戸長壱人ヲ置キ、三百戸以上五百戸迄ハ弐人ヲ置ク、逐次弐百戸ヲ逓加スル毎ニ壱人ヲ増置ス、若シ戸数百戸ニ盈タサルモ、必副戸長壱人ヲ置クモノトス、然レトモ実地ノ景況ニ因リ、斟酌増減スルハ戸長ノ配置ニ同シ、

一正副戸長撰挙之事

該所轄出張所官員ト協議シ、従来在勤ノ者ト否トニ論ナク、性質篤実ニシテ筆算ニ通シ、能ク時勢ヲ弁和スル者ヲ撰挙スベシ、

但従来入札撰挙ノ慣習有之地方ハ、右慣習法ニ基キ入札、取立名数・人名ニ見込ミヲ付シ、具申スヘシ、

一戸長事務取扱（所脱カ）之事

一大区ニ付一ヶ所タルベシ、尤四十九大区牛山郷・四十七大区太良郷等ノ如キ、二三ヶ所ヲ置カサルヲ得サルノ地方ハ、甲ヲ戸長事務扱所トシ、乙亦ハ丙ヲ戸長事務扱所分局トスベシ、

第何大区某郷正副戸長撰挙状

一事務扱所区内　何百何十戸反別何町何反

右戸長　某所士族平民何ノ誰

但従来在勤ノ者　年令

副戸長　某所士族平民何ノ誰

但従来非役カ、又ハ何々カ　年令

副戸長　某所士族平民何ノ誰

但従来非役カ、又ハ何々カ　年令

右之通撰挙仕候也、

年号月日　正副区長連印

県令殿

鹿児島県正副戸長配置表

戸数	戸長人員	副戸長人員	正副戸長合人員
百戸	一人	一人	二人
二百戸	一人	一人	二人
三百戸	一人	二人	三人
四百戸	一人	二人	三人
五百戸	一人	三人	四人
六百戸	一人	三人	四人
七百戸	一人	四人	五人
八百戸	一人	四人	五人
九百戸	一人	五人	六人
千戸	一人	五人	六人
千百戸	一人	六人	七人
千二百戸	一人	六人	七人
千三百戸	二人	七人	九人
千四百戸	二人	七人	九人
千五百戸	二人	八人	十人
千六百戸	二人	八人	十人
千七百戸	二人	九人	十一人
千八百戸	二人	九人	十一人
千九百戸	二人	十人	十二人
弐千戸	二人	十人	十二人
三千戸	四人	十五人	十九人
四千戸	五人	二十人	二十五人
五千戸	六人	二十五人	三十壱人
壱万戸	十三人	五十人	六十三人

記

一筆生ノ事

区長事務扱処一個ニ付弐人乃至三人ヲ雇入レ、筆算等該役所ノ雑務ニ従事セシムヘシ、尤撰挙ノ上、族籍・姓名・年令・給料トモ届出ツヘシ、

但給料ノ儀ハ、十八銭ヨリ多カラス十銭ヨリ少ナカラサルノ日

給ヲ、適宜給与スベシ、

一区長事務扱所ノ事

担当区内各戸長事務扱処ノ内便宜ノ箇所ヲ撰ミ、合併ノ見込ミ相立伺出ベシ、

但事務混交セサル様注意スベシ、

23

支第二百拾九号

正副戸長

区戸長給料之儀、是迄民費課出之処、詮儀ノ次第有之、追テ相達候迄官費ヲ以テ支給候条、従前之給額及官軍進入、或ハ県官出張事務扱方相達候月日等詳細取調、至急可申出、此旨相達候事、

但シ、五月以後本日迄月給民費ニテ請取居候者ハ其趣可申出、

此旨添達候事、

明治十年十一月十九日

宮崎支庁

24

支第二百廿四号

正副区戸長

正副医務取締

第九十六大区ニ於テ天然痘流行ニ付、区内未痘児ハ勿論、普ク種痘候様注意可致、尤痘苗請求ノ向ハ、来ル三十日迄ニ可申出、此旨相達候事、

明治十年十一月十九日

宮崎支庁

25

支第二百廿五号

別紙高野安樹戦死之義、大坂鎮台より報知有之候条、別紙原籍戸長へ取計可申、且本県甲第廿七号布達ニ照準シ、右遺族ノ者より戸籍明細書差出候ハヽ、右を証拠トシ其出張所ニ於テ、一時繰替手当金支給可致、此旨相達候也

但戸長より之請書及遺族より差出シタル願書ハ、其都度取纏メ当庁へ可致進達候事

十年十一月二十日

都城

宮崎支庁出張所

宮崎支庁

（別紙）

支第二百廿六号

第百五大区一小区

戸長

其区内住居陸軍伍長高野安樹、今般西征ノ役肥後国玉名郡岩村口ニ於テ戦死候旨、別紙報告書相添大坂鎮台ヨリ通知相成候間、本人遺族之者へ申聞、受書取立可差出、此段相達候也、

但追テ寡婦孤児扶持料出願ノ節ハ、別紙報告書相添願立候筈ニ候得共、目下規則実践難致候間、平定ニ至ル迄手当金給与候条、当県甲第廿七号ヲ以布達致候陸軍省達但書ニ拠リ、差出候願書ニ副フルニ遺族之者年令・男女ノ別、及ヒ寡婦或ハ孤児、亦父母弟妹ノミアツテ之ヲ養育スル親族ナキ云々等、詳細取調タル書ヲ以金子請取方支庁出張所へ早々可申立旨、遺族ノ者へ可申聞候事、

明治十年十一月廿日

宮崎支庁

号外二ノ第千二十五号

其県高野安樹義、先般出征之処戦死候旨申来候ニ付、不取敢及御

報置(知)候条、親族之者へ早々御達有之度、此段申入候也、

十年十月十五日　　大坂鎮台□

鹿児島県庁

追而、戦死之景状并ニ埋葬地等ハ、相分次第可及御報告筈ニ候条、此段御承知迄ニ申副候也、

元宮崎県
日向国諸県郡都城陸軍伍長高野安樹

右、三月十二日肥後国玉名(名)郡岩村口ニ於テ戦死、

誰某

誰某

26

正副区戸長

各区内医術営業之者、并去ル十月中施療候負傷患者及平常病者之員数等、左ノ雛形ニ照準詳細取調至急可申出、此旨相達候事、

明治十年十一月廿日　　宮崎支庁

往第百廿七号

宮崎支庁

其地出張病院医員并各区内医術営業之者、及ヒ負傷患者・平常病者之員数等、左ノ雛形ニ準シ詳細取調至急可申出、此段相達候事、

追テ、毎区医務取締入用ニ候条、出張医員ハ協議ノ上、各区内医員ノ治術優劣ヲ察シ、甲乙ヲ付シ可申出事、

明治十年十月七日　　鹿児島県令岩村通俊

(別紙)

雛形

都合何名

外ニ出張先ニ於テ雇医アレハ、其族籍・姓名ヲ手記スヘシ、

一現今入院負傷患者　何拾何人

一同　外来負傷患者　何拾何人

一同　外来平常患者　何拾何人

右、何郷何村出張病院

何大区何小区何郷(何村カ何町)士族或ハ平民

医者　誰　某

一負傷患者　何十何人

一平常患者　何十何人

右、於自宅治療

臨時病院出張医員　　誰某

27

甲第六十二号

本年太政官第拾壱号公布鳥獣猟規則第弐条ニ準拠シ、有害ノ鳥獣ヲ除ク可キ銃砲規則、別紙之通仮定候条、此旨布達候事、

但右免許ヲ付与スルハ、無税ノ儀ト可相心得事、

明治十年十一月廿一日　　鹿児島県令岩村通俊

(別紙)

有害ノ鳥獣ヲ除ク可キ銃砲免許仮規則

第一条

一有害ノ鳥獣ヲ除クカ為メ発砲致シ度モノハ、住所姓名身分年令ヲ記シ、県庁へ願出、免許ヲ受ク可キモノトス、

第二条

一此銃砲ヲ免許スル小村ハ三挺、大村ハ五挺マテヲ限リトス、
但本文ノ挺数ニテ実際不足ノ村ハ、其実ヲ調査シ其挺数ヲ増加スルモ苦シカラザルモノトス、

第三条

一左ニ記載シタル者ニハ免状ヲ付与セス、
一年令十六歳未満ノ者
一白痴風癲等ノ者
一故ナク弓箭銃砲ヲ放ツノ刑ヲ受シ者

第四条

一銃砲ノ玉目ハ四匁八分以下ニ限ル可シ、軍銃ヲ用ユルヲ禁ス、

第五条

一此銃砲ヲ携フル者ハ必ス其免状ヲ帯フ可シ、何人ヲ問ハス免状ヲ看ント請フ者アラハ直ニ之ヲ示ス可シ、

第六条

一発砲ノ期限ハ実地ノ景況ニ随ヒ、一月一日ヨリ十二月三十一日マテ、一ヶ年ノ内、或ハ六七ヶ月、或ハ九十ヶ月、敵宜ノ月数取調一期限ト定ム可キ事、
但山陬僻遠ノ村落ニテ、若シ一ヶ年中発砲ヲ要スルノ土地ハ、一ヶ年ヲ一期ト定ムルモ苦シカラサルモノトス、

第七条

一期限ノ外常ノ発砲スルヲ禁ス、然レ共若シ不時ニ有害ノ鳥獣アリテ不得止発砲スルトキハ、其旨直ニ届出置クベシ、

第八条

一免状ハ其功一期限ニ限ルモノトス、

第九条

一免状ハ売買スルヲ禁ス、

第十条

一衆人群集ノ場所、或ハ銃丸ノ達ス可キ恐アル距離ノ人家ニ向テ、発砲スルヲ禁ス、

第十一条

一社寺人家ノ構内ニテ漫リニ発砲スルヲ禁ス、

第十二条

一此銃砲ヲ用テ獲スル鳥獣ハ、官許ヲ経スシテ発売スルヲ禁ス、

右四条及第七条以下ノケ条ヲ犯ストキハ、相当ノ処置ヲ為ス可シ、

28

乙第二十三号

区戸長

県下人民中秩禄并新旧公債証書所持之向ハ、過般鹿児島へ賊徒乱入之際元帳等紛乱候条、右証書所持之輩ハ利賦金下渡之都合モ有之候ニ付、金高種類番号記号枚数及印鑑共、別紙雛形之通相認メ為差出、区戸長ニ於テ取纏メ可申出、尤本人事故有之委任ヲ受候向者、願書別紙雛形之通為差出、前同様区戸長於テ取纏メ、其支庁来ル十二月十日迄ニ屹度差出可申、此旨相達候事、

明治十年十一月廿二日　　鹿児島県令岩村通俊

（別紙）

公債証書所持高御届

七年発行
八年発行

一秩禄公債証書高金何千円　　枚数何枚

但シ七年発行ト八年発行トハ区分掲出スベシ

内

明治何年何月何日

何府県第何大区何小区何町村何番地

士族
平民弘　何之誰ヨリ譲買受

金五百円　い印自壱壱至弐弐三　何枚
金三百円　ろ印自弐弐三至三三四　何枚
金　百円　は印自三三三至四四五　何枚
金五拾円　に印自四四五至五五七　何枚
金弐拾五円　ほ印自五五六至六六七　何枚

譲受シ人毎ニ前例ニ倣ヒ認ムベシ

一新旧公債証書高金何千円　枚数何枚

但シ新公債旧公債トハ区分掲出スベシ

内

明治何年何月何日

何府県第何大区何小区何町村何番地

何ノ誰ヨリ譲買受

金五百円　へ印自七七八至八八九
金三百円　と印自七七九至八八九
金　百円　ち印自九九三至壱三〇三
金五拾円　り印自壱九三三至弐三三四
金弐拾五円　ぬ印自弐三四五至弐四五九

譲受シ人毎ニ前例ニ倣ヒ認ムベシ

右者、前書之通秩禄新旧公債証書譲買受、或ハ何年何月何日下付、私所持罷有候処、今般御達モ有之因テ取調候処、書面之通相違無之ニ付、此段御届仕候也、

何国何大区何小区何町村何番地

年　月　日　士族平民弘　何之誰印

鹿児島県令岩村通俊殿

前書之通相違無之ニ付、奥印仕候也、

何大区何小区正副区戸長　何之誰

年号月日

公債証書利賦金所持人直受取ノ雛形

竪曲尺五寸

横曲尺三寸

秩禄公債或ハ　何国第何大区何小区何町村
新旧公債　何番地
印鑑（実印）　士族平民弘　何之誰

公債証書所持人倘シ事故有之利賦金受取方委任ノ受候向

雛形

竪曲尺五寸

横曲尺三寸

秩禄公債或ハ　何国第何大区何小区何町村
新旧公債　何番地
印鑑　何ノ誰代理
何国第何大区何小区何町村
何番地
士族平民弘　何ノ誰

公債証書利賦金受取方委任受候ニ付願

七八年発行

一秩禄公債証書高金何千円　枚数何枚

但シ七年発行ト八年発行トハ区分掲出スヘシ

内

金五百円　い印（自壱四四四至弐三四五）　何枚
金三百円　ろ印（自三三九至四四五）　何枚
金　百円　は印（自弐四五至三四九）　何枚
金五拾円　に印（自五九三至四九二）　何枚
金弐拾五円　ほ印（自四四九至五六三）　何枚

一新旧公債証書高金何千円　枚数何枚

但シ新公債ト旧公債トハ区分掲出スベシ

内

金五百円　へ印（自四四九至五八七）　何枚
金三百円　と印（自六七八至七九三）　何枚
金　百円　ち印（自四四九至五五八）　何枚
金五拾円　り印（自壱九三四至壱九五八）　何枚
金弐拾五円　ぬ印（自弐五九八至弐六〇四）　何枚

右者、何国第何大区何小区何町村何番地、士族欤平民欤、何ノ誰所有ノ公債証書利賦金受取方、事故有之委任相受候ニ付、私へ御下渡被下度、尤モ受取之節ハ委任状入御覧可申候得共、前以奉願候也、

何国第何大区何小区何町村何番地
士族欤平民欤　何ノ誰印

年号　月　日

鹿児島県令岩村通俊殿

前書之通願出候ニ付、奥印仕候也、

第何大区何小区
正副区戸長　何ノ誰印

年号　月　日

区戸長

29

支第三百四十七号

県税免許鑑札附与相廃シ候旨、本年二月番外ヲ以前県令大山綱良ヨリ相達候付テハ、税金モ廃シ相成候哉ニ心得候モノ有之趣、右ハ鑑札附与ヲ廃シ候ノミニ付、税金ハ昨九年五月租第八号、旧宮崎県布達県税規則ノ通収入候条、心得違無之様致シ、右規則ニ記載アル品目営業ハ、興廃トモ願出ヘキ旨、区内無漏可相達、此旨為念相達候事、

明治十年十一月廿二日

宮崎支庁

30

往第四百拾五号

都ノ城出張所

一金三百弐拾七円拾四銭七厘

外金八拾円　旅費等ヘ充テ用意金

右、其出張所一ヶ月費額予定之上相渡候条、精々節略ヲ要シ超過セサル様支払、一ヶ月限リ取纏メ精算帳ヲ製シ、翌月五日限リ本庁第六課ヘ可差出候事、

但官員月給及庁中買上品ノ類ハ本庁ヨリ運送ス、尤運搬不弁之場所ニ限リ、月俸ヲ除クノ外此限ニ非ス、

明治十年十一月廿四日　鹿児島県令岩村通俊

飫肥出張所

一金弐百三拾四円八拾四銭七厘

外金四拾八円　旅費等ヘ充テ用意金

右、其出張所一ヶ月費額予定ノ上相渡候条、精々節略ヲ要シ超過セサル様支払、一ヶ月限リ取纏メ精算帳ヲ製シ、翌月五日限リ本庁第六課ヘ可差出候事、

但官員月給及庁中買上品ノ類ハ本庁より運送ス、尤運搬不弁之場所ニ限リ、月俸ヲ除ク之外此限ニ非ス、

明治十年十一月廿四日　鹿児島県令岩村通俊

延岡出張所

一金三百弐拾七円拾四銭七厘

外金八拾円　旅費等ヘ充テ用意金

右、其出張所一ヶ月費額予定之上相渡候条、精々節約ヲ要シ超過セサル様仕払、一ヶ月限リ取纏メ精算帳ヲ製シ、翌月五日限リ本庁第六課ヘ可差出候事、

但官員月給及庁中買上品ノ額ハ本庁より運送ス、尤運搬不弁ノ場所ニ限リ、月俸ヲ除ク之外此限ニ非ス、

明治十年十一月廿四日　鹿児島県令岩村通俊

31

甲第六十四号

拙者儀、今般薩隅両国巡回ニ付不在中大書記官渡辺千秋代理候条、此旨布達候事、

明治十年十一月廿四日　鹿児島県令岩村通俊

32

乙第廿六号

区戸長ヘ

別紙之通布達候条、差向区戸長ニ於テモ厳重取締、不都合無之様可致、此段相達候事、

明治十年十一月廿四日　鹿児島県令岩村通俊

33

甲第六十五号

官有ニ属スル森林及道路並木・社寺境内樹木等ノ儀ハ、追々公達ノ趣モ有之、損木・槁木タリトモ、官許ヲ経スシテ猥リニ伐採候義決シテ不相成筈ニ候処、自然等閑ニ相心得、典刑ニ触レ候者有之候テハ不相済候条、以後心得違無之様可致、此旨更ニ布達候事、

明治十年十一月廿四日　鹿児島県令岩村通俊

34

本年五月以来、県下開戦ニ際シ職ヲ兵馬ノ間ニ奉シ、事或ハ即決急施ヲ要スルヨリ、不得止専決候筋モ有之候処、今日ニ到候テハ一々府県職制章程ヲ恪奉シ、其他定規ヲ践行候ハ勿論ノ儀ニ付、各課此意ヲ体シ、毫モ干犯抵触之儀無之様厚注意可致、此段相達候事、

但今後事務上ニ於テ、定規成例ヲ践行難致次第有之節ハ、各課長ニ於テ理由ヲ審明推査シ、其所見ヲ記シ、朱筆付帖ノ上差出候儀ト可相心得事、

明治十年十一月廿四日　岩村県令

35

支第三百九十四号

出甲第六号

各区
正副区長
正副戸長

密売淫并ニ貸座敷、芸娼妓等渡世不相成旨、更ニ出甲第七号及第八号ノ通布達候条、心得違ノ者無之様可致注意、此段相達候事、

明治十年十一月廿五日　　鹿児島県令岩村通俊

36

出甲第七号

密売淫・貸座敷・娼妓等渡世ノ儀ハ惣テ不相成筈ニ候処、騒擾後等閑ニ相心得、類似ノ所業候者不少趣相聞ヘ、不埒ノ事ニ候、向後右等ノ所業於有之ハ、左ノ罰則ニ依リ処分候条、此旨布達候事、

但旧宮崎県ニ於テ差許候貸座敷・娼妓渡世ノ者ハ、兼テ相達置候規則堅ク相守リ営業可致事、

明治十年十一月廿五日　　鹿児島県令岩村通俊

売淫罰則

第一条　凡ソ売淫ヲ為シ、及媒合客止スル者、初犯ハ拾円以内、再犯以上ハ弐拾円以内、窩主初犯ハ拾五円以内、再犯以上ハ三拾円以内ノ罰金ヲ科ス、

但父母等ノ指令ヲナス者ハ、其罰ヲ指令者ニ科ス、

第二条　若シ無力ニシテ罰金ヲ徴収ス可カラサル売淫者及媒合客止、初犯ハ二ヶ月半以内、再犯以上ハ六ヶ月以内苦使ニ処ス、

第三条　売淫ニ類スル猥褻ノ現跡ヲ認ムル三度ニ至ル者、此規則ニ照シ処置スヘシ、

第四条　売淫ノ罰ヲ受ケシ者貧窮ニシテ自存スル能ハサルトキハ、之ヲ救育シテ工芸ヲ授ク、但シ其工事ニ習熟シ又ハ工銭ノ貯蓄ヲ得、就産ノ目途アルカ或ハ人ニ嫁スル等ノ類ハ、親戚又ハ地主差配人等身元慥カナル者ノ保保(証カ)ヲ以テ之ヲ下付ス可シ、

第五条　右ノ者再犯ヲナストキハ、保証人ヨリ五円以内ノ罰金ヲ科ス、

第六条　寄留ノ者売淫ノ罰ニ処セシトキハ、其親戚又ハ雇主受人或ハ正副戸長等ヘ責付シ、本籍ヘ送還セシムルコトアル可シ、

第七条　右之罰金ハ総テ救育費等ノ費用ニ充ツ可シ、

37

出甲第八号

芸岐渡世ノ義ハ兼而不相成筈ニ候処、騒擾後等閑ニ相心得候者モ有之哉ニ相聞、以ノ外之事ニ候、以後心得違無之様可致、此旨布達候事、

但旧宮崎県ニ於テ差許候者ハ、兼テ相達置候規則堅ク相守、営業可致候事、

明治十年十一月廿五日　　鹿児島県令岩村通俊

38

乙第三十七号

各区戸長

本県士族旅行之儀、是迄戸長限リ聞届来候処、此際士族ニ限リ無願旅行不相成候条、必ス願書ヲ為差出、右壱通ヲ最早(寄カ)警視署又ハ警視派出所ヘ差出シ、該「書」所之検閲割印ヲ受ケ本人ヘ下付可致、外壱通ハ、何月何日何処警視署又ハ派出所ニ於テ検閲割印済、本人ヘ下付シタル旨ヲ朱書シテ戸長役場ニ留置キ、毎一ヶ月分ヲ取纏メ翌日五日限当県本支庁出張所之中ヘ可差出、此段相達候事、

明治十年十一月廿六日　　鹿児島県令岩村通俊

39

旧宮崎県区入費科目及賦課方法、別紙雛形之通詳細取調、往復ヲ除

ク之外七日限可差出、此段相達候也、

十一年(十カ)十一月廿六日　都城宮崎支庁出張所

第百四五七九大区各郷
正副戸長中

（別紙）

一大区限取調可差出雛形

旧宮崎県区入費科目及賦課方法

明治九年一月ヨリ九月マテノ現費ヲ掲クベシ、以下倣之、

一金何程都テ大科目ヲ掲クベシ、以下倣之、正副区長給料
一金何程　正副戸長給料
一金何程　大区筆生給料
一金何程　大小区事務扱所諸入費
一金何程　大小区事務扱所修繕費
一金何程　堤防橋梁其他用悪水路等修繕費
一金何程　何々

合金何程　仮令ハ区戸長ノ給料ハ戸数ニ割合、堤防橋梁等ノ修繕費ハ反別ニ割合フ等、其廉ニ因リ課出ノ方法相立居候ハヽ、合計ニ加ヘス別廉ニ顕シ、費目ノ但書ニ其訳記載スヘシ、現費ノ儀者何々ノ方法ヲ以取替置、毎一ケ月毎(三ケ)(二ケ)御届申上候上取立来、或ハ乙年分ノ区費予定概算シ、甲年何月取立来ルトキ、其仕来此処ニ記スヘシ、以下倣之、

金何程　学校費
戸数或ハ貧富ニ因リ課出ヲ異ニスル等ノ区別、
但一戸ニ付金何程、或ハ自金何程至何程、
金何程　神社費
戸数或ハ何々割等ノ区別、
但一戸ニ付金何程、或ハ云々、

此賦課法

金何程　戸数人口割
但一戸一口ニ付金何程
金何程　旧反別草高割
但一反歩一石ニ付金何程
内金何程　士族家禄高割
但家禄高一石ニ付金何程
金何程　貧富ニ因リ課出
但一戸ニ付従何程至何程

鹿児島県へ合併後

区入費科目及賦課方法

明治九年九月廿一日ヨリ十年四月迄ノ現費ヲ掲クヘシ、以下倣之、

一金何程　正副区長給料
一金何程　正副戸長給料
一金何程　大小区事務扱所修繕費
一金何程　何々
一金何程　何々
合金何程

外金何程　学校費
戸数或ハ貧富ニ因リ課出ヲ異ニスル等ノ区別、
但一戸ニ付金何程或ハ自金何程至金何程、
内金何程　戸数人口割
但一戸一口ニ付金何程

金何程　旧反別草高割
但壱反壱石ニ付金何程
金何程　何々割
但・・・・・・・・
一金何程　大小区事務扱所諸入費
何月幾日官費御下渡ノ分、但証書有無、
一金何程　何々費
内金何程　区内共力ヲ以償却ノ分
金何程　借金ヲ以操替払ノ分
但借用証書有無

戦争以後
区入費科目及賦課方法
明治十年五月ヨリ同十月迄ノ現費ヲ掲クヘシ、以下倣之、
一金何程　正副区長給料
一金何程　正副戸長給料
一金何程　何々費
合金何程
外金何程　学校費
戸数或ハ貧富ニ因リ課出ヲ異ニスル等ノ区別、
此賦課法
内金何程　戸数人口割
但一戸一口ニ付金何程
金何程　何々割
但――――
金何程　何々割

但――――
一金何程　大小区事務扱所諸入費
何月幾日官費御下渡ノ分、但証書有無、
一金何程　何々費
内金何程　区内共力ヲ以償却ノ分
金何程　借金ヲ以操替払ノ分
但借用証書有無
一金何程　神社費
但氏子戸数ニテ消費ノ分
一金何程　何々費
内金何程　官費御下渡ノ分
但証書有無
金何程　取立未済ノ分
内金何程　極難ノ者
金何程　兵燹ニ罹ル者
金何程　何々ノ云々ヲ以取立難出来分
右之通相違無御座候、以上、

第何大区何小区　何ノ誰印
何小区戸長　何ノ誰印
副区長　何ノ誰印
区長　何ノ誰印
県令宛

別紙写之通内務卿ヨリ御達有之、該官員本日其支庁江出発致候条、諸事不都合無之様可取計、此旨相達候事、

県令代理
十年十一月廿八日　渡辺大書記官
宮崎支庁

別紙
乾地第千百四号

鹿児島県

其県下官林手入代木并苗木植付等ニ付、当省八等属横山計人・九等属山本章造派出為致候条、諸事差支無之様協議可取計、此旨相達候事、

明治十年十月九日　内務卿大久保利通

41
支第三百八十号

別紙之通、駅逓局より照会有之趣ヲ以、本県より取調ノ義被相達候条、岩満袈裟吉ナル者本年一月来、局務ニ従事ノ有無詳細取調、至急可申出、此旨相達候也、

十年十一月二十八日　宮崎支庁
都城
宮崎支庁出張所

（別紙）

御管下日向国都城郵便局へ、一ヶ月金壱円五拾銭ノ給料ヲ以見習役可差置ニ付、親類等信任スヘキ者ノ内ヲ以人撰申出候様、同局為替発行ノ際相達置候処、本年一月中岩満袈裟吉ナル者撰挙致来候得共、御県下騒擾ニ際シ、取調役ノ在否モ不相分程ノ折柄ニ付、追テ平定ノ後更ニ在否ヲ審問ノ上、何分ノ処分可致積ニ候処、別紙ノ通給料受取方申立候上ハ、未タ同人採用ノ辞令等送付不致ト雖モ、騒擾ノ際本則ノ取扱難相成物ト見做シ、破格ノ訳ヲ以申立ノ通可聞届筋ニ候得共、同人実際局務ニ従事ノ有無如何ノ懸念不尠候ニ付、乍御手数実況御取調否来示相成度、此段及御照会候也、

十月十一月十三日　駅逓局長
前島内務少輔

岩村鹿児島県令

（別紙）

規第四三五号ヲ以テ御達相成候郵便為見習役、本年一月一日より一ヶ月金壱円五拾銭宛給料被成下候処、其義郵便御勘定表ニ組込方去月迄ノ間失念仕、誠ニ以不注意罷在、今更難申上奉存候得共、御下渡被下度儀ハ相叶申間敷哉、恐縮至極ニ奉存候得共、此段御伺奉申上候也、

日向国都城郵便局
明治十年十月四日　岩満九兵衛印

東京駅逓本局
発着課御中

42
甲第六十三号
甲第七号

当省下士以下兵役満期ノ者、当分解役差止候旨、本年六月甲第三号ヲ以テ及布達置候処、右ハ相廃候条、自今従前ノ通可相心得、此旨布達候事、

明治十年十月廿四日　陸軍大輔川村純義
（達候事）

右ノ通海軍省ヨリ被達候条、此旨布

鹿児島県令岩村通俊代理

明治十年十一月三十日　　鹿児島県大書記官渡辺千秋

43

区戸長

本年九月中相達置候、兵乱ニ付破毀焼亡ニ罹リシ宅地、及ヒ田畑荒地并昨九年以来天災ノ荒地共為検査、十二月五日出発官員巡回致シ候条、未小前帳差出サヽル各区ハ右巡回先へ可差出、此旨相達候事、

但検査日限ノ儀ハ巡村先ヨリ可達候間、総テ不都合無之様注意可致事、

明治十年十一月三十日　　宮崎支庁

44

支第三百八十五号

川西幸三

依願職務差免候事、

明治十年十一月廿日　　鹿児島県

龍岡新二

依願職務差免候事、

明治十年十一月廿日　　鹿児島県

45

支第三百八拾六号

右之通被相達候間、為心得此旨相達候也、

十年十一月廿日　　宮崎支庁

追テ別封本人共へ達方取計、受書取之可相廻候也、

別紙之通、本県ヨリ御達相成候間、其部内処轄之儀ニ付不都合無之様可取計、本文米額引請之上ハ其旨悉状可申越、此段相達候也、

明治十年十一月廿日　　宮崎支庁

都城出張所

電報写シ

小野一等属　　渡辺大書記官

陸軍会計副。シバシケイ。ヨリ、其支庁所轄志布志倉村ニ有米拾三俵、当県へ引渡トシテ、十二月三日鮫島軍吏副同所へ出張ノ筈、其支庁ヨリモ官員壱名、立会トシテ出張請取可シ、

十年十一月三十日

46

乙第四十一号

正副区長

区長事務章程末文ニ、其他へ総テ細大トナク県令ニ具申シ云々ト記載シ有之ハ、総テノ具申書県令宛ニ相認メ、該所轄庁又ハ出張所へ進達致候儀ト相心得、尤モ親展ヲ要スル書面ハ一切本庁へ可差出、此旨相達候事、

鹿児島県令岩村通俊代理

明治十年十二月一日　　鹿児島県大書記官渡辺千秋

47

日向国第百五十大区都ノ城ニ区裁判所設置、来ル十日開庁事務取扱候条、左ノ大区中人民へ係ル民事ハ金高百円以下、刑事ハ懲役百日以下裁判シ、勧解ハ金高等ニ不係惣テ同所へ可願出、訴訟其他宛名ノ義ハ、都城区裁判所長判事補窪田盛明宛ニテ可差出事、

第百三大区　第百四大区　第百五大区　第百六大区

第百七大区　第百九大区　以上六大区

鹿児島裁判所長

明治十年十二月三日　判事筧　元忠

今般鹿児島区裁判所設置、来ル十日ヨリ鹿児島裁判所内ニ於テ事務取扱候条、薩摩・大隅両国ノ人民ヘ係ル民事ハ金高拾円以下、刑事ハ懲役二十日以下裁判シ、勧解ハ金高等ニ不係惣テ同所ヘ可願出、訴訟等宛名ノ義ハ、鹿児島地区裁判所長手塚吉康宛ニテ可差出事、

鹿児島裁判所長

明治十年十二月三日　判事筧　元忠

甲第六十六号

管下鹿児島・都ノ城之両所ニ、今般区裁判所設置、来ル十日開庁之旨、鹿児島裁判所長判事筧元忠ヨリ別紙弐通差越候間、為心得此旨布達候事、

鹿児島県令岩村通俊代理

明治十年十二月四日　鹿児島県大書記官渡辺千秋

48

甲第六十七号

熊本県第十二大区八小区河俣村ニ於テ牛疫流行、十一月四日ヨリ廿日迄七頭相斃レ、尚蔓延ノ形勢有之趣通知有之候ニ付、当管下ニ於テモ右等ノ伝染病ニ罹ル牛畜有之節ハ、昨九年内務省乙第廿四号牛疫予防法ニ照シ処置致シ、速ニ可届出、此旨布達候事、

鹿児島県令岩村通俊代理

明治十年十二月四日　鹿児島県大書記官渡辺千秋

49

大分県下ニ於テ天然痘流行ノ趣、別紙写ノ通通報有之候ニ付、為心得及通達候条、兼テ相渡置候痘苗モ有之、定テ施行可相成候得共、尚一層注意致シ、無間断一般ヘ普及候様取計可有之、此段相達候也、

県令代理

明治十年十二月六日　渡辺大書記官

別紙

当県下大分郡鶴崎町ニ於テ、先般来天然痘流行之処、当今マテノ患者九十七人、内十五人死亡、猶亦即今大野・直入・日田・大分ノ四郡各所ニ於テ、該症ニ感染スル者都合四十人、内死亡一人有之候、就テハ予防法并種痘等専ラ施行致居候、此段及御報告候也、

権令代理

明治十年十二月一日　大分県少書記官小原正朝

鹿児島県令岩村通俊殿

50

支第四百十四号

第百弐大区三小区

正副区長

其区大窪村平民吉五郎弟岡田清吉義、別紙之通東京裁判所於テ処断相成候条、原籍ヘ達方可取計、此旨相達候事、

明治十年十二月六日　宮崎支庁

別紙

鹿児島県日向国那珂郡大久保村

平民吉五郎弟

岡田清吉

其方儀、江間千枝方ニ被雇中、同人所持ノ金十円盗取り、又ハ山本彦兵衛雇人赤沢啓助所持ノ衣類盗取貯金四円四拾銭、右科ノ内雇人盗家財物条ニ依窃盗ヲ以テ論シ、一等ヲ加ヘ懲役八十日申付ル、

明治十年十一月九日

鹿児島県令岩村通俊代理

十年十二月六日

鹿児島県大書記官渡辺千秋

51

支第四百四十二号

地租徴収期限ノ儀ハ、本年太政官第五十三号別紙公布ノ趣有之、実践スヘキハ勿論ノ処、当県下ノ儀二月以来兵難ニ際シ、第一・第二両期ノ如キハ倥傯ノ間ニ経過シ、且各郡村田畑荒廃ニ属スルモノ勘カラス、自然定額ノ租税ヲ上納シ不能分往々有之ニ付、曩ニ官吏ヲ派遣シ実地検査ヲ遂ケ候間、猶此上篤ト調査相当ノ税額可相達候得共、上納期限ノ儀ハ畑方沽券税ト雖モ、此際一時徴収候テハ困難ノ事情可有之ニ付、今後田畑トモ併テ三期ニ分チ、来明治十一年四月三十日ヲ以完納ノ期限ト相定メ徴収候条、此旨厚ク可相心得、依テ五十三号公布面歩合ニ準シ、先以当十二月一日ヨリ来明治十一年一月三十一日マテニ、田畑ハ定免額ノ凡四歩通、沽券税ハ昨九年貢金ノ凡五歩通上納可致候、然レトモ追テ本年貢額調査済ノ上ハ、過不足共後期ニ至リ猶可相達儀可有之候条、心得違無之様可致、此旨日向国ヘ布達候事、

但石代上納諸相場ノ儀ハ未定ニ付、先以仮ニ真米ハ延岡・佐土原・高鍋・飫肥・都ノ城五ヶ所、金禄相場平均四円拾銭六厘五毛六絲（米良山・椎葉山々ハ三割二歩減弐円七拾九銭弐厘四毛六絲）、其他赤米・大豆・粟・精麦・小麦ハ、仮ニ各区現今ノ相場ヲ相用ヒ置、追テ石代相場確定ノ上、過不足トモ決算致シ候義ト可相心得事、

52

支第四百拾壱号

区戸長

堤防・橋梁・井堰・用悪水路樋管破損所ノ義、難捨置分而已来春修繕之積、旧宮崎県ニオイテ相達置候雛形ニ倣ヒ、官民費用ノ区別相立目論見帳取調、本月廿八日限可差出候、且又本年修繕ノ儀、前県令大山綱良ヨリ及許可修繕差加候分有之候ハヽ、官員派遣実地検査ノ上、追テ何分ノ儀可相達ニ付、出来形精算帳取調、是又同日迄ニ可差出候、尤出来形帳差出済ノ分ハ、其旨申出候儀ト可相心得、此旨相達候事、

明治十年十二月七日

宮崎支庁

53

支第四百廿七号

区戸長（鹿児島出張所処轄大区ヲ除ク）

本年十一月乙第三十七号達書中戸長役場トアルハ、戸長事務扱所ノ書損ニ候条、此旨相達候事、

明治十年十二月七日

鹿児島県令岩村通俊代理

鹿児島県大書記官渡辺千秋

54

往第四百九十六号

宮崎支庁

本年五月以来、各地へ出張又ハ某救恤所等ニ於テ、兵乱後救恤米金施行候者ハ、右施行済届書又ハ精算書已ニ指出済之者モ有之候処、

該書類県庁兵火之節焼亡候分モ有之、旁取調之都合モ有之ニ付、別紙雛形ニ照シ、往復ヲ除ク之外五日限り無遺漏可届出、此旨相達候事、

但赴任已後救恤事務不致候者ハ、尚其旨可届出事、

明治十年十二月七日　　鹿児島県大書記官渡辺千秋

鹿児島県令岩村通俊代理

別紙

記

一何月何日ヨリ某所出張（某救恤所ニ於テ）、救恤米金施行セシ村町如左、

某大区　某町村
某大区　某町村

但鹿児島救恤所（入来院邸・諏訪邸ノ類）又ハ桜島救恤所等ハ、其概略ヲ記スニ止マル、

一本庁第六課又ハ某支庁・出張所ヨリ・金高何程・玄米何程、何処仮受取或ハ分取米ヲ以テ施行シ、何月何日第六課又ハ某支庁・出張所決算済、或ハ未タ決算不相済云々、

右之通

年号月日　　官姓名印

鹿児島県令岩村通俊代理

鹿児島県大書記官渡辺千秋殿

55

支第四百廿四号

第百五大区一小区戸長

佐藤信綱

依願職務差免候事、

明治十年十二月八日　　鹿児島県

右之通被相達候条、為心得此旨相達候也、

十年十二月十一日　　宮崎支庁

宮崎支庁出張所

追テ、別紙達方取計、受書為差出、送致可有之候也、

56

第九拾七大区弐小区

戸長

其区内住居士族陸軍伍長和木助五郎、今般西征ノ役肥後国熊本城外偵察中重傷ヲ受ケ即死候旨、別紙景状書相添熊本鎮台より通知相成候間、本人遺族ノモノへ申聞、受書取立可差出、此段相達候也、

但追テ寡婦孤児扶持料出願ノ節ハ、別紙景状書相添願立候筈ニ候得共、目下規則実践難致候間、平定ニ至ル（九月迄）手当金給与候条、当県甲第弐拾七号ヲ以布達候陸軍省達但書ニ拠リ、差出候願書ニ副ユル遺族ノモノ年令・男女ノ別、及ヒ寡婦或ハ孤児、又父母弟妹ノミアツテ、之レヲ養育スル親族ナキ云々等詳細取調タル書ヲ以テ、金子受取方支庁へ早々可申立旨、遺族ノ者へ可申聞候事、

明治十年十二月八日　　宮崎支庁

別紙

鹿児島県管下日向国児湯郡高鍋村士族

熊本鎮台歩兵第十三聯隊第二大隊第二中隊附

陸軍伍長和木助五郎

右、鹿児島県賊徒征討之際、明治十年三月十三日熊本城外偵察中、

坪井ニ於テ重傷ヲ受ケ即死候間、熊本県下立田山陸軍埋葬地ヘ埋葬候也、

熊本鎮台歩兵第十三聯隊長心得

明治十年七月　　陸軍少佐川上操六

57

往第五百四号

宮崎支庁

水火風震等ノ際、一時窮民救助規則ニ照シ救恤施行済ノ上ハ、別紙雛形ニ準シ、戸数・金高等ヲ記載シ、本人証書等取纏メ可指出、此旨相達候事、

鹿児島県令岩村通俊代理

明治十年十二月　　鹿児島県大書記官渡辺千秋

一金何千何百何拾円也　　事　水火風震云々ニ付
　　由　何月何日貸渡

内訳

罹災年月日	農具代	仝壱戸宛	小屋掛料	仝壱戸宛	国郡村姓名
明治何年何月何日	何円何拾銭	何円何拾銭	何拾何円	何　円	何郡何村何ノ誰外何名
仝	仝	仝	仝	仝	何郡何村何ノ誰外何名
小計	何拾何円	何円何拾銭	何百何拾円	何拾何円	何拾何人

右之通（小屋掛料農具代）貸下方取計申候ニ付、本人証書相添御届申候也、

何庁出張所詰

明治何年何月日　　官姓名印

県令宛

救恤米金渡表

一米何拾何石何斗何升何合　　事　水火風震云々ニ付

一金何拾何円何拾何銭何厘　　由　何月何日渡

一人員何千何百何拾何人

内訳

罹災年月日	男人員並米額	老幼男人員並米額	女人員並米額	郡村所□相場	郡村姓名
何年何月何日或ハ何日ヨリ何日マテ	何百何十人　米何石何斗何升何合	何百何十人　米何石何斗何升何合	何百何十人　米何石何斗何升何合	何郡何村下米　石ニ付何円何十何銭リ	何郡村　何ノ誰外何百何十人
仝	―――	―――	―――	―――	何郡村　何誰外何十人
小計	何千何百何十人　米何拾何石何斗何升合	何千何百何十人　米何拾何石何斗何升	何千何百何十人　米何拾何石何斗何升合		何千何百何十人

右之通救助米或ハ焚出シ又ハ金渡取計申候ニ付、戸長届書（事由）相添此段御届申候也、

何町出張詰

年号月日　　官姓名印

――――

県令宛

58

往第五百拾弐号

宮崎支庁

水火風震等ノ際、窮民一時救助規則ニヨリ、士族ヘ小屋掛料及ヒ農具代等貸付方之儀ニ付、別紙之通内務卿ヘ相伺候処、朱書ノ通御指令有之候間、為心得此段相達候事、

鹿児島県令岩村通俊代理

明治十年十二月十日　　鹿児島県大書記官渡辺千秋

別紙電信文

是迄各県士族へ小屋掛料及ヒ農具代貸付之儀、救助規則ニ適例無之、最早本年ヨリハ金禄公債証書御発行ニ付テハ、四民共凡テ身元難渋ノ者ニ限リ貸付可限哉、

指令

士族ニシテ、金禄秩禄公債証書之類有之者ヘハ、小屋掛料・農具代トモ貸付ノ儀難聞届候事、

59

其部下諸県郡都城士族山田(内)哲勝外三名、九州臨時裁判所ニ於テ、別紙ノ通処刑相成候条、別紙雛形ニ照準シ、原籍戸長ヘ達方可取計、此旨相達候也、

明治十年十二月十一日　宮崎支庁

都城宮崎支庁出張所

別紙

雛形

何大区何小区

戸長

其区士族平民何誰外何名、別紙ノ通九州臨時裁判所ニ於テ処刑相成候条、右親族之者共江夫々達方可取計、此旨相達候事、

年号月日　宮崎支庁

別紙

鹿児島県日向国諸県郡都城士族

山内哲勝

其方共儀、西郷隆盛ノ逆意ニ与シ、兵器ヲ弄シ衆ヲ聚メ、小隊長トナリ官兵ニ抵抗スル科ニ依リ、懲役十年可申付処情状ヲ酌量シ、除族之上懲役三年申付ル、

明治十年十月三十日

鹿児島県日向国諸県郡都城士族

菊池重彦

其方共儀、西郷隆盛等ノ逆意ニ与シ、兵器ヲ弄シ衆ヲ聚メ、分隊長トナリ官兵ニ抵抗スル科ニ依リ、懲役十年可申付処情状ヲ酌量シ、各除族之上懲役一年申付ル、

明治十年十月三十日

鹿児島県日向国諸県郡都城下長飯村士族

財部完治

其方共儀、西郷隆盛等ノ逆意ニ与シ、兵器ヲ弄シ衆ヲ聚メ、分隊長トナリ官兵ニ抵抗スル科ニ依リ、懲役十年可申付処情状ヲ酌量シ、各除族之上懲役一年申付ル、

明治十年十月三十日

鹿児島県第百七大区三小区麓村二番地士族

満留　均

其方共儀、官兵ニ抵抗スル賊徒ノ為メ、其使役ニ服スルト雖モ、情状ヲ酌量シ各其罪ヲ免ス、

明治十年十月三十日

60

出甲第六号

区戸長役所ノ儀、自今区長事務扱所・戸長事務扱所ト相唱ヘ候条、此旨布達候事、

鹿児島県令岩村通俊代理

明治十年十二月十一日　　鹿児島県大書記官渡辺千秋

61

乙第三拾五号

区戸長

府県

乙第九号

今般征討之役戦死或ハ傷痍ニ因テ、竟ニ死ニ至ル将校以下ノ寡婦孤児ハ、退隠令ニ因リ扶助料可下賜ノ処、現今戦死傷ノモノ取調中ニテ、目下本則ヲ以処分難相成ニ付、特別ヲ以右死没報告其所管ニ相達候翌日ヨリ、追テ規則実践候迄、該所管ニ於テ寡婦孤児ノ内ヘ、為手当毎月、本人死亡シタル時ノ官等ニ由リ、退隠令附録乙丙両号ノ表ニ照シ、其本額十二分ノ一ヲ給与スヘシ、又ハ父母或ハ幼少ノ弟妹ノミニテ、他ニ養育スヘキ親戚ナク難渋ニ及フ者ハ、退隠令第三拾一条ニ照準、相当ノ扶助料ヲ給フヘクニ付、該管ニ於テ詮議ノ上啓申可致、軍属ノ義モ其事由ニ因リ軍人同様之ヲ給ス、尤追テ本則ニ当テ実施候節ハ、右支給ノ金高差引、不足分ハ其節一時ニ下渡スヘク候条、死没軍人軍属ノ遺族ヘ無漏可相達、此旨相達候事、

但シ文官九等以上ハ都テ武官ノ等級ニ準シ、拾等ハ秘書副ニ、拾一等・拾二等ハ艦内教授役介ニ、十三等・十四等ハ鍛冶次長ニ、拾五等以下ハ木工長属ニ、等外ハ水兵ニ準シ下賜フ、

明治十年十一月二日　　海軍大輔川村純義

右之通被達候条、軍人軍属ノ遺族ヘ無漏可相達、此旨相達候事、

鹿児島県令岩村通俊代理

明治十年十二月十二日　　鹿児島県大書記渡辺千秋

62

支第四百六十三号

乙第四十八号

区戸長

旅籠屋渡世之者、已来宿泊為致候節ハ、本籍姓名年令等詳細帳簿ニ記載シ、最寄警視署又ハ派出所江急速可届出旨、右営業之者江無洩可相達、此旨相達候事、

鹿児島県令岩村通俊代理

明治十年十二月十二日　　鹿児島県大書記官渡辺千秋

（頭注、十一年四月第百六十三号ヲ以テ廃）

63

其他諸職工・牛馬車・船共、現今之賃金別紙ノ通相製シ、往復日数ヲ除キ二日間ニ取調可差出、此旨相達候事、

明治十年十二月十三日　　宮崎支庁

都城出張所中

別紙雛形

諸職工其他賃金調表

		戦争前賃金	当時ノ賃金
		金何程	金何程
木挽	一人一日		
大工	同	同	
左官	同		
石工	同		
人夫	同		
人夫	同		
馬	一疋	、、、	、、、
馬	一疋		
荷車	一里	、、、	、、、
人力車	同	、、、	、、、
牛	同	、、、	、、、
船	同	、、、	、、、

64　支第四百三十四号

区戸長

今般県庁新築ニ付、諸職工等人員取調ノ儀有之候間、別紙雛形ニ照シ其概員ヲ取調、尤至急ヲ要スル儀ニ付、往復ヲ除キ五日限、無間違当庁ヘ可差出、此旨相達候事、

明治十年十二月十三日　　宮崎支庁

雛形

一大工　何人　一石工　何人　一瓦師　何人
一左官　何人　一土方　何人　一鍛冶　何人
一杣　何人　一木挽　何人

右者、当庁内諸職工人員、書面之通候也、

第何大区何小区
戸長
年月日　何之誰印

65　甲第七十号

本年十一月廿五日出甲第七号ヲ以テ布達候売淫罰則第六条ニ、町用掛ト有之ハ正副戸長之誤リニ候条、此旨布達候事、

鹿児島県令岩村通俊代理

明治十年十二月十三日　　鹿児島県大書記官渡辺千秋

66　鉄第五十九号

百三大区々戸長

其区士族田中束穂外弐名、別紙之通九州臨時裁判所ニ於テ処刑相成候条、右親族ノ者共ヘ夫々達方可取計、此旨相達候事、

明治十年十二月十三日　　宮崎支庁

別紙

鹿児島県日向国那珂郡福島
西方村士族直長男
田中束穂

其方儀、西郷隆盛等ノ逆意ニ与シ、兵器ヲ弄シ衆ヲ聚メ、半隊長トナリ官兵ニ抵抗スル科ニ依リ、懲役十年ノ処情状ヲ酌量シ、懲役二年可申付処、初メ区戸長ノ達シニ出ルヲ以テ尚酌減シ、各除族ノ上懲役一年申付ル、

明治十年十月三十日

鹿児島県日向国那珂郡福島
西方村士族中長男
田中　登

其方共儀、西郷隆盛等ノ逆意ニ与シ、兵器ヲ弄シ衆ヲ聚メ、小隊ノ監軍トナリ官兵ニ抵抗スル科ニ依リ、懲役十年可申付処情状ヲ酌量シ、各除族ノ上懲役三年申付ル、

明治十年十月三十日

鹿児島県日向国那珂郡
西方村士族
日高百馬

其方共儀、官兵に抵抗スル賊徒ノ為メ其使役ニ服スルト雖モ、情状ヲ酌量シ各其罪ヲ免ス、

明治十年十月三十日

67

支第四百三十七号

其出張処部下第百五大区正副戸長、選挙状而已ニテハ等級難定候ニ付、区長へ見込為相立正副ヲ分チ、名前ノ上何級々々ト記載、至捷可差出、此旨相達候也、

十年十二月十三日　宮崎支庁

都城
宮崎支庁出張所

68

支第四百三拾九号

三級区長申付候事、

但取扱準十三等候事、

明治十年十一月三十日　鹿児島県

隈元棟貫

第百五大区担当申付候事、

同年　同月　同日　鹿児島県

隈元棟貫

右之通被相達候条、為心得此旨相達候也、

明治十年十二月十四日　宮崎支庁

都城
宮崎支庁出張所

追而、百四大区々長久保田好那、第百六大区々長竹内実知、第百七大区々長伊集院新六、第百九大区々長近藤七、副区長野村四郎義ハ、已ニ去ル十七日鹿児島ニテ被達候筈ニ付、其出張所江出頭ノ節、本人辞令書写為差出可相廻、此旨添達候也、

69

支第四百四拾五号

別紙之通、第百九大区四小区戸長江達方取計、追テ金円差出候ハヽ、其出張所ヨリ直ニ郵便為換ヲ以テ、広島県へ送致方可取計、依テ送致案相添此旨相達候事、

明治十年十二月十四日　宮崎支庁

都城
宮崎支庁出張所

追テ、為換手数料ハ、官費支払候儀ト可相心得候事、

別紙

支第四百四十四号

第百九大区四小区

正副戸長

其区温泉場ニ於テ、広島県安芸国第壱大区四小区平民永江儀兵衛儀病死候ニ付、埋葬方取計、右埋葬費弐円廿六銭七厘ハ、同人所持ノ金九円四拾八銭三厘ノ内ヲ以支払候旨原籍へ通知候趣、然ルニ永江ハ永井ノ誤ニテ原籍相違無之、依テ残金取纏メ原籍へ郵送有之度旨広島県ヨリ申越候条、右残金ハ仕訳書ヲ添至急都城当庁出張所へ可差出、此旨相達候事、

明治十年十二月十四日　宮崎支庁

70

支第四百四十六号

区戸長

当地電信分局ニ於テ、明十五日ヨリ私報通信取扱候旨、別紙ノ通申来候条、此旨相達候事、

明治十年十二月十四日　宮崎支庁

別紙

明十五日ヨリ私報取扱候間、其御管下中周御示達有之度、此段及御通知候也、

十年十二月十四日　宮崎電信分局印

宮崎支庁御中

71

甲第七十一号

本年四月中、当県下撫育・承恵両社ノ名ヲ以、紙幣類似之金券ヲ発行候趣相聞候ニ付、本年五月第廿一号ヲ以テ通用厳禁ノ儀及布達置候処、尚当節ニ至候テモ密ニ通用致候者モ有之哉ニ相聞、以テノ外ノ事ニ候、以来該券通用致候決而不相成候、若相背ニ於テハ相当ノ所分ニ可及候、且右金券所持ノ者ハ金高幷ニ枚数共区戸長於而詳細取調、至急本支庁亦ハ最寄出張所等ニ可届出、此旨尚又布達候事、

県令岩村通俊代理

明治十年十二月十四日　鹿児島県大書記官渡辺千秋

72

支第四百四十七号

第百四大区

区戸長へ

旧宮崎県中明治六年ヨリ同九年六月マテ諸建築費三分ノ一、其外民費課出之分未納高金弐百拾五円八拾壱銭四厘、本月廿七日限り皆納可致、此旨相達候事、

明治十年十二月十五日　宮崎支庁

同号

第百五大区

区戸長へ

旧宮崎県中明治六年ヨリ同九年六月マテ諸建築費三分ノ一、其外民費課出ノ分未納高金五百弐円拾八銭九厘、本月廿七日限リ皆納可致、此旨相達候事、

明治十年十二月十五日　宮崎支庁

同号

第百七大区

区戸長へ

旧宮崎県中明治六年ヨリ同九年六月マテ諸建築費三分ノ一、其外民費課出之分未納高金千四百六拾弐円九拾銭八厘、本月廿七日限リ皆納可致、此旨相達候事、

明治十年十二月十五日　宮崎支庁

同号

第百九大区

区戸長へ

旧宮崎県中明治六年ヨリ同九年六月マテ諸建築費三分ノ一、其外民費課出ノ分未納高金三百拾四円四銭三厘、本月廿七日限リ皆納可致、此旨相達候事、

明治十年十二月十五日　宮崎支庁

73

別紙第百七大区小区戸長へ達方可取計、此旨相達候也、

明治十年十二月十五日　都城宮崎出張所　宮崎支庁

別紙

支第四百四十九号

第百七大区一小区
戸長

先般其区副戸長甲斐良一ヨリ、熊本県出張戸長へ報知候同県平民道喜恒八死去候始末ノ儀ニ付、同県ヨリ別紙ノ通照会有之候条、右遺品売払償費相立、以明細書至急可届出、此旨相達候事、

明治十年十二月十五日　　宮崎支庁

74

往第五百二拾五号

宮崎支庁

都城屯在兵、不日熊本鎮台分遣兵ト交換云々、別紙之通鹿児島屯在兵司令長官長坂陸軍中佐ヨリ通知相成候ニ付、此段為心得相達候也、

鹿児島県令岩村通俊代理
明治十年十二月十五日　　鹿児島県大書記官渡辺千秋

別紙

都ノ城警備トシテ、歩兵第四聯隊第一大隊屯在候処、今般熊本鎮台ヨリ当地方警備トシテ歩兵一大隊分遣相成、不日到着交換ノ都合ニ付、該屯在兵来ル十四日同地引揚、当表ヨリ乗艦帰台為致候条、為御心得此段及御通知候也、

鹿児島屯在兵司令長官代理
明治十年十二月十五日　　長坂陸軍中佐

鹿児島県令岩村通俊代理
鹿児島県大書記官渡辺千秋殿

追テ、当地舎営ノ都合モ有之候ニ付、時宜ニ依リ該隊加治木ヘ一両日間滞在為致候哉モ難計候、為念此段申添候也、

75

乙第四十九号

区戸長

辛未秋廃藩四鎮台ヲ被置候節、旧諸藩ヨリ召集ノ兵、去ル八年二月現在服役ノ者ヘ、同年六月一日より二ヶ年間一人口下賜候常備、及ヒ第一・第二後備軍并隊外等服役中ノモノニ非スシテ、今度臨時召募ニ応シ候モノニ限リ、本年六月一日ヨリ向キ二ヶ年間一人口下賜候旨、達甲第三十一号ヲ以陸軍省ヨリ被達候ニ付テハ、右服役中ノモノヲ除クノ外、今般応募従軍ノ者人名、往復ヲ除キ十五日間ニ取調、本支庁・出張所ノ内ヘ差出可申、此段相達候事、

但本文応募従軍無之儀モ、同様可届出候事、

明治十年十二月　　鹿児島県令岩村通俊

76

乙第五十号

各区々戸長

今般各区正副区長、左之通申付候条、為心得此旨相達候事、

鹿児島県令岩村通俊代理
明治十年十二月十五日　　鹿児島県大書記官渡辺千秋

第一第二第三大区
二級区長　青山良啓　　二級副区長　上村行英

第四第廿二第五十第八十七第八十九大区
二級区長　山内賢助　　二級副区長　迫田利建

仝　　松崎平蔵

第五第十七第十八第廿大区
三級区長　伊集院直二
三級副区長　有川浄左ェ門
第六第七第十九大区
二級区長　上原前兵衛
三級副区長　阿多助左ェ門
第八第九第十第十一第十二大区
三級区長　竪山八郎
三級副区長　吉村喜八
第十三第十四第十五第十六大区
三級区長　新納源左ェ門
三級副区長　日高人志
第廿二第廿三第廿四第廿五大区
三級区長　橋口甚蔵
三級副区長　肱黒友直
三級副区長　町田仲之助
第廿六第廿七第廿八第廿九第卅二第卅三第卅四大区
三級区長　鳥丸一六
三級副区長　福島　巖
同　小笠原彦七郎
第三十第三十一第四十第四十一第四十二第四十三第四十四第四十五第四十六大区
三級副区長　林　菊助
同　名越五太夫
第卅五第卅六第卅七第卅八第卅九大区
二級区長　平山季雄
三級副区長　加藤祐徳
第四十七第四十八第四十九第五十第五十一第五十二第五十三第五十四第五十五第五十六第五十七大区
二級区長　築瀬善蔵
三級副区長　毛利直治
第五十一第五十二第五十三第五十四第五十五第五十八第五十九大区
二級区長　平田宗高
三級副区長　新納時房
第六十第六十一第六十二第六十三第六十四大区
三級区長　前田新之丞
三級副区長　園田与藤次
第六十五第六十六第六十七第六十八第六十九第七十大区
三級区長　村田不二
三級副区長　野元綱良
第七十一第七十二第七十三第七十四第七十五第七十六第七十七大区
三級区長　川口　貢
三級副区長　平田五郎右ェ門
第七十八第七十九第八十第八十一大区
三級区長　大迫元裕
三級副区長　長崎勇之助
第八十二第八十三第八十四第八十五第八十六大区
三級副区長　宮里仲之丞
同　石踊昌十郎
第八十八大区
二級区長　種子島六郎
二級副区長　久留十郎左ェ門
第九十四大区
二級区長　上村行清
三級副区長　大島正武
第九十五大区
三級区長　田原親二
三級副区長　安藤七郎
第九十六大区
三級区長　田原　武
三級副区長　渋谷佐八郎
第九十七大区
三級副区長　横尾　栗
第九十八大区
第百八大区兼務
三級区長　近藤千賀良
三級副区長　鈴木大八
同　加藤正時

第九十九大区
二級区長　曽根富弥
三級副区長　関　実賢

第百大区
三級副区長　石崎行篤

第百一大区
三級副区長　津田貞衛
同　和田案山子

第百二大区
三級副区長　群司一蔵

第百三大区
三級副区長　長谷場泰蔵

第百四大区
三級副区長　久保田好那

第百五大区
三級区長　隈元棟貫
三級副区長　田中金平

第百六大区
三級区長　竹内実知
三級副区長　田中　実

第百七大区
三級区長　土師盛大
三級副区長　伊集院新六

第百九大区
三級区長　上原保介
三級副区長　野村四郎

77
往第五百弐拾八号
宮崎支庁

県令岩村通俊赴任以来、戦地ニ在テ尽力不少候ニ付、勲四等ニ叙シ旭日小綬章ヲ授与シ、年俸金百八拾円下賜ル旨、東京表ニ於テ熊本県権令富岡敬明代理ヲ以拝受候旨、同人ヨリ電報有之候条、為心得此旨相達候事、

明治十年十二月十六日　鹿児島県大書記（官脱）渡辺千秋

78
支第四百六十六号
区戸長

当庁第一課職務係ニ、区戸長出庁簿ヲ製シ置候筈ニ付、御用ニテ出庁ノ節ハ、必該簿ヘ姓名ヲ記載シ致捺印候様可致、此旨相達候也、

明治十年十二月十七日　宮崎支庁

79
往第五百弐拾六号
宮崎支庁

県下戦地跡測量トシテ、今般陸軍参謀局ヨリ陸軍大尉福田半出張相成候ニ付テハ、各地区戸長ヘ尋問又ハ照会相成候儀モ可有之ニ付、其旨相心得諸事不都合無之様、予テ所轄内区戸長ヘ夫々可及通達、此段相達候事、

鹿児島県令岩村通俊代理
明治十年十二月十七日　鹿児島県大書記官渡辺千秋

80
往第五百三十三号
宮崎支庁

拙者儀、薩隅両国不在中、大書記官渡辺千秋代理候処、本日帰庁事務取扱候条、此旨相達候事、

明治十年十二月十七日　　鹿児島県令岩村通俊

81

甲第七十五号

左ノ通、鹿児島裁判所ヨリ申越候条、此旨布達候事、

明治十年十二月　　鹿児島県令岩村通俊

日向国第九十七大区宮崎ヘ区裁判所設置、来ル廿五日開庁事務取扱候条、左ノ大区中人民ヘ係ル民事ハ金高拾円以下、刑事ハ懲役二十日以下裁判致シ、勧解ハ金高等ニ不係惣テ同所ヘ可願出、訴状其他宛名之義ハ、宮崎区裁判所長判事河野忠三宛ニテ可差出事、

第九十四大区　第九十五大区　第九十六大区
第九十七大区　第百一大区　第百二大区
以上六大区

鹿児島裁判所長

明治十年十二月十七日　　判事筧　元忠

日向国第九十七大区延岡ヘ区裁判所設置、来ル廿五日開庁事務取扱候条、左之大区中人民ヘ係ル民事ハ金高百円以下、刑事ハ懲役百日以下裁判致シ、勧解ハ金高等ニ不係総テ同所ヘ願出、訴状其他宛名之義ハ、延岡区裁判所長判事補多賀叢生宛ニテ可差出事、

第九十八大区　第九十九大区　第百大区
第百八大区　以上四大区

鹿児島裁判所長

明治十年十二月十七日　　判事筧　元忠

82

丁第壱号

徴兵令ノ儀ハ、過ル明治五壬申年ノ公布ニ依リテ、士民一般既ニ熟知之事ニ可有之候得共、今般来ル明治十一年就役相当ノ徴兵取調候条、銘々篤ク御趣意ヲ奉戴可致、此旨諭達候事、

明治十年十二月　　鹿児島県令岩村通俊

83

乙第五十三号

区戸長

来ル十一年徴兵適令ノ者ハ、左ノ月間ニ誕生ノ者ニ候条、別紙書式ニ倣ヒ、来一月十日限本支庁・出張所ヘ可差出、尤右日限ハ決シテ猶予難相成儀ニ付、心得違無之様可致、此旨相達候事、

一　安政四巳年三月ヨリ同五年午年二月迄ノ間誕生ノ者

明治十年十二月　　鹿児島県令岩村通俊

84

乙第五十四号

区戸長

来ル十一年徴兵適令ノ者出稼ノ儀、右取調中差止メ可申、尚又当時出稼中ノ者ニシテ就役相当ノ者有之候ハヽ、至急呼戻置可申、此旨相達候事、

但免役相当ノ者ハ、本文ノ限ニアラス候事、

十年十二月　　鹿児島県令岩村通俊

85

乙第五拾五号

区戸長

徴兵取調ニ付テハ、士族平民ヲ論セス、就役相当ノ者ニシテ養子・

分家、又ハ嗣子相続人等出願ノ者有之候ハヽ、事情篤ト取調、実際不得止分ニ限リ其都度願書ニ奥印イタシ可差出、此旨相達候事、

明治十年十二月　　鹿児島県令岩村通俊

86

本日十一日附ヲ以テ及御送付候九州臨時裁判所ニ於テ処刑済宣告書写、其部下士族東熊太郎分遺落候間、更ニ及御送付候条、可然御取計有之度、此段申進候也、

十二月十七日　　宮崎支庁
戸籍掛

都城
宮崎支庁出張所御中

鹿児島県日向国諸県郡荘内郷
安永村七十五番地士族
東　熊太郎

其方共儀、西郷隆盛等ノ逆意ニ与シ、兵器ヲ弄シ衆ヲ聚メ、半隊長トナリ官兵ニ抵抗スル科ニ依リ、懲役十年ノ処情状ヲ酌量シ、懲役二年可申付処、初メ区戸長ノ達シニ出ルヲ以テ尚酌減シ、各除族ノ上懲役一年申付ル、

明治十年十月三十日

87

別紙知覧親雄戦死之儀、陸軍省ヨリ報知有之候条、原籍戸長ヘ達方取計可申、且本県甲第廿七号布達ニ照準シ、右遺族之者ヨリ戸籍明細書差出候ハヽ、右ヲ証拠トシ、其出張所ニ於テ一時繰替手当金支給可致、此旨相達候事、

但遺族ヨリ差出シタル請書・願書等ハ、取纏メ当庁ニ可致回達候事、

明治十年十二月十九日　　宮崎支庁
都城
宮崎支庁出張所

別紙
支第四百七十三号

第百五大区一小区
戸長

其区内住居陸軍伍長知覧親雄、今般西征ノ役肥後国益城郡豊福小野山攻撃ノ際重傷ヲ受ケ即死候旨、別紙景状書相添陸軍省ヨリ通知相成候間、本人遺族之者ヘ申聞、受書取立可差出、此旨相達候事、

但追而寡婦・孤児扶持料出願ノ節ハ、別紙景状書相添願立候筈ニハ候ヘ共、目下規則実践難致候間、当分手当金給与候条、当県甲第廿七号ヲ以テ布達致候陸軍省達但書ニ拠リ、差出候願書ニ副フルニ、遺族之者年令・男女之別及ヒ寡婦・孤児、或ハ父母弟妹而已アツテ之ヲ養育スル親族ナキ云々等、詳細取調タル書ヲ以テ、金子請取方支庁・出張所ヘ早々可申立旨、遺族之者ヘ可申聞候事、

十年十二月十九日　　宮崎支庁

別紙

鹿児島県管下日向国諸県郡都城
士族養父兵太亡
別働隊第二旅団選抜大隊第一中隊
伍長知覧親雄

右、明治十年三月三十日、肥後国益城郡豊浦小野山攻撃之際、重傷ヲ受ケ即死致シ候ニ付、肥後国八代郡八代町ニ埋葬致候也、

別働隊第二旅団選抜大隊長心得

明治十年九月十四日　　陸軍大尉目加田　健

88

支第四百七拾六号

旧宮崎県之際、其部内安楽富太郎へ預金未納別紙調書之通候条、本月廿七日限取立、其旨当庁第六課へ可申出、現金逓送之儀ハ追テ何分之可及指揮候、此段相達候也、

明治十年十二月十九日　　宮崎支庁

都城
宮崎支庁出張所

別紙

第百五大区都城
安楽富太郎

預金未納高

一金千弐百八拾五円七拾五銭

89

支第四百八十六号

来ル廿八日御用仕舞候条、為心得相達候事、

明治十年十二月十九日　　小野支庁長

都城出張所

90

本月中各自受領ノ件、来ル廿五日ヲ分界トシ、左ノ通取調、廿七日限可被差出候也、

明治十年十二月十九日　　小野支庁長

都城出張所

一諸願伺届及本庁達其他照会書等、合計何拾件、

内　何件　　指令及ヒ回答済
　　何件　　推問中
　　何件　　支庁申達
　　何件　　調査中

91

宮崎支庁

県下今般ノ兵乱ニ付、各処学校所属ノ書籍器具等、人家ニ、散在致居候儀有之候テハ不都合ニ付、若シ右等ノ儀有之候ハヽ、早々取纏メ、各所属ノ学校へ返付候様可取計、此旨相達候事、

明治十年十二月廿日　　鹿児島県令岩村通俊

92

支第四百八十七号

其部下、証券印紙・煙草印紙・訴訟用罫紙売捌人後金上納之者、計算表月々可差出之処、過般騒擾以来今日ニ至ル迄不差出、然ルニ今般諸印紙・界紙共取調之儀有之候間、別紙証券印紙計算表雛形ニ倣ヒ、各種限リ至急取調、往復ヲ除キ十日限リ取纏メ差出可申候、此段相達候也、

但印紙・界紙トモ売捌相済候税金ハ、本文日限迄ニ第三課へ相納候様可取計事、

十年十二月廿二日　　宮崎支庁

都城
宮崎支庁出張所

証券印紙売捌人
第百四大区壱小区　　中山徳太郎

第百五大区三小区　杉村伝左衛門
同　大区壱小区　渡辺伝次
同小区　大浦善作
同小区　高野直八
同小区　浜田吉助
同小区　大浦六兵衛
第百六大区壱小区　後藤伊左衛門
第百九大区三小区　田口富之丞
同　四小区　黒松藤左衛門
同　二小区　小野島仲兵衛
同　壱小区　谷口源左衛門
第百五大区壱小区　児玉源右衛門
証券・訴訟売捌人
同　大区同小区　野口要太郎
煙草印紙売捌人
第百四大区壱小区　山下喜左衛門
同　売捌人
同小区　又木平助
訴訟用罫紙売捌人
第百九大区壱小区　作山吉兵衛

第百六大区壱小区　高田新七
同　売捌人　後藤伊助　松永喜兵衛　八左衛門

左ノ人名宿所不分明ニ付、其部下在籍ノ者ニ候ハヽ、本文之通証券印紙計算表取調、差出候様可相達候事、

証券	印紙界紙	前月ヨリ越高	本月受取高	合高	本月壱口捌高	上納印税	差引残高
壱銭							
五銭							
拾銭							
弐拾五銭							
五拾銭							
壱円							
五円							
弐拾円							
計							
大判							
中判							
小判							
計							

右之通、印税上納并印紙・界紙差引残高奉預候段相違無之候也、

年　月　証券印紙売捌人

93

甲第七十四号

過般県下騒擾ニ付テハ、一時止ムヲ得サルヨリ各兵難ヲ他所ニ避ケ、於今其所在届出サル者往々有之趣、最早鎮定ノ今日ニ至リテハ速ニ可届出筈ニ付、是迄住所ニ転シ或ハ寄留等致居候モノハ、該本籍所轄戸長及寄留先キ戸長ヘ可届出、此旨布達候事、

明治十年十二月廿二日　　鹿児島県令岩村通俊

94
別紙古垣俊雄戦死之儀、陸軍省ヨリ通達有之候条、原籍戸長へ達方取計可申、且本県甲第廿七号布達ニ照準シ、右遺族之者ヨリ戸籍明細書差出候ハヽ、右ヲ証拠トシ其出張所ニ於テ、一時繰替手当金支給可致、此旨相達候事、

但遺族ヨリ差出シタル請書願書等ハ、取纏メ当庁江可致回送候事、

明治十年十二月廿四日　　宮崎支庁

都城
宮崎出張所

別紙
支第四百九十五号

第百五大区壱小区
正副戸長

其区内住居陸軍少尉古垣俊雄、今般西征之役豊後国海部郡赤木ニ於テ戦闘ノ際、銃丸ヲ受ケ即死致候旨、別紙景状書相添陸軍省ヨリ通達相成候間、該人遺族ノ者へ申聞受書取立可差出、此旨相達候事、

但追テ寡婦・孤児扶持料出願ノ節ハ、別紙景状書相添願立候筈ニ候へ共、目下規則実践難致候間、当分手当金給与候条、当県甲第廿七号ヲ以テ布達致候陸軍省達但書ニ拠り、差出候願書ニ副フルニ遺族ノ者年令男女ノ別及ヒ寡婦・孤児、或ハ父母弟妹ノミアツテ之ヲ養育スル親族ナキ云々等、詳細取調タル書面ヲ以テ金子請取方、支庁・出張所へ早々可申立旨、遺族ノ者へ可申聞候事、

明治十年十二月廿四日　　宮崎支庁

別紙

鹿児島県管下日向国諸県郡都城士族
出征第二旅団参謀部
陸軍少尉古垣俊雄

右、今般征西之役本年六月十九日、豊後国海部郡赤木ニ於テ戦闘之際、銃丸ヲ受ケ即死致候旨、該旅団司令長官陸軍少将三好重臣ヨリ報告候事、

明治十年十一月十九日　　陸軍省

95
別紙荒武直守戦死ノ儀、野津陸軍少尉ヨリ通知有之候条、原籍戸長へ達方取計可申、且本県甲第廿七号布達ニ照準シ、右遺族之者ヨリ戸籍明細書差出候ハヽ、右ヲ証拠トシ其出張所ニ於テ一時繰替手当金支給可致、此旨相達候事、

但遺族ヨリ差出シタル請書願書等ハ取纏メ、当庁江可致回送候事、

明治十年十二月廿四日　　宮崎支庁
都城宮崎支庁出張所

別紙
支第四百九十四号

第百七大区三小区
正副戸長

其区住居陸軍軍曹荒武直守、今般西征ノ役肥後国山本郡有泉村ニ於テ戦死候旨、野津陸軍少将ヨリ通知有之、尤モ景状書ハ即今取調中ニ付、追テ廻送相成候筈ニ候条、其旨遺族ノ者へ申聞、受書取立可差出、此旨相達候事、

但追テ寡婦・孤児扶持料出願之節ハ、景状書相添願立候筈ニ候得

共、目下規則実践難致候間、当分手当金給与候条、当県甲第廿七号ヲ以テ布達致候陸軍省達但書ニ拠り、差出候願書ニ副ルニ、遺族之者年令男女之別及ヒ寡婦・孤児、或ハ父母弟妹而已アツテ之ヲ養育スル親族ナキ云々等、詳細取調タル書面ヲ以テ、金子受取方支庁・出張所へ早々可申立旨、遺族之者へ可申聞候事、

明治十年十二月廿四日　　宮崎支庁

96

支第五百弐号

第百四大区区長久保田好那義、任処ニ赴カサル儀再応申出ノ趣ニ依リ、昨二十四日鹿児島出張処江電報ヲ以及照会候処、同人義ハ不都合之次第有之、諭免可相成旨申来候条、右代員トシテ副区長壱名撰挙ノ義大至急可申出、此旨相達候也、

明治十年十二月廿五日　　宮崎支庁
都城
宮崎支庁出張所

97

支第五百六号

区戸長

本年地租ノ儀、同年第五拾三号公布面歩合ニ準シ、先以当十二月一日ヨリ来明治十一年一月三十一日マテニ、田畑ハ定免貢額ノ凡四歩通リ、沽券税者昨九年貢金ノ凡五分通リ上納可致旨、支第四百四拾弐号ヲ以布達相成候通ニ候処、期日ニ至リ一時ニ着湊上納候テハ、現金改方ハ勿論自然不都合ヲ生スヘキニ付、各大区別紙日割ノ通相心得、該日午前十時マテニ当庁第三課へ相納可申、此旨相達候事、

但日割ノ通上納致シ候ニ付テハ都合モ有之ニ付、前日現金検査ヲ受ケ、該日上納可致儀ト可相心得事、

明治十年十二月　　宮崎支庁

別紙

貢金上納日割

廿二日	第九十四大区 第九十五大区	廿三日	第九十六大区 第九十七大区
廿四日	第百一大区 第百六大区	廿五日	第百二大区 第百三大区
廿七日	第百四大区 第百五大区	廿八日	第百九大区 第百七大区
廿九日	第九十八大区 第九十九大区	三十一日	第百大区 第百八大区

98

支第五百七号

其出張所部下各大区各小区正副戸長改撰済ノ上ハ、従来奉職ノ正副戸長改撰洩レ候者ハ、別紙書式ニ倣ヒ至急辞表為差出候様可取計、此旨相達候也、

明治十年十二月廿五日　　宮崎支庁
都城宮崎出張所（支庁脱カ）

別紙

追々区戸長勤向等御改正相成候趣承知仕候ニ付テハ、不肖ノ私職務被差免度、此段奉願候也、

何大区何小区副正戸長
年月日　　何ノ誰印

鹿児島県令岩村通俊殿

99

乙第五十八号

宮崎支庁

本年十二月廿九日ヨリ来明治十一年一月三日マテ、本支庁・出張所共事務休憩候条、此旨相達候事、

明治十年十二月廿五日　　鹿児島県令岩村通俊

100

往第五百七十六号

宮崎支庁

本県備付ノ刀銘々拝借ノ輩ハ、来十一年一月十日迄ニ第六課ヘ可申出、尤拝借中掠奪焼亡等有之向ハ、其旨書面ヲ以可届出候事、

但納方之儀ハ、尚追テ可相達候事、

明治十年十二月廿五日　　鹿児島県令岩村通俊

101

鹿児島県一等属従六位小野修一郎

鹿児島県御用掛申付、月俸八拾円給与候事、

但取扱准奏任候事、

明治十年十二月二十六日　　鹿児島県

102

支第五百拾号

第百七大区三小区

戸長

其区三ヶ野山村字角内官林松木ノ内五千百本、明治七年中紙屋村商中馬弥介ヘ、旧宮崎県ニ於テ払下候分詮議ノ次第有之、自今伐採差止候、就テハ伐採残立木取調、来ル十一年一月十日迄ニ無相違可差出、此旨相達候事、

但右官林反別・立木・四至境界等別紙雛形ニ倣ヒ、尚絵図面トモ取調、本条調書一同可差出事、

明治十年十二月廿六日　　宮崎支庁

103

支第五百拾二号

別紙、原籍戸長ヘ達方可取計、且本県甲第五拾号布達ニ照準シ、遺族ノ者ヘ手当金給与ノ儀ハ、今般西南ノ役戦死者遺族ヘ致給与手続キヲ以テ、其出張所ニ於テ一時繰替渡方可取計、此段相達候也、

但遺族ヨリ差出シタル請書・願書等ハ、取纏メ当庁ヘ可致回達、

此旨添達候也、

明治十年十二月廿六日　　宮崎支庁

都城宮崎支庁出張所

別紙

第百五大区一小区

戸長

其区内住居熊本鎮台生兵兼崎則重、客歳熊本県賊徒暴動ノ際戦死候旨、同台ヨリ別紙明細書相添報告有之候条、本人遺族之者ヘ申聞請書取立可差出、此旨相達候事、

但寡婦・孤児扶持料給与之儀ハ、当県甲第五拾号ヲ以布達致候陸軍省第廿七号達ニ拠リ、金子受取方都城当支庁出張所ヘ早々可申立旨、遺族之者ヘ可申聞候事、

明治十年十二月廿六日　　宮崎支庁

104

支第五百拾五号

別紙内村紋太郎外弐名戦死之儀、熊本鎮台ヨリ報知有之候条、別紙

別紙

明治九年熊本賊徒暴動ノ際戦死人名

県名　住所	死没月日	旧所轄	官	姓　名
旧宮崎県士族　日向国第十二大区一小区郡元村	九年十月廿四日	熊本鎮台	生兵	兼崎則重

原籍戸長へ達方可取計、且本県甲第廿七号達ニ照準シ、右遺族之者ヨリ戸籍明細書差出候ハヽ、右ヲ証拠トシ、其出張所ニ於テ一時繰替手当金可致支給、此旨相達候也、

但親族より差出シタル請書・願書等ハ、其都度取纏メ当庁へ可致進達候事、

明治十年十二月廿六日　宮崎支庁

宮崎支庁出張所

別紙

第百七大区五小区

戸長

其区内住居熊本鎮台兵卒内村紋太郎、今般西征之役日向国坂ノ口ニ於テ戦死候旨、熊本鎮台より報告相成候間、本人親族之者へ申聞、請書取立可差出、此旨相達候事、

但寡婦・孤児扶助料之儀ハ、当県甲第廿七号ヲ以テ致布達候陸軍省達但書ニ拠リ、差出候願書ニ副フルニ、遺族之者年令・男女之別及ヒ寡婦・孤児、或ハ父母弟妹ノミアリテ之ヲ養育スル親族ナキ云々等、詳細取調タル書ヲ以テ、金子受取方支庁出張所江早々可申立旨、遺族之者江可申聞候事、

明治十年十二月廿六日　宮崎支庁

第百七大区二小区

戸長

其区内住居熊本鎮台兵卒岩崎十郎、今般西征之役六月九日野田村ニ於テ戦死候旨、熊本鎮台ヨリ報知相成候間、本人親族之者へ申聞、請書取立可差出、此旨相達候事、

但寡婦・孤児扶助料之儀者、当県甲第廿七号ヲ以テ致布達候陸軍省達但書ニ拠リ、差出候願書ニ副フルニ、遺族ノ者年令・男女之別及ヒ寡婦・孤児、或ハ父母弟妹ノミアリテ之ヲ養育スル親族ナキ云々等、詳細取調タル書ヲ以テ、金子請取方支庁出張所江早々可申立旨、遺族ノ者へ早々可申聞候事、

明治十年十二月廿六日　宮崎支庁

第百七大区三小区

戸長

其区内住居熊本鎮台兵卒河野庄左衛門、今般西征之役三月十三日負傷六月一日死去候旨、熊本鎮台ヨリ報知相成候間、本人親族ノ者へ申聞、請求（ママ）書取立可差出、此旨相達候事、

但寡婦・孤児扶助料之儀ハ、当県甲第二十七号ヲ以テ致布達候陸軍省達但書ニ拠リ、差出候願書ニ副フルニ、遺族ノ者年令・男女之別及寡婦・孤児、或ハ父母弟妹ノミアリテ之ヲ養育スル親族ナキ云々等、詳細取調タル書ヲ以テ、金子請取方支庁出張所へ早々可申立旨、遺族ノ者へ可申聞候事、

明治十年十二月廿六日　宮崎支庁

105

支第五百六十四号

区戸長

本月十七日ヨリ、宮崎松山町六十三番官舎臨時支病院ニ於テ、本務ノ余暇外来診察差許候条、志願ノ者ハ別紙心得書之通、同院事務掛江可願出、此段相達候事、

明治十年十二月廿七日　宮崎支庁

別紙

診察願心得書

第一条　診察ヲ乞ハント欲スル者ハ、名刺ヲ以テ先ツ病院事務掛ヘ願出、許可ノ上診察ヲ受クヘシ、

第二条　診察ハ日曜日ヲ除クノ外、毎日午前九時ヨリ午后三時迄ノ間タルヘシ、但シ急病ハ此限ニアラス、

第三条　薬価ハ、水薬丸散ヲ論セス一日各ニ金四銭、且ツ頓服ハ金二銭ヲ納ムヘシ、

但貧窮ニシテ薬価上納不相整者ハ、其旨該戸長奥印之書面可差出事、

106

支第五百六十六号

正副区戸長

区戸長月給ヲ除クノ外大小区諸費、本明治十一年一月ヨリ六月迄ノ予算明細取調、同年一月十五日限無遅滞可差出、此旨相達候也、

明治十年十二月廿七日　　宮崎支庁

107

第百五大区

区戸長

一田米七百弐拾五石九斗三升三合　三小区安永村

内真米六百拾七石八斗八升壱合

赤米百八石五升弐合

一田米弐斗五升八合　同村大縄場

一田米弐百四拾四石三斗六升八合　三小区横市村

内真米弐百三石六升四合

赤米四拾壱石三斗四合　同村大縄場

一田米弐斗四升四合

一田米百五拾弐石六斗四升　三小区上水流村

内真米百弐拾六石九斗三升三合

赤米弐拾五石七斗七合

一田米弐百五拾七石四斗七升九合　三小区西獄村

内真米弐百弐拾七石三斗九升

赤米三拾石八升九合

一米弐斗九合　同村大縄場

一田米百弐拾八石六斗六升三合　三小区野々三谷村

内真米百七石五斗八合

赤米弐拾壱石壱斗五升五合

一田米四百拾四石三斗弐升九合　三小区下水流村

内真米三百四拾六石五斗七升三合

赤米六拾七石七斗五升八合

一田米百拾七石五斗六升九合　三小区岩満村

内真米百弐石五斗六升四合

赤米拾五石五合

一田米六合　同村大縄場

一田米弐百六拾五石四斗九升壱合　三小区丸谷村

内真米弐百三拾弐石壱升壱合

赤米三拾三石三斗三合

一田米壱升七合　同村大縄場

一田米六百四拾五石七斗九升弐合　三小区山田村

内真米五百九拾七石七斗壱升七合

赤米四拾八石七升五号
一田米百五拾八石四斗四升三合
内真米百三拾五石六斗五升八合
赤米弐拾弐石七斗八升五合
一田米六升三合
一田米三百拾九石弐斗弐升六合
内真米弐百七拾壱石四斗六升壱合
赤米四拾七石七斗六升五合
一田米三百七拾弐石三斗九升八合
内真米三百三拾七石八斗四合
赤米三拾四石五斗九升四合
一田米九合
一田米弐百六拾弐石九斗三升九合
内真米弐百拾四石七斗三升四合
赤米四拾八石弐斗五合
一田米壱升
一田米弐百八拾七石八斗四合
内真米弐百五拾八石七斗弐升弐合
赤米弐拾九石八升弐合
一田米四合
一田米三百三拾六石九斗七升八合
内真米弐百九拾四石弐斗三升六合
赤米四拾弐石七斗四升弐合
一田米九合
一田米弐百五拾弐石八斗四合

三小区中霧島村

同村大縄場

一小区五拾丁村

一小区宮丸村

同村大縄場

一小区川東村

同村大縄場

一小区郡元村

同村大縄場

一小区上長飯村

同村大縄場

一小区下長飯村

内真米弐百拾九石壱斗九升六合
赤米三拾三石六斗八合
一田米二升四合
一田米弐百五拾七石六斗八升七合
内真米百六拾四石三斗四升九合
赤米九拾三石三斗三升八合
一田米六合
一田米百四拾壱石六斗七升壱合
内真米百拾七石九斗八升八合
赤米弐拾三石六斗八升三合
一田米弐百三拾五石八斗三升五合
内真米百九拾六石五斗七升九合
赤米三拾九石弐斗五升六合
一田米壱升壱合
一田米八拾五石三斗五升
内真米七拾弐石七斗四升壱合
赤米拾弐石六斗九合
一田米百七拾弐石三斗弐升五号
内真米百四拾六石四斗
赤米弐拾五石九斗弐升五合
一田米七合
一田米弐百七拾七石六斗三升五合
内真米弐百九石四斗三升五合
赤米六拾八石弐斗
一田米壱升八合

同村大縄場

一小区梅北村

同村大縄場

一小区合田村

一小区高木村

同村大縄場

一小区豊勝村

一小区安久村

同村大縄場

三小区樺山村

同村大縄場

一田米弐百五拾九石四斗九升五合　二小区蓼池村
内真米百八拾壱石九斗四升七合
赤米七拾七石五斗四合
一田米五升八合　同村大縄場
一田米百拾四石六斗三升八合　二小区宮村
内真米九拾六石五斗七升九合
赤米拾八石五升九合
一田米六拾四石壱斗三升　二小区餅原村
内真米六拾壱石七斗三升九合
赤米弐石三斗九升壱合
一田米弐百八石三斗弐升三合　二小区長田村
内真米百九拾四石壱斗七升五合
赤米拾四石壱斗四升八合
一田米三升五合　同村大縄場
右者春来ノ騒擾ニ付、田方植付後レ仕付荒レ等ノタメ、田方検見之儀願出候ニ付、実地検査之上成規ニ照シ取調候処、税額前記ノ通候条、尓後相達次第納方可取計旨、該村々江無洩相達シ、承知ノ旨正副戸長及地主惣代一村両三人ツヽ、連署シ、往復ヲ除クノ外十日ノ内受書可差出儀与可相心得、此旨相達候事、
明治十年十二月廿七日　鹿児島県令岩村通俊

108

第百七大区
区戸長
一小区麓村
一田米百六拾八石六斗九升
内真米百六拾五石壱斗四升九合
赤米三石五斗四升壱合
一田米拾弐石九升六合　同村大縄場
一田米弐百八拾石五斗六升四合　一小区蒲牟田村
内真米弐百七拾九石九斗五合
赤米五斗六升九合
一田米五石四斗六升六合　同村免下
一田米壱石壱斗五升九合　同村大縄場
一田米百六拾弐石四斗六升九合　一小区後川内村
内真米百四拾四石壱斗三升七合
赤米拾八石三斗二升弐合
一田米弐百拾七石六斗弐升四合　一小区広原村
内真米弐百弐石壱斗五升壱合
赤米拾五石四斗七升三合
一田米四斗四升九合　同村大縄場
一田米三百八拾石四斗九合　二小区真方村
内真米三百七石弐斗四升四合
赤米七拾三石壱斗六升五合
一田米百拾五石五斗九合　二小区北西方村
内真米百九石壱斗九升九合
赤米六石三斗壱升
一田米四百六石六斗九升弐合　二小区南西方村
内真米四百六石四斗九升九合
赤米壱斗九升三合
一田米八百七拾七石七斗五升　二小区細野村
内真米七百七拾五石九斗九升七合

赤米百壱石七斗五升三合
一田米百七拾七石八斗九升七合　二小区東方村
内真米百七拾石壱斗弐升七合
赤米七石七斗七升
一田米五拾五石三斗弐升四合　二小区水流迫村
内真米四拾七石壱斗壱升壱合
赤米八石弐斗壱升三合
一田米三百八拾八石五斗弐升壱合　二小区堤村
内真米三百四拾六石壱斗壱合
赤米四拾弐石四斗弐升
一田米三百三拾石九斗九升九合　二小区紙屋村
（ママ）
内真米七拾弐石六斗五升八合
赤米五拾八石三斗四升壱合
一田米壱升五合　同村大縄場
一田米百弐拾九石八斗四合　三小区（野尻）麓村
内真米百弐拾六石九斗八升八合
赤米弐石八斗壱升六合
一田米四升四合　同村大縄場
一田米四拾弐石六斗六升四合　三小区笛ヶ水村
内真米三拾七石三斗弐升五合
赤米五石三斗三升九合
一田米弐百弐拾弐石四升九合　三小区江平村
内真米百四拾七石八斗弐升六合
赤米七拾四石弐斗弐升三合
一田米九升五合　同村大縄場

一田米百拾石弐斗弐升五合　三小区三ヶ野村
内真米八拾壱石八斗壱升九合
赤米弐拾八石六斗四合
一田米百三拾九石三斗四升弐合　四小区須木村
内真米百三拾石七斗弐升六合
赤米八石六斗壱升六合
一田米三斗六升五合　同村大縄場
一田米百八拾弐石壱斗七升壱合　五小区大牟田村
一田米壱斗五升七合　同村大縄場
一田米弐百九石壱斗壱合　五小区前田村
内真米百八拾九石四斗三升七合
赤米拾九石六斗六升四合
一田米壱升四合　同村大縄場
一田米百弐拾九石四斗五升六合　五小区東霧島村
一田米壱升六合　同村大縄場
一田米百弐拾石六斗四升九合　五小区縄瀬村

109

右者春来之騒擾ニ付、田方植付後レ仕付荒等ノタメ、田方検見之儀願出候ニ付、実地検査之上成規ニ照シ取調候処、税額前規之通候条、尓後相達次第納方可取計旨、該村々江無洩相達シ、承知之旨正副戸長及地主惣代一村両三人ツヽ連署シ、往復ヲ除クノ外十日ノ内請書可差出儀与可相心得、此旨相達候事、

明治十年十二月廿七日　鹿児島県令岩村通俊

第百九大区
区戸長

一田米五拾七石三斗三升四合
内真米五拾七石弐斗六合
赤米壱斗弐升八合
一田米壱石八升四合
一田米拾四石八斗八升弐合
内真米拾三石五斗六升八合
赤米壱石三斗壱升四合
一田米壱斗四升
一田米三拾三石七斗三升四合
内真米弐拾四石弐斗壱升八合
赤米九石五斗壱升六合
一田米壱斗五升八合
一田米五拾六石五升五合
内真米五拾壱石九斗弐合
赤米四石壱斗五升三合
一田米壱斗壱升六合
一田米四拾弐石八斗六升五合
内真米四拾石五斗九升弐合
赤米弐石弐斗七升三合
一田米壱斗四升七合
一田米百三拾石壱斗九升壱合
内真米百五石壱斗五升八合
赤米弐拾五石三升三合
一田米九升
一田米五拾九石壱斗九升壱合

一小区大河平村
同村大縄場
一小区杉水流村
同村大縄場
一小区原田村
同村大縄場
一小区上江村
同村大縄場
一小区今西村
同村大縄場
一小区末永村
同村大縄場
一小区大明司村

内真米五拾八石六斗四升三合
赤米五斗四升八合
一田米七斗弐升
一田米六石八斗四升弐合
内真米五石五斗五合
赤米壱石三斗三升七合
一田米弐斗弐升三合
一田米三拾三石七斗弐合
内真米拾六石九斗五升六合
赤米拾六石七斗四升六合
一田米四拾弐石三斗八升
内真米三拾六石五斗三升弐合
赤米五石八斗四升八合
一田米壱斗七升弐合
一田米百五拾六石六升五合
一田米三斗四合
一田米百五拾五石九斗七升弐合
内真米百五拾壱石七斗八升九合
赤米四石壱斗八升三合
一田米弐斗四升八合
一田米百四拾四石八斗三升三合
内真米百三拾五石六斗八升三合
赤米九石壱斗五升
一田米壱斗八升壱合
一田米弐百五拾弐石壱斗四升壱合

一小区前田村
同村大縄場
一小区坂元村
同村大縄場
一小区池島村
同村大縄場
二小区小田村
同村大縄場
二小区栗下村
同村大縄場
二小区東長江浦村
同村大縄場
二小区西長江浦村

内真米弐百三拾壱石四斗壱升弐合
赤米弐拾石七斗弐升九合
一田米三斗弐升　同村大縄場
一田米百拾四石九合　二小区灰塚村
内真米百拾弐石三斗弐升弐合
赤米壱石六斗八升七合
一田米弐升四合　同村大縄場
一田米百四拾八石五斗八升五合　二小区永山村
内真米百弐拾八石五斗三升五合
赤米弐拾石五升
一田米三斗四升四合　同村大縄場
一田米四拾七石弐斗三升壱合　二小区榎田村
内真米四拾六石三斗七升三合
赤米八斗五升八合
一田米七升壱合　同村大縄場
一田米百三石三斗八升　二小区湯田村
内真米九拾石七斗五升壱合
赤米拾弐石六斗弐升九合
一田米三斗五升八合　同村大縄場
一田米百五拾六石九斗四升七合　二小区西郷村
内真米百拾五石七斗九升壱合
赤米四拾壱石壱斗五升六合
一田米六升五合　同村大縄場
一田米百拾石九斗四升六合　二小区川北村
内真米百弐石五斗八升五合
赤米八石三斗六升壱合
一田米五斗弐升五合　同村大縄場
一田米九拾七石弐斗壱升六合　三小区柳水流村
内真米七拾七石弐斗六升七合
赤米拾九石九斗四升九合
一田米五升　同村大縄場
一田米百拾壱石壱升七合　三小区浦村
内真米九拾壱石六升八合
赤米拾九石九斗四升九合
一田米弐升　同村大縄場
一田米百七拾三石弐斗四升六合　三小区島内村
内真米百三拾三石六斗四合
赤米三拾九石六斗四升弐合
一田米八升　同村大縄場
一田米七拾三石壱斗五升四合　三小区川北村
内真米五拾四石壱斗五合
赤米拾九石四升九合
一田米三升弐合　同村大縄場
一田米六拾五石壱斗七升壱合　四小区岡松村
一田米壱斗六升五合　同村大縄場
一田米拾九石八斗九升壱合　四小区亀沢村
一田米壱斗弐升壱合　同村大縄場
一田米三拾石八斗　四小区向江村
内真米拾五石弐斗壱升
赤米拾五石五斗九升

一田米壱升　同村大縄場
一田米四拾八石七斗六升六合　四小区水流村
内真米四拾三石八斗三升五合
赤米四石九斗三升壱合
一田米弐升　同村大縄場
一田米四拾弐石壱斗七升六合　四小区昌明寺村
内真米弐拾九石五斗三升八合
赤米拾弐石六斗三升八合
一田米弐升　同村大縄場
一田米百拾九石九斗壱升弐合　四小区内竪村
内真米七拾五石九斗三合
赤米四拾四石九合
一田米三升三合　同村大縄場
右者春来ノ騒擾ニ付、田方植付後レ仕付荒等ノ為メ、田方検見ノ儀願出候ニ付、実地検査ノ上成規ニ照シ取調候処、税額前記之通候条、尓後相達次第納方可取計旨、該村々江無洩相達シ、承知之旨正副区戸長及地主惣代両三人宛連署シ、往復ヲ除クノ外十日ノ内、請書可差出義与可相心得、此旨相達候事、
明治十年十二月廿七日　鹿児島県令岩村通俊

110

第百四大区
区戸長
三小区新橋村
一田米弐百三拾石七斗四升
内真米弐百弐拾四石九升弐合
赤米拾石弐斗四升八合
一田米九升弐合　同村大縄場
一田米百壱石六斗五升五合　三小区泰野村
内真米九拾壱石八斗九升九合
赤米九石七斗五升六合
一田米七斗二升　同村大縄場
一田米六拾五石五斗五升九合　三小区尾野見村
内真米六拾三石六斗六升九合
赤米壱石八斗九升
一田米八升五合　同村大縄場
一田米弐拾弐石三斗六升四合　一小区原田村
内真米拾弐石壱斗七升弐合
赤米拾石壱斗九升弐合
一田米弐百七拾三石五斗弐升　一小区月野村
内真米弐百三拾五石三斗七升六合
赤米三拾八石壱斗四升四合
一田真米四拾九石四斗　一小区田野浦村
一田米四拾八石六斗弐升七合　一小区夏井村
内真米三拾三石壱斗八升
赤米拾五石四斗四升七合
一田真米六拾九石七斗八升八合　一小区安楽村
一田米六斗七升六合　同村大縄場
一田米百八石三斗九升四合　一小区野井倉村
内真米百壱石五斗三升七合
赤米六石八斗五升七合
一田米弐斗八升　同村大縄場

一田真米三拾八石六斗四升五合
一小区蓬原村
一田真米九石九斗五升
同村大縄場
一田米五合
一小区野神村
一田米百七拾七石三斗七升八合
同村大縄場
内真米百弐拾石四斗四升三合
一小区伊崎田村
赤米五拾六石九斗三升五合
一田米百六拾五石四斗六升壱合
一小区帖村
内真米百六拾三石六斗五升六合
赤米壱石八斗五合
一田米百四拾石弐斗壱升
一小区内野倉村
内真米百三拾六石三斗三合
赤米三石九斗七合
一田米七拾七石八升八合
二小区野方村
内真米五石三斗八升壱合
赤米七拾壱石七斗七合
一田米五斗七升七合
二小区益丸村
一田米百弐拾七石四斗三升四合
同村免下
内真米九石三斗四升
赤米百拾八石九升四合
一田米百九拾四石壱斗壱升壱合
二小区仮宿村
内真米三拾三石九斗壱升六合
赤米百六拾石壱斗九升五合
一田米三拾三石七斗六升七合
二小区菱田村
内真米拾七石九斗七升三合
赤米拾五石七斗九升四合
一田米三百三拾壱石弐斗三升五合
二小区永吉村
内真米拾三石五斗六升四合
赤米三百拾七石六斗七升壱合
一田米百五拾八石四斗五升四合
二小区横瀬村
内真米五拾四石三斗壱合
赤米百四石壱斗五升三合
一田米六拾四石弐斗九升六合
二小区井俣村
内真米三拾五石五升弐合
赤米弐拾九石弐斗四升四合
一田米拾壱石五斗壱升四合
二小区神領村
一田米五拾六石壱斗五升弐合
同村免下
内真米拾四石五斗五升
赤米四拾壱石六斗弐合
一田米四拾六石五斗壱升五合
二小区持留村
内真米弐拾壱石弐斗七升五合
赤米弐拾五石弐斗四升
一田米三拾五石三斗五升七合
二小区岡別府村
内真米弐石五斗壱升七合
赤米三拾弐石八斗四升

右者春来之騒擾ニ付、田方植付後レ、仕付荒等ノタメ、田方検見ノ儀願出候ニ付、実地検査ノ上成規ニ照シ取調候処、税額前規ノ通ニ候条、尓後相達次第納方可取計旨、該村々へ無洩相達、承知之旨正副戸長及地主惣代一村両三人ツヽ、連署シ、往復ヲ除クノ外十日ノ内受書可差出儀与可相心得、此旨相達候事、

明治十年十二月廿七日　　鹿児島県令岩村通俊

111

乙第六十号

区戸長

来ル十一年一月一日拝賀出頭ノ儀ハ、適宜出頭可致、尤遠隔ノ場所ハ書面ヲ以差出候共不苦候事、

但出頭費用ハ可為自費事、

十年十二月廿七日　　鹿児島県令岩村通俊

112

第百五大区二小区

戸長

其区内住居蒲生常二、昨九年一月黒田特命全権弁理大臣ニ随行、朝鮮国ヘ出張致候節、賞与金請取方之有無至急取調、以書面可申出旨本人ヘ可申達、此旨相達候事、

明治十年十二月廿七日　　宮崎支庁

113

支第五百六十七号

別紙、原籍戸長ヘ至急達方可取計、此旨相達候也、

十年十二月廿七日　　宮崎支庁

都城

宮崎出張所

別紙

第百五大区壱小区

戸長

別紙人名之者共、昨九年一月黒田特命全権弁理大臣ニ随行、朝鮮国ヘ出張致候節、賞与金請取方之有無至急取調、以書面可申出旨本人ヘ可申達、此旨相達候事、

明治十年十二月廿七日　　宮崎支庁

別紙

日向国都城　松永執輔　同　同　速見綱太

同　下長飯村　上村長治　同　同　城ヶ崎儀成

同　鬼塚信正　同　永井実英

同　田実実吉　同　稲元氏宣

同　都城　山田儀郷　同　三俣　松山利助

114

支第五百七十一号

徴兵取調ノ儀ニ付テハ、主係ヨリ照会為及置候処、右ハ来ル十一年一月十五日迄ニ、無遅滞当庁ヘ可差出、此旨相達候也、

明治十年十二月廿八日　　宮崎支庁

都城出張所

115

支第五百七十二号

区戸長

来明治十一年ヨリ、祝日・祭日ニハ、区戸長ハ勿論人民ニ於テモ可成国旗ヲ掲揚候様可致、此旨諭達候事、

明治十年十二月廿八日　　宮崎支庁

116

甲第十八号

銃砲弾薬取締之儀ニ付、明治五年正月以来公布之趣モ有之候処、追而相達候迄ハ、銃砲ヲ携ヘ往来致シ候儀堅ク不相成、尤当分之内有害之鳥獣ヲ可除為メ、銃砲免許並ニ職・遊猟願出ル者ハ、右ニ使用スル銃砲ハ検査ニ可及候間、願書ト共ニ可差出、且弾薬売買之儀ハ双方ヨリ可願出、若シ違犯之者ハ相当之処分ニ可及候、此旨相達候事、

但甲第六十号布達以来既ニ許可ニ及ヒ候者ハ、検査ノ為メ銃砲差出スニ不及、且免状並ニ鑑札授与致シ候上ハ、本人所轄之警視署エ可届出事、

明治十年十二月二十八日　鹿児島県令岩村通俊

117

甲第七十七号

他管下ヨリ当管内へ寄留ノ者、及管内甲区ヨリ乙区へ寄留ノ者共、左ノ書式ニ照シ、出入共該寄留地ノ戸長事務所へ届出（可脱カ）、此旨布達候事、

明治十年十二月廿八日　鹿児島県令岩村通俊

書式

其管下（御管下）第何大区何小区某町村
何番地居住（借家）同居士族平民何職業
何ノ誰
何年何月何日生
母　誰
何年何月何日生
妻　誰
何年何月何日生
幾男女　誰
何年何月何日生
合男何人女何人

右何々ニ付、第何大区何小区某村町何番地士族（平民）何方ニ寄留候処、此節帰家（某所へ転居）候ニ付、此段御届申候也、

年号月日　何　誰印

第何大区何小区
戸長御中

118

区戸長

今般甲第七拾七号ヲ以テ寄留人届方ノ儀布達候ニ付テハ、各戸長事務扱所ニ於テ寄留名簿ヲ備ヘ置キ、出入人員遺漏ナク取調可申、此旨相達候事、

明治十年十二月廿八日　鹿児島県令岩村通俊

甲第七拾七号ハ布達留ニアリ、

（以下底本ノ、第一号・第弐号・第四号・第五号・第六号・第七号・第拾号・第十二号・第十五号・第十六号・第二十二号・第廿六号・第三十号・第卅三号・第卅六号・第卅八号ノ各文書ハ、前掲文書ノ再録ニツキ略ス）

119

帰順掛心得書

第一条

一帰順取調書ヲ本庁内ニ設置シ、其他各郷ニ取調所ヲ置ク、

但各郷取調所ハ、人口ノ多寡土地ノ便否等ニ仍リ、随時之レヲ転移スヘシ、

第二条

一帰順取調所ニハ、帰順掛及ヒ書記・受付等ヲ置ク、

第三条

一帰順掛各郷エ出張ノ節ハ、該所ノ区戸長ニ就キ区内ノ各戸ヲ調査シ、方向ヲ誤リ或ハ脅迫セラレ出軍セシ者ハ、本人ヨリ甲号雛形ニ照シ、戸長ノ奥書ヲ要シ、始末書ヲ指出サセ、其情状ヲ審ニスヘシ、

但自身ニテ執筆調ハサル者ハ、親族代書又ハ仮口供ヲ取リ置クヘシ、

第四条

一暴挙ニ関セサル者ハ、戸主ヲ始メ一家ノ子弟等連署シ、乙号雛形ニ照シ、戸長ノ奥書ヲ要シ、始末書ヲ指出スヘシ、

第五条

一前条始末書ヲ調査シ、之レヲ県令ニ出スヘシ、

第六条

一第三条ニ照シ各戸ヲ調査シ、士官以上及輜重・会計部等ニ長タル者ハ、直ニ警部ニ協議シ執縛ノ手続ヲナスヘシ、

第七条

一自宅謹慎及ヒ入檻等ハ丙号規程ニ照シ之ヲ即決シ、而テ本庁エ逓送ノ儀ハ、其旨報知次第速ニ巡査ヲ派遣シ、之レヲ引致ス、

第八条

一帰順取調所ニハ左ノ印顆ヲ作リ

帰順取調所印

其用ニ供スヘシ、

第九条

一帰順首白スル者ハ勿論、仮令執縛スル者ト雖トモ、負傷スル者ハ病院ニ送付シ療養ヲ許スヘク、依テ帰順掛ヨリ左式雛形ノ通リ切符ヲ製シ、之レヲ本人ニ付与シ病院ニ到ルヲ命スヘシ、

用紙半紙四ツ切

第何号　主任官員見認印

帰順取調所印　何府県〔士族平民〕何大区何小区〔村町〕何番地何ノ誰

割印

何年何月何日　治療許可

第十条

一各郷取調所ノ執縛人賄方ノ儀ハ、其取調所ニ於テ取計、其都度第六課エ通知スヘシ、

右之通仮定候事、

明治十年五月

鹿児島県令岩村通俊

鹿児島県布達

明治拾壱年八

（表紙）

宮崎県古公文書

鹿児島県布達　明治拾壱年八

120

本年度第五号諭達戸籍調査加除規程中、左ノ廉々正誤候也、

明治十一年七月十一日　鹿児島県第一課

一戸籍書式第二罫ニ示シタル戸主苗字名ノ二ハ、必該戸主押印スヘシ、

一調査規程第四条但書該住人ノ三字改メテ、戸主或ハ尊長トス、

121

乙第百四十九号

区戸長

今般戸籍調査ニ付左ノ心得書相示シ候条、右ニ準拠可取調、此旨相達候事、

明治十一年六月廿五日　鹿児島県令岩村通俊

今般戸籍調理ニ付、調査加除規程掲ケテ、本年五月庶第五号ニ詳ナリト雖トモ、尚心得書ヲ左ニ示ス、

戸口取調心得書

第一条

一調査規程第一条ニ示シタル如ク、戸口ハ重複遺漏ナキヲ要スレバ、区内受持戸長実地ニ就キ、戸籍ヘ登記スヘキ廉々明細記載可致事、

但本文取調ニ付テハ、旧戸籍ヲ以テ実地ニ突キ合セ修正ヲ加ヘ又ハ手帳ニ記入スル等便宜タルヘシ、

第二条

一受持戸長ニ於テ、戸籍ヘ登記スベキ廉々下タ調査終ラハ、一町村毎取纏メ、該地出張戸籍掛ノ検査ヲ受ケ、指揮ヲ待テ浄書ニ取懸ルヘシ、

第三条

一戸籍調査終ルノ后ハ勿論、調査中戸口ノ異動アルトキハ、加除尤注意可致事、

第四条

一戸籍調査規程ハ、区戸長ノ規程タルコト、

第五条

一今般ノ戸籍調ハ社寺官庫（其外種々）ヲ除キ、現ニ人民居住スル家屋ノミ調査スルコト、

122

乙第百六十一号

区戸長

乙第百四拾九号ヲ以、戸籍取調心得第一条ヨリ第五条マテ相達置候処、今般更ニ第六条ヨリ第九条迄追加候条、此旨相達候事、

明治十一年七月三日　鹿児島県令岩村通俊

第六条

一戸籍書式末罫附籍書式、左ノ雛形ニ倣ヒ□(虫)ムヘシ、

属族 職業 氏神 宗旨	附籍ノ事故	附籍	住所属族（亡）何ノ誰何男 苗字名 、、、、、、

第七条

一番号ヲ付スルハ、県庁ニ近キ方ヨリ始ムヘシ、

第八条

一官吏ノ官舎、区戸長ノ事務所附属家、僧侶ノ庫裏ニ住スル等番戸ニ不加、尤寄留ハ第二条但書ニ倣ヒ編紹シ、別居ノモノハ第十一野戸籍書式朱書ニ準シ、何々ヘ別居ト記シ、又該大区ニ原籍アリト雖トモ所有ノ家屋ナキモノハ、調査規程第十一条ニ倣ヒ詳記スヘシ、

第九条

一所有地ニ小屋掛ヲ営ミ居ルモノ、及ヒ木材ヲ集メ已ニ旧居ニ家屋ヲ建設セントスル景況アルモノハ、番戸ノ順序ニ従ヒ編紹スヘシ、調査規程第十条・第十一条追加スル、左ノ如シ、

第十条

一第二条第三項ニ示シタル官吏ハ、都テ職名ヲ詳記スヘシ、

　譬ハ何府県何等属何府県等外何等出仕、或ハ何府県雇、又ハ区長・戸長・学区取締・祠官・祠掌ト記スカ如シ、

第十一条

一現今家屋ナキモノハ番外トシテ、該町村戸籍帳ノ冊尾ヘ、第四条ニ倣ヒ逐次編紹シ置クヘシ、

　譬ヘハ他府県ヘ全戸寄留ノモノ、原籍ニアル家屋焼亡或ハ売却、及ヒ現今無力ニシテ借地ヘ小屋掛ヲ営ミ、未定リタル家屋ナキモノ、類、

一調査規程第五条本文、他ノ字ノ下ニ府県大区ノ四字、及ヒ之ヲノ下ニ寄留人ノ三字ヲ加フ、

一戸籍書式第二野朱書、寄留ノ上ニ（全戸）ノ二字ヲ追加ス、

一第二条第三項、何工カ何商カノ、何ノ字ヲ削除ス、

一規程第二条第二項、士族ノ上ニ華ノ字ヲ追加ス、

一同条第三項、左ノ但書ヲ追加ス、

　但華士族ニシテ無職業ノ者ハ、其属族ノミヲ記スヘシ、

一標札第二番、借家居住標札改正スル、左ノ如シ、

五寸

二寸

持 借	家 居住	属族 苗 字 名

一加除規程第七条ヲ改正スル、左ノ如シ、

　一戸ヲ割テ二戸トシ、又ハ分家或ハ他ヨリ移住等ニテ新戸ヲ増殖スルトキハ、隣接ノ号ニ次テ（譬ヘハ一番戸ノ近隣ナレハ乙一番ト記ス類）乙ノ番号ヲ附スヘシ、

一加除規程第八条ヲ削除シ、全文ヲ調査規程第九条に追加ス、

123

乙第百六十二号

区戸長

本年度第五号諭達、戸籍調査加除規定中、左之廉々改正追加候条、此旨相達候事、

明治十一年七月四日　　鹿児島県令岩村通俊

（半頁撮影洩レカ、末尾二次ノ二行アリ）

戸籍書式ノ次ヘ分□(虫)書式追加スルモノ□(虫)

第二行第三行何区ノ下□□字追加十二年乙第二百二十五号

第何大区何小区某町村何番戸住居

族業	神旨			
何年何月当県何郡某町村何番戸居住　属族(亡)何ノ誰何男 苗　字　名 某年月生	属族(養)父兄何ノ誰ヨリ分家	当県士族（亡）何ノ誰何女	母	名　某年月生
		某県平民何ノ誰何女	妻	名　、、
			長男	名　、、
		某府士族何ノ誰何女	長男妻	名　、、
		長男誰長男	孫	名　、、
			庶子二男	名　、、、、
		亡父誰何女	長女	名　、、、、
		亡父誰何男 某府県下某所へ寄留又ハ当何村何番戸別居	弟	名　、、、、
		亡祖父誰何男癈疾	伯父	名　、、、、
		当村平民亡何ノ誰二女	伯父母	名　、、、、

124

庶第五号

戸籍ヲ調査シ人口ヲ詳ニスルハ、兼テ公布モ有之通リ、人民保護上ノ要務タルコト固ヨリ言ヲ待タス、然ルニ当県ノ如キハ、客歳ノ騒擾ニ際シ戸口ノ錯雑容易ナラス、且従来ノ戸籍亦具備完全セサルモノアリ、依テ今回管下一般戸口ヲ調査シ、更ニ戸籍編製候条、人民ニ於テモ政府保護ノ御趣意ヲ厚ク体認イタスヘク、若シ一戸一人ダモ調査ニ漏ルヽ者アレハ、自カラ政府ノ保護ヲ受ケサルノ理由ニ候条、必ス粗漫ノ事ナキ様可相心得、此旨諭達候事、

鹿児島県令岩村通俊代理

明治十一年五月廿一日　　鹿児島県大書記官渡辺千秋

125

戸籍調査規程

第一条

戸籍ハ重複遺漏ナキヲ要スル為メ、実地ノ戸口ニ就キ本籍ヲ調査スルヲ主旨トス、故ニ仮令他ヘ寄留・旅行、又ハ別居等ニテ当時不在ノ者タリトモ、本籍相違ナキニ於テハ、凡テ式ノ如ク該籍ニ記入スヘシ、

但 失跡・逃亡人トイヘトモ、八十年未満ノ者ハ除籍スベカラズ、

第二条

戸籍調査ノ廉々ハ戸籍雛形ニ記載スト雖モ、仍ホ其部目ヲ左ニ詳記ス、

第一項　住所ノ区別

自己所有ノ家屋ニ居住スル者ハ、何番戸居住ト記載シ、他ノ一家屋ヲ借リ受ケ居住スル者ハ、借家居住、他ノ家族ト共居同炊スル者ハ、何番戸内同居ト記載スル類、

第二項　属族

華士族カ平民カ、該戸主ノ身分ヲ記載スベシ、

第三項　職業

農カ工カ商カ、又ハ雑業カ、或ハ官吏カ、都テ該戸主ノ職業ヲ

詳記スベシ、

第四項　氏神　宗旨

氏神ハ其神社名、宗旨ハ何宗、又ハ神葬祭ト記載スベシ、但家族中氏神又ハ宗旨ヲ異ニスルモノアリト雖モ、戸籍上ニハ該戸主ノ氏神又ハ宗旨ヲ記載スル事トス、

第五項　姓名

戸主又ハ附籍主ハ必ス苗字名ヲ記シ、家族ハ止タ名ノミヲ記載スヘシ、

但戸主家族ト□(虫)婦女テハ其名ヲ朱書スヘシ、尤女戸主ハ苗字ヲ墨書シ、名ノミヲ朱書スル事トス、

第六項　年令

年令ハ戸主・家族トモ、都テ雛形ノ如ク生年月日ヲ記載スヘシ、

第七項　戸主肩書

戸主ノ右肩書ニハ、書式ノ如ク必ス該人実父ノ属族ト姓名トヲ記載スヘシ、左肩書ニハ前戸主隠居又ハ死後カ、都テ該家ノ相続ヲ受タル形状ヲ記載スヘシ、

但已ニ死去セシ者ハ亡ノ字ヲ加フヘシ、以下之ニ倣ヒ

第八項　家族続柄

家族ハ書式ノ如ク、戸主ニ対スル等親ト且実父ノ属族姓名ヲ記載スヘシ、

第九項　寄留

全戸他ヘ寄留ノ者ハ、書式ノ如ク戸主姓名ノ上ヘニ寄留先ヲ詳ニ朱書シ、家族中独身ニテ他ヘ寄留ノ者ハ、該人名ノ上ヘニ同様朱書スヘシ、

第十項　附籍人

附籍人ハ、書式ノ如ク末尾ヘ該人ノ属族姓名ト、及附籍タル事故ヲ詳記スヘシ、

第三条

従来ノ番地号ヲ廃シ、現在ノ家屋ニ就キ区内人民ノ所有ト否トヲ論セス、都テ戸毎ニ番号ヲ定ムヘシ、

但番数ハ一町村限リ之ヲ定メ、屋並ノ順次ニ従ヒ、其町村何番戸ト附スヘシ、

第四条

戸籍ハ家屋番号ノ順次ヲ以テ之ヲ編綴シ、一町村ヲ限リ一冊トス、尤該町村戸数ノ多寡ニヨリ、一町村ヲ幾冊ニ分チ、数町村ヲ合冊ニスルモ便宜ニ任ス、

但寄留人又ハ別居人居住ノ家屋ハ、家屋ノ番号ト戸主或ハ尊長ノ姓名ト迄ヲ登記シ、逐次編綴シ置クヘシ、尤家族人名等ハ、別ニ寄留人戸籍ニ式ノ如ク登記スルコトトス、

第五条

他府県大区ヨリ全戸寄留ノ者ハ、区内本籍人同様之ヲ寄留人戸籍ニ登記スヘシ、尤戸籍面戸主姓名ノ上ニ、本籍ヲ朱書ニテ詳記スルヲ例トス、

但戸籍ヲ編綴スルニ至テハ、本籍人ト別異シ、区内寄留人戸籍ト標題ヲ附シ、仍ホ他管下人ト管内他区内人トヲモ区分シ、別冊ニ編綴スヘシ、尤全戸寄留ニアラサル分ハ、該人ヨリノ届書ヲ逐次編綴シ、寄留名簿ト標題ヲ附シ置クベシ、

第六条

隠居又ハ二三男・弟等、同町村内ニ於テ戸主ト居ヲ異ニシ、他ノ家屋ニ住スルモノハ之ヲ別居トス、尤本籍町村外ニ在ルトキハ、之ヲ

寄留トス、

但戸籍ハ、書式ノ如ク該人ノ本籍面ニ、別居又ハ寄留所等ヲ朱書シ置クヘシ、

第七条

戸籍調査終ラハ、速ニ毎戸ヘ番号表ト名標トヲ掲クヘシ、

但標札ハ樅又ハ杉等ヲ以テ之ヲ造リ、寸法書式等雛形ノ通タルヘシ、

第八条

削除

第九条

夫ナキ婦女子ニシテ私生ノ子ハ母ノ名ヲ肩書シ、其幾男女ト認ム可シ、

第十条

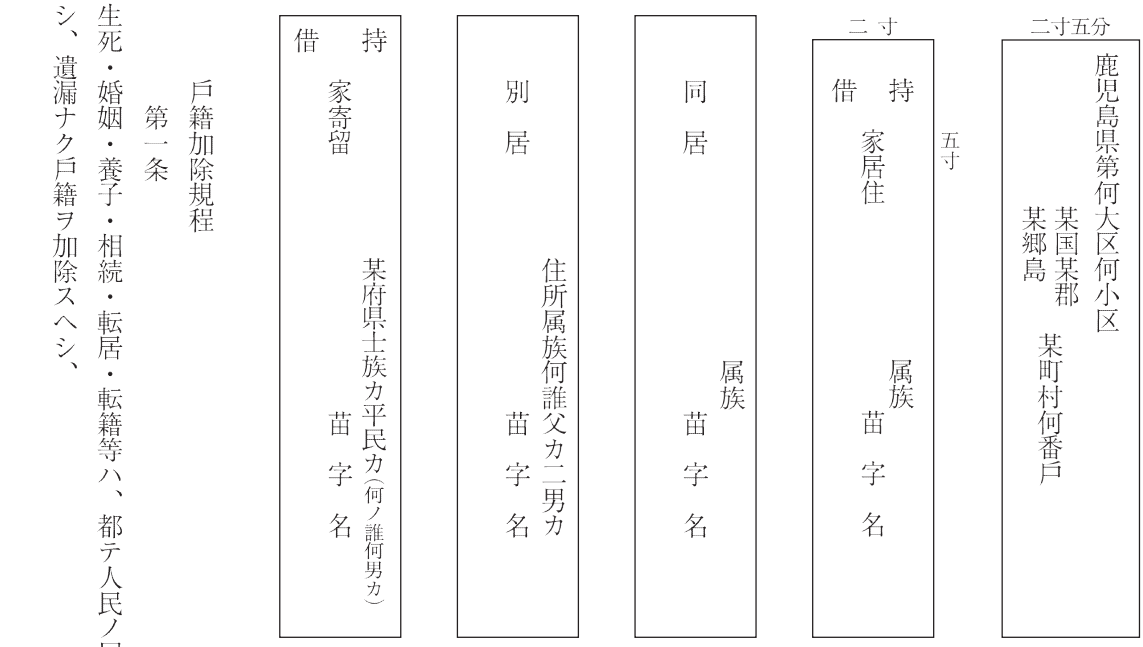
第二条第三項ニ示シタル官吏ハ、都テ職名ヲ詳記スヘシ、

譬ヘハ何府県何等属、何府県等外何出仕、或ハ何府県雇、又ハ区長・戸長・学区取締・祠官・祠掌ト記スカ如シ、

第十一条

現今家屋ナキモノハ、番外トシテ該町村戸籍帳ノ冊尾ヘ、第四条ニ做ヒ逐次編綴シ置クヘシ、

譬ヘハ、他府県ヘ全戸寄留ノモノ原籍ニアル家屋焼亡或ハ売却、及ヒ現今無力ニシテ借地ヘ小屋ヲ営ミ、未定リタル家屋ナキモノ、類、



戸籍加除規程

第一条

生死・婚姻・養子・相続・転居・転籍等ハ、都テ人民ノ届書ヲ証トシ、遺漏ナク戸籍ヲ加除スヘシ、

但加除ハ都テ朱ヲ以テ登記スルヲ例トス、

第二条

家族ノ異動ハ加除書式ニ示ス如ク、該人記名ノ罫内ヘ其由ヲ登記シ、且㊨加除ノ印ヲ捺シ置クベシ、

第三条

該区内ニテ居住ヲ転スルモノハ、加除書式中㊥印ノ如ク、其由ヲ登記シ置クベシ、

第四条

他管下又ハ管下他区内ヘ転籍スル者ハ、㊦印ノ如ク其由ヲ登記シ、且朱ニテ横線ヲ画シ置クベシ、

第五条

他管下又ハ管内他区ヨリ入籍スル者アルトキハ、該人ヨリ家族人員書等親等ヲ逐一詳記セシム ヲ出サシメ、前管区戸長ヨリノ送籍状ト照合審査シ、更ニ式ノ如ク戸籍ヲ浄書シ、逐次別簿ニ綴リ置キ、尓後ノ加除ヲナスヘシ、

第六条

戸主死亡又ハ隠居セシ者ハ、㊤印ノ如ク其由ヲ登記シヲキ、相続者ヨリ家族人員書等親等ヲ逐一詳記セシム ヲ出サシメ、前戸主ノ戸籍面ト照合審査シ、更ニ該家ノ戸籍ヲ浄書シ、前戸主戸籍面ノ上ヘニ糊付スヘシ、

第七条

一戸ヲ割テ二戸トナシ、又ハ分家、或ハ他ヨリ移住等ニテ新戸ヲ増殖スルトキハ、隣接ノ号ニ次テ（譬ヘハ一番近接ナレハ乙番ト記ス類）乙ノ番号ヲ附ス可シ、

㊥当区某町村何番戸ヘ転住
㊦某（当）府県某所ヘ転籍

、、			
、、			
、、			
、、、、、、	㊤某年月日 死亡 隠居		
母	除	、	、、、、、
妻	除	、	、、、、、
長男	除		、、、、、
二男		、	、、、、、
三男	除		、、、、、
伯父	除		、、、、、
長女	除加	、	、、、、、
四男	加	、	、、、、、
後妻	加	、	、、、、、
妹	加除	、	、、、、、
		、、、、、、 某年月日死亡	
		、、、、、、、 某年月日離縁	
		除除族 某年月日除族	
		長男誰除族（廃疾）（何々）ニ付嗣子	
		某年月日住所属族何ノ誰ヘ養子（某所ニ分家）	
		脱籍又ハ行衛不知者満八十年ニ付除籍	
		、、、、、、 某年月日住所属族何ノ誰ニ嫁ス	
		某年月日離縁復籍	
		住所属族何ノ誰何女某年月日結婚	
		亡父誰何女住所属族何ノ誰妻年月日離縁復籍	
		某年月日住所属族何ノ誰ヘ嫁ス	

鹿児島県布達

明治拾壱年九

（表紙）

宮崎県
古公文書

鹿児島県布達　明治拾壱年九

（文書目録ハ末尾ニ移ス）

127

乙第弐号

区戸長

県下今般之兵乱ニ付、各処学校所属之書籍・器具等、人家ニ散在致居候テハ不都合ニ付、若シ右等之儀有之候ハヽ、早々取纏メ、各所属ノ学校ヘ返付候様可取計、此旨相達候事、

明治十一年一月九日　　鹿児島県令岩村通俊

128

乙第四号

去ル十月出乙第四号ヲ以テ相達候正副戸長旅費仮定則、第一条ヨリ第八条迄悉皆取消、更ニ左之通改定候条、此旨相達候事、

明治十一年一月十一日　　鹿児島県令岩村通俊

第一条　区内ニテ出張又ハ巡回候節ハ、別紙表□ニヨリ相当ノ旅費日当ヲ給スヘシ、

第二条　支給方法ハ、都テ官吏内国内旅費定則ニ準拠スヘシ、

第三条　各自所轄庁ニ係ル本支庁又ハ出張所、及持区ヘ出張スルト雖、伺ヲ経サル分ハ旅費日当ヲ給セス、

但非常ノ事故アルトキハ此限ニアラス、

129

乙第五号

正副区長

月給並旅費及該事務扱所経費之義ハ、其所轄庁又ハ出張所ニ請取方可申出、其旨相達候事、

明治十一年一月十一日　　鹿児島県令岩村通俊

130

乙第十八号

区戸長

地租徴収期限ノ義ハ、昨十年太政官第五十三号公布ノ趣モ有之候処、当県下ノ儀ハ、昨□（年）二月以来兵難ニ際シ、実践難相成ニ付右公布歩合ニ準シ、先以同年十二月一日ヨリ本年一月三十日迄ニ、田畑□定免代ノ貢額ニ比シ凡三分通、券税ハ凡四分通上納ノ義、兼テ布達ニ及ヒ置候処、未タ以上納不致、即今ニ至リ日延願出候村方モ有之、甚心得違ニテ、抑地租□□義ハ人民第一ノ義務□（ニ）候処、万一期□（日ヲ）誤リ財産公売等ノ所分ヲ受候テハ憫諒ノ事ニ付、期日通リ無相違上納候様小前末々迄不洩様篤ト説諭可致、此旨相達候事、

明治十一年一月□（廿カ）一日　　鹿児島県令岩村通俊

131

乙第二十三号

区長

区長事務扱所小使日給之儀、自今□（八カ）拾銭以内ヲ以、当分官費繰替給与可致候条、□名給額取極上可届出、此旨相達候事、

但是迄支給方之儀ニ付、伺出候向ヘ指令済之分ニテ、本文達ニ抵

触候分ハ、右指令都テ取消ト可相心得事、

明治十一年二月四日　　鹿児島県令岩村通俊

132

乙第二十八号

区戸長

昨十年徴兵相当之者、本年召募可相成ニ付テハ、追テ検査日限等相達候筋□（モカ）有之ニ付、為心得此段衆達候事、

明治十一年二月六日　　鹿児島県令岩村通俊

133

乙第三十二号

区長

区内人民諸申牒奥印等ニ可用為メ、左ノ雛形ノ通役印彫刻可致、此旨相達候事、

但彫刻費ハ経費金ノ内ニテ可相弁事、

明治十一年二月十二日　　鹿児島県令岩村通俊

五分五リン方

何級区長何ノ誰

同

何級副区長何ノ誰

134

乙第三十六号

各区

正副戸長

昨十年八月廿六日暴風雨之為メ家屋蕩壊、目下雨露ヲ凌キ兼候者共ヘハ、其軽重ニ因リ貸与金之儀、同年十月甲第五十五号及ヒ同乙第廿一号ヲ以布達候ニ付テハ、調落文者無之筈ニ候得共、万一遺漏之者有之候テハ慥然之至ニ付、未タ出願之者有之候ハヽ、本月庁下三大区ノ御発令当日ヨリ七日限、外各大区ハ該日ヨリ日数十日間ヲ限ヽ何日限取調可申出、右期限後ニ至テハ一切採用不致候条、此旨相達候事、

明治十一年二月　　鹿児島県令岩村通俊

135

乙第四十二号

区長

今般県下物産ノ中チ、礦物・煙草・砂糖・松魚節・紙ノ五品取調之次第有之候条、其時区内之分別紙書式ニ做ヒ取調、来三月十日迄可差出、此旨相達候事、

但右之物産無之箇所ハ、其旨可届出事、

明治十二年二月（一）　　鹿児島県令岩村通俊

煙草

第一産地生産高		
同	鹿児島県下第十四大区給黎郡今和泉郷ニ於テ	一ヶ年凡五万六千六百斤ヲ産出ス
同	同第十五大区指宿郡指宿郷ニ於テ	同六十万斤ヲ産出ス
同	同第十六大区頴娃郡山川郷ニ於テ	同七万斤ヲ産出ス
同	同第八十大区大隅郡小根占郷ニ於テ	同三万千斤ヲ産出ス
同	同第十八大区給黎郡知覧郷ニ於テ	同壱万五千斤ヲ産出ス
同	同第八十五大区大隅郡垂水郷ニ於テ	同四万斤ヲ産出ス
同	同第八十四大区大隅郡新城郷ニ於テ	同壱万斤ヲ産出ス
同	同第三十八大区出水郡出水郷ニ於テ	同弐十万斤ヲ産出ス
同	同第十七大区頴娃郡頴娃郷ニ於テ	同弐万斤ヲ産出ス
同	同第六十大区曽於郡国分郷ニ於テ	同十六万斤ヲ産出ス
同	同第六十三大区曽於郡清水郷ニ於テ	同五千斤ヲ産出ス

同	同六十三大区曽於郡襲山郷ニ於テ	同壱万千弐百十斤ヲ産出ス	
同	同第七十六大区肝付郡高山郷ニ於テ	同三万〇八百斤ヲ産出ス	
同	同第四十一大区伊佐郡宮ノ城郷ニ於テ	同四千九百三十斤ヲ産出ス	
同	同第三十一大区薩摩郡入来郷ニ於テ	同弐万弐千斤ヲ産出ス	
同	第四十大区伊佐郡山崎郷ニ於テ	同壱万三千斤ヲ産出ス	
同	同三十六大区出水郡野田郷ニ於テ	同壱万三千斤ヲ産出ス	
同	同第四大区谿山郡谷山郷ニ於テ	同千五百三拾斤ヲ産出ス	
同	同第八十七大区大隅郡桜島郷ニ於テ	同六万〇九百斤ヲ産出ス	
同	同第九十五大区諸県郡糸原村有田村ニ於テ	同壱万五千斤ヲ産出ス	
同	同第百六大区諸県郡高城郷ニ於テ	同七千五百斤ヲ産出ス	
同	同第百六十六大区諸県郡山ノ口村花ノ木村富吉村ニ於テ	同弐千五百斤ヲ産出ス	
同	同第九十五大区諸県郡南俣村北俣村ニ於テ	同六千斤ヲ産出ス	
同	同第百五大区諸県郡十町村宮丸村川東村等ニ於テ	同弐千百四十斤ヲ産出ス	
同	同第百五大区諸県郡安永村山田村等ニ於テ	同千六百八十斤ヲ産出ス	
同	同第百四大区諸県郡帖村内之倉村田ノ浦村等ニ於テ	同五千五百斤ヲ産出ス	
同	同第九十四大区同郡三名村ニ於テ	同弐千百斤ヲ産出ス	
同	同第九十四大区同郡須応田村ニ於テ	同弐千弐百八十斤ヲ産出ス	
同	同第九十四大区同郡本庄村ニ於テ	同弐千七百十斤ヲ産出ス	
同	同第九十四大区同郡森永村ニ於テ	同千斤ヲ産出ス	
同	同第九十四大区同郡竹田村ニ於テ	同九百斤ヲ産出ス	
同	同第九十四大区同郡塚原村ニ於テ	同四万斤ヲ産出ス	
同	同第九十四大区同郡岩知野村ニ於テ	同三百斤ヲ産出ス	
同	同第九十四大区同郡木脇村ニ於テ	同八百斤ヲ産出ス	
同	同第九十四大区同郡嵐田村ニ於テ	同千五百斤ヲ産出ス	
同	同第九十四大区同郡小山田村宮水流村ニ於テ	同五千百廿斤ヲ産出ス	

同	同九十四大区宮崎郡金崎村ニ於テ	同千六百斤ヲ産出ス	
同	同第九十四大区宮崎郡□□村ニ於テ	同弐千斤ヲ産出ス	
同	同第九十四大区宮崎郡大塚村ニ於テ	同千三百弐十斤ヲ産ス	
同	同第九十六大区児湯郡黒生野村ニ於テ	同六百斤ヲ産出ス	
同	同第九十六大区同郡童子丸村ニ於テ	同七千□斤ヲ産出ス	
同	同第九十六大区同郡現王□村ニ於テ	同七千八斤ヲ産出ス	
同	同第九十三大区同郡妻村ニ於テ	同三千斤ヲ産出ス	
同	同第九十六大区同郡調殿村ニ於テ	同八百斤ヲ産出ス	
同	同第九十六大区同郡三宅村ニ於テ	同千弐百斤ヲ産出ス	
同	同第九十六大区同郡清水村ニ於テ	同六百斤ヲ産出ス	
同	同第九十六大区同郡右松村ニ於テ	同弐千斤ヲ産出ス	
同	同第九十六大区同郡南方村ニ於テ	同千五百斤ヲ産出ス	
同	同第九十六大区同郡岡富村ニ於テ	同六百斤ヲ産出ス	
同	同第九十六大区臼杵郡上原村下原村等ニ於テ	同九千五百斤ヲ産出ス	
同	同第百大区臼杵郡山裏村下ノ村等ニ於テ	同弐万七千斤ヲ産出ス	
同	同第百大区臼杵郡三田井村押方村向山村等ニ於テ	同七万千五百斤ヲ産出ス	
同	同第百大区臼杵郡田原上野村河内村等ニ於テ	同十三万八千百三十斤ヲ産ス	
同	同第百大区臼杵郡鞍岡村三ヶ野村三田村ニ於テ	同四万斤ヲ産出ス	
同	同第百三大区臼杵郡西方村南方村市来村等ニ於テ	同四百斤ヲ産出ス	
同	同第百三大区臼杵郡大河内村杉尾村下福良村ニ於テ	同弐千四百六十五斤ヲ産出ス	
同	同第八十八大区熊毛郡種子島全島ニ於テ	同壱万弐百七十五斤ヲ産出ス	
同	同第九十壱大区喜界島ニ於テ	同五千六百五十斤ヲ産出ス	

合百七拾四万弐千七百六十六斤

第二代価　十九万四千六百十三円〇四銭四厘七毛

第三内国供給　鹿児島県下第十五大区指宿郷ヨリ本県諸島并琉球藩等エ運送販売ス

第一功用

第二産地産出高

同　同第十六大区頴娃郡山川郷ヨリ本県下諸島及琉球藩等エ運送販売ス
同　同第八十五大区大隅郡垂水郷ヨリ大阪府下エ運送販売ス
同　同第三十八大区出水郡出水郷ヨリ長崎県・熊本県及ヒ山口県下ノ関等へ運送販売ス
同　同第六十大区鵜峠郡国分郷ヨリ大阪府・西京府・山口県エ運送販売ス
同　同第三十六大区出水郡野田郷ヨリ長崎県・熊本県・山口県等エ運送販売ス
同　同八十七大区大隅郡桜島郷ヨリ大阪府並兵庫県エ運送販売ス
同　同第九十四大区諸県郡森永村ヨリ大阪府並兵庫県エ運送販売ス
同　同第九十四大区諸県郡小山田村・宮水流村・上倉永村等ヨリ大阪府・兵庫神戸等エ運送販売ス
同　同第百大区臼杵郡岩戸村・山裏村・下野村ヨリ熊本県エ運送販売ス
同　同第百大区臼杵郡三田村・押方村・向山村ヨリ熊本県・大分県等エ運送販売ス
同　同第百大区鞍同村・三ヶ所村・桑野内村ヨリ熊本県・大分県エ運送販売ス

同　鹿児島県下第十八大区給黎郡知覧郷ニ於テ　百田紙一ヶ年凡三百十束ヲ産出ス
同　同第八十五大区大隅郡垂水郷ニ於テ　百田紙　同　千六十六束ヲ産出ス
同　同第九大区阿多郡伊作郷ニ於テ　同　同七万五千五百束ヲ産出ス
同　同第七十六大区肝付郡高山郷ニ於テ　百田紙半紙　同　八十束　雑紙
同　同第四十一大区伊佐郡宮ノ城郷ニ於テ　百田紙蘆紙　同　千五百束ヲ産出ス　同五千九百五十束ヲ産出ス
同　同第四十三大区伊佐郡大村郷ニ於テ　同　同壱万束ヲ産出ス
同　同第三十大区薩摩郡樋脇郷ニ於テ　百田紙蘆紙　同　四百五十束　ヲ産出ス
同　同第三十一大区薩摩郡入来郷ニ於テ　雑紙　同　六万束ヲ産出ス
同　同第四十大区伊佐郡山崎郷ニ於テ　雑紙　同　四千束ヲ産出ス
同　同第五十九大区姶良郡加治木郷ニ於テ　百田紙　同　六千九百束ヲ産出ス
同　同第五十三大区姶良郡蒲生郷ニ於テ　百田紙　同　二万千束ヲ産出ス

同　同第七十六大区高城郡高城郷ニ於テ　雑紙　同　壱万束ヲ産出ス
同　同第三十二大区薩摩郡東郷ニ於テ　雑紙　同四万千二百五十束ヲ産ス
同　同第二十一大区日置郡郡山郷ニ於テ　雑紙　同　六百六束ヲ産出ス
同　同第百六大区諸県郡山ノ口村ニ於テ　雑紙　同　百二十束ヲ産出ス
同　同第九十五大区諸県郡高岡ニ於テ　雑紙　同　宇田紙半切紙　同　五千七百五十束　ヲ産出ス　□千□十束
同　同第九十五大区諸県郡北俣村ニ於テ　雑紙　同　百束ヲ産出ス
同　同第九十五大区同郡倉岡ニ於テ　雑紙同二万七千七百四十束ヲ産ス
同　同第百五大区同郡下長飯村ニ於テ　雑紙　同　五千束ヲ産出ス
同　同第百五大区同郡安永村ニ於テ　半紙　同　三百六十五束　同三千五百四十束　ヲ産出ス　同三千二百四十束ヲ産出ス
同　同第百四大区同郡帖村内ノ倉ニ於テ　百田紙半紙　同　百八十壱束　半切紙蘆紙　同　三千五百束

同　同第四十九大区諸県郡三名村ニ於テ　蘆　雑紙　同　壱万千二百束ヲ産出ス
同　同第九十四大区同郡伊佐□村ニ於テ　蘆　雑紙　宇田紙蘆紙　同　百五十束　六千七百廿束　ヲ産出ス
同　同第五十四大区同郡本庄村ニ於テ　蘆　雑紙　同　四十万五千束ヲ産出ス
同　同第九十四大区同郡須志田村ニ於テ　蘆　雑紙　同　千九百二十束ヲ産出ス
同　同第九十四大区同郡森永村ニ於テ　蘆　雑紙　同　千百五十二束ヲ産出ス
同　同第九十四大区同郡塚原村ニ於テ　蘆　雑紙　同　一万二千束ヲ産出ス
同　同第九十四大区同郡岩知野村ニ於テ　蘆　雑紙　同七千六百八十束ヲ産出ス
同　同第九十四大区同郡吉野村ニ於テ　蘆　雑紙　同　九千六百束ヲ産出ス
同　同第九十四大区同郡小山田村上倉永村ニ於テ　半切紙同　弐千束ヲ産出ス
同　同第九十四大区宮崎郡跡江村ニ於テ　雑紙　同　百三十束ヲ産出ス
同　同第九十四大区同郡浮目村ニ於テ　雑紙　同　百四十束ヲ産出ス
同　同第九十四大区同郡富吉村ニ於テ　雑紙　同　八千束ヲ産出ス
同　同第九十四大区同郡□崎村ニ於テ　蘆　雑紙　同五千七百六十束ヲ産出ス
同　同第九十六大区児湯郡三宅村ニ於テ　雑紙　同　六千束ヲ産出ス

同第九十六大区児湯郡右松村ニ於テ　雑紙　同　五千束ヲ産出ス

同第九十六大区児湯郡南方村ニ於テ　同　同　二千束ヲ産出ス

同第九十六大区児湯郡岡富村ニ於テ　同　同　百束ヲ産出ス

同第九十七大区児湯郡高松村ニ於テ　同　同　二千五百束　ヲ産出ス
二万束

同　半紙　同　五万八千九百束ヲ産出ス
蔓紙　同　七千七百八十束

同第九十八大区日知屋村富田村塩見村ニ於テ　宇田紙　同　四千五百束　ヲ産出ス
半紙

同第九十九大区臼杵郡恒富村南方村ニ於テ　蔓紙　同　一万七千束ヲ産出ス

同第百大区臼杵郡七折村ニ於テ　雑紙　同　九百七十束ヲ産出ス

同第百大区同郡山裏村ニ於テ　半紙　同　五百束ヲ産出ス

同第百大区同郡三田井村押方村等ニ於テ　雑紙　同　四百五十束ヲ産出ス

同第百大区同郡三ヶ所村ニ於テ　雑紙　同　五百束ヲ産出ス

同第百大区同郡家代村ニ於テ　雑紙　同　六百束ヲ産出ス

同第百壱大区那珂郡熊野村ニ於テ　雑紙　同　三千六百束ヲ産出ス

同郡百弐大区那珂郡板敷村ニ於テ　雑紙　同　壱万五千束ヲ産出ス

同第百三大区那珂郡西方村北方村等ニ於テ　雑紙　同　四千束ヲ産出ス

同第九十六大区児湯郡穂北村ニ於テ　雑紙　同　二千百五十束ヲ産出ス

百田紙　十万七千百七十壱束

半紙　八万六千三百六十束

蔓紙　五十四万六千八百十二束

半切紙　壱万千百九十束

宇田紙　八千四百束

雑紙　二十一万二千四百八十六束

合九十七万二千四百十九束

第三代価　弐拾五万六千六百四十一円□十四銭二厘

第四内国供給　鹿児島県第三十二大区薩摩郡東郷ヨリ長崎県下へ運送販売ス

同第九十五大区諸県郡高岡ヨリ摂州大阪エ運送販売ス　同　同

同第九十六大区諸県郡倉岡ヨリ摂州大阪エ運送販売ス　同　同

同第九十四大区諸県郡本庄村ヨリ宮崎中村上ノ町商人ノ手ヲ経テ摂州大阪兵庫神戸等エ運送販売ス　同　同

同第九十四大区諸県郡須志田村ヨリ宮崎郡中村上ノ町商人ノ手ヲ経テ摂州大阪兵庫等エ運送販売ス　同　同

同第九十四大区諸県郡森永村ヨリ宮崎郡中村上ノ町商人ノ手ヲ経テ大阪府并兵庫エ運送販売ス　同　同

同第九十四大区塚原村ヨリ同大区六小区六日町商人ノ手ヲ経テ大阪府エ運送販売ス　同　同

同第九十四大区諸県郡岩知野村ヨリ同大区六小区六日町商人ノ手ヲ経テ大阪府ニ運送シテ売却ス　同　同

同第九十四大区同郡吉野村ヨリ同大区六小区六日町商人ノ手ヲ経テ摂州大阪府エ廻送シテ売却ス　同　同

同第九十四大区同郡小山田村ヨリ宮崎郡中村商人ノ手ヲ経テ摂州大阪府エ運送販売ス　同　同

同第九十七大区児湯郡高松村ヨリ大阪府エ運送販売ス　同　同

同第九十八大区児湯郡日知屋村ヨリ大阪兵庫神戸等へ運送販売ス　同　同

同第九十九大区臼杵郡恒富村岡富村南方村ヨリ大阪府エ運送販売ス　同　同

同第百壱大区那珂郡熊野村ヨリ大阪府エ運送シテ販売ス　同　同

同第百二大区那珂郡板敷村楠原村ヨリ大阪府エ運送販売ス　同　同

第五外国供給　無

第六産地消費　拾壱万五千八百五十壱束

第七作料　製紙ニ付一口壱人ノ雇料十六銭七厘二毛

第八事業　楮皮蒸シ剥キ一日一人皮二貫目ヲ得ル事業ヲ為ス、百田紙ハ一日一人凡三束六帖ヲ製出ス、半紙以下ハ一日一人凡十二束三帖ヲ製出スル事業ヲ為ス、

第九履歴　日向ハ替リナシ、薩隅二州ハ旧藩代ニ比スレハ大ニ減少セリ、

蔗糖

第一功用　一ヶ年凡三十壱万斤ヲ産出ス

第二産地産出高　鹿児島県下第八十五大区大隅郡垂水郷ニ於テ　同　同

同第八十四大区大隅郡新城郷ニ於テ　同　壱万五千斤ヲ産出ス

同第八十七大区大隅郡桜島郷ニ於テ　同　六万斤ヲ産出ス

同　三千斤ヲ産出ス
同第九十四大区宮崎郡小松村ニ於テ
同　二万斤ヲ産出ス
同第九十四大区宮崎郡□田村ニ於テ
同　同三万七千九百七十五斤ヲ産出ス
同百壱大区那珂郡恒久村福島村ニ於テ
同　五千斤ヲ産出ス
同第百壱大区宮崎郡船□村ニ於テ
同　十五万斤ヲ産出ス
同第百二大区那珂郡殿所村松永村東弁分益安村ニ於テ
同　千四百万斤ヲ産出ス
同第百三大区那珂郡市本村崎田村等ニ於テ
同　壱万三千四百斤ヲ産出ス
同第八十八大区熊毛郡種子島全島ニ於テ
同　三百万斤ヲ産出ス
同第九十二大区徳ノ島全島ニ於テ
同　百五十万斤ヲ産出ス
同第九十三大区沖永良部島ニ於テ
同　六百七万千四百八斤ヲ産出ス
同第九十三大区喜界島ニ於テ
同　三十七万斤ヲ産出ス
同第九十一大区大島全島ニ於テ
同第九十三大区与論島全島ニ於テ

合千弐百九十五万四千〇拾七斤

第三代価　三拾弐万三千四百弐拾四円拾八銭弐厘七毛

第四内国供給
鹿児島県下第八十五大区大隅郡垂水郷ヨリ大阪府エ運送販売ス
同第百壱大区那珂郡恒久村福島村ヨリ大分県エ運輸販売ス
同第百二大区那珂郡殿所村松永村東弁分益安村等ヨリ大分県ヘ運送販売ス
同　同
同第九十二大区徳ノ島ヨリ鹿児島商人ノ手ヲ経テ大阪エ運送販売ス
同　同
同第九十三大区沖永良部島ヨリ鹿児島商人ノ手ヲ経テ大阪エ運送販売ス
同　同
同第九十一大区喜界島ヨリ鹿児島商人ノ手ヲ経テ大阪府エ運送販売ス
同　同
同第九十大区大島ヨリ鹿児島商人ノ手ヲ経テ大阪府エ運送販売ス
同　同
同第九十三大区与論島ヨリ鹿児島商人ノ手ヲ経テ大阪府エ運送販売ス

第五外国供給　無

第六産地消費　六十五万千四百五十斤

第七作料　耕作人製法人一日一人ノ雇料三十三銭相当、第九十二大区徳ノ島ニ於テハ一日一人男九銭七リ五毛、女六銭五リ牛馬拾九銭五リ、

第八事業　耕作人一日一人培養手入其外事（業七）□□畝ハ八歩相当、製法人一日壱人廿四斤製出スル事業ヲ為スナリ、
徳ノ島ハ耕作人男一人壱畝二十歩、女ハ一畝、牛馬ハ平均四畝、
壱畝ニ付三十斤内外ヲ製ス、全糖ニ製出スルハ一日一人十二斤ナリ、

第九履歴　旧藩政以来種々ノ沿革アリ、後来又更ニ増殖致サスヘキ道無ニ非ルヘシ、

松魚節

第一功用

第二産地産出高
鹿児島県第六大区川辺郡加世田郷ニ於テ　一ヶ年凡拾五万二千本ヲ産出ス
同第十九大区川辺郡鹿籠村ニ於テ　同　八十壱万千二百本ヲ産出ス
同第十九大区川辺郡坊泊村ニ於テ　同　八十万〇〇四百本ヲ産出ス
同第十九大区川辺郡久志村ニ於テ　同十万六千二百九十二本ヲ産出ス
同十九大区川辺郡秋目村ニ於テ　同　壱万〇二百〇五本ヲ産出ス
同第十七大区頴娃郡頴娃郷ニ於テ　同　八万三千九百本ヲ産出ス
同第七十七大区肝属郡内ノ浦郷ニ於テ　同　四万本ヲ産出ス
同第二十四大区日置郡串木野郷ニ於テ　同　十万六千四百本ヲ産出ス
同第九十八大区臼杵郡細島町尾末浦ニ於テ　同　六千六百十六貫目ヲ産出ス
同第九十九大区臼杵郡島ノ浦市振村宮ノ浦等ニ於テ　同　四千三百七十三貫目ヲ産出ス
同第九十九大区臼杵郡土々呂村鯛名村等ニ於テ　同　五千貫目ヲ産出ス
同第百一大区那珂郡折生迫村内海村等ニ於テ　同　九千九百本ヲ産出ス
同第百二大区那珂郡平野村油津下方村大堂津下中村ニ於テ　同　六十万本ヲ産出ス
同第百三大区那珂郡西方村南方村都井村大納村等ニ於テ　同　壱万二千本ヲ産出ス
同第八十八大区取諝郡屋久島全島ニ於テ　同　三万九千八十貫目ヲ産出ス
同第八十八大区熊毛郡種子島国上村ニ於テ　同　五十貫目ヲ産出ス

合　二百七十三万二千二百九十七本
　五万五千百十九貫目

第三代価　十三万八千八百二十四円九十六銭

第四内国供給　鹿児島県第六大区川辺郡加世田郷ヨリ
　大阪府エ運送販売ス
同　同第十九大区川辺郡鹿龍村ヨリ
　東京府大阪府九州地エ運送販売ス
同　同第十九大区川辺郡坊泊村ヨリ
　東京府大阪府中国筋又肥前肥後等向ヶ運送販売ス
同　同第十九大区川辺郡久志村ヨリ
　大阪府東京府九州エ運送販売ス
同　同第七十七大区肝付郡内ノ浦ヨリ
　大阪府エ運送販売ス
同　同第二十四大区日置郡串木野郷ヨリ
　長崎県エ運送販売ス
同　同第九十八大区臼杵郡細島町尾末浦ヨリ
　大阪兵庫長崎□□等エ運送販売ス
同　同第九十九大区臼杵郡島ノ浦ヨリ
　大阪府并中国筋ノ各州エ運送販売ス
同　同第九十九大区臼杵郡土々呂村ヨリ
　大阪府及中国筋エ向ヶ運送販売ス
同　同第百壱大区那珂郡折生迫村内海村ヨリ
　大阪府及中国筋エ向ヶ運送販売ス
同　同第百二大区那珂郡平野村油津下方村大堂津ヨリ
　大阪府エ運送販売ス
同　同第百三大区那珂郡西方村ヨリ
　大阪府エ運送販売ス

第五外国供給　外国輸出ヲ試ミシコト度々ナレトモ、虫出テ、行レス、

第六産地消費　二拾万〇二千四百五十本
　千三百四十三貫七百三十目

第七作料　漁人・製法人、一日一人雇料二十三銭相当、

第八事業　一日一人生鰹二十三尾ヲ節ニ製出ス、或ハ漁人・製法人共多漁ノ節ハ昼夜ニ掛リ、少漁ノ節ハ半日位ニシテ止ム、依テ事業記シ得スト云モ□□、

第九履歴　昨年ニ比スレハ当年ハ少漁、又将来ノ見込無之、

砿物

第一功用

第二産地生産高　鹿児島県薩摩国第四大区谿山郡谷山郷下福元村錫山ニ於テ　錫鉱製練高　一ヶ年凡弐千四百六十二貫八百目産ス

同　同二十四大区薩摩国日置郡串木野郷下名村芹ヶ野ニ於テ　金銀鉱製練高　同　九貫七百弐十八匁六分産ス
同　同第五十七大区大隅国桑原郡横川郷一村山ヶ野　金鉱　同　拾四貫弐百六十二匁八分五厘産ス
同　同第七十五大区薩摩国伊佐郡太良郷長野村長野ニ於テ　製錬高

同　同第五大区薩摩国硫黄島　硫黄　同　四万六千九十七貫六百目産出ス
本山嶽外四ヶ所ニ於テ　製練高
同　同薩摩国川辺郡中ノ島ニ於テ　銅　同　九千百二十貫目ヲ産出ス
製錬高
同　同第九十九大区臼杵郡　銅鉱　同　四千八百貫目ヲ産出ス
北方村字日平ニ於テ　製錬高
同　同第百大区臼杵郡　銅鉱　同　八百貫目ヲ産出ス
七折村ニ於テ　製練高

合六万二千三百〇四貫三百九十壱匁四分五厘

第三代価　三万九千六百七拾六円弐拾七銭弐厘

第四内国供給　鹿児島県大隅国桑原郡横川郷山ヶ野金山并ニ薩摩国伊佐郡太良郷長野金山ニ於テ採取スル金塊ハ、借区人ヨリ大阪府エ運送販売ス、
同　同薩摩国第四大区谿山郡谷山郷下福元村錫山ニ於テ採集スル錫ハ、借区人ヨリ大阪府へ運送販売ス、
同　同第二十四大区薩摩国日置郡串木野郷下名村芹ヶ野金山ニ於テ採取スル金塊ハ、借区人ヨリ大阪府へ運送販売ス、
同　同第五大区薩摩川辺郡硫黄島字木嶽外四ヶ所ニ於テ採取スル硫黄ハ、借区人ヨリ大阪府ニ運送販売ス、
同　同薩摩国川辺郡中ノ島ニ於テ採取スル硫黄ハ、借区人ヨリ大阪府エ運送販売ス、
同　同第九十九大区日向国臼杵郡地方村銅山ヨリ大阪府エ運送販売ス

第五外国供給　無シ

第六産地消費　詳ナラス

第七作料　砿夫・製法人共一日一人ノ雇料各所平均スレハ、拾四銭六厘七毛ニ当ル、

第八事業　砿夫一日一人平均スレハ、純金ニシテ凡弐分壱厘壱毛内外ヲ得ル事業ヲ為ス、

第九履歴　金山履歴

長野金山ハ寛永十七年三月二十二日開業シ、同二十年ノ春停業シ、明暦二年申六月二十六日再ヒ開業ス、旧幕府ノ許可ヲ受ケタルハ明暦四年六月二十五日ニテ、其後元禄ノ此迄ニ左ノ金山ヲ掘採セリ、

芹ヶ野金山

鹿籠金山

神殿山金山

明暦二年十月ノ再興ヨリ明治十四年十二月ニ至ル二百九年間ニ於テ、長野・芹ヶ野ヨリ出金高壱金六千八百二十九貫〇六銭八厘ナリ、□□日本坑法ニ依□□□願済ノ借区人等ノ採取スル出金ハ詳ナラス、

以前ハ余程盛大ニ掘採シ、且鏑筋モ上面ニナリシニヨリ、尤多キハ一日ノ出金高殆五百目ニ相当リ、一年ノ出金高百二十貫目ニモ相廻リ□□、其後□々衰微セリ、目今ノ借区人ニ外国人ヲ雇入着手中ナルニヨリ、後来果シテ盛大ニ至ルベシ、

区長

136

乙第五拾七号

後備軍并ニ徴兵等ノ儀ニ付、当地駐在宮原陸軍少尉試補不日巡回可相成ニ付、庶事不都合無之様可取計、此旨区内戸長ヘモ無洩告知可致置、此段相達候事、

明治十一年三月一日　　鹿児島県令岩村通俊

区長

137

乙第五十九号

元庄屋浮免高役分地、其他町村人民ノ共有ニ関スル田畑山林ノ字反別又ハ建物等、及ヒ金穀類現在高貸付高共詳細取調、建物等ハ図面相添、本月中本支庁戸籍掛ヘ可届出、此旨相達候事、

明治十一年三月五日　　鹿児島県令岩村通俊

但本文共有ニ関スル田畠山林ハ、凡反別ヲ以届出シ不苦候事、

区長

138

乙第六拾弐号

来ル四月初旬本庁ヘ召集致候ニ付其旨相心得、尚区務上ニ就キ審問又ハ具状スヘキ事項モ有之候ハヽ、取調置可申、此段予テ相達候事、

但期日等ノ儀ハ追テ可相達候事、

明治十一年三月六日　　鹿児島県令岩村通俊

区長

139

乙第六十三号

各区正副区長御用有之本支庁ヘ出頭候節ハ、速ニ届出区内ノ事情親ク可申出、且帰区之節モ無洩可届出、此段為心得相達候事、

但本文届ノ外、当地滞在中之宿泊所及ヒ其番地等、明細戸籍掛ヘ可届出候事、

明治十一年二月五日　　鹿児島県令岩村通俊

区戸長

140

乙第六十七号

別冊区戸長職制等相定候条、遵守可致候也、

明治十一年三月十一日　　鹿児島県令岩村通俊

鹿児島県	区戸長仮職制 同　事務章程 同　心得書 同　等級表 同　月俸定則 同　旅費仮定則

区戸長仮職制章程

職制

区長

官省ノ公布・県庁ノ布達ヲ遵奉施行シ、区内一般ノ事務ヲ総掌ス、

区内ノ利害得失並戸長以下功過勤惰ヲ視察シ、之ヲ県令ニ具申スルヲ得、

区内ノ事務挙ラサレハ其責ニ任ス、

学区取締ヲ置カサル区内ニ在テハ、学区取締ノ事ヲ兼勤ス、

筆生ヲ置キ、事務ノ繁閑等ニヨリ之ヲ進退増減スル事ヲ得、

副区長

職掌区長ニ亜ク、

区長欠席スルトキハ其職務ヲ代理ス、

戸長

官省ノ公布・県庁ノ布達ヲ遵奉シ、該区ノ事務ヲ管掌ス、

管掌ノ事務挙ラサレハ其責ニ任ス、

学区取締ヲ置サル区内ニ在テハ、正副区長ニ稟議シテ其学務ヲ助ク、

副戸長

戸長ニ亜キ区内ノ事務ヲ分行ス、

戸長欠席スル時ハ、上級ノ者其職務ヲ代理ス、

区長事務章程

第一条　公布・公達ヲ各戸長ヘ配当スル事、

第二条　戸籍ヲ調査スル事、

第三条　区内ノ政表ヲ調制スル事、

第四条　国民軍名簿及徴兵連名簿等ヲ調査シ、之ヲ具申スル事、

第五条　租税ノ上納ヲ監視スル事、

第六条　成規アル区入費ヲ賦課スル事、

第七条　士民ノ生死・婚姻、及ヒ平民ノ相続又ハ養子等ノ諸届ニ承認スル事、

第八条　士民他行届ヲ承認スル事、

第九条　失踪逃亡届ヲ取扱フ事、

第十条　郷村社以下ノ例祭届ヲ承認スル事、

第十一条　戸長ヨリ申達スル人民ノ諸申牒ニ奥書スル事、

右各条ハ、成規定例ニ拠リ区長之ヲ処分スルヲ得、其他ハ総テ細大トナク県令ニ具申シ、其裁可ヲ仰クモノトス、

但第七条・第八条・第十条ハ、毎一ヶ月限取纏メ之ヲ具申スヘシ、

戸長事務章程

第一条　公布・公達ヲ伝達スル事、

第二条　戸籍ヲ加除スル事、

第三条　国民軍及徴兵年令ヲ審調スル事、

第四条　租税ヲ取纏メ上納スル事、

第五条　地所・建物質入書入、及ヒ建物売買譲渡ノ節、之ヲ台帖ニ記シ割印ヲナス事、

第六条　士民ノ送入籍ヲ取扱フ事、

第七条　棄児・迷子並旅行・病人処分ノ事、

第八条　宿村通送人取扱ノ事、

第九条　道路掃除及用悪水路疏通ノ事、

第　十条　地籍ヲ調査スル事、
第十一条　物産ヲ調査スル事、
第十二条　人民ノ諸申牒ニ奥書スル事、
右各条ハ、成規定例ニ拠り戸長之ヲ処分スルヲ得、其他ハ総テ細大トナク区長ニ稟議スヘシ、

区戸長心得書

第一条　区内人民ヘ朝旨ヲ説明シ、法令ヲ遵守セシムル事、
第二条　下情ヲ暢達シ、決シテ擁塞ノ弊アルマシキ事、
第三条　人民ノ安寧ヲ謀リ公益ヲ興シ、利用厚生ノ道ヲ誘導スル事、
第四条　学区取締ニ協議シテ、学事ヲ勧奨スル事、
第五条　孝子貞婦其他奇特ノ者アラハ、速ニ其行状ヲ具申スヘキ事、
第六条　鰥寡孤独其他貧窶ノ者ヲ恤ミ、救助ヲ仰クヘキモノハ其情状ヲ詳カニ開申スヘキ事、
第七条　人民ニ接スル温厚篤実ヲ旨トシ、決シテ尊大ノ挙動アルマシキ事、
第八条　苞苴の厳禁ハ勿論、百事公正ヲ旨トスヘキ事、

鹿児島県区戸長等級表

／	階級	準等	月給
区長	一級	十二等	弐拾円
	二級	十三等	拾五円
	三級	十三等	十三円
副区長	一級	十四等	十弐円
	二級	十五等	十壱円
	三級	十五等	十　円

／	階級	準等	月給
戸長	一級	等外一等	八円
	二級	等外二等	七円
	三級	等外二等	六円
副戸長	一級	等外三等	五円
	二級	等外四等	四円
	三級	等外四等	三円

正副戸長旅費仮定則

第一条　区用ニテ出張又ハ巡回候節ハ、別紙表面ニヨリ相当ノ旅費日当ヲ給スベシ、
第二条　支給方法ハ、都テ官吏内国旅費定則ニ準拠スベシ、
第三条　各自所轄外ニ係ル本支庁又ハ出張地及持区外ヘ出張スルト雖、伺ヲ経サル分ハ旅費日当ヲ給セス、
但非常ノ事故アルトキハ此限ニアラス、

旅費日当表

／	並旅行	急行	巡回	滞在
正副区長	七拾銭	壱円五拾銭	五拾銭	弐拾五銭
正副戸長	五拾銭	壱円二十銭	三拾五銭	弐拾銭

区戸長月俸定則

第一条　区戸長月俸ハ、其月末ノ日ヲ以テ支給スルヲ定規トス、
但免職・病死等ハ其時々支給スベシ、
第二条　拝免ノ月端日数ハ、日割ヲ以テ支給スベシ、
第三条　前条日割支給方法ノ儀ハ、給額其月現日数ニ割算シ、新拝命ハ其日ヨリ、罷免ハ其日マテ、日数ニ応シ支給スベシ、
第四条　黜陟ノ者月俸モ亦日割ヲ以給ス、譬ヘハ昇給者ノ俸ハ、其前日迄前額、其日ヨリ増給額、又降給者ハ、其日マテ前額、其翌日ヨリ減額、各之レヲ通算シテ支給スベシ、
第五条　便宜ニヨリ兼勤スルモ、別ニ増給セサルベシ、
第六条　許可ヲ得テ帰鹿スルモノハ、該区出立前日マテノ分、日割ヲ以支給スベシ、

但帰区ノ節ハ、着当日ヨリ給与スベシ、

第七条　病気引ノ者、五十日ノ間月俸全額ヲ給シ、其後ハ三分ノ一ヲ支給スベシ、

但病気引十五日ニ至ニハ、必ス医案ヲ副ヘ届出、猶荏苒数月ニ及フトキハ、五十日毎ニ其病状ヲ届出ヘシ、病気引日数ハ引籠ノ日ヨリ□算スベシ、若シ医案ニ因リ該区ヲ離レ、郷里又ハ地方ニテ治療セント欲スル者ハ其旨願出許可ノ上、月俸支給第六条ノ通リタルベシ、

第八条　忌引中ハ月俸全額ヲ支給スベシ、

第九条　公事失錯ニテ事由推問中ハ月俸全額ヲ給シ、若シ公私罪ヲ犯シ暁罪実決ニ処セラル、者ハ勿論、公私罪ニ依テ出頭ヲ止ル者等モ、一切給セサルベシ、

但出頭ヲ差止シ者、及ヒ糾問ノ上無罪ニ帰スル時ハ、全額ヲ給スベシ、

141
乙第六十八号

区戸長

何郷
某村

本租
大豆
一畑粟
菜種

口大豆
口粟

外
大豆
粟

右者、昨明治十年畑方貢租ノ義、田方為検分官員派出之際、実地兵乱罹災ノ深浅□(并カ)風災損害ノ軽重等ヲ斟酌勘査セシメ、即前記ノ通貢額差定候条、此旨相心得、正副区戸長及ヒ一村一両名宛百姓総代ノ者連署シ、往復ヲ除クノ外五日間ニ請書可差出、此旨相達候事、

但各村ノ内、無仕付及ヒ兵乱ノ為焼亡地ノ分ハ、本免役米トモ免除候義ト可相心得事、

明治十一年三月□(十六)日　鹿児島県令岩村通俊

142
乙第六十九号

種子島

区戸長

但本租
大豆
一畑
粟

口大豆
口粟

外
大豆
粟

右者、昨明治十年畑方貢租之儀、客年第千七十八号十二月十二日第一条指令之通、風災ノ損害等ヲ勘査セシメ、即前記之通貢額差定候条、此旨相心得、正副区戸長及ヒ一村一両名宛百姓惣代之者連署シ、往復ヲ除ク之外五日間ニ請書可差出、此旨相達候事、

明治十一年三月八日　鹿児島県令岩村通俊

143
乙第七十号

第一大区
戸長

第二大区
戸長

第三大区
戸長

各軍団人民之家屋へ舎営致候宿料等申出之儀、客歳乙第二十四号ヲ以テ相達置候処、最早取調之都合モ有之ニ付、遺漏日後ニ至申出候トモ一切採用不致候条、此旨相達候事、

明治十一年三月九日　　鹿児島県令岩村通俊

144
乙第七拾弐号

各区々長

各大区内町村浦名及ヒ戸数等、二大区限別紙雛形之通精密取調、本月中本支庁戸籍掛へ可差出、此段相達候事、

明治十一年三月十一日　　鹿児島県令岩村通俊

某国県郡某大区郷名
一小区
何村　何百何拾戸
何町　何百何拾戸
何浦　何百何拾戸
二小区
何村　何百何拾戸
何町　□町村浦名ノ両小区ヘ跨ル分ハ何町村浦ノ内何十戸ト両小区ヘ記入スヘシ、
何浦
合何小区
何拾村
何拾町
何拾浦

一大区ニシテ両郡ニ跨ル分ハ、何大区内何町村浦ハ何郡ニ属ス云々ト其訳ヲ詳記スヘシ、

一郡ニシテ両国ニ跨ル分モ同様タルヘシ、

其大区何村町浦名及ヒ戸数等精細取調候処、前書之相違(通脱カ)無之候也、

某大区
副区長　何某印
区長　何某印
年月日
何某印

145
乙第七十五号

鹿児島三ケ大区
区長
戸長

今般本県□師範学校附属小学校設立ニ付、入学志願之者ハ本月二十日ヨリ三十一日迄以内、同校へ可申出旨相達置候処、詮議之次第有之、右日限之議本月十五日ヨリ同二十日迄ニ取縮候条、此旨再応相達候事、

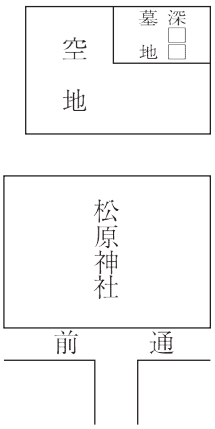
明治十一年三月十三日　　鹿児島県令岩村通俊

146
乙第七十六号

第一大区
第二大区　区戸長
第三大区

松原神社後面別紙図面朱書ノ空地、従前払下許可相済候者ハ、証書類相添本月三十一日迄ニ、第三課エ可届出様区内無洩可相達、此段相達候事、

明治十一年三月十四日　　鹿児島県令岩村通俊



147
乙第七十七号

区長

県下大隅国囎唹郡敷根麓村三番地ニ設置アル別紙海軍省火薬調整所備付品、昨年管下騒擾之際各所へ散乱、今ニ所在不分明ニ付、右取調方同省ヨリ照会有之候条、本月中無遅滞取調、有無共戸籍係へ可申立、此段相達候事、

但日向国ハ有無トモ宮崎支庁へ可申立候事、

明治十一年三月　日　　鹿児島県令岩村通俊

一火薬粒割器械	一組	一木炭焼釜	三個—
一銑銕地金	弐拾五俵	一銕□金	弐個—
一火薬堅メ筒	壱個	一□ス	拾本—
一天幕	弐個	一棒螺旋	大五寸—
一銕筋金	四本	一唐金地金	弐百斤位—
一銕地金	千斤位	一筋金損□	壱包—
一唐金杵□	四本	一同地金	六拾俵位—
一銅地金	拾俵		

148
乙第百七十七号

「活版達」

区戸長

本年七月十一日付戸籍調査加除規程中ノ廉々、第一課ヨリ正誤候処右ハ取消シ、更ニ左之通改正増補候条、此旨相達候事、

明治十一年七月廿一日　　鹿児島県令岩村通俊

一調査規定第四条但書、該住人ノ三字改メテ、戸主或ハ尊属トス、

149
乙第百八十五号

「活版達」

区戸長

今般乙第百八十四号ヲ以テ、徴兵取調方相達候ニ付テハ、右適令ノ内士族平民トモ、養子・分家或ハ嗣子相続人等出願之者ハ、実際止ムヲ得サル分ニ限リ、其都度願出可受許可様可致、此旨相達候事、

明治十一年八月廿日　　鹿児島県令岩村通俊

150
乙第百八十八号

区戸長
官林監守人

官林監守人配置方改正之都合有之、旧来之監守人相廃候条、当分ノ中区戸長ニ於テ、不取締無之様可致注意、此旨相達候事、

但旧来之監守人月給金額并見締方限等、以書付来ル九月五日限可届出候事、

明治十一年八月十七日　　鹿児島県令岩村通俊

151
乙第二百拾壱号

区戸長

別紙人名ノ者、原籍及ヒ家族等、左ノ雛形ニ倣ヒ取調、往復ヲ除ノ外十日間ニ可差出、此旨相達候事、

明治十一年十月十六日　鹿児島県令岩村通俊

雛形

族籍	鹿児島県 士族 平民	姓	
戸主 次三男 弥	戸主 次三男	名	何某
誕生年月	何年干支何月何日生		
本籍住所	鹿児島県第何大区何小区何国何郡町村何番地		
全戸寄留	何府県第何大区何小区何国何郡町村何番地		
父母	姓名年令但亡ナルハ（亡）ノ字ヲ姓名ノ上ニ記スベシ		
養父母	同上　但書同上		
祖父母	同上　但□□□ヲ記スベシ		
妻	何府県何某ノ長次女　某年令何歳但何年何月何日婚姻		
嗣子	姓名年令但養子ナレハ何年何月養子ト□□何某次三男ト記ス		
次男女	同上　但妾腹ノ子ト雖トモ戸籍上ニ登録セシトキハ記入スベシ		
兄弟姉妹	同上　但養子或ハ他ハ嫁スル等ノ者ハ記スルニ及ハス		

以上罫内ニ之レナキトキハ〔無之〕ト記スベシ、

152
乙第二百三十七号

区長

当県庁分課之義、今後左之通相定候条、為心得此旨相達候事、

鹿児島県令岩村通俊代理

明治十一年十二月五日　鹿児島県大書記官渡辺千秋

庶務課　勧業課　租税課　地理課　警察課
学務課　会計課　公債課　土木課

以上

153
乙第二百四十四号

区長

客年西南戦争之際、囚虜永野要平負傷之者ニテ、八代軍団支病院ヘ入院ノ処、同年六月二十一日死去候旨、長□陸軍臨時病院ヨリ通知之上本人遺金送付相成候得共、住所不明瞭ニ付右金円渡方ニ差支候条、区内無漏取調、有無共本月二十五日限可申出、此旨相達候事、

鹿児島県令岩村通俊代理

明治十一年十二月十二日　鹿児島県大書記官渡辺千秋

154
本年乙第七号活版達ニアリ之別冊ナリ

県名	国名	郡名	正誤	地名	正誤
鹿児島	薩摩	伊佐		大口	
同	同	同		山野	
同	同	出水		田代	
同	同	鹿児島		伊敷（ママ）	
同	同	同		甲突川	
同	同	同		新正院	
同	同	同		竹村	
同	同	同		西田川	
同	同	同		□村	
同	同	同		天保山	
同	同	同		洲崎	
同	同	同		吉野村	

同	鹿児島	瀧ノ上	玉江橋
同	薩摩	火薬庫谷	柴原（サイバラ）
同	鹿児島	鳥越坂	脇田江村
同	薩摩	高麗橋	火打山
同	同	西田橋	二本松
同	同	武村	和田ノ浦
同	同	田上村	竹ノ山
同	同	郡山	中村
同	同日置	花倉山	唐湊ノ二本松
同	鹿児島	出水	白銀坂
同	出水	旭岳	武岡
同	伊佐	小川内	常盤
同	同	阿久根	岡ノ原
同	出水	加加刺支峠（カガラシ）	比志島
同	同	野口郷	伊集院
同	伊佐	紫微山	涼松
同	同	宮ノ城	実方
同	同	小木原	杉木馬場
同	同	平泉	吉田
同	同	牛尾	城山
同	同	川岩瀬	岩崎谷ノ内（城山）
同	同	田代	多賀山
同	同	柳葉山	戸越坂
同	同	鶴田	中別府
同	同	野田（ヌタ）川内（ダイ）	尾口
同	同	入来（イリキ）	牧神
同	薩摩	向田	雀ケ宮
同	鹿児島	下取村（エトリノ）	帯迫
同	薩摩カ	字波江野山（ハエノ）	礒山
同	伊佐カ	瀬原	桂山
同	薩摩カ	上ノ原	吉野原
同	日置カ	関屋	中窪
同	同カ	字笹ノ谷	

県名	国名	郡名	正誤	地名	正誤
鹿児島	大隅	姶羅		加治木	
同	同	桑原		栗野	
同	同	囎唹		福山	
同	同	姶羅		国府	
同	同	始羅		蒲生	
同	同	同		溝部	
同	同	同		達門寺坂	
同	同	同		別府川	
同	同	囎唹		小田越	
同	同	桑原		馬越村	
同	同	同		踊	
鹿児島	大隅	囎唹		大窪（シンバル）	
同	同	桑原		神集館（シンジュウ）	
同	同	同		塩浸（ヒタシ）	
同	同	桑原		安楽（アラク）	
同	同	囎唹		襲山（シノ）	
同	同	同		岩川	
同	同	同		鍋村	
同	同	同		通山	
同	同	同		市成	
同	同	同		末吉	

県名	国名	郡名	正誤	地名	正誤
同	同	同		冷水谷	
同	同	同		草牟田村	
同	同	同		池ノ平村	
同	同	同		新神橋	
同	同	同		武橋	
同	同	同		涙橋	
同	同	谿山		谷山	
同	同	同		前方山	
同	同	同		野ノ城山	

県名	国名	郡名	正誤	地名	正誤
同	同	同		財部	
同	同	同		菖蒲谷	
同	同	同		清水	
同	同	同		敷根	
同	同	姶羅		山田	
同	同	同		重富	
同	同	同		佐山	
同	同	同		帖佐	
同	同	同		松原	
同	同	同		思川	
同	同	同		春花村	
同	同	肝属		串良	
同	同	同		鹿屋	
同	同	同		百引	
同	同	大隅		牛根	
同	同	同		二川村	
鹿児島	大隅	囎唹		湊村	
同	同	同		薄木	
同	同	同		永迫	
同	同	同		川内	
同	同	同		総陣山	
同	同	同		塚ノ脇	
同	同	同		荒磯岳	
同	同	同		嘉例川	
同	同	同		高須	
同	同	同		炭山	
同	同	同		曽木	
同	同	菱刈		上宗地越（カンソウヂゴエ）	

県名	国名	郡名	正誤	地名	正誤
鹿児島	日向	諸県		加久藤（カクトウ）	
同	同	臼杵		三田井（ミタキ）	
同	同	諸県		真幸（マサキ）	
同	同	諸県		第百大区三田井村（ダイヒャクダイクミタキムラ）	
				馬関田（バカンダ）	

| | | |

| | | |

| | | |

同 同 同

同	同
同	同
諸県	
小五瀬	塔ノ久屋敷

御布達並雑書

（表紙）

御布達並雑書

155

御筆之写

条　目

一詩歌諸遊技専ニ相嗜、士ニ不似合所業有之間敷事、

一応知行高、軍役人数且兵器粮食不足有之間敷事、

一衣食住ニ奢侈無用之事、

一組合中長病或死去之者ハ、同伍より早速物主江可申出事、

一什伍之組合、互ニ可和睦事、

右之趣堅固ニ可相守者也、

文久二年壬戌十月

御名乗御判

156

御軍役ニ付、平常　御沙汰之趣御別紙之通御筆を以被仰出候条、一統謹而可奉承知候、右ニ付而者当今士風一涯致振起、文武之励者勿論之事ニ而、衣食住之儀弥費用を省き、質素節倹を相守、兵器粮食夫々分限相応用意いたし、急場之御用無滞可相勤、就中与合中和睦信義を専ニ相心得、聊疎意無之、御条目之趣堅固ニ可相守候、

右之通可奉承知候、

二月

（川上久封）筑後
（島津久徴）大蔵

（川上久運）但馬
（川上久美）式部

157

一島津珎彦　島津兵庫　島津讃岐　島津安芸　島津左衛門

島津信濃　島津図書　島津元丸　種子島弾正

右、依　勅命、従来之家格被廃士族之名目被相定、別段之御会釈を以世禄千五百石下賜候、

一川上東馬　島津太郎左衛門　島津隼人　新納四郎左衛門

桂右衛門　島津主殿　樺山主計　島津壬生　町田民部

伊集院靜馬　島津主計　北郷主水　伊集院伊膳　島津式部

頴娃弥一郎　小松玄蕃頭　入来院弾正　比志島靜馬

肝付兵部　菱刈杢之介　諏訪甚四郎　川田掃部　畠山丈之介

鎌田仙十郎　伊勢雅楽　喜入多門

右、依　勅命、従来之家格被廃士族と名目被相定、別段之御会釈を以世禄三百石被究置候、左候而先祖勲功之御取訳を以、高弐百石御蔵米之内より年々被下置候、

一島津織之介　島津良馬　島津助之丞　島津郷太夫　島津多右衛門

右、依　勅命、前同断世禄三百石限リ被究置候、

一川上勘解由　新納刑部　山田新介　鎌田源左衛門

右、依　勅命同断、左候而祖先勲功之御取訳を以世禄三百石限リ被究置、且高弐百石御蔵米之内より年々被下置候、

一島津一二　島津内匠　島津桑衛　吉利群吉　大野多宮

島津織部　平田勒負　二階堂部　市田幸助　義岡相馬

山岡隼見　島津右近　末川主税　島津蔵人　島津勇馬

島津清太夫　川上龍衛　川上隼見　島津左太夫　島津登
郷原金太夫　樺山長太夫　北郷七左衛門　北郷権五郎
桂　内記　島津権左衛門　新納内匠　町田内膳　伊集院
九郎　新納主税　伊集院隼衛　高橋十郎　仁礼舎人
二階堂源太夫　名越兵部　小林龍左衛門　北条直記　本
田治部　平田正十郎　堀弥八郎　小笠原兵部　鎌田十五
渋谷　梢　宮之原幸吉　関山盛之介　亡山田　司　岩下
佐二　上野藤馬　猪飼　央　三崎平太左衛門　倉山作太
夫　谷川新七郎　西　金之介　本田五位　井上備前守
面高真彦　相良治部

右、依　勅命、同断世禄弐百石限り被究置候、

明治二年巳八月七日被仰渡候、

藩治職制

一大政一新、各藩職制可相改　勅論之趣有之、斯ニ　御政躰ニ法リ旧制ヲ取捨シ簡明守易カラシム、希クハ藩屏ノ任ヲ竭シ、以テ皇基ヲ扶植セン、尓諸有司須ラク此意ヲ体シ、勉励奮発少シク怠ルコト無ヲ要ス、

一小権ヲ以大権ヲ犯シ、己レノ務ヲ措テ人ノ務ヲ問フコト勿レ、

一各局事ノ相関渉スル者ハ、宜シク公同商議スヘシ、妄リニ私権ヲ立他局ト扞格支吾シ、以テ事務ノ壅滞ヲ致スコト勿レ、

一旧制某官ヲ帯ヒ某職ニ居ル、名義不当改正セサルヘカラス、今斯ニ俸禄ノ差等ヲ定メ、以テ功労ノ軽重ヲ著ス、一切兼官其レコレヲ停罷セヨ、

一官等ニ準シ俸禄ヲ定ムト雖トモ、職務コトニ劇ナル者ハ別ニ季禄ヲ給シ、以其労ニ酬ヒ其生計ヲ資ク、

一官ノ為ニ人ヲ求メ、人ノ為ニ官ヲ求メス、若其人ナケレハ其官ヲ欠クトモ可ナリ、因テ今職務ノ閑劇ヲ計リ、ソノ人員ヲ定ム、容易ニ加入シ冗官幸位アラシムルコト勿レ、

一諸官二年ヲ以テ交代シ、三月ヨリ翌々三月ニ至ルヲ任限トス、一官二員以上アルモノハ、今後交代ノ時其ノ半ヲ残シ、一年ヲ延シテ交代シ、新旧相雑ラシムヘシ、

但勲績著明、衆望所属ノ者ハ不在此限、

一新制一定、諸有司宜シク奉守失フコトナカルヘシ、若真実事ニ臨ムテ便ナラス、或ハ別ニ良制アラハ更ニ商議ヲ経テ改革ス、

職　制

政府五官

知政所　神社・伝事二方、学館・医院ヲ管ス、

執　政　諸官ヲ統領シ機務ヲ処決シ、上意ヲ奉テ号令・賞罰・黜陟ノ典ヲ明ニスルヲ掌ル、

参　政　執政ヲ輔ケ政事ニ参預シ、庶務ヲ議定スルヲ掌ル、

公議人　参政ノ中選撰シテ之ニ任ス、其職掌一ニ　朝制裁スル所ノ如シ、

朝制云、掌奉承　朝命、代国論備議員、

公用人　京師・東京・大坂ニ分遣ス、邸中ノ庶務ヲ知リ　朝命ヲ伝達シ、藩事ヲ上稟スルヲ掌ル、

書　史　文案ヲ勘著シ、式例ヲ授定シ、及記禄ノ事ヲ掌ル、

見　習　奉官、編修繕写ノ事ヲ主当ス、

筆　者　官中ノ簿書雑務ヲ掌ル、他官ノ筆者此ニ準ス、

神社方　寺院ヲ兼ヌ、

奉行　藩内神社・陵墓祭典・祝部及ヒ諸寺ノ事務ヲ総判スルヲ掌ル、
副役　奉行ヲ輔ケ官事ヲ糺判スルヲ掌ル、他官ノ副役此ニ準ス、
筆者
伝事方
伝事　内外庶事ヲ執達スルヲ掌ル、
筆者
学　館　和漢洋三学及書暦算通訳諸科ヲ包括ス、
学頭　三学ヲ分督ス、
館事ヲ総判シ、学政ヲ提督シ、政治ノ得失ヲ預議スルヲ掌ル、
助　掌同学頭、館事ヲ糺判スルヲ掌ル、医院ノ助此ニ準ス、
都講　講義課試ノ事ヲ掌ル、医院ノ都講此ニ準ス、
授読　音読ヲ教授シ、生徒ヲ督スルヲ掌ル、医院ノ授読此ニ準ス、
助書師
助暦師
助算師　測量術ヲ兼ヌ、
助通訳
助
医　院　病院・製薬院ヲ包括ス、
学頭　和漢洋及鍼科・製薬・病院ヲ分督ス、
院事ヲ総判シ、医学ヲ講明シ、施治製薬ノ事ヲ掌ル、
助
都講
授読
助
会計局　民事・出納・生産・営繕・製造・糧餉六方ヲ管ス、
総裁　一人、内外ノ用度・租税・金穀・物産・営作・市政ノ事ヲ総判スルヲ掌ル、
奉行　掌同、内一人市中政ヲ主当シ、市中ノ庶務訴訟ヲ聴受ス、
副役
勘定役　算計総括ノ事ヲ掌ル、
筆者
軍務局
総裁　一人、海陸軍ノ庶務・守衛・簡閲及ヒ兵士・各籍・戎器修造・軍功ヲ検覈スル等ノ事ヲ総判スルヲ掌ル、
調役　総裁ヲ佐ケ、官事ヲ議処スルヲ掌ル、
指南役　一等ヨリ三等ニ至ル、兵制ヲ諳熟シ、以テ教授スルヲ掌ル、而テ教ル所多寡軽重ヲ以、等級ヲ分ツ、
筆者
海軍方
船将　一等ヨリ四等ニ至ル、
一等船将　海軍兵士検校シ、戎具ヲ充備シ、規律ヲ立、操練指揮ノ事ヲ掌ル、而シテ礮門ノ多寡ヲ以テ等級ヲ分ツ、船数ニ拘ハラス、
二等船将　二十四封度以上ノ礮十二門以上ヲ指揮スル者、
三等船将　二十四封度以上ノ礮二門以上ヲ指揮スル者、
四等船将　コレヲ商船ノ長トス、本局ノ調役之ニ任ス、

士官　一等ヨリ四等ニ至ル、見習コレニ倣フ、
船将ヲ輔ケ艦内ノ規律ヲ守定スルヲ掌ル、
但属スル所ノ船将ニヨツテ等級ヲ分ツ、一等士官ハ一等船将ニ属スルノ類、見習及ヒ大礮・器械・運用・医・書算、コレニ準ス、

見習
大礮士官　一等ヨリ三等ニ至ル、
器械士官　一等ヨリ四等ニ至ル、運用以下コレニ倣フ、
運用士官　軍艦ハ器械ヲ上席トシ、商艦ハ運用ヲ上席トス、軍艦ハ蒸気、商艦ハ風帆ヲ主トスルノ故ナリ、
測量士官
医師
書算
小頭　陸軍小頭同等ト雖ヘトモ、海軍ヲ以テ上席トス、其兵士モ亦コレニ準スヘシ、
陸軍方　陸軍規則一ニ英式ニ依ル、故ニ各官職掌ノ詳ナル宜シク式内ニ就テコレヲ明知スヘシ、
大隊長　大隊ヲ分督シ、操練指揮及ヒ監察スルヲ掌ル、
教頭　隊中ノ総教タリ、
教佐
騎兵一隊長
歩兵一隊長
礮兵一隊長
兵器方
奉行　武庫ノ兵器ヲ主管シ、銃礮・弾薬・糧食ノ庶務、各其本職ト商議区処スルヲ掌ル、
調役　掌同奉行、銃礮・弾薬・糧食ノ事ヲ分課ス、
筆者

会計局
民事方
奉行　田宅・租税・賦役・駅逓・水利・開墾ノ事ヲ掌ル、
副役
見習
筆者

出納方
奉行　内外金穀ノ出納・倉庫・俸禄ノ事ヲ掌ル、其金穀二項分課シテ専任スヘシ、副役以下此ニ準ス、
副役
見習
筆者

生産方
奉行　国内・諸島ノ産物ヲ富殖スルヲ掌ル、其諸島事務ハ別課専任スヘシ、副役以下コレニ準ス、
副役
筆者

営繕方
奉行　土木・工作ノ事ヲ掌ル、
副役
見習
監作　役場監督ノ事ヲ掌ル、

制造方
奉行　製鉄・紡績・弾薬・銃器、諸新造ノ事ヲ掌ル
副役
筆者
糧餉方
糧餉役　平戦ノ糧餉醤政席蓋諸舗設ノ事ヲ掌ル、
助
筆者
監察局
総裁　一人　憲法ヲ執持シ、内外非違ヲ監察糾弾スルヲ掌ル、
監察　掌同総裁、兼テ礼儀・門衛ノ事ヲ掌ル、
巡察　巡邏検察ノ事ヲ掌ル、
筆者
糺明局
総裁　一人、鞫獄・刑名ヲ定メ、捕亡・贖贖ノ事ヲ総判スルヲ掌ル、
副役　聴訟ノ事ヲ掌ル、余ハ他官ノ副役ニ准ス、
見習
筆者
地方官
外城
地頭　所部ノ士民ヲ撫育シ、文武ヲ振ヒ教化ヲ敦クシ、守禦ヲ厳ニシ、操練・簡閲ノ事ヲ統ヘ、租税・賦役・開墾・生産等ノ庶事、民事・生産両奉行ト協議処分シ、及ヒ部内社寺ノ諸務ヲ兼管シ、訴訟ヲ聴受ス、其大ナル者ハ並ニ申稟スヘシ、
副役
諸島　島ノ大小ヲ以等級ヲ立、
在番　職掌地頭及ヒ民事奉行ニ准比ス、島岐ノ大小ヲ以テ等級ヲ立ツ、
一等在番　大島ニ在勤ス、
二等在番　喜界島・徳島・永良部・屋久島四島ニ在勤ス、
三等在番　七島ニ在勤ス、
巡察
筆者
内務局　膳所及ヒ道具方・庭方・医員・裏方ヲ管ス、
知家事　保伝ノ任ニ居リ、輔導ノ職ヲ尽シ、君徳ヲ賛成シ、内事総判スルヲ掌ル、内一人世子ノ伝役ヲ兼ヌ、
尓後本年八月十七日、随　朝命改称家令、
侍直長　左右ニ昵近シ、起居行止ノ事ヲ掌ル、内一人内庫ヲ主当ス、
侍直　宿直使令ノ事ヲ掌ル、
筆者
膳所
頭
助
内監
道具方
頭　蔵弃ノ器翫ヲ主掌シ、兼テ茶道ヲ掌ル、
助

庭方
　頭　園池清灑ノ事ヲ掌ル、
医院
　侍医　内幾人裏ニ侍ス、
　助
裏役
　頭　内窪ノ庶務ヲ総判スルヲ掌ル、
　助
　内監
　　以上

159
諸役人并兵士・筆者・小役人等、此節廃官之面々助役(迄)ニ茂、三拾俵以下御役料米等被下置候者ハ、都而是迄之金禄被下儀ニ付、夫々治定之趣者尚又可申渡候得共、此涯御米申請度者ハ、形行出納奉行米穀掛方へ可申出候、左候而三拾俵以上俸禄被下置候面々ハ、別段以等級被成下筈候間、其段ハ追而可申渡候、此旨向々江可申渡候、
　但海陸軍局廃官之面々ハ、銘々自身通帳取仕立、軍務局免印を以出納奉行米穀掛江申出、御米可申請候、
　　三月七日　　知政所

160
本文巳十一月廿九日上野休助御取次を以被仰渡候事、
一鹿児島士族并諸屋敷御検地帳、此節庄内表御検地ニ付御用見合相成候間、被仰渡度奉存候、此段申出候、以上、
一鹿児島士族居屋敷之儀、千五百石以下者三反、五百石以下ハ弐反、弐百石以下ハ壱反限リ被相究度、当時ニ至てハ居屋敷迚茂税地相当可有之候付、都而御軍役高ニ被召加、自然被究置高前及返上候ハヽ、御定直成ヲ以売払候様、尤是迄無高ニ而屋敷持之面々ハ、其侭高持成被仰付、何れ茂屋敷高出米上納被仰付度候事、
　但居屋敷壱ヶ所之外、添地又ハ余人名前を借、壱屋敷ニ円置候面々間々有之哉ニ候間、御定之畦反以上致所持候分ハ、上屋敷壱貫目位、中下之屋敷者弐三百目ツヽ、少目を以限月相定、屹与売払無駄之同様被仰付候、

161
一任(ヒト)統(スヘ)恵(アヤ)睦(ムツ)
　右文字、実名・仮名・同唱迄も遠慮、
一義(ヨシ)忠(タヽ)光(ミツ)久(ヒサ)
　右文字、同断遠慮、
一親(チカ)勝(カツ)寧(ヤス)貞(サダ)房(フサ)
　右文字、仮名相用候儀同唱迄も遠慮、
一桃齢　随真　聰徳　紫雲　知鏡　晴雲　天璋
　右二字続候文字、仮名相用候儀同唱迄茂遠慮、
一朝　頼　與　斉　彬
　右文字遠慮、
一久　忠
　右文字、依家実名相用候儀御免、仮名相用候儀一統遠慮、
一三郎
　右二字続候文字、仮名相用候儀遠慮、
一又
　右文字、依家柄別而由緒有之向計仮名相用候儀御免、其外一統遠慮、

一封（クニ）済（オワリ）

右、実名相用候儀同唱之文字ハ、心入を遠慮、

一盛　悦之助　成　真之助　俊

右文字、御同名同唱迄も遠慮、

右之通、遠慮文字被相改候条、向々江可申渡候、

明治三年午三月　　知政所

162

集成館并火薬製造局之儀、　御先代様深　思召を以被召建、軍器専要之製造所ニて、士族たり共是迄之通製造方として、罷出候儀不苦候旨被仰達候条、軍務局惣裁江申渡、可承向江も可申渡候、

163

大工・木挽・日雇等諸職人賃銀之儀、上中下夫々兼而定置候処、頃日何となく緩く相成、就中下町出火以後ニ至リ過当之雇賃払受、往々甚敷ハ食物等差出候儀ニ相聞得、別而不可然事ニ候、方今物価沸騰一般之折柄、猶更右躰之取締厳重不行届候而ハ不叶事ニ候、右等職工之儀ハ、専営繕方管轄之事候条、前文之趣奉行・監作汲受、取締精微ニ行届候様営繕奉行申渡、会計局・監察局其外向々江可申渡候、

164

内厩方

右、二之丸江召建候、左候而、五疋立馬并右見合馬被召置候旨被仰達候条、此旨家令江申渡、可承向江可申渡候、

165

衆中より御小姓与養子成、双方往来御免被仰付、尤第一嫡庶之訳且血統連続之者より可相撰旨、先達而被仰渡置其後一同士族被仰付、何れも区別ハ無之事候得共、全躰鹿児島士族希望之者不少、追々続等不正之者継目養子等願出候向も有之、家統連続之義ハ至重之事候処、右式心得違之義願出候而ハ随而衆弊も可生旁混雑之基ニ候条、以来嫡庶又血統連続明白成る者より御免可被仰付旨、更ニ被仰達候条、此旨一同江可申渡候、

一統軍役高之内永損高之儀者、賦米之分上納被仰付、其外諸出米之義者当秋より以来不及上納候、当損并休地之義ハ是迄之通被仰付候条、出米総無混雑様可取計候、此旨会計総裁・民事奉行・出納奉行江申渡、向々江茂不洩様可申渡候、

166

一藩士横山庄太郎死を以献言仕候処、誤聞之廉有之候由、実ニ奉恐入候次第ニ御座候、右ニ付祭礼料頂戴被仰付候得共、誤を正しく申述候始末に御咎目可奉蒙筈之処、却而御目録被成下候而者名実不相当之訳、何を以祭礼し、何を以霊魂を慰し可申哉、賞罰之典ニおひて何れ共方向を失ひ、所置難仕御座候ニ付、重畳恐惶之至ニ候得共御目録返上仕候ニ付、宜敷御執奏奉冀候、以上

明治三年午八月　　鹿児島藩庁

167

一鹿児島弐拾五ヶ村并御城下諸屋敷、当暮より大御支配被仰渡ニ付、諸屋敷取扱之義左ニ申上候、

一是迄余人名前を借、一屋敷境等相除度支配候者茂可有之哉ニ相聞得、左様之者者御法違之事候ニ付御取揚可被仰付候得共、全躰手狭之所より一囲ニ為相円筈、今般御支配ニ而ハ別段之訳を以二屋敷相円、壱反限ハ此節ニ限リ居屋敷可被召付哉、余ハ相対譲渡候様被仰付度候、

一居屋敷之義、是迄凡五畦以下ハ御免無之事候得共、間々五畦位之屋敷ニ、内々ニ而両人居住之者も有之哉ニ相聞得候ニ付、弐畦位迄ハ屋敷立賦ニ付、右様之屋敷ハ此節ニ限リ二屋敷之御免被仰付度、弐畦以下ハ不屋舗立候ニ付、合住居之向を以被召置度候、

一居屋敷格別手狭ニ有之添地等御免之人、御定之坪数丈ケハ屋敷ニ被召附度候、

一御城下并近在寺跡之義、学校又者軍局御用地之外地面茂可有之候ニ付、向々立会差支無之場所ハ夫々士族屋舗ニ申受被仰付度候、

一旧福昌寺門前地等、此以前所置相附居候場所等、凡下躰之者ハ此節御定之通、十ケ年限引移候儀ハ其通ニ而、此節新ニ士族屋舗ニ相定候所江ハ、凡下居住之者者御竿入より拾ケ年、引移方被召延度候、

一士族屋舗之内、間々内々ニ而近所之者江、本物返等之約束ニ而、切坪ニ而譲渡置候者茂可有之、右躰之屋敷ハ当分四壁形ニ御竿相究候様被仰付度候、

但屋敷御竿入之儀も、年間久敷故不格好之屋敷茂可有之、右ハ見分之上形行ヲ以取直方可致候、

一諸座付御借地之内江、内々人家来等致住居名目迄ニ而、諸座附之者不罷居屋敷者御取揚被仰付度候、

一旧船手之儀、生産方一囲之地面ニ而、右之内江水主之者共御借地被仰付置候処、当分ハ士族過分致借地、右面々之儀屋敷帳江被戴置候現屋敷之事候ニ付、此節御検地ニ者、士族借地之義ハ居住之侭御定之畦反通申請被仰付、水主之者共ハ生産方御借地之名目ニ而、外々同様御借地被仰付度候、

但向船手之義茂同様取扱被仰付度候、

一上・下・西田町并浜浦屋敷之義も、夫々三畦位御免数被相究度候得共、依職業ハ壱反内外茂無之候而ハ相済間敷候ニ付、此節者御竿召入畦直リ迄被仰付度候、以来商売向盛ニ仕建、倉庫等作り広め度願之者ハ、時々吟味次第地面取添候儀ハ不苦筋被究置候、

一町屋敷之中江、間々士族屋敷所持之者有之候ニ付、依願者町屋敷ニ被仰付度、且町屋敷引続等之士族屋敷江下人等召置店明御免之所も有之候ニ付、右様之屋敷者当分形被仰付度候、

但無免之店舗ハ被取除度、以来願出候而茂致免許間敷候、

一現屋敷致所持、引続高地面壱反以上相円居候人者、現屋敷之方余人江譲渡候様被仰付度候、

但家作ニ付差支候分ハ、現屋敷高地之方江繰替之義ハ御免被仰付度候、

一過上屋敷所持之者居屋敷差支候分ハ、拾ケ年ハ御免被仰付旨被仰渡、此節大御支配ニ付而ハ、御竿召入致屋敷割不置候而者名実ニ不相叶、勿論以後家作引直之節者混雑有之賦候間、其通被仰渡候、

一過上屋敷所持之者分地別立ニ而、致附属亦ハいたす筈候得共、此節御竿入ニハ差掛混雑之義茂難計候間、経界分明四壁可取掫旨尚又被仰渡候、

一近在五ケ村御免御借地者反限者現屋敷ニ被召成、過上丈ケハ余人江譲渡候様被仰渡候而ハ、過上屋敷譲受度者より当分借地主江譲渡度相対致内談、右之趣を以当局江代銀上納申請之願書差出候ハヽ、御検地之上畦反相究、当局より引付を以在番所江相納候様被仰渡候、

右之通一統被仰渡、当午閏十月中願出候ハヽ、時々差免、帳面仕付等いたし、十一月初方より屋敷致改方候、来春御検地取掛差支之

廉有之間敷候、尤是迄之改様ニ而者屋敷主住居之実否不相分候ニ付、万一疑敷有之節ハ直ニ糺方之上、不正之屋敷ハ屹与御取揚被仰付度致吟味、此段申出候、以上、

明治三年午九月　　民事局

168

大隊長
一一等　百俵
一二等　九拾五俵
一三等　九拾俵

教頭
教佐
一一等　九拾俵
一二等　八拾五表

右者、被定置候俸禄之内、先般減少被仰付置候処、右之諸官亦願之趣有之、無余儀被　聞召通候ニ付、右之通減禄被仰付候条、向々江可申渡候、

明治三年午九月　　知政所

169

従四位様御筆写

一横山正太郎儀、　皇国之御為至誠之忠胆より死を以　朝廷江致建言候儀深令感賞候、此上者尓后之祭礼不懈を第一之儀与存候事、

横山正太郎儀、為漢学諸生東京表江被差出置候処、　皇国之御為見至之趣条挙を以　朝廷江建言及自殺候段相達、至誠忠胆之一挙深御感怖、御別紙之通親族江被仰達、尚祭資等下賜候事、

170

布告事

一諸官職之面々俸禄渡方之儀、是迄任官之節伝事方より会計被相達候得共、裏書証文を以可承向江申達、且俸禄帳江相記米渡方申達候仕向ニ御座候処、多人数之出入ニ而不行届儀有之、以来ハ任官之書付伝事より被差廻候ハヽ、明細書為指出、持高出納方江引合之上、裏書江俸禄何拾俵被下旨相記候様可致取扱候間、出納方筆者御切米方差出人数之内両人混与根帳仕付、御証文首尾一篇ニ相掛置、手形取扱外人数より致首尾、出納奉行見習之内両人ツヽ差分リ、混与御切米方江相詰、時々御証文根帳江向込、無手抜致取扱候様被仰渡度、右ニ付兵士其外面々出入之節者、時々会計局江書付差廻候様諸局江被仰渡度候、

一転官并御軍役高上リ下リ之節者、時々明細帳書是迄ハ俸禄通帳相添会計局江差出候様被仰付度、左候ハヽ、張紙又ハ裏書証文を以出納方江相達候様取扱可致、右ニ付持高五拾石以上・以下出入之向ハ、月末出納方より会計局江届申出候様被仰付度候、

一死失之節ハ、三日之内俸禄通帳差出候様被仰達候得共、以来ハ死失御届伝事方江申出候節、俸禄通帳相添差出会計局江差廻相成候様、左候而俸禄不被相下置候向者其訳御届之上、組書江相記候様向々江無洩目様被仰渡置度候、

右之通被仰渡、其外何廉是迄之通致取扱候様被仰渡度事、

明治三年八月　　会計局

右之通被仰付候条、向々江可申渡候、

八月　　知政所

171
一御当地士族持高多少ニ付、俸禄被下方ニ拘リ候付高直願出候節、五拾石以下出入有之節ハ高直之差出江、其身ハ勿論二男三男末子迄茂、何御奉公相勤候訳書載願出、左候而高直御免之上、右書付米穀掛出納奉行より会計局江差出候様被仰付置度候間、時々無手抜可取計旨被仰渡度事、

但何秋より所務米可相請取訳茂可書載候、諸郷之義ハ弐拾五石以上、以下出入之節ハ同断之事、

明治三年九月　　会計局

172
一十一月中卯日　明日

但当年者廿五日ニ相当リ候、

右者、　鶴嶺神社御神事例年右之通被仰付候条、副斎主江申渡、可承向江可申渡候、

明治三年閏十月　　知政所

173
一朝廷新嘗之御祭者、歴代之　天皇御神祭被為在、新殻之初穂を天神地祇ニ供祀せられ、上古　天祖之詔を以蒼生之為ニ、稲穂を天孫ニ被為奉授候神恩を被為報候御重典ニ而、毎年十一月中之卯日右御祭日ニ相当リ、且又鶴嶺神社御祭茂其明日被為遂行候御定ニ而、右両日ハ格別之御祭日ニ付、　御藩内一同穢不浄を避け、斎戒之心を存し敬斎罷在候様被仰達候条、向々江不洩様可申渡候、

但当年者来月廿四日中之卯日ニ相当り候、

明治三年閏十月　　知政所

174
一附士之分地別立之儀ハ、高五石以上致附属別立御免被仰付来、本家残高不被定置候処、纔ニ拾石位所持之者迄茂別立願出、其通ニ而者本末共ニ可及衰微ニ事候ニ付、以来本家江拾五石以上残置、分地別立被仰付候条、向々江可申渡候、

明治三年壬十月　　知政官（ママ）

175
一自今長岡藩被廃候事、

明治三年午十月　　太政所（ママ）

176
一諸藩　朝集相定候条、簡易軽便ヲ旨トシ、供連始精々減省、総テ冗費無之様可致候事、

明治三年庚午十月　　太政官

177
一皇軍神社（祭神十座）

武雍槌神　経津主神　橘正成卿　忠久公　忠良君
貴久公　義久公　義弘公　斉興公　斉彬公

右者、此節　御軍神社御改造被　在候ニ付、社号被相定、皇国武道之祖神以下十座御祭祀被仰付候条、軍務局江申渡、可承向江茂可申渡候、

明治三年午十一月　　知政所

178
一東京公用方之事

庶務方

右之通唱被相替候条、向々江可申渡候、

明治三年午十一月　　知政所

御包紙

島津従三位

御感書写

朕忝大統ヲ継、夙夜憂々勤、惟恐皇紀未張万姓未安、前途之業実不容易、朕深苦慮、汝久光朕カ股肱羽翼ナリ、宜朕カ不逮ヲ助、左右群臣ト同心戮力皇業ヲ賛成シ、朕ヲシテ復古ノ成績ヲ遂シメヨ、今大納言具視勅テ朕カ意ヲ告、其レ欽テ之ヲ聴ケ、

岩倉大納言

今般深　叡慮ヲ以御剣一口、薩州鹿児島　照国大明神江被為納、国家興隆之御祈誓被為　在候条、　御趣意奉戴参拝可致之旨　御沙汰候事、

庚午十二月

三条　実美
徳大寺　実則
正親町　実愛

今般不図モ　勅使御下向、　宸翰拝戴被仰付、不肖愚昧之臣別而恐縮至極奉存候、就而者病躰勉彊仕来、春中　闕下ニ拝趨仕、奉謝深重々　天恩度奉存候、此段御請申上候間、宜御執奉被成下度奉伏願候、敬白、

十二月　　御名

此節　勅使を以　従三位様　宸翰御拝戴被為在候ニ付、御別紙之通御請被仰上候段被仰達候条、一統江奉承知候様、向々江可申渡候、

明治三年午十二月廿六日　　知政所

180 一勅使岩倉大納言殿、明後廿八日客屋御出立、御成御門より石燈籠通御通行、同所御渡戸より御乗船福山江御渡海、別紙之通　御休泊被遊　御通行候条、追々御布令之通諸事無滞様可取計候、尤御供廻リ并取締之義者、　御先着之節通被仰付候条、向々江早々可致通達候、

十二月　　知政所

十二月廿八日　福山御着船御一泊　　同廿九日　下荘内御昼
正月元日　上三侯御泊　　同二日　岩川御昼　　同日　高岡御泊

181 御藩内村落庄民、旧来之弊習致深染、未神祇道　御一新之御趣意ニ茂不相叶候付、従来祭来候十二夜亦ハ庚申祭等之儀、基仏家之余習付致廃止、以来毎月初午之宵ニ神比神祭いたし候様被仰付候条、地頭江申渡、可承向江可申渡候、

但宮比神之御神徳ハ、第一上に奉公して過なく、寿命を保ち身に無恙、親子・夫婦・兄弟・朋友之中和睦し、家業・職業衆人之愛敬を得て、家門之繁昌を授け給ふ神也、

（明治四年辛未正月廿日）　　取次　上村休介

182 当三月中ニハ諸吏変遷期限之処、第一　御上京且兵隊茂　御親兵之

御沙汰ニ相成、其侭被差出候ニ付、今一期限酉三月迄、諸局共当分之通被差置候条、向々江可申渡候、

但冗員相重居候分ハ、追而　御沙汰可有之候、

明治四年未三月　　知政所

183

房姫様御諡号

花蘟豊房姫命（ハナカツラトヨフサヒメ）

右之通奉称候条、向々江致通達、諸向江茂可申渡候、

明治四年未三月　　知政所

184

一諸向より、諸人軍役高等引当を以被差出置候拝借銀利息銀、当時世上之利足ニも不弁、且御吟味之趣も有之候ニ付、当正月より都而壱割利足上納被仰付候、左候而是迄定通之利足も、右之相渡嵩利足丈ケハ別段差分置、小学校行用ニ被振向候、第一諸士御引立之御趣意ニ付右之通被仰付候条、不洩様御達より布告可有之事、

明治四年未四月　　会計局

185

一此節　御上京中且　御親兵在京之内ハ、毎月廿九日飛脚被差立候条、向々江可申渡候、

但諸局御用物等ハ、船便より可差廻候、左候而差掛御用有之節ハ、朔日・二日方迄之間被召延候儀も可有之候、

明治四年未四月　　知政所

186

一御軍役高員数

一家々俸禄右同

但嫡子より末子迄

一御養料米并御切米右同

右、御用見合相成可申出旨会計局より致承知候ニ付、来ル十四日限無間違候様拙者方江可被差出候、比旨早々申進候、以上、

未四月十二日　　精松善之丞

187

一今般　勅使御下向、実父久光　宸翰拝戴被　仰付、病躰勉強仕、当春中　闕下江拝趨可仕旨御請申上置候処、病痾猶順快不仕候ニ付、恐縮至極奉存候得共、当秋迄御猶予被成下候様奉歎願候、依之臣忠義久光ニ代リ上京仕、奉謝　天恩度奉存候間、宜御執奏奉願候、以上、

明治四年辛未三月三日　　鹿児島藩知事

島津忠義

弁官御中

御附札

願之趣、兼而御沙汰被為在候儀候得共、不得止事情ニ付被聞食届候間精々療養相加、其内聊得病間候ハヽ、早速上京可致候、就而者忠義願之通早々上京可致候事、

188

従三位様為　御名代従四位様御上京之義、御別紙之通御願立被遊候処、御附札之通被　仰出候、各奉承知候様向々江早々可致通達候、

四月　　知政所

189

一御藩内産科療治未相聞、難産ニテ斃候者不少候処、医学校御雇人之教師ウリキス右之手術器械伝来、此節局中医師鮫島喙斎・渡辺

昌斎両人江産科掛被仰付候間、以来難産罹候者ハ勿論産婦療治望之者ハ病院江申出、教師并両人江可受療治候、此旨向々江不洩様可申渡候、

明治四年辛未三月　　▽知政所△

190

一戊辰以来　朝廷之御規儀不致確定候処、此節厚き　思召を以従三位様被為蒙　勅命候得共、いまた　御平快不被為在候ニ付、従四位様被為代　闕下江御拝趨被遊候、就而者　御両殿様兼而之御赤心相貫、　皇国興隆之大端可開立機会茂立至不容易御場合ニ候間、御供方ハ勿論、一同右之　御趣意奉体之尽至誠可致勉励旨御沙汰被為　在候条、各奉得其意無緩怠可相勤候、此旨家令江申渡、向々江茂可申渡候、

明治四年未三月　　知政所

191

一詔書写

故参議広沢真臣ノ変ニ遭、朕既ニ大臣ヲ保比スルコト能ハス、又其賊ヲ逃逸ス、抑維新ヨリ以来大臣ノ害ニ罹ル者三人ニ及ヘリ、是　朕カ不逮ニシテ、　朝憲ノ立タス網紀ノ粛ナラサルノ所致、朕甚夕為憾ム、其天下ニ令シ厳ニ捜索セシメ賊ヲ必獲ニ期セヨ、

明治四年辛未二月

別紙

詔書之通被　仰出候、今日　朝憲ノ不立網紀不粛ハ全ク実美等其職ヲ不尽ニ由リ、苟モ大臣ヲ残害ニ及ヒ候賊徒ヲ逃逸シ、既ニ五旬ニ及ヒ未タ捕獲ニ不至、実ニ恐懼ノ事ニ候条、篤　詔書ノ旨ヲ体シ、厳密捜索遂ケ速ニ捕獲、可奉安　宸襟様尽力可致候也、

辛未二月　　右大臣実美

192

一諸郷地頭之儀、管轄郷内居住所被定置候得共、何方迚茂差別無事候ニ付、以来居住所不被定置候条、地頭江申渡、向々可申渡候、

明治四年未三月　　知政所

193

一諸局之内被定置候季禄被成下候上者、最初より之御規定通御心得附銀ハ不被成下候、且島方為引替御金被下候儀茂、以来一切不相成候、左候而抜群致精勤御用立候者江ハ、別ニ褒賞之典可有之候、

右之通被仰付候条、向々江可致布告候、

明治四年未三月　　知政所

194

一第一郷校

右者高見馬場方限郷校右之名目ニ官校ニ被召建、本学校管轄被仰付候条、可承向江可申渡候、

明治四年未三月　　知政所

195

一当三月諸吏変遷期限之儀、今一期限当分之通被召置候ニ付而ハ、廃官之面々御養料米之義茂、右規限通酉三月迄世禄五拾石以下是迄之通被下置候、尤是迄四石以上被下置候面々ハ四石宛被下置候条、向々江可申渡候、

明治四年未三月　　知政所

196

一鹿児島

原良村　　右、永吉村江合併、

花野村　右、岡之原江合併、
下田村　右、坂元村江合併、
皆房村　右、比志島村江合併、
草牟田村　右、下伊敷村江合併、
華棚村　右、川上村江合併、
右者此節大御支配ニ付、鹿児島近在村々之内合村被仰付候条、此旨民事局江申渡、向々江茂可申渡候、
明治四年未五月　知政所

197
一二月十一日　一九月廿八日
照国神社例祭、改而右之通被定置候条、向々江可申渡候、
明治四年六月　知政所

198
一大門口南御台場迄之間　右、南水泳場
一病院下舌出地北新築地通角迄之間　右、北水泳場
右者、小学校・郷校諸生、毎年六月十五日より七月晦日迄、水泳修行被定置度吟味仕、此段申上候、
但諸生等級之標木等召建候義茂可有之、此段も申上置候、
右之通被仰付候条、本学校江申渡、向々江可申渡候、
明治四年未六月　知政所

199
一谿山郡　宇宿村　但広木一方限除
右、御城下近在江隷属、壱村ニ被召建候、
一同村之内　広木方限
右、近在田上村江被召建候、
右者、此節御検地ニ付御吟味之訳有之、右之通隷属被仰付候、左候而郡之義ハ是迄之通被召置候、
一西別府村之内大牧地面之義、痩労ニ付村違ニ者候得共、別段之訳を以作職御免被仰付置候得共、右之通広木方限被召付候ニ付、本通西別府村江被召返候、
一宇宿村山野見掛所務、谷山郷軍役方江被振向置候得共、右通支配替相成候ニ付、引取被仰付候、
右之通被仰付候条、民事局并地頭江申渡、可承向江茂可申渡候、
明治四年辛未七月　知政所

200
御藩江御達之書付　写
汝等曩ニ大義ノ不明ヲ慨、名分ノ不正ヲ憂ヘ、首ニ版籍奉還ノ議ヲ建ツ、朕深之ヲ嘉シ、新ニ知事ノ職ヲ命シ、各其事ニ従ハシム、今ヤ更始之時ニ際シ、益々以テ大義ヲ明ニシ名分ヲ正シ、内以テ億兆ヲ保安シ、外以テ万国ト対峙セントス、因テ今藩ヲ廃シ県ト為シ、務テ冗ヲ去リ簡ニ就キ、有名無実之弊ヲ除キ、更ニ綱紀ヲ張リ、政令一ニ帰シ、天下ヲシテ其向フ所ヲ知ラシム、汝等其レ能ク朕カ意ヲ体シ、翼賛スル所アレ、
明治四年辛未七月十四日　鹿児島藩　知事島津忠義

201
奉　勅速ニ上京、苦労ニ被　思召候、抑御維新以来綱紀更張、御施設ニ相成候処、方今内外之形勢前途之事業不容易、深ク御配　慮被為在、今般一層御鞏革被遊候　御趣意ニ付、特ニ復古ノ際大政ヲ賛成致候議ニ候得者、始終ノ成功ヲ奏シ候様被仰出候ニ付而ハ、国事

御諮問被為　在候間、無忌弾建言宏謨ヲ可奉裨補候事、

辛未七月三日

202

口達覚

月中三ヶ度参　内之事、

但二ノ日ヲ以テ定日トシ、十字参仕、政府宮内省江舎人ヲ以テ可届出、尤御用有之候節者、此余時ニ可被為召候事、

203

一

西郷鹿児島藩大参事

右、被任参議候間、此段相達候事、

辛未六月二十五日

薩州　大久保参議

肥前　大隈参議

土州　佐々木参議

土州　斉藤参議

中山神祇伯

有栖川兵部卿

万里小路宮内卿

九条弾正尹

近衛神祇大副

長州　大木民部大輔

津和の　烏丸宮内大輔

長州　福羽神祇少副

山県兵部少輔

右同　宍戸刑部少輔

右之通今日免職候条、為心得申達候也、

辛未六月廿五日

兵部省

中山従一位

右之通被蒙　仰候、

辛未六月廿七日

九条従一位

近衛正二位

右、麝香間祇候更ニ被　仰付候事、

辛未六月廿九日

斉藤従四位

麝香間祇候被　仰付候事、

辛未七月二日

右大臣三条実美

兼任神祇伯宣教長官

右、任大蔵卿

岩倉大納言

任外務卿

薩州　従三位大久保利通

津和の　従四位福羽美静

任神祇少副兼宣教次官

肥前　従四位大隈重信

任大蔵大輔　　従三位大久保利通

任大蔵卿　　正三位万里小路博房

任宮内大輔　　従一位中山忠能

追々老年苦労被　思召、本官ヲ免シ、特旨ヲ以終身現米五百石下賜候事、

大嘗会御用懸被　仰付候事、　　同人

辛未六月

任民部少輔　　長州　従五位井上馨

辛未六月廿八日

任兵部少輔　　長州　従五位山県有朋

204

一鹿児島藩知事麝香間詰被　仰付候間、比段申達候也、

辛未五月十八日　　城中取締官掌

任民部卿　　長州　大木民部大輔

任民部卿　　肥前　大隅大蔵大輔

任参議　　土州　板垣高知藩大参事

任参儀　　任従四位

任兵部大輔　　同人

右、宣下候事　　長州　兵部少輔山県有朋

麝香間祇候　　徳大寺正二位

右之通被　仰付候事、　　嵯峨従二位

辛未七月十四日

被免謹慎　　筑前福岡藩知事

代リ知事　　有栖川宮

筑前大参事　　田川人川田佐久間

右之通被　仰付候事、

205

御布告写

朕惟フニ、更始ノ時ニ際シ、内以テ億兆ヲ保安シ、外以テ万国ト対峙セント欲セハ、宜シク名実相副ヒ政令一ニ帰セシムヘシ、朕曩ニ諸藩版籍奉還ノ議ヲ聴納シ、新ニ藩知事ヲ命シ各其職ヲ奉セシム、然ルニ数百年因襲ノ久キ、或ハ其名アリテ其実挙ラサル者アリ、何ヲ以テ億兆ヲ保安シ万国ト対峙スルヲ得ンヤ、朕深之ヲ慨ス、仍テ今更ニ藩ヲ廃シ県ト為ス、是務テ冗ヲ去リ簡ニ就キ、有名無実ノ弊

ヲ除キ、政令多岐ノ憂無ラシメント、汝群臣其レ朕カ意ヲ体セヨ、

明治四年辛未七月十四日

206

藩ヲ廃シ県ヲ被置候事、

辛未七月　太政官

一自今刑部省・弾正台被廃、司法省被置候事、

辛未七月　太政官

一太政官　三条　岩倉　徳大寺　参議　西郷　木戸

一神祇官　伯　福羽　右大臣兼　石州津和野　三国

一民部省　卿　大輔　少輔　井上

一大蔵省　卿　大輔　少輔　大久保　大隈

一工部省　卿　大輔　少輔　後藤

一兵部省　卿　大輔　少輔　山県

一宮内省　卿　大輔　少輔　万里小路　吉井

外ニ外務省・刑部省・弾正台、此三局御用首尾不相掛訳ニやら有之、今日迄廃官不成候、

一番

一藩ヲ廃シ県ヲ被置候事、

七月　太政官

二番

一御参内之上、坊城殿より御直ニ御請取、

鹿児島藩知事

島津忠義

免本官

辛未七月　太政官

三番

一今般藩ヲ廃シ県ヲ被置候ニ付而ハ、追テ　御沙汰迄ハ、大参事以下是迄之通事務取扱可致事、

辛未七月　太政官

四番

一藩ヲ廃シ県置セラレ候付テハ、県如何相心得可申哉奉伺候、以上、

月番　元　三藩

七月十四日

右之通相伺候処、上野官掌ヲ以テ、旧藩名ヲ県ニ換称候様、演達有之候段申来候事、

一今般廃藩被　仰出候ニ付テハ、追而　県治一定之御規則可被　仰出候得共、差向キ是迄取扱来候庶務ハ大参事処決可致、尤重大之事件者伺出可請　朝裁事、

辛未七月　太政官

別紙七通従　朝廷被仰渡趣、　従四位様於東京被遊　御承知候段御到来候、依之　従四位様　従三位様、弥　朝意御遵奉之御事候条、一同心得違無之、尚再度何分被　仰渡之間、士農工商百般之役職是迄之通勉励可罷在候、此段別而相達候条、不洩様向々江可申渡候、

明治四年辛未八月　　知政所

207

一知政所之事

鹿児島県庁

右之通被相改候条、向々江可申渡候、

未八月　　鹿児島県庁

208

一鹿児島并諸郷江被掛置御製礼之御副札、右可取除候、

一旧藩境被建置候標木、

右、藩之字県字ニ可書改候、

右之通被仰付候条、可承向々江早々可申渡候、

明治四年辛未八月五日　　鹿児島県庁

209

元参議

一土州佐々木司法省大輔　　長州宍戸司法省大輔

万里小路宮内大輔　　薩州吉井宮内大丞

薩州西郷参議　　長州木戸参議

肥前大隈参議　　土州板垣参議

肥前副島参議　　右大臣三条神祇伯

洋行

津和の福羽神祇伯　　元参議

宇和島洋行伊達大蔵卿　　薩州大久保大蔵卿

薩州吉田大蔵少丞　　長州伊藤大蔵少輔

長州大木民部卿　　長州井上民部大輔

旧大納言岩倉外務卿

薩州寺島外務大輔　　土州後藤工部大輔

長州山県兵部大輔　　薩州川村兵部少輔

麝香之間詰人数

徳大寺　中山　近衛　鹿児島　九条

右、此節改革後被仰付役人姓名

210

一今般藩を廃し県を被置候ニ付而ハ、租税之儀一般之法則ニ可引直候処、因襲之久き、一時ニ引直し候而ハ都而民情ニ係り候儀ニ可有之候ニ付、当未年ハ悉旧慣ニ依可申、尤是迄取扱来候古法并租税之名義区別等詳細取調、来ル申三月迄ニ可伺出事、

太政官

211

一高弐拾五石以下小高無高之鹿児島士族、一家部ニ付御救米三拾俵ツヽ、被下候、

一家督之者軍治諸官相勤、六石以下之俸禄被下候者ハ其禄合本行之通被下、尤部屋栖者俸禄之義ハ別段ニ而、不及差引、

一昼飯米被下候者并旅行之節ハ、年中旅扶持米其数合ニ而、六石以上ニ及候者ハ別段不被成下候、尤臨時之旅行等ハ非此定、

一近来致別立、父兄同居ニ而本家高弐拾五石以上之者ハ、廿五石以下たりとも同居中ハ御扶持米不被成下候、

一台場見締并大砲掛リ、御救勤ハ此節引取、

一三口番・御文書蔵番人并諸所塩硝蔵・大門口遠見番人ハ、此節より都而窮士部屋栖之者江被仰付、限月并扶持米ハ是迄之通、

一学侶出席之者繰廻ヲ以御扶持被下候義ハ、家督ハ勿論部屋栖迄此節都而引取、

一比志島転任(仕カ)士、仕付料被下候面々ハ此節引取、

一家部付六石ツヽ、被成下候上ハ、是迄四ヶ月目御救米被下候家部茂

一同十分之御宛行相成候ニ付、以来ハ臨時之御救米等ハ一切不相成候、

一廃官之面々、六石以下之御養料被下置候者共、右ハ不被成下候、以来右救米六石被成下候、

一当時弐拾五石以上之者、以後高相下候共、右同様之御取扱ニハ不被仰付候、

一諸郷中宿者ハ士着同様之訳合、中宿之内ニハ御救助米不被成下候、

一此節諸郷掛持之自作地、其郷江売払且差上候者ハ、追て返高被成下候ニ付、当分弐拾五石以下ニ而茂、右取調ニ不及候、

右之通、鹿児島士族之儀多ハ俸禄を以経営弁多候処、少高無高之者数多、先年来為御救別段高被差分置、夫々御救之道相立候得共、至当分弥増難渋之士多、依之別段之御吟味を以右之通被仰付候条、弐拾五石以下之面々ハ別紙引札之通明細書相認、来ル十日限徇達江相付可差出候、此旨向々江可被申渡候、

但当分御救助被仰付置候面々ハ、御救助米相渡迄之間、是迄之通可相心得候、

明治四年未九月四日

212

一華族より平民ニ至迄、互ニ婚姻被差許候条、双方願ニ不及其時之戸長江可届出事、

但送籍方之儀ハ、戸籍法第八則より十一則迄ニ照準可致事、

一散髪・製服・脱刀共、自今可為勝手事、

但礼服之節者帯刀可致事、

八月　太政官

右之通、於東京被仰出候段申来候条、向々江可申渡候、

明治四年辛未九月　鹿児島県庁

213

着服之儀前之通被　仰出候処、当県之儀者是迄略服勝手ニ被　仰付置事ニ而、別段相替儀無之候得共、以来治事局出仕之面々を始、筒袖、バツチ着用可為勝手候、此旨向々江可申渡候、

未九月　鹿児島県庁

214

軽歩兵一大隊人員表

少佐一人	本大隊長	大尉八人	同小隊長
副官一人		中尉八人	同半隊長
少尉八人	同分隊長	曹長一人	
権曹長八人	同教（ママ）	軍曹三十二人	
射的軍曹八人		給養軍曹八人	
喇叭軍曹八人		同伍長一人	
伍長六十四人		喇叭卒三十二人	
銃卒五百七拾六人			

一大隊例外ナリ

大尉筆頭一人	大尉射的一人
中小尉給養一人	中小尉会計一人
医官二人	書簡掛権曹長一人
給養軍曹一人	倉庫曹一人
銃工長一人	縫工長一人
靴工長一人	会計書記伍長一人
銃工三人	縫工拾六人

靴工拾六人

一小隊人員表

大尉一人　中尉一人　小尉一人　権曹長一人
軍曹四人　射的軍曹一人　給養軍曹一人　伍長八人
喇叭卒四人　銃卒七拾二人

軽歩兵一大隊諸官職務表

位階職号

上等士官

少佐　大隊司令官

大尉筆頭

予備隊及ヒ諸務ヲ扱フ、但列外ナリ、

大尉　小隊司令官

於戦隊テ、其小隊ノ右第一列ニ列ス、

大尉副官

於戦隊テ、右半大隊ノ後ニ列ス、

大尉（射的）

一大隊中狙撃教授ヲ司ル、但列外ナリ、

中尉　半隊司令官

於戦隊テハ、其小隊第二半隊ノ後ニ列ス、

中少尉（給養）

一大隊中器械・食料・衣服其外ノ事ヲ扱フ、列外ナリ、

中少尉（会計）

一大隊中会計ヲ総轄ス、但列外ナリ、

小尉　分隊司令官

於戦隊テ、第一半隊ノ後ニ列ス、

医官

一大隊中治療ノ事ヲ扱フ、但列外ナリ、

下等士官

曹長　下副官

於戦隊テ、左半大隊ノ後ニ列ス、大尉副官ノ助務、

権曹長　分隊司令次官

於戦隊テ、第二半隊ノ後ニ列シ、即チ第四分隊ノ令官（司脱カ）、

権曹長（書簡掛）

一大隊中書簡等ヲ扱フ、但列外ナリ、

軍曹　右左嚮導官及ヒ押伍官

各分隊ニ一員宛属ス、

軍曹（射的）　押伍官

権曹長一手伝ヲナシ、其小隊中器械・食料・衣服等ヲ扱フ、但

小旗持及ヒ右左総嚮導ヲ命セシトキハ、伍長ニテモ欠ヲ補フ、

軍曹（倉庫掛）

倉庫中ノ諸物ヲ扱フ、但列外ナリ、

軍曹（倉庫書記）

会計中少尉ノ書記、但列外ナリ、

軍曹（喇叭）　喇叭長

於戦隊テ、喇叭ノ前ニ列ス、

銃工長　縫工長

列外ナリ、　列外ナリ、

靴工長

例外ナリ、

諸卒

喇叭
伍長　於戦隊テ、喇叭ノ右ニ列ス、

会計書記
伍長　会計書記軍曹ノ助務、但列外ナリ、

伍長　各分隊ノ右及ヒ左第一列中ニ列ス、

陸軍

大将　掌総判陸軍事務、

中将　掌同上、相当将聯隊以上、或任諸道鎮台師、

少将　掌同上、相当将聯隊以上、或任諸道鎮台師、

以上三将、任参謀官、或為閲使長、

右、総判官　勅任

大佐　掌参陸軍事務、相当任各兵聯隊、

中佐　掌同上、相当任各兵予備大隊長、或為聯隊、

少佐　掌同上、相当任各大隊長

以上三任、或諸道鎮台大少弐、或任参謀官、又為閲検使、

右、参判官　奏任

大尉　在各兵、掌中隊指揮、

中尉　在各兵、掌小隊指揮、

少尉　在各兵、掌半隊指揮、

以上三尉、或任諸道(脱カ)、或参謀属、又為閲検使属、

右、上士官　判任

曹長

権曹長

軍曹　掌受尉命督視隊兵、

銃工
伍長　列外ナリ、

右、下等士官

副官　掌副従本官賛成諸務、無一定之等級、其本官上下其格別如左、

大将副官　中佐以下大尉以上、

中将副官　少佐以下中尉以上、

（少将副官ナシ、脱ナラン）

大佐副官

中佐副官　大尉以下少尉以上、

少佐副官　中少尉

215

西郷正三位、東京ヨリ桂四郎殿エ被遣候書

朝暮秋気相催し、弥以御壮栄可被成御座、恐悦之御儀奉存候、陳者天下之形勢余程進歩いたし、是まて因循之藩々却而奮励いたし、尾張を始阿州・因州等之五六藩及建言（大同小異ハ有之大体郡県之趣意）候得共、日々御催促申上候位、殊ニ中国辺より以東ハ大体郡県之体裁ニ倣候模様ニ成立、既ニ長州候ハ知事を被辞、庶人与可被為成思召ニ而、御草稿まても出来居候由御座候、封土返献天下ニ魁たる四藩其実蹟不相挙候而ハ、大ニ天下の嘲弄を蒙り候而已成らす、全奉欺　朝廷候場合ニ成立、天下一般帰着する所を不知、有志之者ハ紛紜議論相起候上、外国人より茂　天子之威権者不相立国柄ニ而、政府与言物国々四方ニ有之抔与申触し、頓と国体不相立旨申述候由、当時ハ万国ニ対立し、気運開立候而ハ迚茂勢難防次第ニ御座候間、断然公儀を以郡県之制度ニ被復候事ニ相成、命令を被下候時機ニ而、御互ニ数百年来之御鴻恩、私情ニおひて難忍事ニ御座候得共、天下一般如此世運と相成、如何ニしても十年は防かれ申間敷、此運転は人力之不及処与奉存候、此際ニ乗し封土返献之魁よりして、天下一般之着眼と相成

候上者、色々議論相立候而者、是迄勤　王之為ニ幕府を掃藩被遊候御趣意茂不相貫、殊ニ　頼朝以来私有之権を御一洗被為在候御功績茂難相立事候得者、決而異議者有之間敷候得共、旧習一時ニ散し候事ニ候得者、依事而者異変無之共申難く国々も不相知候付、　朝廷ニ於ては戦を以被決候、確乎として御動揺不被為在候間、夫丈ハ御安心可被下候、此運ニ当り私有すへき訳無之事候間、右体変動之模様も相見得不申候得共、此末所置を間違候而如何之変態ニ推移候哉茂難計事与奉存候、此旨乍大略形行如此御座候、尚追々可申上候得共甚急敷、一筆奉得御意候、恐惶謹言、

「明治四年辛未」七月廿日　　西郷吉之助

桂四郎様

216

一　御親兵ニ成候旧鹿児島県之兵員

一権小隊　百　幸衛　一右同　遠竹橘二
一右同　今村幸之助　一海軍所出仕営繕掛前田伊兵衛
一右同　小田重之助　一右同　川上仲助
一右同　小笹林左衛門　一海軍所出仕　町田八郎左衛門
大将　中将　少将　大佐　中佐　少佐　大尉
中尉　少尉　曹長　権曹長　軍曹
一大佐兼権大丞　野津七左衛門
一権大丞会計監督　種子田健一郎
一大佐　篠原冬一郎
一少将箱館鎮台出張　桐野信作
一侍従　高島鞆之助
一いまた不相知、後砲隊大佐ニ成　村田新八
一海軍所出仕海軍取建掛　草道甚左衛門
一右同　郷原内（本ノマヽ）
一右同　末川清彦
一小隊　吉原彦左衛門
一会計局海軍所出張　有馬万左衛門
一右同　砲取建掛　税所四郎左衛門
一会計局出張海軍所出勤　荒川仲蔵

右拾三等

217

西郷正三位隆盛、東京府ヨリ桂四郎殿江書状

芳翰難有拝誦仕候、残暑酷敷御座候得共、弥以御壮栄御勤務之段恐悦奉存候、随而少弟無異儀罷在候間（之至）（付）、乍憚御放慮可被下候、陳者乍（先）月下瀞（候処、初此方より二藩）漸三藩出揃ニ相成、戮力同心与（立）申儀、只取会まてニ而者志危直（気）様難安き次第候間、此度ハ十分戮力、同心之根本を堅ふいたし候様急務と存候、其根本（源）ニおひては三藩之内より壱人主宰を立（立）、皆此人之手足と相成十分使ハれ候而、其人を助け候処不相定候而者（立）、只面々之議論を主張いたし候（様之）機会ニ成行候ニ付、壱人見込通施させ候而、面々（衍）を一々定め不申候而者（二）必事業不挙、紛擾之場（々）と相成可申（合二）、若又見込相違大体不相叶候得者（致）（衍）、速ニ引籠方可然（候）、少々之見込違必有之事候間（付）、右等は推而やり貫き候得者、其弊を矯め候位者如何様共相成候ニ付、是を以定約いたし、木戸壱人を参議ニ居へ、外ハ省々（々）ニ降り（衍）其任を負ひ、勉励可致与相決（議）し土州江相談仕候（衍）処、至極同意ニ而御座候間、両藩より得（篤）与長藩江申述候得共、木戸決而不肯、然とも両卿江申立懇（々）ニ御説諭相成候得共、少茂承引不致候ニ付不得止候（衍）、此上ハ都而省々江相（衍）降り、互ニ手を引合候而参り候外無之与、策を替

へ談判いたし候処、又々議論沸騰ニ(し)成立、既ニ崩立勢ひと相(ニ成立)成、頓と御改革(者)茂不出来次第ニ立(至)到候処、一昨夕大久保より(行)得と(篤)相談有之、此上私気張候得者、随分御変革之所も請合て可相調与之事候間、相(ニ付)(左候ハヽ)はまり可申、此節不相調候得者、御国許ニ而隊中与相約候折、切断相究居申候間、迚茂逃出しは出来不申、山ニ入候儀者相塞り、何れ土(地)ニ入之外無之与存承(候故承諾)伏仕候処、木戸納得ニ相成、両人参議ニ茂(ニ拝)承命仕候次第ニ御座候、外ハ皆省々江相下り、一時ニ参議并卿・大少輔を被廃、其上又々御調之上省々ニ被相居、何分十全之撰択不被相行、残念之至御座候、乍然此上屹与定則相立候得者、是を以責め或者罪(罰)候場合ニも可相成(議)与奉存候、大少丞以下之処未撰無之、是も続(変換)而相発候賦ニ御座候処、官省之調并任員之定額・章程等相極め候而可相廃とて、只今取調中ニ而御座候(間)、不日ニ相廃シ可申、此度者俗吏余程落胆いたし、濡鼠之如く相成居(申候)、御遠(遥)察可被下候、定而鬼様者私壱人ニ相留(行)り可申と、最早相明(行)め居申候、猶追(近)々事情可申上候得共、大略まて如斯御座候、恐々頓首(恐々頓首)、以上、

未七月十日　　西郷吉之助

桂四郎様

218

一民部省被廃候事、
大蔵省中、監督司度(用カ)司租税廃、更ニ左之通被置候事、
　租税寮　勧業司　統計司　紙幣司　戸籍司　駅逓司
工部省中　土木司　被置候事、

辛未七月　　太政官

一太政官中、左之通被廃候事、

左右大臣　大納言　大史　権大史　小史　権小史
主記　官掌

辛未七月　　太政官

一太政官職制左之通被定候事、

太政官　元老院
太政大臣　正一位　納言　従二位
参議　正三位　枢密大史　正四位
同権大史　従四位　同少史　正五位
同権少史　従五位　大史　正四位
権大史　従四位　少史　従五位
権少史　正六位

式部局　長　正四位　助　従四位
舎人局　長　従六位　助　正七位
雅楽局　長　従六位　助　正七位

一今般宮内・文部両省江左之通被置候条、為心得相達候事、

辛未七月　　太政官

宮内省
侍従長　正四位　大監長　従六位　少監長　従八位
内匠司　調度司
文部省
大博士　従三位　中博士　正四位　少博士　従四位
大教授　従三位　中教授　正四位　少教授　従四位
教授　従六位　権中教授　正八位　少助教　正九位

大審院

議長　正三位　　一等議員　従三位　　二等議員　正四位

三等議員　従四位

右院

諸省　長官　次官

別紙之通被仰渡候間、此段相達候也、

辛未七月廿九日　　太政官

219

一従四位様御儀、去月廿二日御用之儀有之、　御参　朝被成候様万里小路宮内殿より御達ニ付、翌廿三日夕四字　御参　内被遊候処、山里御茶屋江緩々被為召、　御自身御杓ニ而　天盃　御拝載、七字過被遊　御帰邸候段御到来、恐悦之御儀候条、一同奉承知候様御布告有之度、此段申出候、以上、

明治四年辛未八月十八日　　家令

220

一東京江此御方様より　二丸老公御建白、至極御都合宜敷、　朝廷ニ者都而其通御取用相成、　只今ニ而者　天朝ニ茂一向ニ此御方様を御頼ニ被　思食事ニ相成、万か万迄も我　老公思召通ニ、朝廷都而被行候由、無左候得者既ニ　日本同志軍ニ相成勢候処、邪説悉皆消散し、　此御方様御威光誠ニ朝日之昇るか如き御忠誠御真義天日を貫キ候由、貴島宇太郎より家内江申来候段、汾陽真一兵衛云々、

一明治四年辛未四月中旬、膳所藩士族一統帰農ヲ願出、　朝廷ヨリ免許ノ命下リシ、

一苗木（ナヘキ）・三田（サンダ）ノ二藩モ右同ラン（断）

一丸亀藩知事ヲ始メ、諸官員并兵額ニ至ルマテ、其法則悉諸県ニ比例シ、自余ノ士卒族ハ大抵帰農セリト云、

一全国戸籍調規則三十三ヶ条被仰出、尤来ル申ノ二月ヨリ五月マテノ間ニ取調、以後ハ六年目毎ニ相改マルヨリ（シ）、

一未四月中、東山道・西海道ニ鎮台ヲ分営（脱アラン カ）トシ、西海道（東山）ハ石巻ヲ以テ本営トシ、盛岡・福島ヲ分営トシ、西海ハ小倉ヲ以テ本営トシ、日田・博多ヲ分営トス、

一清国一ノ御使節、明治四年辛未五月十八日ヨリ発スル由、人名未タ詳ナラス、

一山口藩士卒ヲ合併スルノ告諭略ニ云、国富強ノ術他ナシ、天下ニ曠土浮民ナク、各天分ノ才力ヲ伸長シ、其力ニ食スルニアリ、抑日本全国ノ歳入実数凡千三百万石ニシテ、府県ノ管タリ、而テ各藩百万有余ノ士、其七百万石ヲ世襲シ坐食スル者半ニ過ク、癸丑外国ノ事起シヨリ殆二十年、天下未タ兵制ノ実備ヲ見ス、因テ朝廷別ニ四民ニ募リ節制ノ兵ヲ編セントス、然ルニ之ヲ養フノ資何レニ求ンヤ、　朝廷天下ノ富ヲ興シ天下ノ用ヲ養ント欲ス、而テ諸藩皆世禄ナリ、　朝廷天下ノ兵ヲ強セント欲ス、而テ諸藩ノ士、全州保護ノ常備兵ニシテ其実ナシ、故ニ士ノ外ニ兵ヲ募レハ、其用費ハ又民税ニ関リ、民ハ益労シ士ハ益逸ス、何レノ時カ四民労逸ヲ均シクシ、各其所ヲ安スルニ至ランヤ、内国力ヲ挟定メ、外万国ニ対峙スルハ、彼ノ無用ヲ廃シテ此有用ニ充ルノ外ナカルヘシ、今般士卒合併、兵制一般ノ法ヲ設クルハ其力役ヲ尽サシムルニアリ、人々天下ノ大勢ヲ推テ、今日ノ食録ハ則世襲不易ノモノニ非サル所以ヲ領知シ、予メ前途ノ目的ヲ定メ、各自己ノ才力

ヲ磨励ムヘシト云、

一亀井・津和野藩知事辞職ヲ請フ建言ノ書有之、

一諸藩知事辞職ノ事

水野山形藩知事　北条狭山藩知事　吉井吉井藩知事
南部盛岡藩知事　牧野長岡藩知事　京極多度津藩知事
京極丸亀藩知事　大給龍岡藩知事

同宗藩江合併ノ部

一鞠山藩　福本藩　高須藩

藩農ニ帰セシ部

一苗木藩　三田藩　膳所藩

一明治四年辛未六月、徳山藩山口藩ニ合併セリ、

一津和野藩願之通藩ヲ廃シ、浜田県管轄ナリ、

一今部大溝藩知事、其職ヲ辞ス、

一名古屋城楼上金造ノ鯱魚（シャチホコ）両頭、世ニ名高カリシ品ナルカ、今般同藩ヨリ之ヲ東京ニ送リ　朝廷へ献納セリ、高サ九尺余、鮮甲鰭尾皆ノベ金ヲ以テ包ナリ、持運ノ人両双ニ八十人ヲ用ユト云、

一福岡藩贋札事件ニ付、黒田長和知事職ヲ免セラレ、有栖川宮代テ其職ニ任セラレ、七月二日東京発途ノヨシ、

一従来ノ漢学ハ、其教方甚迂遠ニシテ生徒皆成立ニ苦メリ、因テ今般大学ノ本校開興ニ付テハ、最初ニ教ユヘキ書ハ皆和訳シテ援ケントノ御趣意ニテ、原書已ニ和訳最中ナリト云、

一当今大学ニテ語彙ト称スル日本字引編集アルヨシ、追々出来スベシト云、

丹波国山家・綾部・福知山・園部・亀岡・篠山七県在京参事

一同ヨリ合県歎願書ノ写

一廃藩為県ノ御趣意ヲ奉載仕候処、区々ノ小県非無鎖砕之憂（レ）、大政ノ御妨ニ相成候ニ付、丹波七県申合セ合県ノ儀奉願候、従来藩債等ノ取調臣等関係罷在候儀ニ付、追テ明細書ヲ以言上可仕候、区々ノ微衷御採用奉願候云、

明治四年辛未

一九月十日、朝四ツ時より大円寺江被遊　御参詣、昼八ツ前　御帰邸相成候処、　朝より御用召ニ相成、直ニ　御参内被遊候処、左之通被為蒙　仰候、

従三位島津久光

積年功労不少、格別之　思召ヲ以分家被仰付、同姓従四位御賞典拾万石之内五万石、為家禄分賜候事、

辛未九月十日　太政官御印

従四位島津忠義

同姓従三位、積年功労不少候ニ付、格別之　思召ヲ以分家被仰付、御賞典拾万石之内、五万石為家禄分賜候条、此旨相達候事、

辛未九月十日　太政官御印

御朱印

従三位源朝臣久光

叙従二位

太政大臣従一位藤朝臣実美宣

大内史従五位源朝臣不磨奉

明治四年辛未九月十三日

御朱印
従四位源朝臣忠義
叙従三位
太政大臣従一位藤朝臣実美宣
大内史従五位源朝臣不磨奉
明治四年辛未九月十三日

従三位島津久光
先般従二位　宣下再三固辞、無余儀被　聞食候処、今般更ニ
思食ヲ以従二位　宣下被仰出候事、
辛未九月十三日　太政官

従四位島津忠義
先般従三位　宣下再三固辞、無余儀被　聞食候処、今般更ニ
思食ヲ以従三位　宣下被仰出候事、

223
右、未九月十三日九ツ過、式部省より礼服只今御用御承知相成、直様御直垂被為召　御参内被遊候処、右之通御書附御頂戴相成、御帰掛三条様江為御礼被為入、八ツ過被遊　御帰邸、直ニ御書附拝見被仰付候事、
明治四年辛未九月十三日

一人々生命を保護し人間交際之道を勤るハ、教化を以蒙昧之愚を開候外他なく、当春以来学校一新、適々子弟之教導方被仰付候段者何れも目視之道ニ候、就而ハ追々女子学校をも及興設賦候得共、急速ニ者其途ニ茂至兼候間、一統其心得を以、尓来男女共教育行届、愚昧を開き行々惟行正敷、各一身之職業勉励ニ赴候様可有之儀肝要之事候条、誰人ニ而も男子之学校者勿論取建度願之者ハ、本学校江相付願出候ハヽ、可令免許、此旨御県庁内中江可致布告候、
明治四年未十月　鹿児島県庁

224
一来ル十八日、鹿児島神社浜殿御本(幸)御神事、御道半御道筋左之通
御本社より草牟田学校前より、川筋高城六右衛門角より竹下喜左衛門前通、千石馬場二階堂蔀角より伊勢健彦角、中福良・石燈爐通・呉服町、松原神社前より蜜職(織)方角より大門口台場後塩浜筋浜殿江、但還御之筋茂同断、右之通例年御道筋被定置候条、向々江可申渡候、
明治四年十月　鹿児島県庁

225
詔書
朕惟フニ、風俗ナル者移換、以テ時ノ宜ニ随ヒ、国体ナル者不抜、以テ其勢制ス、今衣冠ノ制、中古唐制ニ模倣セシヨリ流テ軟弱ノ風ヲナス、朕太タ慨之、夫神州ノ武ヲ以テ治ルヤ固ヨリ久シ、天子親ラ之カ元帥ト為リ、衆庶以テ其成ヲ仰ク、神武創業・神功征韓ノ如キ、決テ今日ノ風姿ニアラス、豈ニ一日モ軟弱以テ天下ニ示ス可ケンヤ、朕今断然其服制ヲ更メ其風俗ヲ一新シ、祖宗以来尚武ノ国体ヲ立テント欲ス、汝等ソレ朕カ意ヲ体セヨ、
右之通、明治四年未九月十四日、東都　主上太政大臣へ勅語アラセラレタル由、

226
汝等積年苦労シ、以テ今日ニ到ル、謂ク実力ナル者全ク汝等カ服役

スル在リ、　朕太タ之ヲ嘉トス、殊ニ方今外交内務日新ノ時ニ当リ、邦家盛衰ハ実ニ兵制ノ強弱ニ存ス、汝等深ク　朕カ意ヲ体シ、弥以テ紀厳律明衆心一致シ、励精努力セヨ、

兵部省

右、明治四年辛未九月三日、東都浜離宮ニ於テ、供奉ノ兵部

227

一先般清国へ差遣サレシ伊達大蔵卿・柳原外務大丞、其他随従官員一同、引纏メ帰国可致トノ命アリ、

一至急御用有之、外務大記花房義質清国へ被差遣ノ命アリ、

228

此節高弐拾五石以下之士族江御救助米被成下候段ハ、先達而致布告置候通ニ候、右ハ全体今日経営難渋之者江、別段之御取訳を以被下置訳合ニ付、其旨一同厚心得、御救助之詮屹与相立候様心掛、時勢ニ応シ夫々御奉公相勤候様(儀カ)肝要之事候条、聊心得違偸安懶惰ニ相流候儀共有之間敷候、取扱向等之儀左之通、

一戦死跡等ニ而、其家ニ三拾俵以上之御扶助米又ハ御切米等被下置候面々、年限中ハ別段御扶助不被成下候、

一右同断御扶助米等被下置候家督廃官之養俸ハ是迄之通被下、任職之節ハ官禄等級之通被成下候、

一旧定府之内、養俸并堪忍料米六石以上被下置候者ハ当分之通ニ而、尓後養俸不被下節堪忍料米込六石被成下候、

一分地別立之者、父兄同居ハ勿論他家相続等ニ而実家之高頭弐拾五石以上ハ、弐拾五石以下ニ而も同居中ハ御救助米不被成下候、

但是迄御救勤被仰付候者ハ別段、

一家督之者県行等ニ而、跡家族無之者ハ同断不被下候、

一罪科有之者刑律を以御救助米被召揚候儀ハ勿論、家督御答目中又ハ島方居住之者ハ同断不被下候、

一御救助米引当ヲ以金銭致他借候者ハ、即可被召揚候、

一家督継目又ハ任職・免職・病死等之節御救助被成下候面々ハ、明細書を以伝事江可届出候、

一俸禄米等手形等帳面之儀ハ、いろは順を以米蔵より米穀掛出納方へ取揚差引相究候上、本之通米蔵江可差廻候、左候而此節新ニ御救助米被成下候人数ハ、十一月十日方より手形帳面可相渡候間、米穀掛出納方より可相請取候、

一御救助米被下候次第、別表之通、

右之通被定置候人数江、別表定ニ基き十一月朔日より御救助米被成下候条、向々江可申渡候、

明治四年未十月

鹿児島県庁

229

一時計ニ依リ時刻之異同有之、各所学校時限一定無之ニ付、来月朔日より時鐘之外、昼十二字ニ当リ正午鐘三ツ撞候様被仰付候条、向々江可申渡候、

明治四年辛未十月

鹿児島県庁

230

一今般廃藩被仰渡候ニ付而者、七百年来臣子之情義実ニ難堪次第ニ而、末世ニ至リ御旧恩不可忘儀ハ勿論之事候ニ付、旧御藩内之人民上下一統より惣代両名を以、東京表　従三位様江、一歳一次年始之御祝儀申上筈候、右ニ付而ハ進上物為手当、応人戸来申年頭より銭弐百文ツヽ、出銭いたし、十二日中於向々取揃、諸財方江可相納候、此旨御県内中道之島迄茂不洩様可申渡候、

但諸島之儀、出銭之代ニ砂糖其他産物を以相納、且上納比合等之儀、生産奉行致吟味可申出候、

明治四年辛未十一月　　鹿児島県庁

本文ニ付、家来・下人迄茂、応人戸出銭弐百文宛被仰付候事、

231

一戸数幾ツ
一家部幾ツ
右士族
男拾四歳以下何人、内午御改後生子何人
男拾五歳より弐拾歳迄何人
男弐拾壱歳より三拾九歳迄何人
男四拾歳より五拾九歳迄何人
男六拾歳より七拾九歳迄何人
男八拾歳以上何人
女拾四歳以下何人　内午御改後生子何人
女拾五歳より三拾九歳迄何人
女四拾歳より七拾九歳迄何人
女八拾歳以上何人
合男何人
合女何人
右之内癈疾何人
　内男何人　女何人
外ニ　午改後死亡人何人
　内男何人　女何人
一戸数幾ツ
一家部幾ツ
　右、家来・下人
右之通相違無御座候、以上、

何番方限
何番士族

月　日　　何野何かし

桂　久武

232

任都城県参事、
右　宣下候事、
辛未十二月十四日　　太政官

大山綱良

任鹿児島県参事
右　宣下候事
辛未十二月十四日　　太政官

右之通　宣下有之、今日奉命候条、向々江申渡、琉球館役江茂可申渡候、

明治四年辛未十二月二日　　鹿児島県庁

233

鹿児島県大参事

西郷隆盛

任参議
右　宣下候事
辛未六月廿五日　　太政官

鹿児島県権大参事
伊集院直右衛門

任出納権正
右　宣下候事
辛未七月廿九日　太政官

鹿児島県権大参事
伊地知正治

任中議官
右　宣下候事
辛未十月五日　太政官

右之通　宣下有之候条、向々江可申渡事、
辛未十一月　鹿児島県庁

234
一此節当県江鎮台分営被召立兵隊編制ニ付左之通、
一御城下兵士都而被免候、左候而俸禄之義ハ是迄之通被下置、已来小学校・郷校之間江出席可致候、尤各校江分配等之儀ハ、何篇本学校江委任申付候、
一台場兵隊・諸郷之兵隊ハ当分通ニ而、已来県庁管轄申付候条、砲台勤之面々ハ兼而受持之場所江致出勤、諸事是迄之通可相勤候、
近藤七郎左衛門
副長三拾石
山口源助　伊東万四郎　木脇啓四郎　伊集院直二
里正拾五石
山下七郎　小笠原彦七郎　新納新左衛門　高田平次郎
和田五左衛門　田中金兵衛　東郷九左衛門
山本覚右衛門　成尾清八　山口彦四郎　上村敬吉
副正九石
伊東喜之助　宮之原正蔵　橋口権九郎

一諸郷番兵并報知役之儀御暇被下候条、勝手ニ可引取候、
右之通被相定候条、向々江可申渡候、
明治四年辛未十二月　鹿児島県庁

235
一郡長五拾石　一副長三拾石　一里正十五石
一副正九石　一戸長五石　一戸長助四石
郡長五拾石
椎原与右衛門　田尻　務　貴島平八　土持左平太
阿多慶二　鳥丸六左衛門　椎原権兵衛　猿渡彦左衛門
木藤角太夫　飯牟礼八郎　肝付郷右衛門　築瀬善左衛門

236
長州ノ本太守毛利元徳山口藩知事上書ノ写
臣元徳謹而惟ルニ、大政一新聖明英断ヲ以テ、封建ノ宿弊ヲ改革シ粗郡県ノ制度ニ復セリ、随テ会計兵備等目的相立ニ至レリ、就中其名已ニ備テ其実未タ挙ラサル事アリ、臣夙ニ　闕下拝趨ノ命ヲ蒙リ区々ノ微衷ヲ吐露セント欲ス、然ルニ名古屋・徳島其他上表論述スル処、能前途ノ形勢・内外ノ事情ヲ洞観シテ事理当然ナリ、速ニ採択挙行ノ実アランコトヲ仰ク、蓋シ此際ニ当リ、門閥世襲ニ安シ身家ヲ顧慮スル処アル時ハ、人才輩出ス可ラサル必然ナリ、因テ断然華士族ノ名唱ヲ廃シ均ク平民トナシ、其家禄ハ悉大蔵省ニ収入シ、

公議ノ上相当ノ禄ヲ下賜リ、更ニ一国ニ一府ヲ置キ、天下ノ人才ヲ網羅シ、其長官ニ任スルニ至ラハ、乃チ郡県ノ名実相副ヒ、全国一治ノ大本自ラ立ツコトヲ得ン、臣資性庸劣ニシテ素ヨリ重任ニ堪カタシ、頓ニ辞職セントス、然レトモ管内ノ人心偏固ノ風習一洗セス、日夜努力ヲ尽シ聊カ藩政ヲ改ム、尓後人心ノ方向稍定レリ、然ルニ己巳冬ニ至リ、朝旨ニ基キ常備兵ヲ編制シ国家ノ用ニ供セントセシニ、豈料ランヤ兵隊中不良ノ徒一時ノ紛紜ニ乗シ、衆人ヲ煽動シ朝憲ヲ憚カラス、終ニ暴挙ヲナスニ至レリ、是他ナシ、臣ノ才劣リ識薄ク　叡旨ヲ貫徹スル能ハス、且所謂門閥ヲ脱セサルニ因ル、深ク恐悚ノ至ニ堪ス、故ニ其職ニ在ル一日モ安セス、仰キ願クハ即今臣カ職務ヲ免セヨ、然レハ退テ平民ニ帰シ日夜激励シテ智識ヲ磨キ、他日鴻恩ノ万一ニ報シ、従一位遺表ノ意ヲ通暢セントス、　英明宜ク臣カ微衷ヲ憐察シテ、之ヲ採用センコトヲ期ス、云々、

237

（本文書ハ二〇五号文書ト同文ニツキ省略ス）

238

一今般船改方并運上所相立、大小船共厳重ニ出入相改行届候ニ付而ハ、以来山川津口改ヲ不相請直乗可為勝手旨、更ニ被定置候事、

但前之浜廻着不相成諸郷船之儀ハ、是迄振合通たるへく候、

申四月　　鹿児島県庁

239

一是迄諸郷士族、以来鹿児島県士族与改称、片書ニ何方居住与可書記事、

右之通申付候条、及布告候事、

明治四年（五カ）壬申四月　　鹿児島県庁

240

一今般中西国等江　御巡幸被　仰出、当月廿二日東京御乗艦、当県江茂　御巡幸被為在筈候段申来候、就而ハ千古希有之御事候条、士民一同其御盛意を奉戴シ、各不失職掌聊緩怠之儀有之間敷候、此旨一同江可及布告候事、

明治五年申五月廿八日　　鹿児島県庁

241

一明二日　御発艦ニ付而者、家毎ニ万歳奉祝之開酒宴、管絃歌舞等可為勝手次第事、

但明二日限候事、

明治五年壬申六月　　鹿児島県庁

242

一明二日午前第三字、当所　出御被為在候条、此旨申入候也、

壬申七月一日　　供奉　式部寮

鹿児島県庁

追而、御県官員之先駈之輩、第二字参集可有之候也、

一明二日暁三字当所　御出馬、四字　御乗艦、五字　御発艦被　仰出候、就而ハ早鐘之相図次第、諸人　御通輦筋江可罷出候、

一御道筋并御手当向、何篇　御着艦之節之通、

一御通輦筋、燈爐可相燈事、

一火用心猶以可入念事、

右之通早々及布告候也、

壬申七月一日　　鹿児島県庁

243

一第一大区小三区

右之通区名相改候条、及布告候也、

明治五年壬申七月十四日　　鹿児島県庁

戸長

244 （本文書ハ『鹿児島県布達（上）』一一六号文書ト同文ニツキ省略ス）

245 （本文書ハ『鹿児島県布達（上）』一一七号文書ト同文ニツキ省略ス）

246 （本文書ハ『鹿児島県布達（上）』一一五号文書ト同文ニツキ省略ス）

247 一御定場ニ(外脱カ)おひて、銃発不可然儀ハ人々心得可有之候得共、日比等閑之者茂可有之哉ニ相聞得、右体之者ハ夫々御処置可相成候条、見当次第名本承届、其段可申出候、此旨及布告候也、

壬申十一月　　聴訟課

各区　戸長

248 （本文書ハ『鹿児島県布達（上）』一二六号文書ト同文ニツキ省略ス）

249 一華族ヨリ平民ニ至ル迄、自今苗字・名并屋号共改称不相成候事、

但同苗同名ニテ無余儀差支有之者ハ、管轄庁へ可願出事、

府県へ

人民一般改称ノ儀、別紙之通御布告相成候ニ付テハ、華族及奏任官以上ハ、管轄庁ニ於テ事実取調ノ上聞届可申事、

別紙之通従　朝廷　仰渡候ニ付、可及布告候也、

壬申十月十二日　　鹿児島県庁

戸長

250 （本文書ハ『鹿児島県布達（上）』一二一号文書ト同文ニツキ省略ス）

251 （本文書ハ『鹿児島県布達（上）』一二五号文書ト同文ニツキ省略ス）

252 一是迄磯旧御茶屋下辺御場内と唱へ、諸人魚猟差留有之候得共、以来勝手ニ釣不苦候、其外谷山諸所下汚辺猟場之義、其外郷内領分之様相心得、諸人猟方差留候場所茂有之、以来誰人ニよらす勝手猟差免候間、何品によらす生業相励、国益相成候様分而可致布告候事、

壬申十月　　鹿児島県庁

253 詔書写

朕惟フニ、我邦通行ノ暦タル、大陰朔望ヲ以テ月ヲ立テ、太陽ノ纏度ニ合ス、故ニ二三年間必閏月ヲ置カサルヲ得ス、置閏ノ前後時ニ季候ノ早晩アリ、終ニ推歩ノ差ヲ生スルニ至ル、殊ニ中下官ニ揚ル所ノ如キハ、率ネ妄誕無稽ニ属シ、人知ノ開達ヲ妨ルモノ少シトセス、蓋シ太陽暦ハ太陽ノ纏度ニ従テ月ヲ立ツ、日子多少ノ異アリト雖トモ季候早晩ノ変ナク、四歳毎ニ一日ノ閏ヲ置キ、七十年ノ後僅ニ一日ノ差ヲ生スルニ過キス、之レ大陰暦ニ比スレハ最モ精密ニシテ、其便不便モ固ヨリ論ヲ俟タサルナリ、依テ自今旧暦ヲ廃シ太陽暦ヲ用ヒ、天下永世之ヲ遵行セシメン、百官有司其レ斯旨ヲ体セヨ、

明治五年十一月

一今般大陰暦廃シ、太陽暦御頒行相成候ニ付、来ル十二月三日を以て明治六年一月一日と被定候事、

但新暦鏤板出来次第頒布候事、

一一ヶ年三百六拾五日、十二ヶ月ニ分チ、四年毎ニ一日ノ閏ヲ置候事、

一時刻ノ儀、是迄昼夜長短ニ随ヒ十二時相分候処、今後改而時辰儀時刻昼夜平分二十四時ニ定メ、子ノ刻ヨリ午刻迄ヲ十二時ニ分チ午前幾時ト称シ、午刻ヨリ子刻迄ヲ十二時ニ分チ午後何時ト称候事、

一時鐘ノ儀、来一月一日ヨリ右時刻ニ可改事、

但是迄時辰儀時刻ヲ何字ニ唱来候処、以後何時ト可称事、

一諸祭典等、旧暦月日ヲ新暦月日ニ相当シ施行可致事、

太陽暦一年三百六拾五日、閏年三百六拾六日、四ヶ年毎ニ置之、

一月大三十一日　其一日即旧暦壬申十二月三日
二月小二十八日（閏月二十九日）　其一日　同癸酉正月四日
三月大三十一日　其一日　同　二月三日
四月小三十日　其一日　同　三月五日
五月大三十一日　其一日　同　四月五日
六月小三十日　其一日　同　五月七日
七月大三十一日　其一日　同　六月七日
八月大三十一日　其一日　同　閏六月九日
九月小三十日　其一日　同　七月十日
十月大三十一日　其一日　同　八月十日
十一月小三十日　其一日　同　九月十二日
十二月大三十一日　其一日　同　十月十二日

大小毎年替ルコトナシ、

時刻表

午前　零（即午後十二時）子刻　一時　子半刻　二時　丑刻
三時　丑半刻　四時　寅刻　五時　寅半刻　六時　卯刻
七時　卯半刻　八時　辰刻　九時　辰半刻　十時　巳刻
十一時　巳半刻　十二時午刻
午後　一時午半刻　二時　未刻　三時　未半刻
四時　申刻　五時　申半刻　六時　酉刻　七時　酉半刻
八時　戌刻　九時　戌半刻　十時　亥刻　十一時　亥半刻
十二時　子刻

右之通被定候事、

明治五年壬申十一月九日　太政官

別紙之通被仰出候条、致布告候也、

壬申十一月九日　鹿児島県庁

255

一今般太陽暦ニ御変更ニ付、来月三日、一月一日被仰候ニ付而者、同月二日廿九日之場ニ相当候得共、諸出納并諸人取引等、当年迄ハ旧暦之日限通可相心得候、此旨布告候也、

壬申十一月十九日　鹿児島県庁

256

（本文書ハ鹿児島県布達（上）、六号文書ト同文ニツキ省略ス）

257

一区内諸人無税地屋敷、畦反歩并番区、毎戸地主より書出取揃可差出事、

一右屋敷、地所ニ依り当分致売買候適当之実価聞合、壱畦ニ付何程之訳、方限・等級幾ケ条ニ茂取分、一紙書を以可差出事、右来ル二月十二日限可差出也、

地券方

258

一第弐拾七号

自今華士族平民、互ニ養子取組不苦候事、

但卒族者管轄庁ヨリ正院江伺出、士族者管轄庁ニ而聞届、平民ハ戸長江可届出事、

明治六年一月二十二日　太政官

259

第弐拾八号

一今般華族家督相続之義ニ付左之通被相定候条、此旨相達候事、

一総領之男子他江養子ニ遣シ、或ハ父ノ心底ニ不応縁故有之者ニ厄介ニ遣シ、其家ハ次三男或ハ他人ニテモ当主之存寄ヲ以相続願出候節ハ、聞届不苦事、

一幼少ニテ家督為致候節ハ、親戚又ハ他人ニテモ相当之者相撰、後見可為致事、

一当主致隠居、実子又ハ養子家督相続致し候迄、其相続人多病或ハ不埒之儀有之歟又ハ病死致シ、最前之隠居壮健ニテ再ヒ相続願出候節ハ、聞届不苦事、

但再相続人ト可称事、

一当主壮年ナレトモ疾病其外無據事故有之養子致候処、前当主疾病平愈又ハ事故相解候節再家督致シ、右養子ハ実家江立戻候歟又ハ当地江縁付候共、双方熟談之上願出候ハヽ、聞届不苦事、

一本家分家親戚等之内当主病死致シ、跡子弟幼年并婦女等之砌、死之遺言又ハ其父母等重立候親戚及ヒ遺妻子、熟談之上合家願出候ハヽ、聞届不苦事、

一父兄伯叔総テ目上之者、子弟甥等之目下之家ヲ継承スル時ハ相続人ト称シ、養子ト称スヘカラス、当主死去跡嗣子無之、婦女之已ニ而已ヲ得サル事情アリ養子難致者ハ、婦女子之相続差許、従前給禄可支給事、

右之通ニ候条、華族ハ管轄庁ヨリ正院江相伺、士族ハ管轄庁ニ於テ聞届可申出事、

明治六年一月二十二日　太政官

別紙弐通之通被仰渡候条、此旨及布告候也、

明治六年二月廿七日　鹿児島県庁

260

（本文書ハ『鹿児島県布達（上）』一三一号文書ト同文ニツキ省略ス）

261

一旧一門島津珎彦以下士族卒軍役高、先般太蔵省より御取調相成候処、此度従前之通、永世為家禄下賜候御治定相成候段御達相成候間、一統可奉承知事、

明治六年酉二月　鹿児島県庁

262

第一号

今般改暦ニ付、人日・上巳・端午・七夕・重陽之五節ヲ廃シ、神武天皇即位日・天長節之両日ヲ以、自今祝日ト被定候事、

明治六年一月四日　太政官

第二号

自今休暇左之通被定候事、

一月一日ヨリ三日迄、六月二十八日より三十日迄、十二月二十九日ヨリ三十一日迄、毎月休暇是迄通、

但大ノ月三十一日者休暇非、

明治六年一月七日　　太政官

別紙之通被仰渡候条、及布告候也、

酉二月　　鹿児島県庁

263

（本文書ハ『鹿児島県布達（上）』一三四号文書ト同文ニツキ省略ス）

264

一第四十一号

従前之衣冠ヲ以テ祭服ト可致旨被　仰出候処、衣冠所持無之輩者狩衣・直垂衣等相用候儀、不苦候事、

明治六年二月七日　　太政官

265

一第四十二号

除服出仕　宣下候輩、自今御祭典之節奉仕参拝不及憚候事、

但忌明之輩、同様不及憚候事、

明治六年二月七日　　太政官

266

一第二十一号

妻妾に非サル婦女にして分娩する児子ハ一切私生を論シ、其婦女の引受するへき事、

但男子ヨリ己レノ子ト見留メ以上者、婦女住所之戸長ニ請テ免許ヲ得候者、其子男子ヲ父トスルヲ可得事、

明治六年一月十八日　　太政官

267

一第三十六号

自今年令ヲ計算候儀、年幾月ト可相数事、

但旧暦中之儀者一干支ヲ以テ一年トシ、其生年之月数者本年之月数ト通算シ、十二ヶ月ヲ以テ一年ト可致事、

明治六年二月五日　　太政官

268

一種子油申請之儀、基ひめ本品之事ニ而、先年者御仕登種子、大坂直成ヲ以時々被召替来候処、近年御仕登無之故、大概之并直成ヲ以壱盃ニ付三百三拾六文并之処、此節金価并天保銅銭直成被召替候得共、右通訳ヲ以矢張是迄之直成ヲ以申受被差出候ニ付、致布告候也、

明治六年酉三月八日　　出納課

269

（本文書ハ鹿児島県布達（上）一四〇号文書ト同文ニツキ省略ス）

270

一諸郷居住士族等、当県旧城下屋敷内々買取居候者ハ、三ヶ年限余人江可譲渡事、

一右同断士族、依願借地免許之者ハ、三ヶ年限余人江可譲渡候、

一旧門前亦ハ諸局支配地等、此節居住之侭屋敷成免許ニ付而ハ、諸郷士族之分ハ、三ヶ年限余人江可譲渡事、

一旧諸座附屋敷江致借地居候面々、昨年居住之侭屋敷成、右之内諸郷居住士族之義ハ、前件同断三ヶ年限余人江可譲渡事、

一平民より士族屋敷買取候儀、町続之地面限願出候節ハ免許可申付

事、

右ハ、諸郷士族等旧城下屋敷買取候儀ハ不相成候藩政中成規ニ候処、近年諸郷より寄留人県下江居住無際限所より、屋敷地別而無多事、方今帰農当然之世態ニ茂候間、適宜之吟味を以右之通究置候条、（前件カ）支許之通屹与可致取扱候、此旨租税課より相達、一統江可及布告也、

明治六年酉三月十日　　鹿児島県庁

271

一四月二日巳ノ刻、右御首途、

一四月六日午刻、右御発駕、

右、此節　久光公就　御上京、御日取右之通ニ候間、此段及布告候也、

明治六年三月廿四日　　鹿児島県庁

県下戸長

272

一辛未七月以来唯今ニ至迄、兵隊ハ勿論奉職之月日、且東京其他何方ニ而も旅行出入之訳、是又月日相記委細一帳を以、来ル四月十日限差出候様、無遺漏可布告候事、

明治六年三月廿四日　　鹿児島県庁

戸長

273

一大山参事殿、四月十九日於東京当県権令拝命相成候段申来候条、及布告候也、

明治六年酉五月三日　　庶務課

戸長

274

一去月廿八日　御参内　天気御伺、且一昨年　従二位様被為蒙　宣下候処、御病中ニ而拝　命御猶予御願済相成居候処、右御受御礼茂被為済候、仍而　従二位様与奉称候様、此旨御問合申越候、以上、

御分家

明治六年酉五月九日　　御家令

島津久邦殿

別紙之通相達候条、致布告候也、

五月廿二日　　鹿児島県庁

275

（本文書ハ鹿児島県布達（上）一四四号文書ト同文ニツキ省略ス）

276

第三十二号

諸物価之儀者、年々豊凶・物之多寡又ハ精粗・善悪ニ依リ、致低昂候儀者自然之道理ニ而、一定之価相立候而者却而物貨之流通を妨、諸人之不自由を生候ニ付、今般米酒其外諸商売立直之義ハ相廃し、以来適当之売買申付候、乍然分外高直ニ商売いたし候者ハ、兼而厳密ニ見分掛置候付、相顕次第相当之科罰可申付候条、右之趣意篤与相心得可申付事、

明治六年癸酉十二月十二日　　鹿児島県庁

県下

戸長

277

一畦反何程

一表口

278

但新地之分者東西南北之訳、
一何大区何小区何番地、士族平民之訳、
一戸籍番号相洩候者者其訳、
一地所字何方何馬場又者何通り之訳、
右者、当春以来居屋敷・余地亦者割地ニ而、余人江授請名面替願済之者、又ハ従来借地居住之侭申請屋敷成願済之者、其外新地屋敷願済者ニ多人数有之候付、区内不洩様取調、前件之通当人より差出取揃、来ル十二日限可差出候事、

六月七日　　地券方

明細書案文

一俸禄何石
但賞典并御養料其外定禄被下置候人ハ其訳、
一当分之勤
但無役ニ而茂賞典禄并御切米堪忍料・御養料被下置候人ハ、旧藩之節勤方取しらべ、
一高
一居所
一当分実名相名乗候而ハ通称片書ニいたし、

右之通御座候、以上、

第一大区小三区
士族　何野何某

当九月より軍功賞典禄并俸禄・御養料・御扶持米等ニ至迄、都而切手形相済候様被仰渡置候付、別冊日割通出納課より米蔵出張方江可差出候ニ付、賞典禄其外定禄被下置候人ハ、都而別紙案文通明細書一帳取建、来ル十五日限戸長前ニ而取揃当課江可差出事、

六月廿五日　　出納課

279

（本文書ハ『鹿児島県布達（上）』一四八号文書ト同文ニツキ省略ス）

280

一先般藩札引替之節金銭相場之儀、夫々計算相立公平之融通いたし、心得違無之様申渡置候処、当分ニ至取引之間、段々狂ひ（々之）廉有之不都合之趣相聞得候間、尚又至当之見込有之者ハ計算を立、来ル三十日限県下末々まて無用捨、算当書を以戸長江相付可申出、其上適宜之方法篤と取調之上、一般致施行候様更ニ可申渡、此旨早々可致布告者也、

明治六年癸酉七月廿七日　　大山権令

281

（本文書ハ『鹿児島県布達（上）』一四九号文書ト同文ニツキ省略ス）

282

一県庁令廃止候ニ付而ハ、何分申渡迄之間、難差置願伺等之事件ハ戸長江相付可差出事、

明治六年七月二十日　　大山権令

283

（本文書ハ『鹿児島県布達（上）』一五〇号文書ト同文ニツキ省略ス）

284

一太陽暦御頒行ノ節干支ヲ除キ候処、既往ノ年月ヲ推歩候ニハ干支相用候方便利ニ付、自今暦上ニ年月トモ干支記載可致事、

太政官

285 （本文書ハ『鹿児島県布達（上）』一五二号文書ト同文ニツキ省略ス）

286 （本文書ハ『鹿児島県布達（上）』一五三号文書ト同文ニツキ省略ス）

287 （本文書ハ鹿児島県布達（上）一七四号文書ト同文ニツキ省略ス）

288 林大蔵大丞工部省六等出仕石田英吉以下六名当県江御差出相成直達之大意

右、今般直達之大意ハ、朝廷より特別之御詮議を以御遣相成、専撫民之御趣意ニ付而ハ、新ニ内務省を被置候儀ニ付、地方之官員一層誠実致勉励、万民御趣意致貫徹候様注意可有之、尤御新政之時ニ当毎ニ変更茂少からん、随而人民疑惑ヲ生し候哉も難計ニ付、右等之夫々見込も有之候ハ、可申立、尚官員并戸長撫民之御趣意厚く心得可致勉励旨、反履直達相成候条、此旨相達候事、

癸酉十二月廿日　大山権令

県下戸長

289 第三百七十五号

内務省被置候条、此旨布告候事、

但掌管ノ事務ハ追テ可及布告事、

明治六年十一月十日　右大臣岩倉具視

290 （本文書ハ『鹿児島県布達（上）』一九五号文書ト同文ニツキ省略ス）

291 一当艦も戌八月十六日長崎出艦、尤大久保弁理大臣乗組ニ而、（十九カ）同九日支那清国上海江碇泊、其折孟春艦上海川口江碇泊ニ付、右孟春艦より上海城下迄大久保大臣ニ者被差越、同廿三日同所出帆、同廿七日支那烟台港江碇泊、同廿九日天津江向ヶ出艦ス、同三十日天津沖江碇泊、尤孟春艦も類艦候処、大久保大臣ニ者孟春艦より天津迄被差越、当艦儀も同三十一日同所出艦、又々烟台ニ向ケテ出艦ス、九月二日烟台港江碇泊、大久保大臣儀者台湾一条付北京江応接ニ付被参、当艦同所江相待居度々応辞ニ相成候得共、中々聞入無之候ニ付、左候得者台湾兵隊迄も不引揚との大久保より返答ニ而天津迄引取相成候処、又々北京之様呼返し、英米両国公使中入ニ而、漸々罰金を出す賦ニ相成、員数左ニ記ス、

銀四拾万テール　壱テール我壱円五拾六銭

我六拾万弐千四百円

右罰金軍費

拾万テール　我拾万五千六百円

右戦死扶助金

合五拾万テール　我七拾八万円

一右、大久保台湾江差越兵隊引揚之上相請取賦ニ相決シ、当月五日大久保は英国渡海船ヨリ烟台江被参、同日同船江乗組台湾之様被差越候、同六日烟台出艦、今日九時無恙当港江碇泊、

一十月十八日、神奈川丸ト申船烟台諸品積込参候処、右出船便より委細相記書面差出置候事、

一支那出来白マト弐段上海江碇泊候処、当艦差越候処、右支那乗艦之水夫等数多脱走いたし候由、

一鯊船三隻　一英ゴホー一隻　一仏一隻

一皇国船筑波艦　当艦　春日艦　東艦　雲揚艦　第二丁卯艦

孟春艦
　但今日入港　高尾艦
其他商船多数碇泊、当艦出艦も未相分り不申候事、
明治七年甲戌十一月十日　長崎より

一家禄・軍功禄弐拾七万石
　内弐拾万五千石　但現米払之分
　六万五千石　但旧　知事公御家禄并御賞典、久光公同断、
　　西郷吉之助外八名同断、代金渡、
一米拾七石　但租税米凡積　差引三万五千石　現米不足
　右五部五厘通現米不足
一草高千五百石　三斗六合代　所務米四百五拾九石　先ニシテ四百
八拾壱石九斗五升　五部五厘通　八拾七石六斗弐升七合
右代金渡　但先石ニ付五円九拾弐銭弐毛弐糸
三百九拾四石三斗弐升三合　現米渡
一同三百石　所務米九拾壱石八斗　先ニシテ九拾六石三斗九升
片書同断　拾七石五斗弐升五合　代金渡リ直成同断
七拾八石八斗六升五合　現米渡り
一弐百石　所務米六拾壱石弐斗　先ニシテ六拾四石弐斗六升
片書同断　拾壱石六斗八升三合　代金渡り　直成同断
五拾弐石五斗七升七合　現米渡り
一同百石　所務米三拾石六斗　先ニシテ三拾弐石壱斗三升
片書同断　五石八斗四升弐合　代金渡り
弐拾六石弐斗八升八合　現米渡り
一同五拾石　所務米拾五石三斗　先ニシテ拾六石六斗五合
片書同断　弐石九斗弐升　代金渡り　同断
　拾三石壱斗四升五合　現米渡り
一同弐拾五石　所務米七石六斗五升　先ニシテ八石三升弐合
片書同断　壱石四斗六升　代金渡り　同断
六石五斗七升弐合　現米渡り
一家禄六石先　内壱石九升　代金渡り　同断
　四石九斗壱升　現米渡り
一同四石先　内七斗弐升七合　代金渡り　同断
　三石弐斗七升三合　現金渡り
　但石高ニ応し、右之割を以払渡之賦ニ候、
当亥秋収入より不足米之義、去ル申年より戌年迄、三ヶ年平均五
円九拾弐銭弐毛弐糸相場ヲ以、大蔵省より御下渡相成筈御布達ニ
候条、就而ハ石代直成格別之低価ニ付、従前之通現米御買入之上
払渡候義不相整候ニ付、尓後左之通取扱可然哉、家禄高之義ハ祖
先より従来私宅取納之処、御一新後御蔵入ニ而是迄所務米相渡候
付、右株惣而現米相渡、軍功并六石以下家禄之義者残米割付、不
足丈代金ニ而可相渡哉、又ハ家禄高渾而現米相渡可申儀至当候得
共、讒六石給与之者江代銀而已相渡候而者、甚難渋顕然之事候間、
別紙之割ヲ以払渡相当可致哉、右両条之間可然方ニ相決、尚又上
局江上申御布告相成度候間、御吟味給度候也、
　亥十月　　出納課属
　庶務課属　後条之取扱可然ヤ、
　学務課属　張紙後条取扱可然、
　租税課属　張紙右之割合通可然致吟味候也、
　聴訟課属　張紙右之割合通ニ而違論無之、

293
右之通達相成、然ニ当県靖献神社ト名号之義も、同様招魂社ト社号改名可致候条、此段一段及布告候事、

明治八年亥十月廿四日　　鹿児島県令大山綱良

庁下三大区
戸長中

294
一当亥秋地租米ヲ以諸払不足之儀、去ル申年より戌年迄、三ヶ年平均石代金五円九拾弐銭弐毛弐糸之相場ヲ以、大蔵省より御下渡相成筈候処、石代格別低価ニ付、従前之通士族家禄・賞典等一同現米買入之上払渡候儀不相整、因而ハ第一家禄高所務米之儀ハ、惣而現米を以払渡儀至当ニ候得共、少禄之面々困苦ニ茂可及候付、別紙之割を以、一般ニ致平均米金取交セ可払渡候条、此旨管下江無遺漏布達可致事、

八年十一月二日　　鹿児島県令大山綱良

295
旧鹿児島藩士族家禄旧慣之通券書ヲ以売買之伺

鹿児島県并宮崎県管轄諸県郡内江有之候士族旧持高ト称スル家禄米之儀ハ、従来官ヨリ廩米ヲ以テ給与致候他県一般之家禄と大ニ異リ候、元来鹿児島藩ノ田制ヲ定ムルヤ、公田アリ、士族高地アリ、所謂高地トハ、旧城下ヨリ各郡郷ニ至ルマテ、其土着ノ士族八百年前祖宗以来、荒蕪又ハ不毛ノ棄地ヲ開墾耕種シタル土田ニシテ、士族互ニ売買ヲ許シ、官ヨリ知行高名寄帳ト号スル券書ヲ交付シ、売買スルトキハ官ニ請テ券書ノ署名ヲ改テ受授セシム、然レトモ地ニ遠近アリ、遠キハ其土民ニ佃作セシメ、近キハ躬耕スルアリ、此乃チ士族私有ノ家産ニシテ、方今ノ所謂不動産是ナリ、旧来都テ持高ト称シ、近年ニ至リ或ハ家禄トモ云フ、然ルニ藩政中廩米渡シト相成候得共、昔時他藩其君主ヨリ支給ノ家禄トハ其実大ニ差異アリ、相比シテ論スヘカラス、所謂廩米トナル所以ノ者ハ、官ヨリ士族勢力ノ及ハサル所ニ保護ヲ加ヘ、耕種ノ時節及ヒ収穫ノ季節等ヲ公田ト斉ク督促シ、其納米ヲ暫ク官倉ニ入レ、随テ即チ士族ニ分与ス、只士族ト土民トノ間ニ任セ置候テハ、耕種時ヲ失ヒ収納淹滞ニ患アリ、加之愚民動モスレハ目前ノ作得ヲ不覚私物ト看做シ、肆マヽニ放食暖衣シテ納米ヲ費耗シ罪戻ニ陥、故ニ官倉ニ入ルヽ者ハ此患ヲ防ク者ナリ、故ニ名ハ廩米ト云ヒ、是又尋常ノ廩米ニ非ス、然ルニ元来ノ種類右通異ル故、是ヲ他県官給ノ家禄ト同一禁止スル時ハ、士族中忽活計ノ途ヲ失ヒ困却ニ及候ニ付、即今ニ至迄旧来ノ名寄帳ヲ以テ売買致シ来候間、将来売買旧慣ノ通御聞届相成、更ニ別紙通ノ券書ヲ以、各自所有ノ名寄帳ト交換致候ヘハ、士族中安堵可致候ニ付御許相成度、然レハ兼テ及御届置候禄高帳ト致相違候ニ付、壱ヶ年間売買転換ノ差異年々十二月限取調、翌年二月中致進達候、就テハ地券御規則ニ倣ヒ、券書壱枚ニ付印税金五銭ツヽ取仕立、仕払書ヲ以可及御届候条、是又御聞届相成度、此段上申候也、

但本文ニ相伺従前持高ト称スル種類ノ外、元来家ニ付廩米渡ノ禄モ有之、右ハ他県一般ノ家禄ト同種ニ付、売買ハ素ヨリ禁止ニ候、

明治八年六月廿九日　　宮崎県参事福山健偉
　　鹿児島県令大山綱良

大蔵卿大隈重信殿

296

第一万千五百九十二号

伺之趣不得止事態ニ付、禄券売買差許候条、其方法ハ当分旧慣ニ拠リ処分可致、尤給与之儀ハ外県々同様相心得、向後売買致シ候者有之節ハ、双方人名・禄高詳細記載、一ヶ月宛取纏メ、其翌月限リ可届出事、

但本年当省乙第百三十号ヲ以、金禄調帳雛形達候通取調差出候上、禄券ヘ直ニ金額ヲ以記載可致、且禄税之儀モ、右雛形之通課出高相定収納可致、並別紙禄券雛形之内七ヶ所、貼紙之通記載発行可致事、

明治八年十一月十五日　　大蔵卿大隈重信印

297

記

貼紙
家禄金何円何銭何厘
同　金何円何銭何厘
米何百何拾何石何斗何升何合

鹿児島県
宮崎県
士族　第何大区小区

持主　何野何某

永代家産米ノ証トシ、更ニ券書ヲ与フルノ条目、左之通ニ候、

第一貼紙　此禄券ニ此家産米券書ハ、何郷何村何門高・浮免高之訳、高何拾何石何斗何升何合名寄帳為引替相渡、本行石数凜米ヲ以可相渡候尤従前通士族中互ノ売買差許候条、買受・譲渡之趣此裏ニ相認、双方並戸長連印ヲ以テ書替可願出、割高ヲ以テ売買致シ候義不苦候、

第二貼紙　此禄券鹿児島藩士族ニ此券書当県士族外ヘ売買質入令禁候、

第三貼紙　此禄券ハ特例ヲ以売買差許スト雖、給与之方法等ハ外県々貫属家禄同様之儀ト可相心得事、

第四貼紙　此券書ヲ其相続人又ハ他人ヘ譲ル時ハ、其趣此裏江記載シ願出ツヘシ、

第五貼紙　火災盗難其外事アリテ此券書ヲ紛失セハ、受人両人以上ノ証印ヲ以テ県庁ニ申立、新ニ券書ヲ願出ツヘシ、

右之通候条、此旨可相心得候也、

298

第五十号

当県士族家禄、旧慣之通売買之儀別紙之上申候処、今般朱書之通指令相成候条、禄券引換之儀者追而可相達候、此旨布告候事、

但元来家部付六石又者四石、及ひ旧来切米ト唱ヘ凜米渡ハ、他県一般ノ家禄ト同種ニ付、売買ハ素より禁止候事、

明治八年十二月八日　　庁下戸長（通脱カ）

鹿児島県令大山綱良

299

（本文書ハ『鹿児島県布達（上）』六四号文書ト同文ニツキ略ス）

300

（本文書ハ『鹿児島県布達（上）』六六号文書前半ト同文ニツキ略ス）

301

（本文書ハ『鹿児島県布達（上）』六六号文書後半ト同文ニツキ略ス）

302

第二百七号

一本年十二月第百九拾六号布告、訴訟用罫紙規則中掲載有之候訴訟用及裁許状、左ノ見本ノ通候条、此旨布告候事、

明治八年十二月廿八日　　太政大臣三条実美

罫紙見本左之通

訴訟用　訴訟文通用　裁許用

右、色々有之、

303

第三十八号

自今大礼服着用并軍人及ヒ警察官吏等、制規ある服着用之節を除ノ外帯刀被禁候条、此旨布告候事、

但違犯之者ハ其刀可取上事、

明治九年子三月廿八日　　太政大臣三条実美

304

第何大区小何区
朱書ニて
第何大区何小区

右墨書之通是迄相認来候事共、以来朱書之通相認候様県庁より致承知候間、可被得其意候也、

明治九年子七月廿七日　　永山直次郎

305

此節地租改正ニ付、銘々所持之自作他・開拓地等、名前等雛形之通木竹札相立候様地租改正方より致承知候間、此旨早々致布告候也、

明治九年子七月廿七日　　戸長

雛形

凡長三四尺竹木適宜タルヘシ

表面

一田　何番
弘　字何々　何反何畝何拾歩　持主何ノ某

畑　宅地
何

306

一今般霧島神宮大少宮司より、同宮教会講社教部省江上申許可ヲ得候ニ付而者、追々各区戸長江茂打合せ結社致度、其節不都合無之様管内一般江布達、願出聞届候条、此旨及布告候事、

明治九年十月廿八日　　鹿児島県令大山綱良

307

乙第百三十二号

各管内ニ設置有之候招魂社之儀、従前其所在之地名号種(等カ)々之社号ヲ附シ来候向茂有之候処、自今種々之社号ハ都而相廃シ、一般招魂社ト相唱候様可致、此旨相達候事、

明治八年十月十三日　　内務卿大久保利通

308

第四十三号

庁下戸長

管下近来一種巫覡ノ輩有之、其名ヲ神ニ設托シ、妖妄ノ説ヲ吹テ人民ヲ誑誘シ、疾病災難ヲ禳フト唱ヘ、医薬ヲ禁セシムル等ノ悪事有之、以ノ外之事ニ付、今後右体所業之者令厳禁候、左候而兼而警保官吏ヨリ令査察候条、違犯之者ハ相当之処分ニ可及、此旨布告候事、

但区戸長ヨリ、区内人民更ニ無遺漏諭達可致事、

明治九年五月十七日　　鹿児島県令大山綱良

309

一七月　手形渡　　従前士族

一八月　渡　　旧附士以下

右、家禄・軍功録五分五厘通代金払相成、尤米之儀ハ右月者不相渡候間、此段布告候也、

子五月　出納課

310

一此節松原神社新御造立ニ付、献金被致度向者員数并名前相記、来月五日限拙者宅へ御遣シ可被成候、左候而取揃之上銘々名前相立、一紙書相添第一課江可差出候、此旨致通達候也、

子五月廿三日　戸長

311

一　庁下三町戸長

第一課　庶務　第二課　勧業　第三課　租税
第四課　警保　第五課　学務　第六課　出納

客年十月三十日御達ニ依リ、居吏生職務右之通改定候条、此旨布告候也、

明治九年子四月　鹿児島県令大山綱良

312

第六十三号

庁下并三町戸長

一新器水量壱升　旧枡ニ比較弐盃七合
一同　五合枡　同断壱盃三合五勺
一弐合五勺枡　同断六合七勺五才
一壱合枡　同断弐合七勺
一五勺枡　同断壱合三勺五才

右者、今般度量衡改正ニ付、当県内へ用来候旧枡ハ、新器発売之日より断然廃物タルヘキ段ハ、各月廿九日第六十号ヲ以相達置候通可相心得候、新器照準前件之通候条、売買ニ於て聊誤量無之様厚可致注意、此旨布告候事、

明治九年子七月　鹿児島県令大山綱良

313

第百三十三号

府県市街地等、是迄地価百分一収税致来候処、明治六年第二百七十三号布告之通地租改正致、管内一般施行候節ハ、右改正ニ法(被カ)準拠地価百分三ノ税ニ改正候条、此旨布告候事、

314

甲第二号

嗣子無之、弟ヲ養子ニ致度願出候者ハ従来聞届候処、倫理上不都合之廉有之、是迄依願聞届候分ハ其通ニテ、将来弟ヲ養子ニ致候儀不相成候、然トモ嗣子無之、弟へ家督相続セシムル時ハ相続人ト称シ、養子ト称スヘカラス、称呼ハ本属ノ通タルヘク候、此旨布達候事、

明治九年十二月二日　鹿児島県令大山綱良代理
参事田畑常秋

315

番外

庁下戸長
三町戸長

今般鹿児島神道事務分局ニテ、伊勢皇大神宮御分霊御鎮祭并開講式、来ル十七日ヨリ十九日迄施行候旨新宮ヨリ届出候条、此段布達候事、

鹿児島参事
田畑常秋

明治九年十二月六日

第百拾弐号

筑摩県初左之通廃合并管轄替被仰付候条、此旨布告候事、

明治九年八月廿一日　　右大臣岩倉具視

一筑摩県ヲ廃シ、飛弾国ヲ岐阜県江合シ、信濃国ノ内ヲ長野県江合併、

一熊谷県管轄武蔵国ノ内ヲ埼玉県江合、栃木県管轄上野国山田・新田・邑楽ノ三郡ヲ熊谷県江合、熊谷県ヲ上野国高崎ニ移シ群馬県ト改称、

一浜松県ヲ廃シ静岡へ合併、

一若松・磐前両県ヲ廃シ福島県へ合併、磐城国亘理・伊具・苅田ノ三郡ヲ宮城県へ合併、

一鶴ヶ岡・置賜両県ヲ廃シ山形県へ合併、

一敦賀県ヲ廃シ越前国ノ内七郡ヲ石川県へ合シ、同国敦賀郡并若狭国ヲ滋賀へ合併、

一鳥取県ヲ廃シ島根県へ合併、

一飾磨県及豊岡県ヲ廃シ、播磨国・但馬国両国并丹波国多起郡・氷上郡ヲ兵庫県へ合シ、丹後国并丹波国天田郡ヲ京都府へ合併、

一三潴県ヲ廃シ肥前国ノ内ヲ長崎県へ合シ、筑後国ヲ福岡県へ合併、

一福岡県管轄肥前国宇佐・下毛両郡ヲ大分県へ合併、

一宮崎県ヲ廃シ鹿児島県へ合併、

一香川県ヲ廃シ愛媛県へ合併、

一名東県ヲ廃シ、淡路国ヲ兵庫県へ、阿波国ヲ高知県へ合併、

一当県士族初年賀為祝詞預仕向、畢竟旧ヲ不忘ノ厚ニ出候情義深令喜悦候、然とも方今上下疲弊ノ砌、各戸出銀相成候儀遠慮致度候付、来丑年以来無余儀相改度、依テ如此候也、

明治九年子九月　　島津忠義

三大区戸長
各郷戸長

御中

甲第三号

日向国　第十一大区　志布志　大崎　松山
第十二大区　都之城　三俣　荘内
第十三大区　高城　山之口
第十四大区　高原　小林　野尻　須木　高崎
第十六大区　飯野　加久藤　吉田　馬関田

右者宮崎支庁管轄ニ候処、土地ノ便宜ニ随ヒ区名ハ先ツ是迄通ニテ本庁直轄申付候条、自今区戸長等伺届ハ勿論人民願伺等、従来ノ手続ヲ以テ本庁へ可差出候、此旨布達候事、

鹿児島県令大山綱良代理
参事　田畑常秋

（百脱カ）
第五拾二号

一家禄賞典禄改正之儀、本年八月第百八号ヲ以テ布告候処、右之内旧藩庁ニ於テ禄券売買差許有之、従来現場売買致タル家禄之向ニ限リ、其高之多寡ニ不拘、総テ拾ヶ年分ノ金高公債証書ヲ以テ一時ニ下賜、来ル明治十年ヨリ年一割ノ利息下渡候条、右元金消却利金下渡方等之儀者、金禄公債証書発行条例之通可相心得、此旨

布告候事、

家禄改正之儀、今般第百五拾二号公布之通公債証書ヲ以被相渡筈候条、利子ハ明治十年分ハ十一月・翌年五月ニ被相渡、以後之レニ準シ年々両度ニ下渡賦ニ付、別紙計算書之通可相心得候、此旨布達候事、

但旧都城県・旧宮崎県分製郷計算ハ追テ可相達候、

九年十二月廿九日　　鹿児島県令大山綱良

一高二百石、現米七拾七石四斗、先石ニシテ八拾壱石弐斗七升、
一拾年右高之公債証書、今四千八百九拾七円八拾四銭、一ヶ年請取分利子、金四百八拾九円七拾八銭、
一高百石、現米三拾八石七斗、先石ニシテ四拾石六斗三升五合、
一十ヶ年右高ノ公債証書、金弐千四百八拾八円九拾弐銭、一ヶ年請取分利子、金弐百四拾四円八拾九銭、
一高五拾石、現米拾九石三斗五升、先石ニシテ弐拾石三斗壱升七合、
一十ヶ年右高ノ公債証書、金千弐百二拾四円四拾三銭、一ヶ年請取分利子、金百弐拾弐円四拾四銭、
一高壱石、現米三斗八升七合、先石ニシテ四斗六合三勺五才、
一十ヶ年右高公債証書、金弐拾四円拾九銭、一ヶ年請取分利子、金弐円四拾四銭九厘、

右之通ニテ、公債証書ノ元金ハ五ヶ年間之ヲ据置、六ヶ年目ヨリ大蔵省ノ都合ニヨリ、毎年抽籤ノ方法ヲ以テ之ヲ消却シ、都合二拾ヶ年間ニ悉皆之ヲ消却スヘシ、

320　番外

庁下戸長

一今般柳原前光　勅使トシテ来艦候処、右揚陸ニ而為警衛兵隊・巡査等凡二千計上陸致シ候間、為心得此旨相達候事、

明治十年三月九日　　鹿児島県令大山綱良

追而、兵隊ハ旧客室・黒木学校・巡査ハ下会所・広小路学校江宿所、

321

一拙者儀、今般政府江尋問之筋有之（廉カ）、明後十七日県下発程、陸軍少将桐野利秋・陸軍少将篠原国幹及ヒ旧兵隊之者共致随行候間、其台下通行之節者、兵隊整列指揮ヲ可被請、此段及照会候也、

陸軍大将　　西郷隆盛

明治十年二月十五日

熊本鎮台指令長官

322

（本文書ハ『鹿児島県布達（上）』二四九号布達ト同文ニツキ省略ス）

323

小官等之ヲ司法官ニ受ケ、職ヲ鹿児島裁判所ニ奉シ、今般ノ形勢ヲ目撃シ、憂国ノ至情黙スルニ忍ヒス、敢テ僭越ノ罪ヲ犯シ、我カ天皇陛下ニ奉呈スルニ別紙ヲ以テス、願ハ　閣下小官等ノ微衷ヲ憐察シ、　至尊非常ノ　宸断ヲ翼賛シ、人民ノ塗炭ヲ救ヒ玉ハンコトヲ、小官等謹テ言ス、

鹿児島裁判所在勤　　長島銕太郎

明治十年三月三日　　郡司盛武

小川重任
八代　規
山本守時
小野道一
吉本祐雄

太政大臣三条実美殿下

小臣等

斧鉞之誅ヲ冒シ、血涙昧死ヲ以テ我　天皇陛下ニ上言ス、小臣等員ヲ司法官ノ後ニ備リ、今又鹿児島裁判所ニ在リ、今般陸軍大将西郷隆盛上京スルヲ目撃ス、豈之ヲ黙スルニ忍ヒンヤ、抑此原因タルヤ、旧警視庁警部中原尚雄等同人ヲ窃カニ暗殺セントスル陰謀発覚シ、其供出スル処別冊ノ如シ、実ニ驚愕為ス所ヲ知ラス、是西郷隆盛等我政府江伺問ノ意アリ、登京スル所以カ、然レハ則チ一朝暴動ヲ以テ目ス可カラス、宜ク原ニ遡リ其主謀ノ者ヲ処スルニ法律ヲ以テシ、以テ国憲ヲ正サヽル可カラス、然リ而シテ何事カ今日ノ齟齬ヲ生シ、六軍西ニ下リ西郷隆盛等ノ行路ヲ遮リ、国民ノ如何ヲ顧ス此惨毒ヲ為スニ至リ、且当県令ノ使節抑留シ其意ヲ中塞シ、大ニ疑フ所アルカ如シ、然リト雖トモ、今地方官ノ任ニ背カサルハ小官等ノ熟知スル所ナリ、然ルニ已ニ斯如シ、嗚呼今日ノ人民実ニ方向ノ帰スル所ヲ知ラス、小臣等痛歎ノ至リニ堪ヘス、且夫該犯数十名ノ如キ、当県庁已ニ我裁判庁ノ検事ニ附シ、検事之ヲ司法卿ニ具ニ申ス、其犯罪ノ証アル已ニ司法卿之ヲ　陛下ニ奏門スル所アルヘシ、仰願クハ陛下ノ至仁犬馬ノ言退ケス、我国民ノ塗炭ヲ憐察シ、速ニ非常ノ宸断ヲタレ玉ハンコトヲ、小臣等恐懼ノ至ニ堪ス、謹テ上言ス、

明治十年三月三日

324

久シク高風ヲ仰カス、尊掌如何、時下氷霜将ニ解ントス、請フ自愛セヨ、卑臣鹿児島裁判所ニ在リ、今般ノ形勢ヲ親目ス、憂国ノ衷情同僚一轍ニ出テ黙スルニ忍ヒス、敢テ献芹シ謹テ逆鱗ノ　宸怒ハ斧鉞ノ誅ヲ待ツ、聞　閣下　喜春殿ニ侍スト、右上表今般出京ノ二級判事補吉本祐雄携帯ス、当地ノ情勢輸セサルニ似タリ、願ハ玉車ヲ馳セテ彼ニ下問シ、翼賛スル所アリ、処スルニ其過ヲ以テシ、白雲忽チ晴レ、人民ヲシテ青天ノ春日温和ノ仁風ニ浴セシメ玉ハンコトヲ、敢テ聞ス、

鹿児島裁判所在勤
小川重任

侍従西四辻公業殿

左右

325

今般陸軍大将西郷隆盛外二名上京ノ次第、兼而御届申上置通リニテ、已ニ去ル十五日当地発程致候、通行ニ付テハ、曩ニ各府県・各鎮台江通知致置候、熊本県ニ於テハ未前ニ県下焼払ヒ、通行筋川尻迄押出砲撃ニ及候旨追々報知有之、然処彼地江去ル十九日、当県江征討ノ命被仰出候哉ニ相聞ヘ、何トモ恐入次第候、乍併西郷大将儀ハ先般辞表差上、以来県下ニ於テ厳粛ニ謹慎致シ、且数万ノ士族自費ヲ以テ学校ヲ開キ、忠孝ヲ重シ諸生ヲ教導シ、第一方向ヲ誤ラサル様勉メテ説諭シ、已ニ佐賀ノ暴動曳続キ熊本・山口同断ノ節、県内安静終ニ一毛ヲ損セサルハ全国ニ明瞭ナルコトニ候処、何等嫌疑アツテ大久保利通・川路利良ヨリ私怨ヲ以テスルカ、容易ナラサル国憲

ヲ犯シ暗殺ノ内諭ヲ下シ候儀、実ニ海外ニ対シ乍恐政府上ノ御失体ト奉存候、最モ通行者共銃器ヲ以テ途中保護ノ儀ハ、暗殺ヲ命セラル程ノ者、異儀ナク上京不相遂ハ勿論ノ事ニ、不得止於下官モ聞届置候、就テハ愈当県征討ヲ被仰出候上ハ、県官且士民ニ至迄御征討ノ御趣意ニ被仰出候哉、夫々無名ノ恥ヲ蒙ラセテハ、鹿児島人民ト雖トモ皆王民ニシテ、政府ノ命令ヲ不奉者一夫モ無之候得共、何分士民挙テ動揺ニ立至リ候間、至急　御勅諭被下度、最モ西郷大将ノ趣意モ致貫徹候様御処分被下度、此段愚誠ヲ以テ奉願候也、

明治十年三月二日　　鹿児島県令大山綱良

征討総督有栖川殿下

追テ、去ル廿八日付ヲ以テ太政大臣江同案ヲ以テ伺出置、

326

御勅書写

鹿児島県下逆徒熊本県ニ乱入、朝憲ヲ蔑如シ官兵ニ抗シ悖乱ノ挙動ニ及ヒ、朕既ニ征討ノ令ヲ布キ、二品親王有栖川熾仁ヲ征討総督ト為シ進発ヲ命セリ、汝久光実ニ国ノ元功、朕カ素ヨリ信重スル所、今特ニ議官柳原前光ヲ遣シ朕カ旨ヲ諭サシム、其レ能ク尓カ誠意ヲ致セヨ、

十年三月十日

327

今般鹿児島県騒擾ニ付テハ種々巷説モ有之候得共、右ハ全ク県下私学校党過激少年輩ノ挙動ニ出候次第ニ而、素ヨリ旧藩主父子等ニ連及致候儀無之、西郷隆盛過激少年ニ対シ、屡々説諭尽力致シ候所終ニ承服ニ不致、不得止身ヲ避候儀、該県令ニ於テ毫モ方面ヲ不失、充分鎮撫尽力致候次第、委細具状之旨有之候間、今彼地之事情ニヨリ如何之御処置可相成モ難計候得共、決シテ管下士民動揺無之様取締筋注意致シ、人心鎮静候様可取計、此旨及内達候事、

明治十年二月十三日　　内務卿大久保利通

328

客年長肥暴動以来、人心恟々安着スル所ヲ知ラス、茲ニ二月初鹿児島県ニ於テ、犯憲ノ大事ヲ企タツル刺客ヲ捕縛ノ処、該犯ノ口供全在　朝一二ノ使ムル所ノ係ル、就テハ不容易ノ事変、実ニ国家ノ危急、臣子ノ身トシテ傍観スルニ忍ヒス、因テ有志ノ士同心合力、相共ニ禁闕ヲ守護シ奉リ、国恩ノ万一ヲ報ヒ、下ハ臣子ノ義務ヲ尽シ且建白セント欲ス、時ニ道路梗塞　朝憲ヲ伺フテ進退スルニ暇アラス、国家非常ノ際各輩此大事ヲ担任シ、方向ヲ惑フ事勿レ、

人吉有志士族

求磨人吉士族

明治十年丁丑三月三日　　村田量平

黒田　等

329

迫田隆蔵外ニ一名御遣シ被下、来船之次第致承知候、乍然(下拙)事柄分兼候得共、彼方(敵)策も尽果候而調和之論ニ落候欤、畢竟敵方ニ於テ熊本(籠)落城ト相成候而者各県蜂起可致候間、(付)全力ヲ熊本ニ相尽、於是(猶)事破れ候者もふ(二)者致方なく、(不)夫切の策相立候儀慥ニ聞得候間、則彼の策中之陥、此篭城ヲいゑ(餌ニ)ミいたし、四方之寄手ヲ打破リ候(而)者、此所ニ勝破相決シ可申、地形と云人気ト云、実ニ其所ヲ得候間、(付)我兵モ一向此所ニ力(貴)ヲ尽候処、既ニ戦モ峠ヲヤリ過、六七ノ分(分ノ)所ニ相付申候、今ヤ盃(再)本有共一冊戦勢ヲもひ返(守)シ候期有之間敷、余程敵之兵気抽(挫)ヶ候ニ付、▽少し此間ニ息を休め△油断為致候而一(又)策ヲ廻シ候目算

ニ者相違無御座候間、決而狸ニだまされ候処(ざるる義)肝要之事ニ御座候、征討総督之令書先日差上置候、全暗殺ヲ取消シ趣ニテ戦(打)(候)(ト申候旨ニ)ヲ幸ニイタシ書面ニ相見得、可悪之巧ニ御座候、然る上ハ何分曲直分明ナラサレハ、鎮撫も糸瓜(へちま)も無之、断然条理ニ不戻(相)候処、御尽力可被下者、(候)最初ヨリ我々共ニ於テ勝破ヲ以テ論シ候訳ニ而(等)ハ無之、条理斃(敗)れ候思ひ込(見)事候間、態々(ゟ)其慮御汲取被下候様(能々)念望(辺)いたし候(可)也、(偏)

明治十年三月十二日　　西郷吉之助

大山綱良様

追啓上、別紙当県之兵隊協同隊探偵差出候処、探得候形行申出候付差上申候、大概此方探偵も同様ニ御座候、久留米・柳川・肥前辺ヨリ追々報知有之筈、高瀬・南関口ハ惣軍凡壱万千人、其内近衛兵弐千ハ三好少将之ヲ卒、高瀬口ニ偽戦凡十分シ、之ハ死傷アリト云、

一巡査五百名計ハ各隊ニ配賦セリ、

一山鹿ヨリ久留米方江赴間道兼松越ト申所ニ千五百計出張、要所ニ者地雷ヲ設アル由、三好ハ高瀬之戦ニ手ヲ傷タリト云、福岡県エハ新潟県鎮台千人計出張セシ処、両三日前少々ツヽ、操出且弐百名計佐賀江派出シ、岡迫・佐賀鎮台之間出張シタル巡査百余名ハ、南関口エ赴タル由、

一七日比之噺ニ、全軍之死傷六千ニ及フト云、畢竟鎮台兵ハ戦ヲ畏レ戦地ニ赴クヤ、各自傷ツキ戦ヲ免ルノ策ヲナス者多候故、左手ヲ傷ツキタル者莫大ナリト云、

一本病院ハ久留米ニ有リ、其外高瀬・南関仮病院アリ、

一高瀬口負傷ハ都而舟ヨリ運送スル、九日高瀬川口ヨリ筑後エ廻シタル船五艘、一艘ニ付凡四五十名乗セタリト云、

一七日八日ニ者是非高瀬口ヲ破リ、熊本エ進入之筈ト云、

一彼ノ軍勢モ日々萎靡シ、南関ノ本営ナトハ近日ニ到リ勢備ヲ厳ニスル模様、道路ノ風説ニハ、最早五六日ヲ経ハ東軍ノ破走疑ナシ、会南筑アタリノ人民ハ、一統南軍ノ勝利ヲ祈ラサル者ナシ、

一東軍ハ頻ニ偽説ヲナシ、鹿児島・熊本ノ兵ハ三四千ノ烏合ノミ、偶々南軍ノ勢焔ヲ談スル者ハ、路人トイエトモ之ヲ縛スル由、右、北馬商人高木新太郎ナル者久留米地方エ遣シ候処、今朝罷帰リ探偵之趣ニ御座候、

三月十三日　　協同隊

野津ハ南関ニテ、馬上ニテ足ヲ傷ヲ請ケタリトノ風説アリ、

（本文書ハ『鹿児島県布達』（上）二六四号ト同文ニツキ省略ス）

見込上申控

臣等此度誠意ヲ致セヨトノ　勅諭ヲ賜ヒ、愚魯ノ臣等威佩ノ至ニ堪ヘス、故ニ聊カ胸臆ニ包蔵スルコトナク、之ヲ左ニ上陳ス、

一当県士族西郷隆盛・桐野利秋・篠原国幹初メ党与スル二万人、政府へ訊問ノ儀有之ト称熊本県ニ乱入、　朝憲ヲ蔑如ス、故ニ征討ノ令被発ノ旨拝承候、旧情モ有之候得者実以恐縮ノ至ニ堪ヘス、伏テ　御垂憐ヲ乞、乍去　朝憲ヲ奉蔑如程ノ者共、今日至リ臣等愚意敢テ不用儀、得ト御了解被下度仰処ニ候、

一西郷隆盛等此度政府ヘ訊問トシテ、多勢兵器ヲ携出行セシハ、既ニ道ヲ失タル其罪大ナリ、且内務卿大久保利通・大警視川路ヨリ内命ヲ受ケ、数人帰省等ニ事ヲヨセ離間等ノ策ヲ行フ、云々事発

覚シ、義妄説ノ布達拝観ス、此義臣等大ニ疑惑スル処ナリ、其故如何トナレハ、道程数里ヲ隔テ則之ヲ妄説ト見認ラル、西郷等ニ於テ必其罪ニ伏ス可カラス、是至公平ノ所分ニアラサルカ故ナリ、鹿児島県人民ニ於テ最確証ヲ挙ケ見聞シタルモノニテ、或ハ間ヲ使ヒ同意ノ躰ヲシタル、或ハ自訴シタルアリ、故ニ傍人モ是ヲ証シテ疑ハサル処ナリ、

一弾薬掠奪ハ、捕縛人之前ナルハ臣等モ保証スル処ナリ、然トモ西郷ハ大隅ヘ旅行中之ヲ聞キ大ニ憤怒、篠　ノ挙動ヲ譴責シタルハ県下人民ノ能ク知ル所ナリ、其際ニ当リ捕縛人ノ事露顕シ、之ヨリ意ヲ決シテ衆ト訊問ノ事ヲ議定シタリト云フ、

一西郷此以前征韓論破裂シ、職ヲ辞シ政府ノ許可ヲ俟タス下県セシハ、臣礼ヲ失シ其過大ナリ、然トモ政府之ヲ責ルコト能ハス、昨今迄非職大将ノ任ニ位ス、若シ当節ニ当リ更ニ是ヲ責ルニ烏有ニ帰スヘカラス、亦在県シテ恣ニ横行ストモ国憲ニ触レサレハ、政府ノ威力ト雖トモ之ヲ抑圧スヘキノ権アル可ラス、亦弾薬掠奪ハ壮士輩ノ簾暴ニ起リタル者ニシテ、西郷此事ニ因テ此度ノ挙動ニ携名義ナキニハ、別ニ鎮静ノ道ヲ計ルヘキカ、是等糺弾ノ上ニアラサレハ明瞭ス可ラス、

一古今国家不軌ヲ計ル、其ノ種類区域アル挙テ数ヘカタシ、然トモ事ヲ挙ケサル、未然露顕スレハ其主領ノミヲ取分シ、仮令連判牒ヲ焼キタルアリ、之称シテ美トス、毛ヲ吹キ疵ヲ求ルヲ小人トス、是レ事ヲ執ルモノニ、量ノ大小ニ因テ美　徳ノ分ル、処最注意スヘキコトナルヘシ、今ヤ外国我国ヲ覬覦シ、古ヘノ　皇国ニアラス、能々思慮ヲ加ヘサレハ不測ノ変ヲ生ス、鑒ミサルヘケンヤ、

然トモ是ヲ以テ国法ヲ烏有トスルニ非ス、之ヲ処置スルニ、政府公明正大ニ所分ノ外更ニ道アルヘカラス、

一夫賢者在位、能者在職ニ無党無偏、文武ノ官人身ヲ国家ニ致シ遵奉シ、一揆強盗ノ難アル可ラス、然ルニ此近年打続キ、士族ニテハ肥前江藤・島ノ党アリ、肥後ニ敬神党、長門ニ前原、(目)自今西郷党アリ、百姓一揆負債挙テ数ヘカタカレ共、根元ハ民ノ堪サル処アルカ故ナラン、此度閣下ノ布達ハ一往ノ糺弾ナク之ヲ妄説トス、仮令真ニ妄説ト見認ラルトモ、再応取調ノ上ニ非サレハ、政府命令ト雖トモ人民必信認スルモノニ非ス、是則　帝王一人ノ私スル者ニ非ルニ因テナリ、故ニ国家ノ危キコト累卵ノ如シ、仰願クハ至急休戦ノ令ヲ総督府ニ下サレ、此度ノ巨魁人員ヲ定メ、平穏ノ処分ヲ以テ中途ヲ護送シ、大久保・川路モ随テ之ヲ召シ、更ニ至理至当聊偏頗ノ処分ナク、各法官ヘ渡シ、奏任以上其席ニ列座シ非常ノ裁判ヲ開キ、其結局ニ至テ律ニ照シテ之ヲ罰シ、其上若シ異議ヲ生セハ断然ト罪ヲ鳴シ、之ヲ征討セラレテ可ナリ、乞フ速ニ実事施行アランコトヲ、

右ハ今般　勅諭ヲ拝戴シ、当今ノ時態眉憂慮スルノ余リ、忌諱ヲ憚ラス、臣等ノ誠意ヲ表スル如此、猶巨細子弟等ニ申付越候、閣下意ヲ平ニシ之ヲ聴納セハ、幾多ノ軍士活路ヲ得、上ハ皇国ヲ永世ニ維持シ、下無罪ノ良民塗炭ノ苦ヲ免レンコトヲ、

従二位　　従三位

従二位微臣等ニ正副使申付上京為仕奉建言主意ス

追テ左ニ上申仕候

鹿児島県士族中原尚雄以下捕縛ノ末、口供之儀ニ付無根ノ妄説タル

旨御布達拝承仕、実地ノ情実モ有之大ニ疑惑シ、久光父子ノ愚意既ニ柳原前光ニ縷述仕置、更ニ今度微臣等ノ差登、勅使ノ御礼且天機伺申上、猶見込書奉差上候次第ニ御坐候、如此再復上申仕候主意ハ、　政府施行セラル、処人民疑惑不仕、只管信認、将来何廉障碍ヲ生セサル様ニトノ誠意一途ニ出タルモノニテ、敢テ余意アルニ非ス、故ニ其主意ヲ過日来前光ニ依リ上申仕置候間、御聞取被下儀ト奉存候、将タ　聖上御宸怒、随テ総督官奉如大小ノ将校ニ於テモ、其情状忍フ可カラサルヲ察知仕候得者、休戦専ト仕タル義ニハ無御坐、夫等上京ノ上宜ニ応シ唯注目ト候ハ、捕縛人裁判双方権衡得ルニ非サレハ、果シテ将来人心ノ固結スル氷解スヘカラサルヲ、幾重ニモ県令仕夫等ノ事情能ク政府ヘ貫徹仕様申分、微臣等ニ委任状相渡罷登儀ニ御坐候、就テハ双方権衡ヲ得ルノ御処分、捕縛人ノ口供ヲシテ烏有ニ帰セシムルニ注目仕外、更ニ見込無御坐候、最口供烏有ニ帰セサレハ、於鹿児島県捕縛人糺弾致シタル人員ヲ御引抜キ、裁判ヘ御呼出ノ上、御仰願クハ其御取分ニ立到候得者、薩隅日三州ノ地ハ無申迄、闔国於人民政府ノ御処分ニ奉感佩、固結ノ異念解キ可哉ト奉存候、因テ此旨乍恐為御参考無忌諱上申仕候、誠恐誠惶昧死謹言、

島津

明治十年四月廿五日

島津

太政大臣三条実美殿閣下

333

甲第七十一号

本県警察課之儀、警察本署ト改称候条、此旨布達候事、

明治十二年四月三十日　　鹿児島県令岩村通俊

334

第拾五号

鹿児島県管轄大島・喜界島・徳ノ島・沖永良部島・与論島ヲ以テ大島郡ト為シ、大隅国ヘ被属候条、此旨布告候事、

明治十二年四月八日　　太政大臣三条実美

335

第二号

華士族当主死亡後相続人無之、親族協議ノ上家名預リ置、追テ相続人ヲ定ムルハ、当主死亡後日数五十日ヲ過クヘカラス、若不得已事情有之、親族連印管轄庁ヘ延期願出ルモノハ、更ニ相当ノ猶予ヲ与フルト雖、死亡後六ヶ月ヲ過キ仍ホ相続人ヲ届出サルトキハ、其族称ハ廃絶候儀ト可相心得、此旨布告候事、

明治十三年一月廿九日　　右大臣岩倉具視

336

乙第七十八号

区戸長

幼少ニシテ家督相続為致候節ハ、親戚又ハ他人ニテモ相当ノ者相選後見可為致成規ニ有之、右ハ十九年十一ヶ月迄ハ未成丁ノ者ニ付、士族平民ノ別ナク後見人為相立候儀ト可相心得、尤十五年以上親戚ノ協議ヲ以後見ヲ免候儀ハ適宜不苦候、此旨為心得相達候事、

但女子一家督相続為致候節モ、本文同様可相心得、

明治十一年三月十三日　　鹿児島県令岩村通俊

337

番外六号

家禄賞典制限御改正、公債証書ヲ以テ下賜候、就テハ右公債証書書入・質入并売買約定取結候儀ハ禁止之旨、明治九年八月五日太政官第百

九号公布之趣有之候処、当県下旧鹿児島藩士族元所有禄之儀ハ、従前売買之習慣モ有之、且右公布之趣貫徹不致故欤、種々之浮説又ハ教唆ヲ信シ、一時ノ利欲ニ迷ヒ、後年生計ノ勘弁モ無之、目今内密売買等致シ候者有之哉ニ相聞ヘ、不都合之至ニ候、右ハ前条公布之趣モ有之、万一右様之儀有之候而ハ実ニ不相済事ニ付、右公債証書御発行条例年々利子金御下渡方之御旨意等不相弁者モ有之候ハヽ、該区々戸長等ヘ能々尋問を遂ケ、将来保存之筋厚相心得、一時之浮説ヲ妄信シ、後来之生計ヲ不失様可致、此旨旧鹿児島藩士族ヘ諭達候事、

明治十一年三月九日　　鹿児島県令岩村通俊

三月廿八日今帰(ナキジン)仁王始三司官以下松田大書記官ヘノ歎願趣意

今帰仁王子始メ三司官以下旧役人多数沖縄県庁ニ参リタリ、其趣意ハ他ニアラス、今般ノ変革ニ付テ歎願ナリ、其言ニ曰、琉球藩主ハ大旧諸候ト異ナリテ君主権ヲ有セシ者ナリ、依テ是迄通リニ致度云云、大書記官曰ク、君主権ヲ有シタル者ハ上ニ天子ナキ者ナリ、琉球藩ハ上ニ日本天子ヲ仰キタルニアラスヤ、是迄通トハ日本・大清両属之意ナルヘシ、君主権ヲ有シタル者ノ意ニアラス、日本属国琉球藩王ノ希望スル処ナルヘケレトモ、決シテ採用不相成云々、王子又曰ク、廃藩置県ノ御達ハ、清国御談判済ノ上御達シ相成度云云、大書記官曰ク、日本政府ヘ対シ甚不敬之言語ナリ、政府我カ属国ヲ処分スルニ何ソ清国ニ談判スルノ理アラスヤ、王子又曰ク、藩主ハ病テ臥シタルヲ以テ、三十日ニ城ヲ引渡ス事不相叶、依テ后後十日間御猶予ヲ願度、大書記官曰ク、十日間ヲ猶予セハ全癒スルノ見込アルヤ、病ノ全癒スルヤハ医モ予定スル難シトス、王子曰ク、心ノ病ナルヲ以テ十日間ヲ経過セハ進退自由ナルヘシ、大書記官曰、既ニ陸軍ニモ三十日正午十二時迄ニ請取ルヘク達シタリ、依テ同時ニハ必ス城中ニ繰込ナルヘシ、其際ニ至リテ御引渡不相成ニ於テハ、陸軍ニ規則アリ如何ノ大事件ニ立至ルヤモ難計、又城ヲ御引渡不相成御趣意ナレハ、拙者ハ取ルノ権ヲ有スルヲ以テ取ルヘシ、取ラルヽヨリ寧ロ渡シテ可ナラント、此語ヲ聞キ王子以下三司官等ハ、渡スノ意ヲ表シテ帰リシ由、

文書題

文書題

明治拾年参

番号	底本ノ番号	年月日	文書題
一	支第一三四号	一一月　一日	弾薬兵器類取纏本庁ヘ郵送セシム
二	往第三七七号	一一月　七日	権祢宜隈元常規挙動探偵ノ儀
三	甲第五九号	一一月　七日	特別ニ借家人同居人エ小屋掛料貸下
四	往第三七八号（支第一八一号）	一一月　七日	各警察所配置
五	番外	一一月　七日	去十月三十一日布達中正誤
六	無号	一一月　七日	賊徒乱入ノ節所有品焼失盗奪等調
七	支第一七一号	一一月　八日	威銃鑑札下附ノ儀
八	甲第六〇号	一一月　九日	有害ノ鳥獣ヲ除ク銃砲免許仮規則
九	支第一六七号	一一月　九日	虎列刺病治方概略
一〇	往第三八三号	一一月　九日	熊本鎮台工兵山下安太郎死去
一一	往第三九〇号	一一月一〇日	高鍋士族坂田諸潔処計済
一二	支第一七七号	一一月一〇日	霧島神社へ長尾神社等摂社ニ定ム
一三	乙第三九号（達甲第三七号）（支第三三七号）	一一月一二日	陸軍中将ヨリ達ノ移達
一四	甲第六一号（支第三三七号）	一一月一三日	各出張所所轄更定
一五	支第一九一号	一一月一三日	区戸長給料支給方ノ儀
一六	支第一九五号	一一月一四日	上中下米大豆粟石代相場調
一七	乙第二九号	一一月一五日	売買禄ノ儀云々
一八	乙第三〇号	一一月一五日	士族所務米受取残余有之者取調
一九	乙第三一号	一一月一五日	戊辰ノ役賞典禄云々
二〇	甲第六九号	一一月一六日	区戸長ノ仮職制章程及心得并等級
二一	乙第四五号	一一月一六日	同上正副区長へ達
二二	支第一〇八号	一一月一六日	区戸長配置方
二三	支第二一九号	一一月一九日	区戸長給料追テ相達候迄官費
二四	支第二二四号	一一月一九日	種痘注意
二五	支第二二六号（支第二二五号）	一一月二〇日	陸軍伍長高野安樹西征ノ役ニ戦死

二六	無号（往第一一七号）	一一月二〇日	医術営業并負傷患者平常病者取調
二七	甲第六二号	一一月二一日	鳥獣猟規則第二条ニ準拠ノ仮規則
二八	乙第二三号	一一月二二日	公債証書所持高調
二九	支第三四七号	一一月二二日	県税免許鑑札附与相廃云々ノ儀
三〇	往第四一五号	一一月二四日	各出張所費額
三一	甲第六四号	一一月二四日	県令薩隅両国巡回
三二	乙第三六号	一一月二四日	別紙ノ通布達ニ付厳重取締ノ儀
三三	甲第六五号	一一月二四日	官有ノ損木槁木タリトモ伐採不可
三四	無号	一一月二四日	府県職制章程ヲ恪奉スヘシ
三五	出甲第六号（支第三九四号）	一一月二五日	密売淫并ニ貸座敷芸娼妓渡世不可
三六	出甲第七号	一一月二五日	売淫罰則
三七	出甲第八号	一一月二五日	芸妓渡世不相成ニ付心得違無之様
三八	乙第三七号	一一月二六日	士族旅行ノ儀
三九	無号	一一月二七日	旧宮崎県区入費科目及賦課方法調
四〇	往第四五二号	一一月二八日	県下官林手入等ニ付内務省官員派出
四一	支第三八〇号	一一月二八日	岩満袈裟吉ガ駅逓局ヘ従事ノ有無
四二	甲第六三号	一一月三〇日	海軍大輔ヨリ達ノ移達（甲第七号）
四三	無号	一一月三〇日	荒地等検査ノ為官員出張
四四	支第三八五号	一一月三〇日	川西幸三・龍田新二免職
四五	支第三八六号	一一月三〇日	志布志ニ有米引渡トシテ官員出張
四六	乙第四一号	一二月　一日	区長事務章程末文ノ儀
四七	甲第六六号	一二月　四日	鹿児島都ノ城両所ニ区裁判所設置
四八	甲第六七号	一二月　四日	熊本県下牛疫流行
四九	無号	一二月　六日	大分県下天然痘流行
五〇	支第四一四号	一二月　六日	岡田清吉犯罪処刑
五一	支第四四二号	一二月　六日	地租徴収期限ノ儀云々
五二	支第四一一号	一二月　七日	堤防橋梁井堰用悪水路等ノ儀
五三	支第四二七号	一二月　七日	本年十一月乙第三七号達文中書損
五四	往第四九六号	一二月　七日	兵乱後救恤米金精算書差出方
五五	支第四二四号	一二月　八日	戸長佐藤信綱依願免職

五六	無　号	一二月　八日	陸軍伍長和木助五郎西征ノ役即死
五七	往第五〇四号	一二月　日欠	水火風震ノ際救恤施行戸数金高調
五八	往第五一二号	一二月一〇日	士族公債所有者へ小屋掛農具代貸付無シ
五九	無　号	一二月一一日	都城士族山田哲勝外三名処刑
六〇	出甲第六号	一二月一一日	区戸長役所唱称ノ儀
六一	乙第三五号	一二月一二日	海軍大輔川村純義ヨリ達ノ移達
六二	（支第四六三号） 乙第四八号	一二月一二日	旅篭屋ニ於テ宿泊人届方
六三	無　号	一二月一三日	諸職工其他賃金調
六四	支第四三四号	一二月一三日	県庁新築ニ付諸職工等取調
六五	甲第七〇号	一二月一三日	十一月二五日出甲第七号布達ノ正誤
六六	飫第五九号	一二月一三日	田中束穂外二名処刑
六七	支第四三七号	一二月一三日	正副戸長撰挙等級ノ儀
六八	支第四三九号	一二月一四日	隈元棟貫区長申付
六九	支第四四五号	一二月一四日	広島県永江儀兵衛病死ニ付埋葬費
七〇	支第四四六号	一二月一四日	宮崎電信分局デハ十五日ヨリ私報取扱
七一	甲第七一号	一二月一四日	撫育承恵社紙幣通用ニ付詳細取調
七二	支第四四七号	一二月一五日	旧宮崎県建築費未納高皆納期限
七三	支第四四九号	一二月一五日	熊本県平民道喜恒八遺品売払償費
七四	往第五二五号	一二月一五日	都城屯在兵熊本分遣兵卜交換云々
七五	乙第四九号	一二月	今般応募従軍ノ人名取調
七六	乙第五〇号	一二月一五日	今般各区正副区長申付
七七	往第五二八号	一二月一六日	県令岩村通俊叙勲年金下賜
七八	支第四六六号	一二月一七日	第一課職務係ニ区戸長出庁簿ヲ設置
七九	往第五二六号	一二月一七日	戦地跡測量ニ陸軍大尉福田半出張
八〇	往第五三三号	一二月一七日	県令薩隅両国巡回
八一	甲第七五号	一二月一七日	宮崎延岡へ区裁判所設置
八二	丁第一号	一二月	明治十一年就役相当ノ徴兵取調
八三	乙第五三号	一二月	来十一年徴兵適令ノ者年月
八四	乙第五四号	一二月	徴兵適令ノ者出稼呼戻
八五	乙第五五号	一二月	右ノ者養子分家嗣子等ノ儀

八六	無　号	一二月一七日	東熊太郎処刑
八七	支第四七三号	一二月一九日	陸軍伍長知覧親雄西征ノ役即死
八八	支第四七六号	一二月一九日	安楽富太郎へ預金取立期限
八九	支第四八六号	一二月一九日	来ル二十八日御用仕舞
九〇	無　号	一二月一九日	文書受領ノ件数取調
九一	無　号	一二月二〇日	兵乱中書籍器械散乱ハ学校へ返付
九二	支第四八七号	一二月二二日	諸印界紙計算表差出方
九三	甲第七四号	一二月二二日	兵難ヲ他所ニ避シ者速ニ届出シム
九四	支第四九五号	一二月二四日	陸軍少尉古垣俊雄西征ノ役即死
九五	支第四九四号	一二月二四日	陸軍軍曹荒武直守西征ノ役戦死
九六	支第五〇二号	一二月二五日	区長久保田好那不都合ノ儀有之諭免
九七	支第五〇六号	一二月	貢金上納日割
九八	支第五〇七号	一二月二五日	正副戸長改撰洩レノ者辞表差出シム
九九	乙第五八号	一二月二五日	十二月二九日ヨリ一月三日迄休業
一〇〇	往第五七六号	一二月二五日	本県備付ノ刀拝借ノ輩申出シム
一〇一	無　号	一二月二六日	小野修一郎御用係任命月俸八拾円
一〇二	支第五一〇号	一二月二六日	三ヶ野山村間林松木伐採残立木取調
一〇三	支第五一二号	一二月二六日	兼崎則重客歳熊本賊徒暴動ノ際戦死
一〇四	支第五一五号	一二月二六日	内村紋太郎外二名西征ノ役戦死
一〇五	支第五六四号	一二月二七日	宮崎臨時支病院ニ於テ外来診察許可
一〇六	支第五六六号	一二月二七日	大小区費予算明細取調
一〇七	無　号	一二月二七日	田方実地検査ノ上税額　百五大区へ
一〇八	同	同	右　同　百七大区へ
一〇九	同	同	右　同　百九大区へ
一一〇	同	同	右　同　百四大区へ
一一一	乙第六〇号	一二月二七日	来十一年一月一日拝賀出頭ノ儀
一一二	無　号	一二月二七日	蒲生常二賞誉金請取方ノ有無取調
一一三	支第五六七号	一二月二七日	松永執輔外九名賞誉金請取方取調
一一四	支第五七一号	一二月二八日	徴兵取調ノ儀
一一五	支第五七二号	一二月二八日	祝日祭日ニハ可成国旗掲揚ノ儀

明治拾壱年八

一一六	甲第一八号	一二月二八日	銃砲弾薬取締ノ儀
一一七	甲第七七号	一二月二八日	寄留者届書式
一一八	無　号	一二月二八日	各戸長事務扱所ニ寄留名簿ヲ備置
一一九		五月	帰順掛心得書
一二〇	無　号	七月一一日	庶第五号布達戸籍規程ヲ正ス
一二一	乙第一四九号	六月二五日	区戸長ヘ戸籍調査ノ心得書ヲ達ス
一二二	乙第一六一号	七月　三日	区戸長ヘ戸籍調査ノ心得書ヲ追加
一二三	乙第一六二号	七月　四日	庶第五号布達戸籍規定ノ改正追加
一二四	庶第五号	五月二一日	戸籍調査ニ当ッテノ心構ヘヲ説ク
一二五			戸籍調査規程及ビ雛形
一二六			戸籍加除規程及ビ雛形

明治拾壱年九　乙号筆記達目録

一二七	乙第二号	一月　九日	兵乱中各学校ノ書籍器具類散乱ス
一二八	乙第四号	一月一一日	正副区戸長旅費仮定則ヲ改正ス
一二九	乙第五号	一月一二日	正副戸長月給・旅費・事務経費等
一三〇	乙第一八号	一月二一日	地租徴収期限ニ付イテ区戸長ヘ
一三一	乙第二三号	二月　四日	区長事務扱所小使日給繰替渡ノ件
一三二	乙第二八号	二月　六日	徴兵調ベニ付イテ
一三三	乙第三三号	二月一二日	書類ヘ押印スル区長役印ヲ新調セヨ
一三四	乙第三六号	二月	風災ノ為雨霧ヲ凌キ兼ル者ヘ貸与金
一三五	乙第四二号	二月	物産取調ベ
	乙第五〇号		乙第五十号布達ハ重複ノ為削除
一三六	乙第五七号	三月　一日	徴兵ノ為宮原陸軍少尉試補巡回
一三七	乙第五九号	三月　五日	元庄屋浮免高ヤ共有物等ノ取調
一三八	乙第六二号	三月　六日	本庁ヘ召集サレル区長ノ調査事項
一三九	乙第六三号	二月　五日	本庁ヘ出頭スル区長ノ注意事項
一四〇	乙第六七号	三月一一日	別冊区戸長職制等制定
一四一	乙第六八号	三月　八日	各郷ヘ十年分畑貢租決定額通知
一四二	乙第六九号	三月　八日	種子島ヘ十年分畑貢租決定額通知
一四三	乙第七〇号	三月　九日	各軍団ガ宿営シタ宿料申請ノ再達
一四四	乙第七二号	三月一一日	各大区町村浦名・戸数等ノ調査雛形
一四五	乙第七五号	三月一三日	師範学校附属小学校ノ志願者ヘ
一四六	乙第七六号	三月一四日	松原神社裏空地ノ払下者ヘ
一四七	乙第七七号	三月　　日	敷根海軍省火薬調整所ノ備品調査
一四八	乙第一七七号	七月二一日	本年七月戸籍調査規程ノ改正増補
一四九	乙第一八五号	八月二〇日	兵役免除出願ニツイテ
一五〇	乙第一八八号	八月一七日	官林監守人ノ配置方改正
一五一	乙第二一一号	一〇月一六日	戸籍及ヒ家族等ノ調査雛形
一五二	乙第二二七号	一二月　五日	県庁ノ分課名称通知
一五三	乙第二四四号	一二月一二日	軍団病院デ死去シタ永野要平ノ住所
一五四	乙第七号		別冊、薩隅日地名一覧

御布達并雑書

番号	元号	年	月　日	文　書　題
一五五	文久二年		一〇月	島津茂久（忠義）条々
一五六			二月	家老連署布達、条目ノ趣旨ヲ厳守セヨ
一五七	明治一年		八月　七日	版籍奉還後上級士ノ家禄ヲ改正
一五八				藩治職制、島津忠義履歴抄
一五九			三月　七日	知政所布達、廃官ノ者ヘ俸禄米
一六〇			一一月二九日	鹿児島士族屋敷ノ面積制限
一六一	同	三年	二月	知政所布達、人名ニ使用禁止ノ文字
一六二				集成館ノ火薬製造所ヘ従来通り出頭許可
一六三				大工・木挽等ノ賃銀取締リ
一六四				二之丸ヘ内厩方設置
一六五				衆中カラ城下士ヘ養子縁組ノ条件
一六六		三年	八月	鹿児島藩庁布達、横山正太郎ノ祭典料
一六七		三年	九月	民事局布達、鹿児島城下諸屋敷地ノ検地

一六八	三年	九月	知政所布達、大隊長以下ノ奉禄改正
一六九	三年	八月	島津忠義仰出、横山正太郎誅死ノ件
一七〇	三年	八月	知政所布告、俸禄ノ渡シ方ニツイテ
一七一	三年	九月	会計局布達、高直願手続
一七二	三年	閏十月	知政所布達、鶴嶺神社神事
一七三	三年	閏十月	知政所布達、神嘗祭神事
一七四	三年	閏十月	知政所布達、附士分地別立ノ条件
一七五	三年	一〇月	太政官布告、長岡藩ヲ廃ス、
一七六	三年	一〇月	太政官布告、諸藩朝集ノ際軽便ヲ旨トス
一七七	三年	一一月	知政所布達、皇軍神社祭神十座
一七八	三年	一一月	知政所布達、東京公用方ヲ庶務方ヘ
一七九	三年	一二月二六日	知政所布達、島津久光宛明治大皇宸翰
一八〇		一二月	知政所布達、岩倉具視帰路通行筋
一八一	（三年	一月二〇日）	島津久光内意書、神祭ニ改メヨ
一八二	四年	三月	知政所布達、藩吏ノ勤務期限ヲ延期ス
一八三	四年	三月	知政所布達、房姫ノ諡号
一八四	四年	四月	会計局布達、拝借銀ノ利息上納
一八五	四年	四月	知政所布達、在京ノ御親兵ヘ飛脚便
一八六		未四月一二日	精松善之丞達書、軍役高・俸禄等
一八七	四年	三月　三日	島津忠義願書、父久光ノ上京猶予
一八八		四月	知政所布達、島津忠義上京
一八九	四年	三月	知政所布達、産科治療開始
一九〇	四年	三月	知政所布達、島津忠義上京ノ随行者ヘ
一九一	四年	二月	明治天皇詔書并三条実美添書
一九二	四年	三月	知政所布達、地頭ノ住所ハ自由トス
一九三	四年	三月	知政所布達、諸役人ノ奉禄ハ規定通リ
一九四	四年	三月	知政所布達、第一郷校ハ高見馬場郷校
一九五	四年	三月	知政所布達、諸役人ノ交代ヲ一期延期ス
一九六	四年	五月	知政所布達、鹿児島近在ノ諸村ヲ合併ス
一九七	四年	六月	知政所布達、照国神社ノ例祭日ヲ変更

一九八	四年	六月	知政所布達、南北両水泳場ヲ設定ス
一九九	四年	七月	知政所布達、鹿児島近在ノ支配替
二〇〇	四年	七月一四日	廃藩置県ノ詔書
二〇一	辛未	七月　三日	島津忠義ヘ勅、改革ニ協力セヨ
二〇二			口達覚、毎月三度参内セヨ
二〇三	辛未	六月二五日	廃藩ニ備エテ新政府ノ人事異動
二〇四			鹿児島藩知事以下ノ人事異動
二〇五	四年	七月一四日	明治天皇布告写
二〇六	四年	八月	知政所布達、廃藩ニツイテノ太政官布告等
二〇七		未八月	県庁布達、知政所ヲ鹿児島県庁ト改称
二〇八	四年	八月　五日	県庁布達、城下ト諸郷ノ制札ハ、藩ノ字ヲ県ニ改メヨ
二〇九			新政府人事異動
二一〇	四年	九月　四日	太政官布告、租税ハ旧法ニヨル
二一一			県内士族ノ救助米等改正
二一二	四年	九月	県庁布達、華族ト平民ノ婚姻ヲ許可ス
二一三		未九月	県庁布達、県官ノ着服ヲ制定
二一四			軽歩兵ノ大隊・小隊等編制
二一五	四年	七月　九日	西郷吉之助ヨリ桂四郎宛書翰
二一六			御親兵ノウチ主ナ鹿児島県出身者名簿
二一七		七月一〇日	西郷吉之助ヨリ桂四郎宛書翰
二一八		七月	官制改革ノ太政官布告五通
二一九	四年	八月一八日	島津家家令達、島津忠義近況
二二〇			某書状ナラビニ聞書
二二一			丹波国篠山ナド七県合県願書
二二二	四年	九月一三日	島津久光ヘ従二位、忠義ヘ従三位宣下
二二三	四年	一〇月	県庁布達、男女小学建設希望者ヘ
二二四	四年	一〇月	県庁布達、鹿児島神社浜下リ道筋
二二五	四年	九月一四日	服制ニツイテ明治天皇詔書
二二六	四年	九月　三日	兵部省ヘ明治天皇勅書
二二七			花房義質ヲ清国ヘ派遣

二一二八	四年	一〇月	県庁布達、救助米等ニツイテ再達
二一二九	四年	一〇月	県庁布達、時鐘ハ正午ニ鐘三ツ撞ク
二一三〇	四年	一一月	県庁布達、廃藩後旧藩主ヘ年頭祝義
二一三一			戸籍・家部・男女人数調雛形
二一三二	四年	一二月　二日	県庁布達、桂久武任都城県参事 大山綱良任鹿児島県参事
二一三三		一一月	県庁布達、西郷隆盛任参議、伊集院直右衛門任出納権正、伊地知正治任中議官
二一三四	四年	一二月	県庁布達、鎮台分営設立、旧兵士処置
二一三五			郡長、戸長等人名・俸禄書上
二一三六			山口藩知事毛利元徳上書
二一三七			明治天皇御布告写、二〇五号ト同文省略
二一三八		申四月	県庁布達、船改方・運上所廃止
二一三九	五年	四月	県庁布達、諸郷士族ヲ鹿児島県士族ト改称
二一四〇	五年	五月二八日	県庁布達、明治天皇行幸日程
二一四一	五年	六月	県庁布達、天皇出船、管絃歌舞勝手次第
二一四二		七月　一日	県庁布達、暁三字出発、通筋手当ノ次第
二一四三	五年	七月一四日	県庁布達、第一大区小二区ト改称
二一四四		一〇月	県庁布達、『鹿児島県布達(上)』ノ一一六号ト同文省略
二一四五		一〇月	庶務課布達、『鹿児島県布達(上)』ノ一一七号ト同文省略
二一四六	五年	一〇月　八日	庶務課布達、『鹿児島県布達(上)』ノ一一五号ト同文省略
二一四七		一一月	聴訟課布達、許可地以外ノ発砲禁止
二一四八		一一月	庶務課布達、『鹿児島県布達(上)』ノ一二六号ト同文省略
二一四九		一〇月一二日	県庁布達、勝手ニ姓名ノ改称ヲ禁ス
二一五〇	五年	一〇月	県庁布達、『鹿児島県布達(上)』ノ一二一号ト同文省略
二一五一		一〇月	県庁布達、『鹿児島県布達(上)』ノ一二五号ト同文省略
二一五二		一〇月	県庁布達、磯近辺ノ漁猟ノ禁ヲ解ク
二一五三	五年	一一月	明治天皇詔書、太陽暦採用
二一五四		一一月　九日	県庁布達、太陽暦採用ノ太政官布告
二一五五		一一月一九日	県庁布達、出納取引ハ今年迄旧暦トス

二一五六	六年	一月二〇日	庶務課布達、『鹿児島県布達(上)』ノ六号ト同文省略
二一五七			地券方布達、屋敷面積ノ申告
二一五八	六年	一月二二日	太政官布告、華士族平民ノ養子縁組許可
二一五九	六年	一月二七日	県庁布達、家督相続ノ太政官布告
二一六〇		二月二八日	県庁布達、『鹿児島県布達(上)』ノ一三一号ト同文省略
二一六一	六年	二月	県庁布達、旧士族ノ軍役高ハ永世家禄
二一六二		二月	県庁布達、改暦ニツキ休日ノ太政官布告
二一六三	六年	三月　七日	県庁布達、『鹿児島県布達(上)』ノ一三四号ト同文省略
二一六四	六年	二月　七日	太政官布告、祭服ハ狩衣直垂モ可
二一六五	六年	二月　七日	太政官布告、除服出仕
二一六六	六年	一月一八日	太政官布告、私生児ハ婦女ノ子トス
二一六七		二月　五日	太政官布告、年令ハ何年何月ト数ヘヨ
二一六八	六年	三月　八日	出納課布達、種子油値段ハ従来通リ
二一六九	六年	二月二七日	県庁布達、『鹿児島県布達(上)』ノ一四〇号ト同文省略
二一七〇	六年	三月一〇日	県庁布達、諸郷士族ノ城下屋敷ヲ禁ス
二一七一	六年	三月二四日	県庁布達、島津久光ノ上京日程
二一七二	六年	三月二四日	県庁布達、兵隊・官員等履歴ヲ提出セヨ
二一七三	六年	五月　三日	庶務課布達、大山綱良ガ権令トナル
二一七四		五月二二日	県庁布達、島津久光ヲ従二位様ト称ス
二一七五	六年	五月二七日	県庁布達、『鹿児島県布達(上)』ノ一四四号ト同文省略
二一七六	六年	一二月一二日	県庁布達、諸物価ハ適当ノ値段トセヨ
二一七七		六月　七日	地券方布達、屋敷地ノ面積ヲ届ケヨ
二一七八		六月二五日	出納課布達、賞典禄等明細届書案文
二一七九			県庁布達、『鹿児島県布達(上)』ノ一四八号ト同文省略
二一八〇	六年	七月二七日	大山権令布達、藩札引替ニツイテ
二一八一	六年	七月二〇日	大山権令布達、『鹿児島県布達(上)』ノ一四九号ト同文省略
二一八二	六年	七月二〇日	大山権令布達、県庁廃止、願伺ハ戸長ヘ
二一八三	六年	七月二四日	右松典事布達、『鹿児島県布達(上)』ノ一五〇号ト同文省略

二八四			太政官布告、太陽暦ニ干支ヲ併記
二八五	六年	七月二七日	大山権令布達、『鹿児島県布達(上)』ノ一五二号ト同文省略
二八六	六年	七月二七日	大山権令布達、右同、一五三号ト同文省略
二八七		八月二二日	県庁布達、右同、一七四号ト同文省略
二八八		一二月二〇日	大山権令布達、内務省設置ノ大意
二八九		一一月一〇日	岩倉具視布告、内務省設置
二九〇		一二月二七日	県庁布達、『鹿児島県布達(上)』ノ一九五号ト同文省略
二九一	七年	一一月一〇日	某艦長報告、天津迄大久保利通ニ同行
二九二		一〇月	出納課属布達、家禄等米金渡方問合書
二九三	八年	一〇月二四日	大山県令布達、靖献神社ヲ招魂社ト改称
二九四	八年	一一月 二日	大山県令布達 家禄等ハ米金混シテ支給
二九五	八年	六月二九日	旧鹿児島藩士家禄売買ノ伺、大蔵省ヘ
二九六	八年	一一月一五日	右ニツイテ大蔵卿大隈重信ノ許可書
二九七			右ノ金禄調帳雛形
二九八	八年	一二月 八日	大山県令布達、家禄売買ニツイテ
二九九	八年	一二月一二日	大山県令布達、『鹿児島県布達(上)』ノ六四号ト同文省略
三〇〇	九年	二月 九日	大山県令布達、『鹿児島県布達(上)』ノ六六号前半ト同文省略
三〇一	五年	一一月 九日	『鹿児島県布達(上)』ノ六六号後半ト同文省略
三〇二	八年	一二月二八日	三条実美布達、訴訟用罫紙見本
三〇三	九年	三月二八日	三条実美布達、廃刀令
三〇四	九年	七月二七日	永山直次郎布達、大区小区ノ表示変更
三〇五	九年	七月二九日	某戸長布達、地租改正用ノ竹木札雛形
三〇六	九年	一〇月二八日	大山県令布達、霧島神宮教会講社許可
三〇七	八年	一〇月一三日	内務卿大久保利通布告、招魂社
三〇八	九年	五月一七日	大山県令布達、巫覡ノ業ヲ禁ズ
三〇九		五月	出納課布達、家禄等支給月通知
三一〇		五月二三日	某戸長布達、松原神社造立ノ献金
三一一	九年	四月	大山県令布達、県庁ノ各課職務分担
三一二	九年	七月	大山県令布達、度量衡ノ計器改正

三一三			市街地等ノ地租改正
三一四	九年	一二月 二日	田畑参事布達、養子ノ弟ハ相続人トス
三一五	九年	一二月 六日	田畑参事布達、伊勢皇大神宮分霊鎮祭
三一六	九年	八月二一日	岩倉具視布達、諸県ヲ統廃合
三一七	九年	九月	島津忠義布達、年頭ノ祝儀ヲ遠慮
三一八	九年	一二月 四日	田畑参事布達、宮崎支庁管轄ヲ本庁管轄ヘ変更ス
三一九	九年	一二月二九日	大山県令布達、金禄公債証書下付
三二〇	一〇年	三月 九日	大山県令布達、勅使柳原前光来艦
三二一	一〇年	二月一五日	西郷隆盛届書、今般政府ヘ尋問ノ筋
三二二		三月一二日	大山県令布達、『鹿児島県布達(上)』ノ二四九号ト同文省略
三二三	一〇年	三月 三日	鹿児島裁判所吉本祐雄等七名上申書
三二四			同小川重任上申書
三二五	一〇年	三月 二日	大山県令願書、征討総督有栖川宛
三二六	一〇年	三月一〇日	勅書、有栖川熾仁ヲ征討総督に任ス
三二七	一〇年	二月一三日	大久保利通内務卿内達、鹿児島県騒擾
三二八	一〇年	三月 三日	人吉村田量平・求磨黒田等連署上申書
三二九	一〇年	三月一二日	大山綱良宛西郷吉之助書翰
三三〇	一〇年	四月二七日	征討総督諭達、『鹿児島県布達(上)』ノ二六四号ト同文省略
三三一			島津久光・同忠義見込上申書
三三二	一〇年	四月二五日	島津久光・同忠義ノ使節上京上申書
三三三	一二年	四月二〇日	岩村通俊布達、警察課ヲ警察本署ト改称
三三四	一二年	四月 八日	三条実美布告、大島郡ヲ大隅国ヘ付属
三三五	一三年	一月二九日	岩倉具視布告、相続人ノ決定法
三三六	一一年	三月一三日	岩村通俊布達、家督相続
三三七	一一年	三月 九日	岩村通俊布達、金禄公債証書ノ売買禁止
三三八		三月二八日	今帰仁・三司官歎願書

鹿児島県史料集刊行一覧

集	史料名	執筆者
1	薩藩政要録	桃園恵真・五味克夫
2	丁丑日誌（上）	村野守次
	丁丑日誌（下）	芳　即正
3	薩摩国新田神社文書	五味克夫
4	一向宗禁制関係史料	桃園恵真
5	薩摩国山田文書	五味克夫・郡山良光
6	諸家大概・別本諸家大概・職掌紀原・御家譜	桃園恵真
7	薩摩国阿多郡史料・山田聖栄自記	五味克夫・郡山良光
8	御登御道中日帳御下向・列朝制度	原口虎雄
9	明治元年戊辰戦役関係史料	村野守次
10	伊能忠敬の鹿児島測量関係資料並に解説	増村　宏
11	管窺愚考・第遊雑記傳	五味克夫
12	川上忠塞一流家譜	五味克夫・桑波田興
13	本藩人物誌	桃園恵真
14	薩陽過去帳	宮下満郎
15	備忘抄・家久公御養子御願一件	五味克夫
16	鹿児島縣地誌（上）	桐野利彦
17	鹿児島縣地誌（下）	桐野利彦
18	薩藩舊士文章	五味克夫・桑波田興
19	薩藩先公貴翰（乾）	五味克夫・桑波田興
20	薩藩先公貴翰（坤）	五味克夫・桑波田興
21	小松帯刀傳・薩藩小松帯刀履歴・小松公之記事	芳　即正
22	小松帯刀日記	芳　即正
23	新修舊鹿児島藩領国・郡・郷・村・浦・町附（上）	原口虎雄
24	新修舊鹿児島藩領国・郡・郷・村・浦・町附（下）	原口虎雄
25	三州御治世要覧	宮下満郎・桑波田興
26	桂久武日記	村野守次
27	明赫記	宮下満郎
28	要用集（上）	芳　即正
29	要用集（下）	芳　即正
30	桂久武書翰	村野守次
31	本藩地理拾遺集（上）（薩摩国）	桐野利彦
32	本藩地理拾遺集（下）（大隅国・諸縣国）	宮下満郎
33	江夏十郎関係文書	山田尚二
34	示現流関係史料	宮下満郎
35	樺山玄佐自記並雑丁未随筆・樺山紹剣自記	晋　哲哉
36	島津世禄記	山田尚二
37	島津世家	畠中　彬
38	譯司冥加録・漂流民関係史料	宮下満郎
39	薩摩藩天保改革関係史料一	尾口義男
40	薩藩学事一・鹿児島県師範学校史料	宮下満郎
41	薩藩学事二・薩藩学事三	畠中　彬
42	薩藩名勝志（その一）	吉元正幸
43	薩藩名勝志（その二）	吉元正幸
44	薩藩名勝志（その三）	吉元正幸・塩満郁夫
45	鹿児島県布達（上）	宮下満郎

鹿児島県布達（下）

（鹿児島県史料集　第四十六集）

平成十九年三月

発行　鹿児島県立図書館
鹿児島市城山町七―一
電話　〇九九―二二四―九五一一
ＦＡＸ　〇九九―二二四―五八二四

印刷　濱島印刷株式会社
鹿児島市上之園町十七の二
電話　〇九九―二五五―六一二二